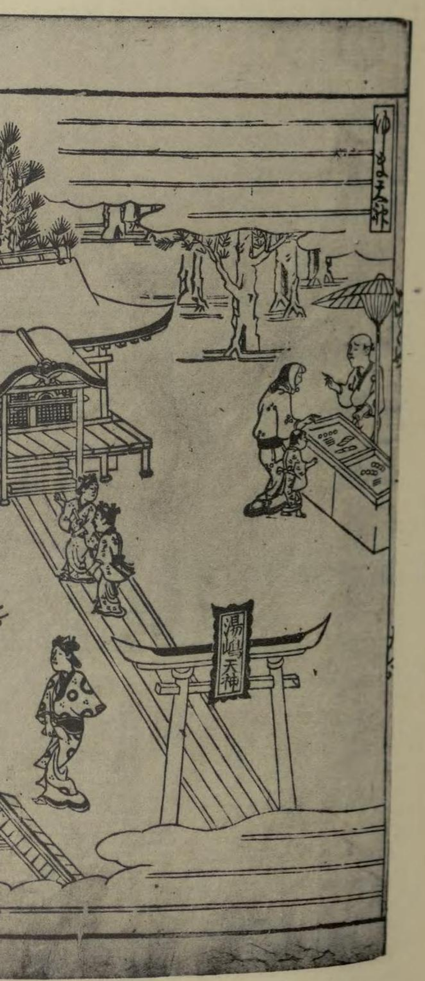
奈良繪本「いはやのさうし」（笹野堅氏藏）

丹後本「義經記」（笹野堅氏藏）

南北朝時代刊「五味禪」中の十牛之圖
（岩崎文庫藏）



延寶五年刊「江戸雀」挿繪（菱）

江戸初期刊「扇の草紙」(嵯峨本風)
(岩崎文庫藏)

南北朝時代刊「五味禪」中の十牛之圖(傳雪村筆)
(岩崎文庫藏)

明治二十年刊「新粧の佳人」挿繪(筆者不詳)

延寶五年刊「江戸雀」挿繪(菱川師宣筆)

繪書家といふ專門家が現れて來た。

【參考】浮世繪と挿繪藝術織田一磨○德川時代三大挿繪家井上和雄（版畫禮讃）○挿繪版畫概論平塚運一（世界美術別卷、東洋版畫篇）○西鶴好色本挿繪水谷不倒（早稻田文學、西鶴特別號）○明治の挿繪鏑木清方（日本文學講座）〔織田〕

座敷淨瑠璃（ざしきじやうるり）【名稱】「座敷」で演ずる淨瑠璃の意で、舞臺で演ずる淨瑠璃に對していふ。往々古圖に殘れる大名屋敷などで、人形を操れる「座敷操り」といふに同じく、「座敷能」などいふもその意であるが、第二義の意味として「座補任言貝合帖」（安永三年正月恐らくはこれが初演に於ける名題ではあるまいか。【諸本】書卸の臺本は傳はらないが、河竹繁俊氏が横とぢの臺帳を所藏してゐる。「歌舞伎新報」には東京壽座上演の際の詳細な筋書を掲載。帝國圖書館藏の「勝諺造作演劇脚本集」にも幾分簡約されて收錄されてゐる。

【初演】明治十四年四月大阪角の芝居。

〔役割〕敎員團泰二（市川右團次）、農夫末次郎（實川八百藏）、泰二の父士族平八郎（市川鰕十郎）、おみのの兄甚之助（中村駒之助）、末次郎の妻おみの（實川正朝）等。

似てゐるといふ百姓達の言葉に、泰二の良心は痛むらしい。父平八郎の頑固な意見。洩れ聞いた末次郎が恨めしさうに立歸る。泰二は鐵砲と金札を持つて追跡する。（守山村末次郎內）車夫三之助が辻堂で拾つた戀文を種にゆすつてゐる。歸宅した末次郎は、泰二が以前勤めた團家の子息といふ關係から、主家の名譽のため、耐へ忍んで穩便に落着させようと、おみのへ意見を加へる。とこの時、泰二は鐵砲で末次郎を狙擊し、家に火を放つて、おみのと幼兒を連れて逃れ去る。三之助は松

判事民尾護は、泰二を呼出し除族の上絞罪に行ふ旨、判決文を朗讀する。〔大詰〕（團泰二絞罪）檢視の警部は松倉延吉。父平八郎と僧了念が駈付けるが、親を呪詛し佛を冷罵し、敎員をも勤務した自分が、かくの如き最期を遂ぐるも親及び世間の不開化無智に原因すると、不貞腐れた態度で惡口して絞罪になる。

【解說】この狂言は大好評を博し、當時開化の散髮をした新人市川右團次（後の齋入）の當り藝となつた。と同時に勝諺造の狂言作者としての地位を確保せしめた、新聞種脚色の代表

繪畫家といふ專門家が現れて來た。

【參考】浮世繪と挿繪藝術織田一麿〇德川時代三大挿繪家井上和雄（版畫禮讃）〇挿繪版畫概論平塚運一（世界美術別卷、東洋版畫篇）〇西鶴好色本挿繪水谷不倒（早稻田文學、西鶴特別號）〇明治の挿繪鏑木清方（日本文學講座）〔織田〕

座敷淨瑠璃（ざしきじやうるり）【名稱】「座敷」で演ずる淨瑠璃の意で、舞臺で演ずる淨瑠璃に對していふ。往々古圖に殘れる大名屋敷などで、人形を操れる「座敷操り」といふに同じく、「座敷能」などいふもその意であるが、第二義の意味として「座鋪狂言早合點」（安永三年正月刊行）などに見る如く、「素人淨瑠璃」「なぐさみ淨瑠璃」の意にも用ひる。【解說】淨瑠璃が素人の間に口ずさみ、口眞似された記錄は、その創始期において實に多い。「竹本祕密丸」には「なぐさみ淨るり惣名寄」の一項目があつて、竹本筑後掾門弟と並記されてゐるに徵しても、義太夫節創始時代から、素人淨瑠璃の流行を見るべく、且つ太夫の血緣相續は極めて稀で、弟子乃至なぐさみ淨瑠璃から太夫への修業に轉じ、舞臺を勤め相續する人が多い。既に名を成した素人淨瑠璃が、玄人として太夫として玄人の修業を經ずして芝居を勤むるを、その仲間では「化物」と稱してゐる。初代義太夫の師も淸水理兵衞といつた「なぐさみ淨瑠璃」であり、二代義太夫の竹本播磨少掾も、この意味の「化物」であつた。〔石割〕

指絞鮮血染野晒（さししぼりちぞめのざらし）【作者】勝諺造【通稱】團泰（だんやす）【別名題】撮絞（つまんしぼり）鮮血染野晒・長崎新聞聲戒鑑・指絞鮮血染野晒・長崎珍聞遊夜語（ひまちのよがたり）・摘絞（つまみ）鮮血染野晒。「竹柴諺造脚本名題目錄」及び「勝諺造脚本集」に依れば、「撮絞（つまんしぼり）鮮血染野晒」とあり、恐らくはこれが初演に於ける名題ではあるまいか。【諸本】書卸の臺本は傳はらないが、河竹繁俊氏が横とぢの臺帳を所藏してゐる。「歌舞伎新報」には東京壽座上演の際の詳細な筋書を掲載。帝國圖書館藏の「勝諺造作演劇脚本集」にも幾分簡約されて收錄されてゐる。【初演】明治十四年四月大阪角の芝居。

〔役割〕敎員團泰二（市川右團次）、農夫末次郎（實川八百藏）、泰二の父士族平八郎（市川鰕十郎）、おみのの兄甚之助（中村駒之助）、末次郎の妻おみの（實川正朝）等。

【題材】東京「いろは新聞」（柳香子筆）に連載された、長崎縣島原附近に惹起した事件の脚色である。

【梗概】〔序幕〕（三室村小學校門前）筑後柳川の旅籠屋へ入聟した甚之助は、久し振りに歸鄕して伯父の巡査松倉延吉や妹おみのに面會し、更に阿彌陀寺の伯父了念を訪問のため人力車に乘る。敎員團泰二の下僕淸藏は、自分が媒妁した農夫末次郎の女房おみのが、主人泰二に附文して不義をしかけた事を憤り阿彌陀寺へ赴く。（阿彌陀寺庵室）甚之助は了念と淸藏に對して、妹おみのの處置に就きよく意見をする旨を述べて調停する。（釋迦ケ池辻堂）その夜、身の不行跡に分別を失つたおみのが投身自殺を企て、泰二に救助される。その述懷を聞いて、泰二も仇情（あだなさけ）に動かされる。甚之助の懷中金を拾ひ盜んだ車夫三之助、女房を尋ね探す末次郎、辻堂前で四人はだんまり模樣。〔二幕〕（島原城下出口・守山村入口）泰二の父士族團平八郎は、伜の姦通事件を百姓の噂話より聞き知つた。（團泰二住居）末次郎はおみのとの間に出來た幼兒へ、名前を附けて貰ひに訪問してゐる。この幼兒が泰二に似てゐるといふ百姓達の言葉に、泰二の良心は痛むらしい。父平八郎の頑固な意見。洩れ聞いた末次郎が恨めしさうに立歸る。泰二は鐵砲と金札を持つて追跡する。（守山村末次郎內）車夫三之助が辻堂で拾つた戀文を種にゆすつてゐる。歸宅した末次郎は、泰二が以前勤めた團家の子息といふ關係から、主家の名譽のため、耐へ忍んで穩便に落着させようと、おみのへ意見を加へる。とこの時、泰二は鐵砲で末次郎を狙擊し、家に火を放つて、おみのと幼兒を連れて逃れ去る。三之助は松倉巡査に捕縛された。〔三幕〕（筑後國柳川下立本町旅宿）木賃宿へ僞名で逗留する兩人、おみのは心痛の極、病床に橫はつてゐる。巡査の宿泊人取調べ、或は新聞記事に依り、身の危急を覺つて泰二は逃亡しようとする。この旅宿の女房お倉とおみのとは主人の甚之助故に互ひに義姉妹なる事を知り、お倉は逃してやらうとの心組。おみのと泰二は兄夫婦に書置を認める。折柄淨瑠璃お俊傳兵衞堀川の段が聞えて來る。松倉巡査が逮捕に來るので、甚之助は、おみのを犧牲に泰二を助けようとする。又國元より淸藏が嫌疑をうけた平八郎赦免のため、泰二を連れに來たので、遂に泰二は捕へられてしまふ。甚之助夫婦に堀川の與次郎の心が、終始流動してゐる。〔四幕〕（長崎警察本署訊問所）平八郎は、泰二に對する嚴正な裁斷を申請してゐる。末次郎は鐵砲傷に憔悴しながらも、泰二と妻との關係を否定し、舊主の恩義に報いようとする。その眞心に感動したおみのは、今迄頑强に口を開かなかつた罪狀を告白する。（同樞倉內）末次郎より團泰二へ差入物あり。この事件は、意味深長と見えると小使の獨り言。（刑事課白洲）判事民尾護は、泰二を呼出し除族の上絞罪に行ふ旨、判決文を朗讀する。〔大詰〕（團泰二絞罪）檢視の警部は松倉延吉。父平八郎と僧了念が駈付けるが、親を呪詛し佛を冷罵し、敎員をも勤務した自分が、かくの如き最期を遂ぐるも親及び世間の不開化無智に原因すると、不貞腐れた態度で惡口して絞罪になる。

【解說】この狂言は大好評を博し、當時開化の散髮をした新人市川右團次（後の齋入）の當り藝となつた。と同時に勝諺造の狂言作者としての地位を確保せしめた、新聞種脚色の代表作である。この作で注目すべき二つの事柄は（一）諺造が率先散切物の新聞種脚色に着手するに當り、默阿彌に纏綿した因緣因果の關係を顧慮せず、可なり現實に忠實なる態度を取つた事、（二）大詰絞罪の場に於て團泰二が父子關係、宗敎等について、歌舞伎劇としては奇異な感じを抱かせる言辭を弄してゐる事である。其處に明治初期に於ける士族にして敎員といふ階級の一部に存する思想體系が展望出來るとさへ考へられる。併しこの大詰は東京中島座所演に際しては、改心した泰二を繞る愁歎場と變形してゐる。

【參考】南座堂本寒星〇壽座の新劇を評す三木竹二（しがらみ草紙一號）〇歌舞伎新報（二二ノ八、二五ノ四）〔尾澤〕

指出廼磯（さしでのいそ）　語學書　一卷【著者】東條義門【成立】文化十二年四月。天保十二年自ら頭註を加ふ。【刊行】天保十四年九月「磯の洲崎」（別項）と合冊して出す。【內容】著者の友人石田千穎が、村田春海の「琴後集」の中に「着馴らしゝ」とも、「きならせし」ともあるについて、「しゝ」と「せし」との異同を質問したのに答へ、その序に、活用その他につい

て述べた事共を書き記したもの。その項目は「萬葉に詞活用のあや敷有事」「おはすと云詞の活のいと紛敷事ども」「詞の活といふ名を設る事」「假名遣の格と云事有べき所以」「眞字書の古書に假名の紛敷も少からぬ事」「かなに定格なしと云或說」「萬葉集中てにをはの異敷有事」等。【價値】本居春庭の「詞八衢」（別項）は既に出たけれども、その眞價がまだ學者に十分認められなかつた當時に於て、活用研究の大切な事を事實について說き、學界に大きな刺戟を與へたものである。

【備考】長野義言の「指出廼磯辨」（一卷、寫本、弘化二年二月成る）は、「指出廼磯」を批評したもので、「やちまたにのみ泥づみ云々」と云へること、「つまこみ」にとあるはこめなるべし」等二十餘條を擧げてゐる。併せ見るべきものである。

〔龜田〕

指面草（さしもぐさ）　滑稽本　一册

【作者】山東京傳【名稱】子安觀音に關する趣向であるため、「新古今集」釋教歌、淸水觀音の歌と傳へる「なほ頼めしめぢが原の指面草わが世の中にあらむ限りは」を聯想した名である。【刊行】天明六年【諸本】滑稽名作集下卷（帝國文庫）・滑稽本集（日本名著全集）・滑稽文學全集第六に所收。【題材】魂の入替によつて性格が變ることから、子安觀音が子胤を取違へて、家風と全然反對な子供を授けられるといふ事は、當時他にも類似のある趣向である。恐らく支那の影響であらう。

【梗概】子安觀音の所へ天照皇太神が訪ねられ、申子は神の所管か佛の所管かと相談せられて、以後は觀音の支配に定められることとなつた。觀世音は挿文に書いた申子の符牒と子胤が入れ替りとをひつくり返して、子胤が混合し、授けられる子胤に間違が生ずるに至つた。兩替屋の金多屋溜右衞門に授かつた申子の溜三郎は武士の子胤であり、家業と似もつかぬ武藝ばかりをし、同じく兩替屋仲間に固い親爺に似ぬ放蕩者の金公が生れ、溜三郎を誘つて吉原へ案內したが、溜三郎は武骨振りを發揮して華魁等から笑はれる。金公は馴染の太夫東野を對手にしてゐる。溜三郎は歸途淺草觀世音の境內で見染めた大名の姫君に心をなやます。こゝに又、兩國の舟宿に遠州屋七兵衞といふものがあり、これも子胤の間違ひから茶湯好きで、一個の茶碗ほしさに娘を遊女に賣るといふ始末であつた。その娘こそ金公が思ひつめてゐる東野太夫である。一方、洲崎の料理屋增屋の亭主は公家の子胤の間違ひで、國學・和歌・手跡方面に趣味を持ち、この料亭へ、これも百萬石の家柄に生れながらも、町人氣質の若殿蘆河鷹之輔が許嫁の姫君を捨てて東野太夫を呼んで遊ぶ。かういふ風にどの家にも家風と似合はぬ子を持つた親の嘆きから、金多屋溜右衞門や蘆河の家老馬由尾祕藏女等が觀音へ參籠する事となる。夜中に三十三體の菩薩が姿をあらはし、間違つた子胤の魂を入れ替へることを告げられる。案の如く、それから鷹之輔は武藝を覺えて許嫁の姫君と結婚し、溜三郎は東野を妻とし、何れもめでたく榮える。

【構想】不調和、不釣合といふ點に滑稽を見出してゐる。殊に有り得べからざる架空的なものを實現させたところに、その面白味を見出さうとしたのである。この態度は滑稽本といはれる型とは多少異つたものである。謂はば黃表紙（別項）に見える趣向といはねばならぬ。八犬字盡の編賣物の趣向をも取入れて居り、洒落本の行き方をも持つてゐるといへる。要するに黃表紙・滑稽本・洒落本の諸性質を含んで、而も、もとは滑稽本の型をとつたものである。【價値】意匠・描寫に流石と首肯される京傳のうまさがある。滑稽本が一九や三馬等に大成せられるまでの試みの時代に出て、一役割を演じた作と見るべきもので、歷史的に注意さるべき滑稽本である。

〔小柴〕

指物師名人長次（さしものしめいじんちやうじ）　脚本

五幕　世話物【俗稱】名人長次【作者】三代河竹新七【諸本】日本戲曲全集第三十二卷所收【題材】三遊亭圓朝がモウパッサンの小說から飜作したと傳へられる人情噺「名人長次」を脚色したものである。【興行】明治二十八年十月、東京新富座上演。

〔役割〕指物師長次郎・岩村玄石（五代尾上菊五郎）、坂倉屋娘おしま（中村福助事現歌右衞門）、指物師恒太郎（尾上菊之助）、指物師娘おまさ（尾上榮三郎事現梅幸）、指物師淸兵衞（先代片岡市藏）、坂倉屋助七・長次弟分兼松（尾上松助）、坂倉屋助藏（坂東家橘）、美濃屋茂二作（尾上蟹十郎）等。

【梗概】〔序幕〕東兩國大德院前の指物師箱淸事淸兵衞の弟子長次は、修業を積むに從ひ非常に上達して名人長次と呼ばれ、向島小梅に指物屋を開いたが、慈善心に富むのと、所謂名人肌である所から、好事家の愛顧を受けてゐた。或る時、藏前の札差坂倉屋助七が三宅島產の桑材を提供して佛壇を指さしたところが、七ケ月もかゝつて出來上り、而も手間代だけで百兩だといふので一同びつくりする。〔二幕〕長次はまだ孩兒の頃、背中に受けた大きな傷が痛むので、湯河原へ湯治に行つてゐる時、坂倉屋の息子助藏の思ひ者藝者お花の指機を敎つたりしたが、茶に來てゐた手傳ひの雇婆の話は彼を十分驚かした。自分は捨兒で、この土地の長右衞門といふ百姓に育てられたので、實の兩親が宿屋で口論の末、箱根道の笹藪の中に捨てたために、背中へ大傷が附いたのであつた。〔三幕〕坂倉屋では長次に作らせた佛壇は林大學頭の賞讃を得、折紙までも與へられて、いよ〳〵名人たる事を知り、娘おしまの豫ての望みに任せ嫁に遣る事となる。一方長次を贔屓にしてゐた龜甲屋の幸兵衞夫婦は、長次を捨てた生みの親だといふ事が判明するが、幸兵衞はどうしても親子の名乘りをしない。小梅の土手で長次が執念く親子の名乘りを迫るので、子を脅す積りで拔いた脇差の間違ひから、幸兵衞夫婦は自らを殺してしまふ。〔四幕〕長次は自首を決心して家を疊み、師匠箱淸の許に行き、京都の名工利齋の弟子となるために上京すると語り、わざと師匠を怒らせて師弟の緣を切り、卽刻自首して出る。〔五幕〕長次は南町奉行所の白洲に呼び出され、筒井和泉守の訊問を受けた。初め長次はただ夫婦を殺害した事實のみを述べてゐたが、やがて鋭い追及に、幸兵衞夫婦は生みの親で箱根で捨てられた者、そして親子の名乘りを强請した始末を告白する。和泉守も幸兵衞が名乘りを拒んだのには何かの事情あることを悟り、內偵させると、幸兵衞の女房お柳には前夫があり、密通してゐるうち、前夫の病氣治療にかこつけて鍼醫岩村玄石なる者に殺させ、事情を知る茶道具屋美濃屋茂二作を媒人に立てて幸兵衞は入夫したのであつた。而して元來長次が捨兒にされたのは、前夫の胤であるとかないとかの言ひ爭ひからだつた。これ等の罪惡は玄石の捕縛から分明となつた。長次に放免されて龜甲屋の跡目を相續することとなつた。

【價値】謂はゆる圓朝物の一代表作である。長次が幸兵衞夫婦を生みの兩親であると知るに至る徑路に不自然さがあるが、五代菊五郎の當り狂言の一つとされても居り、原作たる圓朝の口演材料がモウパッサンの小說に出發してゐるといふ點に於て、注意すべきものであらう。

【參考】續々歌舞伎年代記田村成義〇尾上菊五郎自傳等

〔河竹〕

坐禪（ざぜん）「花子」を見よ。

定家（ていか）「定家」を見よ。

貞丈（さだたけ）　武家故實家【姓名】伊勢氏。

る。貞爲の子貞衡、德川家光の世に、春日局の願に依つて初めて德川幕府に仕へることとなり、御藏米千俵を與へられ、爾來禮法の家として立つた。春日局は貞爲の妻の姉で貞衡の伯母に當つて居つたことは、貞衡自筆と稱する系圖及び安永三年に貞丈が官に差出した伊勢氏先祖書にも見えてゐる。この貞衡は、實に貞丈の高祖父であつた。貞守・貞長父子相傳へて貞益に至り、幕命に依つて家流の書籍二十七卷を書寫して上つたこともあつた。【閱歷】享保十年、貞丈の父貞益病死して兄貞陣（さだつら）その後を襲いだが、翌十一年僅に十三で痘に罹つて早世し、一時家名斷絕領知召上げと病弱で夙く職を辭し、貞丈に先だつて死んだので、孫貞春が先祖の學を總承する事になつた。貞丈の筆寫したものに、孫のために執筆する旨を繰返してゐるのは、この故である。

【著書】貞丈雜記十六卷〇四季草七卷〇安齋叢書二十五册〇安齋隨筆三十二卷〇安齋小說二十册〇安齋雜考二卷（以上別項）〔解說書〕犬追物類鏡四卷〇犬追物圖說一卷〇座右書十四册〇武器考證二十卷〇軍用記七卷〇刀劍問答一卷〇包結圖說二卷（以上別項）〔註解〕平義器談二卷〇五武器談二卷（各別項）〇條條聞書貞丈抄五卷（明和三年十月二十七日成。伊勢貞親入道宗五の作に註せるもの）（續續群書類從第七）。知らず故實にもないことを妄作して人を欺く者が多いのを「座右書」に非難してゐる。斯道に對する心事の公明にして態度の堂々たる、洵に大家の風格を備へてゐる。隨つてその考說は常に廣く資料を古書・記錄・繪畫等に探り妄に私意を挾まない公平な態度で、結論を急がずに論究する風があつて、所謂科學的研究法に近いものがあるのは洵に偶然でない。殊に文獻の探求に困難で、兎角獨斷に流れ勝な時代にあつては、確かに一頭地を拔くものがあつた。【史的地位】貞丈の論著の大部分、卽ち武家故實に關したものは、博引旁證、考據精密、前代の蒙を啓き誤を正した論斷が少

屋の跡目を相續することとなつた。

【價値】謂はゆる圓朝物の一代表作である。長次が幸兵衛夫婦を生みの兩親であると知るに至る徑路に不自然さがあるが、五代菊五郎の當り狂言の一つとされても居り、原作たる圓朝の口演材料がモウパッサンの小説に出發してゐるといふ點に於て、注意すべきものであらう。

【參考】續々歌舞伎年代記田村成義○尾上菊五郎自傳等　〔河竹〕

坐禪（さぜん）「花子」を見よ。

定家（ていか）「定家」を見よ。

貞丈（さだたけ）　武家故實家　【姓名】伊勢氏。幼名は萬助、通稱平藏。【號】安齋・銀卿　【生歿】享保二年に生れ、天明四年（一七八四）六月五日に歿す。享年六十八　【墓所】もと東京芝區西久保八幡町西岳山大養寺にあつたのを、大正十一年東京市外世田ヶ谷大吉寺へ移葬。

【家系】平貞盛から出て、十一代俊繼の時伊勢守となり、初めて伊勢氏を稱することとなつた。後五代（四代とも）の孫貞繼（貞經とも）室町幕府の政所に出仕し、御所奉行を兼ね、爾來代々その職を傳へて、將軍家殿中の禮儀・作法を掌る家となつた。後數代を經て貞孝に至り、その子貞良と三好氏の亂に、舟岡山に戰死を遂げたが、貞良の子貞爲は幼少のために難を免れることが出來、後年織田信長・豐臣秀吉に仕へたと傳へる。貞爲の子貞衡、德川家光の世に、春日局の願に依つて初めて德川幕府に仕へることとなり、御藏米千俵を與へられ、爾來禮法の家として立つた。春日局は貞爲の妻の姉で貞衡の伯母に當つて居つたことは、貞衡自筆と稱する系圖及び安永三年に貞丈が官に差出した伊勢氏先祖書にも見えてゐる。この貞衡は、實に貞丈の高祖父であつた。貞守・貞長父子相傳へて貞益に至り、幕命に依つて家流の書籍二十七卷を書寫して上つたこともあつた。

伊勢貞丈

【閲歷】享保十年、貞丈の父貞益病死して兄貞陣（さだつら）その後を襲いだが、翌十一年僅に十三で痘に罹つて早世し、一時家名斷絶領知召上げとなつた。同年八月五日、特別の思召で貞丈を召出されて、新に舊知相模國大住郡の內三百石を與へられ、寄合の列に加へられた。時に貞丈十歲であつた。延享二年、御小姓組番入となつた。貞丈の書に、よく「江戸幕下扈從隊士」などと書いてあるのは、この事をいふのである。天明四年二月三日老衰の爲め致仕し、十一日小普請入仰せ付けられ、十二日中坊金藏の支配となつたが、六月五日病歿した。貞丈には男子がなく、貞敦を聟養子としたが、病弱で夙く職を辭し、貞丈に先だつて死んだので、孫貞春が先祖の學を繼承する事になつた。貞丈の筆寫したものに、孫のために執筆する旨を繰返してゐるのは、この故である。

【著書】貞丈雜記十六卷○四季草七卷○安齋叢書二十五册○安齋隨筆三十二卷○安齋小說二十册○安齋雜考二卷（以上別項）〔解說書〕犬追物類鏡四卷○犬追物圖說一卷○座右書十四册○武器考證二十卷○軍用記七卷○刀劍問答一卷○包結圖說二卷（以上別項）〔註解〕平義器談二卷○五武器談二卷（各別項）○條條聞書貞丈抄五卷（明和三年十月二十七日成。伊勢貞愼入道宗五の作に註せるもの）（續續群書類從第七）。〔附考〕愚得隨筆附考三卷（別項）、直垂考附錄一卷（壺井義知（よしとも）著「直垂考」に附錄したもの）〔圖錄〕鎧着用次第一帖（別項）〔雜〕貞丈家訓一卷（子孫のために人倫の道を說き誡したもの）。

【學風】貞丈の研究範圍は、公武兩方面に亙り頗る廣汎であつたが、その主とする所は固より武家故實に在つて、餘力たま〳〵公家の方面に及んだものであつた。「貞丈雜記」官位部の題名の下に、「此一段、武家の故實にあらずといへども、かやうの事も知らざれば、舊記を見るに心得がたき事有故記之」とあるが如きは、固よりその書の目的を明かにした言に過ぎないが、よくその用意の程を察するに足る。又武家故實といふ中にも、主として家傳の伊勢流を祖述するを志としたもので、同じく「貞丈雜記」禮法之部に、その祖先について京都將軍の禮法の家と世にもとなへ、伊勢流と人の名付けたことを云ひ、その本領とする所を詳述してゐる。又當時正しい故實家は、堅く人に祕して傳へることをせず、眞の故實を解しないものは、何流などと稱へて出處も知らず故實にもないことを妄作して人を欺く者が多いのを「座右書」に非難してゐる。斯道に對する心事の公明にして態度の堂々たる、洵に大家の風格を備へてゐる。隨つてその考說は常に廣く資料を古書・記錄・繪畫等に探り妄に私意を挾まない公平な態度で、結論を急がずに論究する風があつて、所謂科學的研究法に近いものがあるのは洵に偶然でない。殊に文獻の探求に困難で、兎角獨斷に流れ勝な時代にあつては、確かに一頭地を拔くものがあつた。【史的地位】貞丈の論著の大部分、卽ち武家故實に關したものは、博引旁證、考據精密、前代の蒙を啓き誤を正した論斷が少くない。また假令それまでに至らないものでも、後世に問題を提供したものが數多いことは疑ひない事實である。實に貞丈は近世武家故實研究の第一人者で、この人に依つて一時代が劃されたと言つていゝ。　〔石村〕

貞敏（さだとし）　雅樂家　【姓】藤原　【生歿】大同二年に生れ、貞觀九年（一五二七）十月四日歿す。享年六十一。【墓所】未詳。【閲歷】「三代實錄」の淸和天皇貞觀九年十月四日の條に、次のやうなことが記されてゐる。「この日、從五位上行掃部頭藤原朝臣貞敏が卒した。貞敏は、刑部卿從三位藤原繼彥の第六子で、少い時から音樂を耽愛し、好んで琴を彈ずることを學び、最も琵琶を善くした。承和二年に美作掾兼遣唐使準判官となり、同五年に大唐に到り、上都に達し、琵琶の名人なる劉二郎といふ者に逢ひ、貞敏は砂金二百兩を贈つたので、彼は喜んで貞敏に琵琶曲を傳授した。二三ヶ月の間に盡く妙曲を覺えてしまつた。そこで、劉二郎は、琵琶譜數十卷を贈つて、君はもと、何人を師として學んだかと問うたの

で、貞敏は、これは我が累代の家風であつて、別に師があつたのではないと答へた。劉二郎は大に感服して、自分の娘なる一少女を貞敏に與へ婚せしめた。この娘は琴及び箏を善くしたので、貞敏は又新聲數曲を學んだ。翌年、貞敏は歸朝の途に就いたが、別れに臨み劉二郎は祖筵を設けて貞敏に紫檀と紫藤との琵琶各一面を贈つた。この歸朝の年は我が承和六年、卽ち大唐の大中元年（これは三代實錄の誤で、承和六年は唐の開成四年に當り、大中元年は我が承和十四年に當る）である。翌承和七年に三河介、八年に主殿助・雅樂助となり、九年春に從五位下を授けられ、齊衡三年に備前介を兼ね、その翌春、從五位上となり、後掃部頭となりて貞觀六年備中介を兼ね、同九年に卒した。貞敏は琵琶を以て三代に歷任し、世評が高かつた」と。中に劉二郎とあるのは、「源平盛衰記」には廉承武としてある。併しどれ程の人物であつたかは分らないが、相當の妙手であつたものと思はれる。又貞敏が持ち歸つた二面の琵琶は、「大日本史」卷百十四に、「將に歸朝せんとするに及び、二郎、爲めに祖筵を設け、贈るに紫檀・紫藤琵琶各一張を以てす。貞敏持ち歸り、終に朝廷の重器となる。所謂玄象・青山是なり。」と書いてある通り、その一は玄象（又は玄上）で、他は青山である。この事は「禁祕御抄」「拾芥抄」「十訓抄」等にも記されてある。なほ「樂家錄」卷九には、琵琶の祕曲として流泉・啄木・楊眞藻の三曲を擧げ、この三曲は人皇五十四代仁明の御宇、遣唐使掃部頭藤原貞敏、廉承武より之を傳ふと記してある。この三つの祕曲は今日絶えてしまつたが、平安朝の末頃迄は傳へられてゐた。

我が國に傳へられたことは、眞らしく思はれる。貞敏は我が國琵琶樂中興の祖で、恐らく中世の雅樂琵琶の祖と稱するも過言ではなからう。樂曲のみならず、琵琶の調子についても貞敏はこれを研究し制定したやうである。琵琶のことを書いた古書として最も有名なる「三五要錄」の中の「調子品」の條下に、「式部親王（貞保）琵琶譜に云く、夫れ琵琶の調子品其數繁多にして、忽に彈じ盡す可らず。然るに貞敏朝臣諸調を充彈し貫綜せざる所なし。而して或は其音殊に美ならず、或は笛に合するに多く迂なり、仍て四調を定め雅樂に備ふ。（中略）所謂四調とは風香調・返風香調・黃鐘調・清調なり云々」と書いてあるのを見ても、貞敏は雅樂琵琶の奏法の上にも大改革を行つたものらしい。しかも特に貞敏の作曲として傳はつてゐる曲は見當らない。貞敏の事業は主として唐の名曲の輸入と、その奏法の改修とにあつたやうである。

【參考】 三代實錄○三五要錄○禁祕御抄上○拾芥抄○十訓抄○源平盛衰記○大日本史卷百十四○教訓抄○續教訓抄○體源抄○樂家錄卷九○日本音樂史考 東儀季治 ○日本音樂史 田邊尙雄（日本風俗史講座）　〔田邊〕

貞主（さだぬし）　儒者　【姓】滋野朝臣。滋野は地名から起つたもの　【生歿】桓武帝の延曆四年に生れ、文德帝の仁壽二年（一五一二）二月卒す。享年六十八　【家系】遠祖は神皇產靈命五世の孫紀伊國造天道根命。氏は最初楢原造と云ひ、天平勝寶二年三月駿河國守楢原造東人が部內なる廬原郡多胡ノ浦濱に黃金を鑄てこれを獻上した。そこで勤ノ臣の姓を賜つた。勤は伊都志と訓む。後、延曆十七年に至つて、弘仁十四年に宿禰を更に朝臣と改めた。

楢原造東人―某―家譯（イオサ）―貞主―┬繩子（仁明帝に寵せられ一皇子二皇女あり）
└奥子（文德帝に寵せられ一皇子二皇女あり）
└貞雄―岑子（文德帝に寵せられ二皇子二皇女あり）

「公卿補任」には、貞主を楢原東人の孫としてゐるが、「文德實錄」卷四に、曾祖父、大學頭兼博士正五位楢原東人（仁壽二年二月、貞主の卒去の條）とあるのが正しい。滋野宿禰又は朝臣中著名の人々には、嵯峨記（弘仁八年正月丁卯）に滋野宿禰貞道、光孝紀（仁和二年九月乙巳）に更衣滋野朝臣直子（同三年正月辛卯）、正六位下大外記、滋野朝臣良幹など見えてゐる。

【閱歷】 仁明帝の東宮時代、東宮學士として仕へ、天長四年五月「經國集」（別項）を撰進し、同八年には諸儒と共に勅命をうけて「祕府略」一千卷を撰んだ。仁明帝卽位後は親任一層厚かつた。毒瘡を唇に病み、歿する前には帝より醫藥を賜つた程であつた。諸官を歷任して功績も少くなかつた。【著作】 祕府略千卷。諸儒と共に撰す。古今の文書を類從したもの。現存卷八六四（德富蘇峯藏）と卷八六八（前田家藏）の二卷のみである。何れも平安時代の書寫であらう。二卷共に續群書類從卷八八三所收。又「祕府略」の引用書に關しては纔に現存二卷によつては到底そのすべてを知る事は出來ないが、試に列記すれば左の如くである。

翰苑　玉藻　夢書　吳志　晉書
吳記　趙書　尸子　列子　墨子
抱朴子　淮南子　神仙傳　異物志　益州記
鄴中記　洞冥記　述異記　丹陽記　拾遺錄
西京雜記　華陽國志　漢武內傳　呂氏春秋　白虎通
風俗通　東觀漢記　鬼子方言　列女後傳　遷左要集
[illegible]

この他「文選」、詩文の總集・別集・儒家・道家・法家・兵家・墨家及び雜家、政法・地理・金石雜書（雜記・雜說・雜考の類）を網羅した事は勿論で、引用書目は優に千五百餘種に及び、支那宋代の勅撰「太平御覽」の壘を摩するか或はそれ以上のものがあらうと思ふ。何となれば藤原佐世が「日本國見在書目」には、易家より總集家に至る四十家、書目一千五百五十餘部を揭げてゐる。しかも「日本國見在書目」は佐世が陸奥守となつた寬平三年若しくはそれ以後のものである。なほ僧家の將來目錄卽ち最澄の台州錄・越州錄の如き、空海や常曉の請來目錄の如き、圓仁の承和五年入唐求法目錄・在唐送進錄・入唐新求聖敎目錄等を見るに、經典の外に詩集・文集等が少からず交つてゐる。以上の如き多數の中には、その後支那に佚亡して我が國にのみ存する珍籍すら少くない。外に「經國集」二十卷（別項）がある。なほその作るところの詩は長短種々あるが、頗る唐詩の風格が多いと稱せられる。嵯峨帝の漁歌子に和した漁歌五首は詩餘（別項）である。當時詩餘の流行を以てしても、唐詩の隆盛と悄悅とを知るに足るものがある。

【人物】 身長六尺二寸、體軀魁偉であるが、溫良で仁慈の心深く、且つ度量があり、人材を適所に用ひることに努めた。その卒去を聞いて、知るも知らぬも流涕して悼惜したと傳へられてゐる。なほ死に臨んで、齋供の外は悉く儉薄にせよと遺言した如き、その人を想察することが出來よう。【業績】 貞主の陳情した便宜十四事は、「文德實錄」卷四（仁壽二年二月乙巳）にも「事多くして載せず。議文行はれず」と記してあるが、その[illegible]

昨二年春の上書には「太宰府は西極の大鎭、中國の領袖である。九國二島を以て群縣闊遠、古來の重鎭であり中外の關門である。故に有德を帥貳となし才良を監典とすべきである。若し其の人が無ければ辨官又は式部から選ぶがよい。聞く所によれば、近來太宰府の吏は、聚斂を事として府司國宰共に悲傷する者が多い。又少貳小野朝臣恒柯と筑前守紀朝臣今守と執論して敢て曲吏を矯正するの事を怠つてゐる。故に上奏して意を披瀝する」といふにある。この上奏は言辭誠に切實であつたが用ひられなかつた。又その邸宅を西寺の別院とし、唐の孫思邈の藥餌を[illegible]

祖父の著書の校訂などに努めた。【著書】 室町殿屋形私考一卷（室町幕府殿中の大概を記したもの。增訂故實叢書所收）この外、位署微古○皮類考○具足羽織記○大和事始正誤○類聚馬毛名歌等がある。　〔石村〕

貞陸（さだみち）　故實家　【姓名】 伊勢氏。初名は貞隆。道號は光岳。【法名】 常照・茂齋（或は叔とも）・勝蓮院。【生歿】 生年未詳。永正十八年（二二八一）八月七日歿す。【閱歷】 貞親の孫、貞宗の子。從四位上・備中守・伊勢守・兵庫助となり、七郎と稱した。政所・殿中惣奉行等の世職を勤め、故實に通ずるを以て著はれた。

も云ひ、白石との問答の筆記で、[illegible]等、法制に關したものを合せたもので、定基の寶永八年の跋がある。新井白石全集第六所收）○平家物語考證十二卷、語句を摘出し舊記數百部を擧げて解說し且つ事實を訂正したもので、平家註釋書中の一異彩。國文註釋全書所收）○裝束溫故抄一卷（冠・袍その他束帶の具に就いて、古書を引かず、その故實の大要を概說したもの。寶永元年の自序がある）○吉口傳正誤一卷（元祿十五年五月成、吉田隆長の吉口傳の誤を訂したもの）○群記類鑑五卷（公事部類で祭事部のみ出來たものと云ふ）。　〔石村〕

貞頼（さだより）　故實家　【姓名】 伊勢氏。通稱

「左千夫歌集」（別項文庫本、「伊藤左千夫集」（現代短歌全集、改造社）等がある。　〔齋藤（茂）〕

左千夫歌論集（さちをかろんしふ）　歌論集　三卷　【編者】 齋藤茂吉・土屋文明　【刊行】 昭和四年より五年にかけて岩波書店から刊行。【內容】 伊藤左千夫の歌に關した論文・講話等すべてを輯め、なほ隨筆・感想文・書簡をも附加した。歌論の主なるものには、萬葉集新釋、新歌論、短歌連作論、新しい歌と歌の生命、叫びと話、表現と提供、仁德天皇の御製、僧良寬の歌と田安宗武の歌、上田秋成の歌、與謝野晶子の歌を評す等がある。　〔齋藤（茂）〕

昨二年春の上書には「太宰府は西極の大壤、中國の領制である。九國二島を以て群縣闊遠、古來の重鎭であり中外の關門である。故に有德を帥貳となし才良を監典とすべきである。若し其の人が無ければ辨官又は式部から選ぶがよい。聞く所によれば、近來太宰府の吏は、聚斂を事として府司國宰共に悲傷する者が多い。又少貳小野朝臣恒柯と筑前守紀朝臣今守と執論して敢て曲吏を矯正するの事を怠つてゐる。故に上奏して意を披瀝する」といふにある。この上奏は言辭誠に切實であつたが用ひられなかつた。又その邸宅を西寺の別院とし、唐の慈恩寺の構營に摸したために慈恩寺と稱したのである。その宅を寺院とするのは法華經の諸品に屢々見えるやうに現世の功德を期待するものであらう。

【參考】〔傳記〕文德實錄卷四（仁壽二年二月乙巳の條）○公卿補任（仁明帝承和九年）。〔詩〕凌雲集○文華秀麗集上下○雜言奉和○經國集卷一・十・十一・十三・十四。〔慈恩寺の事〕續日本後紀卷十四（承和十一年四月三十日壬午の條）○百錬鈔卷六（保延二年十二月、慈恩寺災の條）○慈恩院初會序（本朝文粹卷一〇）〔山岸〕

貞順（さだのぶ）　故實家【姓名】伊勢氏。通稱六郎左衞門【著書】伊勢貞順豹文書一卷（着類の染色・着用法に就いて述べたもの。續群書類從第六八七武家部三三所收）○伊勢六郎左衞門尉貞順記一卷（武家故實に關して數百項が記されてある。續群書類從第六八七武家部三三所收）。〔石村〕

貞信（さだのぶ）「三草集」を見よ。

貞春（さだはる）　故實家【姓名】伊勢氏。通稱萬助【家系】貞丈（別項）の智養子貞敦が病弱のため夙く蟄居したので、貞春が嫡孫として家督を繼ぎ、三百石を食み、又家學を繼承して祖父の著書の校訂などに努めた。【著書】室町殿屋形私考一卷（室町幕府殿中の大概を記したもの。增訂故實叢書所收）この外、位署微古○皮類考○具足羽織記○大和事始正誤○類聚馬毛名歌等がある。〔石村〕

貞陸（さだみち）　故實家【姓名】伊勢氏。初名は貞隆。道號は光岳。【法名】常照・茂齋（或は叔とも）・勝蓮院。【生歿】生年未詳。永正十八年（一二八一）八月七日歿す。【閲歷】貞親の孫、貞宗の子。從四位上・備中守・伊勢守・兵庫助となり、七郎と稱した。政所・殿中物奉行等の世職を勤め、故實に通ずるを以て著はれた。【著書】伊勢貞陸自記一卷（殿中に於ける一年中の御對面・御祝等のことを記したもの。卷末は古くから闕けてゐたと云ふ）○常照愚草。〔石村〕

定基（さだもと）　有職家【氏名】野々宮氏。初名は親茂【號】松堂【生歿】寛文九年七月十四日生れ、正德元年（一三七一）六月二十九日歿す。享年四十三【閲歷】內大臣中院通茂の二男で、延寶五年母方の野々宮家に入り、定緣の後を襲ぐ。元祿元年左中將、寶永元年參議に任じ、寶永七年正三位に叙せられた。正德元年權中納言に進み卽日薨じた。有職に精しく、地下の壺井義知・新井君美等と問答する所があつた。

【著書】本朝故實記一卷（野宮殿口語又は野宮問答と題したものもある。位記・讓位踐祚・裝束等、故實に關する問答の筆記で、安永三年の芙蓉道人の跋には、この書は正德年中、新井白石上洛の時の問答であらうと言つてゐる）○車服制度手記（白石との問答の筆記で、乘車之儀・下車之儀・女房乘車之儀・同下車之儀・打板之儀・前板之事を記してある。又車服問答と題し、他の白石との問答を加へたものもある。新井白石全集第六所收）○新野問答（一名黃白問答と云ひ、白石との問答の筆記で、冠・袍・束帶・位袍・朝倉等、法制に關したものを合せたもので、定基の寶永八年の跋がある。新井白石全集第六所收）○平家物語考證十二卷（語句を摘出し舊記數百部を擧げて解說し且つ事實を訂正したもので、平家註釋書中の一異彩。國文註釋全書所收）○裝束溫故抄一卷（冠・袍その他束帶の具に就いて、古書を引かず、その故實の大要を概說したもの。寶永元年の自序がある）○吉口傳正誤一卷（元祿十五年五月成、吉田隆長の吉口傳の誤を訂したもの）○群記類鑑五卷（公事部類で祭事部のみ出來たものと云ふ）。〔石村〕

貞賴（さだより）　故實家【姓名】伊勢氏。通稱は二郎左衞門【號】鳩拙齋【生歿】未詳【法名】宗五【閲歷】因幡守貞長の孫、下總守貞數の子。永正・大永頃の人。下總守と稱した。【著書】宗五大艸紙（別項）がある。〔石村〕

左千夫歌集（さちをかしふ）　歌集【編者】初版は伊藤左千夫歿後、門人島木赤彥・石原純・古泉千樫・中村憲吉・胡桃澤勘內・土屋文明・齋藤茂吉。改訂版は中村憲吉・土屋文明・齋藤茂吉。【刊行】初版は大正九年九月、春陽堂。改訂版は正和五年五月、岩波書店。【內容】初版は左千夫全集第一編として出たもので、明治三十三年以降、左千夫歿年の大正二年に至るまでの作、短歌一千八百七十九首・長歌七十四首・長詩十二首・旋頭歌七首を收めた。本書は長く絕版になつたので、二百餘首の歌を增補して校合を新にし、再び「左千夫歌集」として出すに至つた。左千夫は生前に歌集を編む志があり、自ら「ゆづり葉」と命名したのであつたが、それを實行するに至らずに歿した。なほ左千夫の歌の選抄本には、島木赤彥編「伊藤左千夫選集」（アルス）、齋藤茂吉・土屋文明共編「左千夫歌集」（岩波文庫本）、「伊藤左千夫集」（現代短歌全集、改造社）等がある。〔齋藤（茂）〕

左千夫歌論集（さちをかろんしふ）　歌論集　三卷【編者】齋藤茂吉・土屋文明【刊行】昭和四年より五年にかけて岩波書店から刊行。【內容】伊藤左千夫の歌に關した論文・講話等すべてを輯め、なほ隨筆・感想文・書簡をも附加した。歌論の主なるものには、萬葉集新釋、新歌論、短歌連作論、新しい歌と歌の生命、叫びと話、表現と提供、仁德天皇の御製、僧良寬の歌と田安宗武の歌、上田秋成の歌、與謝野晶子の歌を評す等がある。〔齋藤（茂）〕

皐月晴上野朝風（さつきばれうへのあさかぜ）　歌舞伎脚本　七幕　世話物【作者】竹柴其水【俗稱】上野の戰爭【興行】明治二十三年五月、東京新富座初演。

〔役割〕天野八郎・金魚屋清八實は天野八郎・越前屋佐兵衞（五代尾上菊五郎）、長岡悅太郎・執當白王院・天野賢次郎（先代市川左團次）、高木原源吉（中村芝翫）、後藤鐵次郎・非人ぼうだら勝次（市川小團次）、金魚屋女房おわか（澤村源之助）、上野の僧光仁（中村福助）、秋本唐之助・銀行副頭取壙實（坂東家橘）、天野半左衞門・金魚屋九郎兵衞（尾上松助）早ぶさ菅吉・金魚屋德松（尾上幸藏）等。

【諸本】日本戲曲全集第三十二編・世話狂言傑作集第七卷所收【題材】明治維新の際の上野戰爭に關する遺聞逸事。

【梗概】〔序幕〕明治元年五月、上野に戰爭が始まるといふので、江戶市中は物情騷然としてゐた。歩兵は官軍の名を借りて到る處で亂暴を働く。殊に上野の宮を中心として、將軍家恩顧の者共は、容易に上野の屯集を解かうともせず、彰義隊をめぐつて、悲劇は數限りもなく、武士と町人とに展開されるのであつて、知るも知らぬも流涕して悼惜したと傳へられてゐる。なほ死に臨んで、齊供の外は悉く儉薄にせよと遺言した如き、その人を想察することが出來よう。【業績】貞主の陳情した便宜十四事は、「文德實錄」卷四（仁壽二年二月乙巳）にも「事多くして載せず」と記してあるが、その大部分は「類聚三代格」に載つてゐる。なほ平安朝の末頃迄は傳へられてゐたが、平安朝の末頃迄は傳へられてゐる。なほ「樂家錄」卷九には、琵琶の祕曲として流泉・啄木・楊眞藻の三曲を擧げ、この三曲は人皇五十四代仁明の御宇、遣唐使掃部頭藤原貞敏、廉承武より之を傳ふと記してある。この三つの祕曲は今日絕えてしまつたが、平安朝の末頃迄は傳へられてゐる。

卒す。享年六十八【家系】遠祖は神皇產靈命五世の孫紀伊國造天道根命。氏は最初楢原造と云ひ、天平勝寶二年三月駿河國守楢原造東人が部內なる盧原郡多胡ノ浦濱に黃金を鑄てこれを獻上した。そこで勤ノ臣の姓を賜つた。勤は伊豫志と訓む。後、延曆十七年に至つて、

た。〔二幕〕下谷竹町の湯屋佐兵衞は、今度上野の宮が京都へ行かれ、その後へ四條侍從が見えるから、お前の家へも官軍御用といふ札を掛けよと名主から言はれたが、いつかな聞き入れなかつた。上野凌雲院に本陣を構へてゐる彰義隊の頭領天野八郎をたづねて、總督の使者として長岡悅太郎(山岡鐵太郎)が唯一人平服で來り、靜かに解散することを勸めるが八郎は服せず、返答を後日に約して別れ、一戰するの止むを得ぬことを暗示する。〔三幕〕元來、天野八郎は奧御祐筆を勤めてゐた半左衞門の長子であり、弟の賢次郎は兄の武藝を勵むのと反對に學事にいそしみ、一刻も早く洋行して、日新月歩の學問をしようと決心した。この決心を知つた兄八郎は、德川譜代の家に生れた身を以て、外夷に深く心を寄するは國賊だといふので、刺し殺さうとしたが、父に引き分けられ、父は改めて兩人の志を聞き、親子兄弟の緣を斷つて水盃をなし、各々望むところに向へと金子を與へて西と東に別れさせる。〔四幕〕上野戰爭の場で、隊長酒井宰助・僧隨念・田宮新八郎等の戰死があり、彈丸雨飛する中を、湯屋の者が辨當を配つてゐる。〔五幕〕上野を落ちた白王院(覺王院)・光仁(宮樣)等が高木原(榊原)源吉・湯屋佐兵衞等に導かれて、官兵を追拂ひながら三河島の不動前まで落ち來り、これより尾久村の長兵衞方を志す事となる。〔六幕〕天野八郎は戰爭の後、本所北割下水の金魚屋九郎兵衞に匿まはれ、清八と名を替へ、ぼうふら取りなどを手傳ひて世話になつてゐた。秋の末になつたので父の安否を氣にしてゐる所へ妹のお花が捜しあてて來て、父は七月の末に現し、若黃次郎左衞門の長子であり、弟の賢次郎は兄の武藝を勵むのと反對に學事にいそしみ、一刻も早く洋行して、日新月歩の學問をしようと決心した。この決心を知つた兄八郎は、德川譜代の家に生れた身を以て、外夷に深く心を寄するは國賊だといふので、刺し殺さうとしたが、父に引き分けられ、父は改めて兩人の志を聞き、親子兄弟の緣を斷つて水盃をなし、各々望むところに向へと金子を與へて西と東に別れさせる。〔四幕〕上野戰爭の場で、隊長酒井宰助・僧隨念・田宮新八郎等の戰死があり、彈丸雨飛する中を、湯屋の者が辨當を配つてゐる。〔五幕〕上野を落ちた白王院(覺王院)・光仁(宮樣)等が高木原(榊原)源吉・湯屋佐兵衞等に導かれて、官兵を追拂ひながら三河島の不動前まで落ち來り、これより尾久村の長兵衞方を志す事となる。〔六幕〕天野八郎は戰爭の後、本所北割下水の金魚屋九郎兵衞に匿まはれ、清八と名を替へ、ぼうふら取りなどを手傳ひて世話になつてゐた。秋の末になつたので父の安否を氣にしてゐる所へ妹のお花が捜しあてて來て、父は七月の末に現し、若黃次郎左衞門の長子であり、弟の賢次郎は兄の武藝を勵むのと反對に學事にいそしみ、一刻も早く洋行して、日新月歩の學問をしようと決心した。この決心を知つた兄八郎は、德川譜代の家に生れた身を以て、外夷に深く心を寄するは國賊だといふので、刺し殺さうとしたが、父に引き分けられ、父は改めて兩人の志を聞き、親子兄弟の緣を斷つて水盃をなし、各々望むところに向へと金子を與へて西と東に別れさせる。〔四幕〕上野戰爭の場で、隊長酒井宰助・僧隨念・田宮新八郎等の戰死があり、彈丸雨飛する中を、湯屋の者が辨當を配つてゐる。〔五幕〕上野を落ちた白王院(覺王院)・光仁(宮樣)等が高木原(榊原)源吉・湯屋佐兵衞等に導かれて、官兵を追拂ひながら三河島の不動前まで落ち來り、これより尾久村の長兵衞方を志す事となる。〔六幕〕天野八郎は戰爭の後、本所北割下水の金魚屋九郎兵衞に匿まはれ、清八と名を替へ、ぼうふら取りなどを手傳ひて世話になつてゐた。秋の末になつたので父の安否を氣にしてゐる所へ妹のお花が捜しあてて來て、父は七月の末に現し、若黃次

き、自分は榎本武揚と共に北海道に脫走せんと決心する。〔七幕〕明治二十三年、上野に第三回內國博覽會の開かれたその會場內を舞臺とし、洋行から歸つた天野賢次郎が、湯屋の佐兵衞を初め、高木原源吉などに逢ひ、往時を追懷する。

【解說】上野戰爭を正面から歌舞伎に採用して上演した最初の作であつて、當時江戶の民心を作者の體驗からも描破してゐる所に別趣の興味もある。五代菊五郎の天野八郎は、左團次の舍弟賢次郎、松助の父親や金魚屋の亭主等と共に非常な當り役であつた。

【參考】河竹默阿彌 河竹繁俊 ○月くさ 〔河竹〕

雜藝叢書 ざつげいそうしよ 風俗 二卷 【刊行】卷一は大正四年二月、卷二は同年八月、國書刊行會 【解說】江戶時代に於ける娛樂・諸藝に關した祕傳・祕法を書いたものを集む。卷一には、楊弓射禮蓬矢抄(館重興・同追考(今井一中)等。卷二には、古今俄選・座敷狂言早合點・茶番狂言早合點(式亭三馬)等、すべて四十九種七十一卷を收め、卷一には三田村鳶魚、卷二には、朝倉無聲の解題を各卷頭に載せてある。〔石村〕

雜誌 ざつし 【性質】定期刊行物の一種で、普通には書册の體裁をなし、月刊・週刊・月二回刊・旬刊、又は年數回發行のものなどあつてさま〳〵である。(但し諸種の學界の報告、年鑑の類を除く)。雜誌には文學・宗教など或る特殊の一事項を限つて取扱ふものと、雜然と種々の題目に關する記事を掲載するものとがある。何れにしても內容は概して論說・報道を主とするものであつて、その性質はよほど指圖(別項)と似た點がある。ただ前者は報道に中心を置く。尤も後には單に論說・報道に限らず、趣味・娛樂その他萬般の事項に亙るものも出來、各々專門の雜誌さへ生れ、所謂娛樂雜誌の如きものすら生れて來た。古くはその性質によつて、Review(評論)と Magazine(雜誌)の區別があつたが、現在ではこの區別は必ずしも明かでない。【起原】西曆一六六五年一月、フランスに於て發行された "Journal des Savants" を以て嚆矢とする。これは新刊書の評論、科學上の新發見の報告、人事の消息及び學界の報道を主としたものであつた。その後、イギリス、イタリー、ドイツなどにも相次いで發行を見たが、これ等は皆多少ともフランスの影響を受けたものであつた。十八世紀以降、印刷文化の進步に伴つて、雜誌は歐洲各國に於て長足の發達をなし、英國には評論雜誌、ドイツには學術雜誌、フランス、イタリーには文學雜誌、アメリカには娛樂雜誌が榮え、各々その特色を示した。また英國には十八世紀中頃に政黨の機關雜誌が生れ、フランスに於ては、同じく十八世紀後半に農業・商業・經濟・社會・軍事等の特殊雜誌が續出した。なほイギリスの有名な月刊雜誌 "The Gentleman's Magazine" (1730頃)の如きは、當時に於て發行部數優に一萬を超えたといふ。十九世紀に入つて雜誌は驚くべき發達をなし、歐洲各國に亙つて、文學・政治以外に、宗教・教育・諸科學・美術・商業等の諸雜誌が續々刊行され、社會生活の重要な一機關となつて今日に及んだ。

【日本に於ける發達】日本の雜誌は、新聞と共に西洋文明の輸入に伴つて移植されたものであつて、文獻的には、慶應三年に出た柳川春三の「西洋雜誌」が出てから同十年までに、百八十餘種の雜誌が出たといふから、その發展は驚くべきものであつた。その中の主なものは、慶應義塾の「民間雜誌」(明治七年二月)、「三田演說筆記」(同八年五月)、「家庭叢談」(同九年九月)を初め、中村敬宇の「同人社文學雜誌」(別項)、成島柳北の「花月新誌」(同十年一月)、ポンチ式の「團々珍聞」(同十年三月)、投書雜誌「穎才新誌」(別項)などであつた。十年から二十年までの間に於ては、なほ學者の啓蒙的傾向も殘つてはゐるが、雜誌が政黨の宣傳機關として視聽を集めた事が注意される。就中、自由民權運動の指導機關となつた中江兆民の「政理叢談」(明治十五年二月)が最も代表的である。有名な「民約論譯解」が發表されたのもこの雜誌である。また文學雜誌の「文章倶樂部」、第二次文

語は既に「雲萍雜誌」(別項)などに用ひられてゐるが、これを定期刊行物に移し用ひて、今日の意味に轉換させたのは、この「西洋雜誌」である。これは主としてオランダ雜誌の飜譯であるが、間々日本の記事をも挾み、立派に雜誌の體裁をなして居り、又當時に於て雜誌の性質をよく理解してゐたといふ點でも注目すべきものである。しかし最初は新聞と雜誌との分化が十分には遂げられてゐないので、體裁性質共に判然たる區別は認められなかつた。中には「新聞雜誌」(明治四年)といふ標題のものすらある。雜誌が獨自の發達を示すに至つたのは、明治七年三月の「明六雜誌」(別項)からと見てよい。この雜誌は、同十年までに於て最も注目すべきものであつたが、明治八年に新聞條例、讒謗律が發布されるや、同年末、四十三號を以て、同人等は自發的に廢刊してしまつた。宮武外骨氏の調査によれば、柳川春三の「西洋雜誌」が出てから同十年までに、百八十餘種の雜誌が出たといふから、その發展は驚くべきものであつた。その中の主なものは、慶應義塾の「民間雜誌」(明治七年二月)、「三田演說筆記」(同八年五月)、「家庭叢談」(同九年九月)を初め、中村敬宇の「同人社文學雜誌」(別項)、成島柳北の「花月新誌」(同十年一月)、ポンチ式の「團々珍聞」(同十年三月)、投書雜誌「穎才新誌」(別項)などであつた。十年から二十年までの間に於ては、なほ學者の啓蒙的傾向も殘つてはゐるが、雜誌が政黨の宣傳機關として視聽を集めた事が注意される。就中、自由民權運動の指導機關となつた中江兆民の「政理叢談」(明治十五年二月)が最も代表的である。有名な「民約論譯解」が發表されたのもこの雜誌である。また文學雜誌の「文章倶樂部」、第二次文

鏡を持た明日開軒の「東京經濟雜誌」が出て、この種のものの先驅をなした。その外、東京大學系統の論說を中心とする「東洋學藝雜誌」(別項)があり、「女學新誌」(明治十七年六月)、「女學雜誌」(別項)、「女學叢誌」(同十八年七月)なども創刊された。かくの如く急に婦人雜誌が續出するに至つた事は雜誌の發達史上特に注意すべき事である。なほこの頃硯友社(別項)が結成せられ、明治十八年二月には、後の「我樂多文庫」(別項)の萌芽と見るべき廻覽雜誌「我樂多文庫」が生れてゐた。二十年代に入つては、最も注意すべきものに、德富蘇峰の「國民之友」(別項)がある。これは政治經濟論に、社會・文學の方面にも亙つたもので、この傾向は後の「太陽」「反省雜誌」を通じて、遙かに今日の「中央公論」「改造」にまで及んでゐるといつてよい。この「國民之友」の歐化主義に對立するものに三宅雪嶺の「日本人」(別項)があり、文學雜誌としては森鷗外の「しがらみ草紙」(別項)、坪内逍遙の「早稻田文學」(別項)が相對峙し、別に北村透谷・島崎藤村等の「文學界」(別項)があり、外に「城南評論」及び「評論」があつた。一方、文壇に於ける小說の興隆と共に、幾多の小說雜誌が現はれた。即ち二十一年より公刊するに至つた「我樂多文庫」を初め、「都の花」「小說萃錦」「やまと錦」「新小說」「葦分舟」「文庫」「江戸紫」「千紫萬紅」「新著百種」「小櫻縅」「日本の文華」(各別項)などが出た。婦人雜誌としては「女學雜誌」「以良都女」(別項)「貴女の友」があつた。日淸戰爭後は雜誌が著しく商品化し、學者の啓蒙事業や政黨の宣傳機關の方が特殊雜誌の觀を呈するに至つたことは最も注意すべき現象である。「文藝倶樂部」「太陽」「新小說 再刊」(各別項)等はこの機運に乘じて生れた。なほ二十年代の末には、「文庫」「青年文」「新聲」「江湖文學」「めざまし草」「帝國文學」「中央公論(反省雜誌改題)」(各別項)等が出た。こゝに一つ注意すべきは、「少年園」「小國民」(各別項)などが出て少年雜誌の先驅をなしたことである。三十年代に入つては雜誌の商品化的傾向は益々顯著となり、「日本大家論集」(別項)で成功した博文館は、在來發行してゐた數種の雜誌を整理して、二十八年以降、「太陽」「文藝倶樂部」「少年世界」の三雜誌を發行して來たが、爾來益々發展して、「太平洋」「寫眞畫報」「女學世界」「少女世界」「中學世界」「文章世界」(別項)など十數種を刊行するに至り雜誌界に覇を唱へた。就中、田山花袋の主宰した「文章世界」は、自然主義運動に貢獻すること甚だ大であつた。又三十年には日淸戰爭以後の實業熱に乘じて「實業之日本」が出、この種の雜誌に先鞭をつけた。同社は數年後れて「婦人世界」「日本少年」を出した。なほ三十年には「新著月刊」、三十一年には「ホトトギス」、三十四年には「明星」「小天地」、三十五年には「萬年草」「文藝界」(以上各別項)、三十六年には山路愛山の「獨立評論」、三十七年に「新潮(新聲改題)」(別項)などが創刊され、三十九年には「趣味」が出、「早稻田文學」も再興された。「日本人」が「日本及日本人」と改題したのもこの頃である。この外に「活文壇」(明治三十二年)「秀才文壇」(同三十四年)「女子文壇」(同三十七年)などの投書雜誌があり、二十年代の末に出た「青年文」「文庫」「新聲」(各別項)などと共に多くの文學者を生み出したことは注意すべきである。四十年代に入つては日露戰爭後に起つた新文學運動に伴つて、「新思潮」「藝苑」「スバル」「三田文學」「白樺」「藝文」「青鞜」(各別項)などの文學雜誌が生れた。これ等の諸雜誌と共に「中央公論」「早稻田文學」「新潮」「文章世界」などが、自然主義を中心題目として花々しく活躍した。殊に「中央公論」は、日露戰爭後急に活氣を帶び、當時文藝及び思想界に君臨してゐた「太陽」を壓倒するの氣勢を示した。なほこの時代に於て注意すべきは、後に雜誌の商品化を最も徹底せしめた講談社の出現である。四十三年初めて「雄辯」を創刊、續いて翌年、博文館の「講談雜誌」に倣つて、「講談倶樂部」を出し、少年少女雜誌にも手を染め、次第に博文館の牙城に迫つて行つた。大正期に入つては、初期に「黑潮」「文章倶樂部」、第二次及び第三次「新思潮」(別項)などの刊行があり、同人雜誌なども多く現れたが、歐洲大戰を轉機として異常な發展を示した。この期に創刊された主なる雜誌には、「改造」「解放」(各別項)「新時代」「女性」「苦樂」「婦人公論」「女性改造」「人間」「思想」「種播く人」(別項)「我觀」「文藝春秋」「文藝戰線」(各別項)等がある。殊に目覺しい活躍をなしたものは「中央公論」であつて瀧田樗陰の編輯の下に、吉野作造の論說を掲げ、デモクラシーの宣傳に努め、一躍「太陽」の堅壘を拔いた。爾來斯界に第一流の地位を占めて今日に至つてゐる。これに次いでは「改造」「新潮」があつた。「改造」は當初、旗幟甚だ不鮮明であつたが、三號頃から新興無產階級的諸運動の機關紙なるかの如き編輯を示し、これに依つて成功を收めたのであつた。「新潮」は中村武羅夫の編輯であつたが、純文藝雜誌として、「中央公論」と共に文壇に重きをなした。なほこの期に於て特徵的なことは、評論雜誌乃至文藝雜誌と娛樂雜誌が截然と分けられて來たことである。これは世界大戰以後に於ける好況時代の後を受け、一般社會、殊に知識層から娛樂を要求する風潮によるものと思はれる。當時の娛樂雜誌としては、「講談雜誌」「文藝倶樂部」「講談倶樂部」「面白倶樂部」「キング」などが擧げられ、やゝ高級なものには「苦樂」「女性」「新趣味」「新青年」が數へられる。これ等の傾向は後に合流して今の所謂大衆雜誌を生むに至つた。更にもう一つのこの期の特徵は、畫報類と婦人雜誌の進出である。特に婦人雜誌は、「主婦の友」「婦女界」「婦人倶樂部」など各々大なる發行部數を有し、昭和時代にかけて驚くべき發展をなした。又大震災の前後、殊に大正末年に於ける大小無數の同人雜誌の出沒は甚だ興味ある現象であつた。又社會主義思想乃至勞働運動に關するものには、古く「政理叢談」があり、次いで「六合雜誌」(明治十三年)「勞働世界」(同三十年)「直言」(同三十七年)「火鞭」「光」「新紀元」(以上同三十八年)「社會主義研究」(同三十九年)等が出たが、この期に入つてから大杉榮・荒畑寒村の「近代思想」(大正元年)、堺利彥等の「新社會」(大正四年)が出た。以上擧げた以外に、各種專門の諸雜誌が殆ど無數に刊行されてゐる。次に詩歌・俳句・演劇に關するものの中、左の

〔詩歌〕アララギ・心の花・歌學・水甕・日光・國民文學・潮音・若竹・生活と藝術・白百合・朱欒・屋上庭園(各別項)〔俳句〕俳諧評論・高潮・秋の聲・卯杖・木太刀・にひはり・懸葵・石榴・海紅・三味・層雲(各別項)〔演劇〕歌舞伎・新報・歌舞伎・演藝畫報・新演藝・劇と評論・演劇新潮

は、それ〴〵獨立解說した。(兒童雜誌參照)

【參考】明治文化全集(雜誌篇)○東天紅(東京帝大法學部明治新聞雜誌文庫所藏目錄)○雜誌年表(愛書趣味二ノ四)○日本雜誌發達史 木村毅

方を志す事となる。〔六幕〕天野八郎は戰爭の後、本所北割下水の金魚屋九郎兵衞に匿まはれ、淸八と名を替へ、ぼうふら取りなどを手傳ひて世話になつてゐた。秋の末になつたので父の安否を氣にしてゐる所へ妹のお花が捜しあてて來て、父は七月の末に歿し、遺骸は次

鑑の類を除く)。雜誌には文學・宗教など或る特殊の一事項を限つて取扱ふものと、雜然と種々の題目に關する記事を掲載するものとがある。何れにしても內容は概して論說・報道を主とするものであつて、その性質はよほど新聞(別項)と似た點がある。ただ新聞は報道

外に、宗教・教育・諸科學・美術・商業等の諸雜誌が續々刊行され、社會生活の重要な一機關となつて今日に及んだ。

【日本に於ける發達】日本の雜誌は、新聞と共に西洋文明の輸入に伴つて移植されたものであつて、文獻的には、慶應三年に出た柳川

十年までの間に於ては、なほ學者の啓蒙的傾向も殘つてはゐるが、雜誌が政黨の宣傳機關として視聽を集めた事が注意される。就中、自由民權運動の指導機關となつた中江兆民の「政理叢談」(明治十五年二月)が最も代表的である。有名な「民約論譯解」が發表されたのもこの雜誌である。

倫部・醫書部・官位部・武職・樂府錄附樂器・衣服部・經論部・本書部・歌道部・遊樂部・飲食部・香部・繪部といふ順序で、漢字で書いた單語を以上の部類に從つて列擧し、間々傍に讀假名を附し、稀に註を加へてゐる。訓註には往々「和名類聚抄」を引用してゐる。室町時代の語彙として注目すべきもの丶一である。〔龜田〕

雜字類編（ざつじるゐへん）　漢文作法書　七卷

【著者】柴野栗山　【刊行】明和六年　【解說】童蒙の漢文を作る資料に供せんが爲め、國語に漢語を配當したもので、先づイロハ順に分類し、更に天文・地理・時令・宮室・人品・家倫・官職・身體・神佛・器用・衣服・飲食・文書・錢穀・采色・人事・動物・植物の十八部門に分け、普通適切な詞を蒐集してある。「文藻行潦」（別項）と同じ體裁の書である。〔佐久〕

薩人書（さつじのしよ）「神代文字」を見よ。

雜訴決斷所牒（ざつそけつだんしよてふ）「牒」を見よ。

雜訴決斷所下文（ざつそけつだんしよのくだしぶみ）「下文」を見よ。

雜俳（ざつはい）　俳諧　【解說】前句附の附句が前句から分離獨立して川柳が出來たと同時に一方には同じく前句附から冠附（かむりつけ）・沓附（くつつけ）・一字題・一言題・折句・折込・捩り（もじり）・廻文（をくり）・小倉附（をくらつけ）・五文字・段々・狂俳（各別項）などと稱する各種の遊戲文學が生じた。これ等を汎稱して雜俳といふのである。尤も雜俳なるものの範圍・領域は廣汎に亙つて、物者附（ものはつけ）・語呂合（ごろあはせ）・地口・尻取（各別項）を初め、謎や都々一など迄もその中に包容する人がある。【沿革】最初は前句附の點者がその選を兼ねてゐたが、寶曆頃よりこれ等低級卑近な遊戲文學が漸く社會の下層界を風靡し流行り出して、それ〴〵專門的の

多事多難のため自然に衰微廢滅して、ただその中の二三種が僅に餘喘を保つに過ぎなくなつた。元祿・享保の往時より文化・文政の近代にかけて發行せられた雜俳の書物は、非常に饒多になつた。今その主なものを擧げれば、難波土產・俳諧高天鶯・江戸土產・冠獨歩行・若えびす・俳諧萬人講・俳諧三尺のむち・俳諧金砂子・眉斧日錄・俳諧あづまからげ・豆鐵砲・俳諧鰕・阿津まにしき・猿蒐玖波集・冠附青木賊・鸚鵡返・歌羅衣（各別項）等がある。〔西原〕

薩摩歌（さつまうた）　淨瑠璃　三段　世話物

【作者】近松門左衞門　【名稱】源五兵衞（おまん）と角書がある。薩摩源五兵衞の流行唄に着想を得たところから名づけた。【興行】寶永元年正月十五日初日、「悅賀樂平太」（別項）の切として竹本座に上演。【諸本】八行五十六丁本、十行三十四丁本、加賀掾正本の八行四十七丁本（「諸國鑑じるし」がなく、他にも改修がある）等の版本。近松傑作全集第三・近松世話淨瑠璃集（帝國文庫）・近松門左衞門全集第四・近松淨瑠璃集第一（有朋堂文庫）・近松全集第六・近松名作集上（日本名著文庫）等所收。【題材】「松の落葉」等に傳はる薩摩源五兵衞の唄によつて案じたものと思はれるが、「好色五人女」（別項）卷五も多少利用されたかと思ふ。殊に同書におまんが男裝して源五兵衞に接する趣向を逆に行つたのが、本曲の三五兵衞のお林かと考へられる。但しこの種の事實があつて、近松が西鶴か何れかが比較的忠實に筆端に上せたのかとも考へられぬでもない。夢分舟の案は流行唄から得たのであらう。

【梗概】（序の卷）（平鹿屋敷）但馬侯の留守居役京都平賀の許では姉娘小万が御小姓役たるべきために藤人ある取を迎ふ。この藤人は

し）色事でお尋ね者の薩摩浪人菱川源五兵衞が諸大名の鑓印を言ひ上げたので、抱へられて名も津摩藏と呼ばれる。その晩、馴れぬ夜廻りで庭先まで踏み込んで小万に嬲られた津摩藏は、國で芭蕉布屋のお万との情事を明かした。小万も許嫁笹野三五兵衞の病氣によつて後家を立てる身の、遣る瀨なさに津摩藏を蚊帳に引き入れた。小万が氣に入りの女中の林、實は仇討のためやつした三五兵衞はこれを知つて女敵討たんと躍り出たが、源五兵衞の相手は替玉のお蘭であつた。源五兵衞は三五兵衞等の祕密を守つたが、自身は暇を出される。〔中の卷〕（お万の宅）源五兵衞は大膽にも事介と變名して戀仲のお万の家に住み込んだ。お万は繼母のために緣談が決められ、今日は祝言の使者が來る。悲しみの中にも生母十三年の忌日なので、お万は密かにその冥福を祈り、折から來た比丘尼の修行者を二階の佛間に案内したが、これはお蘭であつた。お万は源五兵衞とお蘭との契りの絕えぬ事を思ひ怨むの餘り、自害を計る。源五兵衞が留めた機みに刄は飛んでお蘭の腕を傷つけたので、騷動となり、そこに繼母が歸つて、源五兵衞は逐ひ出される。夜更けて塀を越えたお万は、帶を松の枝に懸けて危い所をお蘭に救はれた。お蘭は既に我が身の戀を捨てたのであつた。（源五兵衞お万夢分船）（以下、下の卷か）源五兵衞を尋ね行くお万が船路の夢は、源五兵衞に殺され、彼も自刄する凶夢であつた。（源五兵衞宅）男の無事を見て喜んだのも束の間、繼母が乘り込んで來て、お万を連れ戻さうとする。鞘を走つた源五兵衞の刄は繼母を屹ふお万を傷けてしまつた。襷ざの巾に源五兵衞は

撮壤集（さつじやうしふ）　語學書　三卷

【著者】飯尾永祥　【成立】享德甲戌（三年）十有一月桃花坊蘭雪齋の序がある。その頃に出來たもの。【諸本】寫本の外に活版になつたのは「增補語林和訓栞」に附載したもの及び續群書類從八八九所收本。【內容・組織】分類體の辭書である。即ち「上卷」天象部・風雨部・佛部附天部・神部・祈禱部・寺院部・諸宗部・四時部・年中行事・衆色類。「中卷」地儀部・海部・船部・海藻・漁獵・魚部・鳥部・獸部・蟲部・草木部・五穀部・農作附農器・衣物部・馬部・鞍鐙部・金玉部・京洛部・行

果して美名を謳はれる三五兵衞・小万の夫婦が現れた。曩の日の處置を德とし、お万が他家への緣談を防ぐために、彼がお万方へ祝言を申込んだのであつた。深手の傷も必ず癒す南蠻醫者へと源五兵衞等は運ばれた。

【構想】源五兵衞・お万の情事としては單純なものであるが、三五兵衞・小万の件が關與した所に姓名の類似もはたらいて、觀衆の理解を混亂させる脚色の複雜化に成功を遂げた。而して第一次事件として小万の部屋の濡れ場を見せた事が極めて自然に運ばれてゐるのは作者の手練に外ならぬ。故に三五兵衞・小万は、

は、未だ發展の餘地を十分に存してゐると思ふ。【影響】淨瑠璃には「薩摩歌妓鑑」（寶曆七年九月三十日初日竹本座上演。作者吉田冠子・近松景鯉・竹田小出雲・近松半二・三好松洛）が元文二年大阪北の新地に於ける薩摩藩早田八右衞門の菊野殺しに附會して改作されたもので、その改修が「元文二年七月も早五十二の歲を經たり」國言詞音頭」（天明八年五月十三日初日、竹本染太夫座上演）である。又心中天網島（別項）との綯交ぜに「置土產今織上布」（安永六年五月十九日初日、北堀江座上演。作者、菅專助・豐春曉・若竹笛躬）がある。歌舞伎にはこれ等の作が常に上演されたが、獨特の成功を

により、江戸淨瑠璃界を事實上掌握した觀があり、代を逐つて榮えた。後年に對する彼の功績は偉大なものがある。

【正本】太夫の署名あるものとして、「はなや」（寬永十一年さうしや太郎右衞門版）と、「小袖曾我」（寬永十九（又は二十）年か、さうしや長兵衞版）とが傳存してゐる。「高館」（寬永二年勢兵衞版が傳存）も彼の語り物らしい。薩摩太夫正本作者に、淸玄とか北條宮內とかの傳へがあるが明かでない。「はなや」六段、十四行十六丁本。聖武天皇の御代、筑前博多の花屋長者家房は娘花よの姫を娶らんとした萩

せぬと言ふ。行先を問ふと、天王寺だとの事に、神崎の渡場はどうなさると詰め寄ると、船賃を持たぬからいつそ下向しようと言ひ出す。それなら船賃を進ぜようが、あの渡守は秀句好きだから、平家の公達薩摩守ただのりだと答へるやうに敎へる。僧はやがて聞きしに違はぬ渡にさしかゝり、船に乘つて船賃を請はれ、秀句で渡さうと言ひ出すと、船頭はこの意外の詞に驚き、その秀句好きの響いてゐるのに聊か得意となり、然らば秀句で受取らうとなる。然るに僧は、平家の公達薩摩守とばかり二の句が繼げないので、向うに上つて

所收本。【内容・組織】分類體の辭書である。即ち〔上卷〕天象部・風雨部・佛部附天部・神部・祈禱部・寺院部・諸宗部・四吐部・年中行事・衆色類。〔中卷〕地儀部・海部・船部・海藻・漁獵・魚部・鳥部・獸部・蟲部・草木部・五穀部・農作附・器部・衣物部附馬鞍・燈燭部・金玉部・京洛附行領域は廣汎に亙つて、物者附・語呂合・地口・尻取（各別項）を初め、謎や都々一など迄もその中に包容する人がある。【沿革】最初は前句附の點者がその選を兼ねてゐたが、寶曆頃よりこれ等低級卑近な遊戯文學が漸く社會の下層界を風靡し流行り出して、それ〳〵專門的の

果して美名を謳はれる三五兵衞・小万の夫婦が現れた。曩の日の處置を德とし、お万が他家への緣談を防ぐために、彼がお万方へ祝言を申込んだのであつた。深手の傷も必ず癒す南蠻醫者へと源五兵衞等は運ばれた。

【構想】源五兵衞・お万の情事としては單純なものであるが、三五兵衞・小万の件が關與した所に姓名の類似もはたらいて、觀衆の理解を混亂させる脚色の複雜化に成功を遂げた。而して第一次事件として小万の部屋の濡れ場を見せた事が極めて自然に運ばれてゐるのは作者の手練に外ならぬ。故に三五兵衞・小万は、脚色の爲めに使嗾せられた人物であるといふより以外には考へられぬのであるが、お万が身を以て逃れんとして却つて悲劇を生んだ緣談の相手が、實は恩に報いんとした三五兵衞であつたといふ脚色は、餘りに假空的な感がないでもないが、三五兵衞等の挿入を極めて意義あるものとしたと思ふ。お蘭に就いては或はかやうな比丘尼が實在したかとも察せられるが、お万の替玉として突如現はれる輕い役が、後には重要な働きを示す事になつて、作者の老巧を思はすものがある。夢分舟は小唄を巧に綾なした美文で愛誦するに足るが、單身我が家を逃れたお万の運命は危くも心許ない。その觀衆の焦慮を舟路に託する時、血腥い夢が吉か凶か。かくして漸層的な著しい好果がこの道行の場面に發見されるのである。本曲の各場面各人物が徒勞なく源五兵衞への同情ある解釋に集中されてゐる事は、五人女の源五兵衞が本能的な好色漢として描かれたに比して注目に値する。但し本曲が世話淨瑠璃としては初期の作であつて、舞臺技巧の苦心は察せられるが、箇々の人物の描寫については、未だ發展の餘地を十分に存してゐると思ふ。【影響】淨瑠璃には「薩摩歌妓鑑」（寶曆七年九月三十日初日竹本座上演。作者吉田冠子・近松景鯉・竹田小出雲・近松半二・三好松洛）が元文二年大阪北の新地に於ける薩摩藩早田八右衞門の菊野殺しに附會して改作されたもので、その改修が「元文二年七月も早五十二の歳を經たり國言詢音頭」（天明八年五月十三日初日、竹本染太夫座上演）である。又心中天網島（別項）との綯交ぜに「置土産今織上布」（安永六年五月十九日初日、北堀江座上演。作者菅專助・豐春曉・若竹笛躬）がある。歌舞伎にはこれ等の作が常に上演されたが、獨特の成功を收めたのは寛政六年の「五大力戀緘」（別項）である。この作の影響は頗る強く且つ大で、今後の源五兵衞の狂言は悉く本作の亞流と見られる。小説への影響も五大力に出發してゐると思はれる。

【參考】近松全集第六卷解題藤井乙男〇近松名作集上（日本名著全集）〔守隨〕

薩摩歌妓鑑（さつまうたいけいこかがみ）「薩摩歌」を見よ。

薩摩淨雲（さつまじやうん）淨瑠璃太夫【本名】熊野小平太とも虎屋次郎右衞門とも傳へる。淨雲はその法名である。【別名】薩摩太夫、天下無双薩摩太夫など。【生歿】文祿四年生れ、寛文十二年（一六三二）四月三日歿す。享年七十八と傳へる。【閲歴】出生地に就いては京説・堺説・紀州説等あつて的確でない。京の次郎兵衞又は角澤檢校の門に淨瑠璃を習ひ、元和・寛永の頃、江戸に下つて操芝居の櫓を上げた。又瀧野の弟子で、杉山丹後掾（別項）を慕つて下り、初めその助音を語つたとの傳へもある。一座は操法の妙と舞臺裝置の進歩と人形衣裳の華美を以て、當時第一流の江戸操芝居たる地位を占めた。殊に杉山丹後掾の上京により、江戸淨瑠璃界を事實上掌握した觀があり、代を逐つて榮えた。後年に對する彼の功績は偉大なものがある。

【正本】太夫の署名あるものとして、「はなや」（寛永十一年さうしや太郎右衞門版）と、「小袖曾我」（寛永十九（又は二十）年か、さうしや長兵衞版）とが傳存してゐる。「高館」（寛永二年勢兵衞版が傳存）も彼の語り物らしい。薩摩太夫正本作者に、清玄とか北條宮内とかの傳へがあるが明かでない。「はなや」六段、十四行十六丁本。聖武天皇の御代、筑前博多の花屋長者家房は娘花よの姫を娶らんとした萩原國司の請を斷つたために流罪になつたが、姫と弟花若丸とが觀音の加護により虎口を逃れて上洛し、花若丸は皇后の御惱に幼き修行者として選ばれたところ、皇后は法華經の功力で御平癒になり、賞として筑前國を賜はつたので、訴へて萩原國司を討ち、父を救つて本領を安堵したといふ筋である。「小袖曾我」も「高館」も幸若の詞章と殆ど同文である。

【參考】羅山文集林羅山〇色道大鏡畠山箕山〇繪入淨瑠璃史水谷不倒〔守隨〕

薩摩守（さつまのかみ）能狂言【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へらる。【格式】小習。但し謠入になるとずつと重く、一番習になつてゐる（和泉流）。【題材】薩摩守忠度の名を、乘物に無賃で乘る「ただ乘」の意に使ふ秀句は、かなり古い事であつて、今も人の口に上るのである。この作は秀句好きの船頭と、渡をただ乘りしようとするさもしい出家とを主要人物としてゐる。

【梗概】關東邊の僧、天王寺へ行く途に茶屋に立ち寄つて茶を呑み、代も置かずに立ち去らうとするので、茶屋が請求すると、錢を持合はせぬと言ふ。行先を問ふと、天王寺だとの事に、神崎の渡場はどうなさると詰め寄ると、船賃を持たぬからいつそ下向しようと言ひ出す。それなら船賃を進ぜようが、あの渡守は秀句好きだから、平家の公達薩摩守ただのりだと答へるやうに敎へる。僧はやがて聞きしに違はぬ渡にさしかゝり、船に乘つて船賃を請はれ、秀句で渡さうと言ひ出すと、船頭はこの意外の詞に驚き、その秀句好きの響いてゐるのに聊か得意となり、然らば秀句で受取らうとなる。然るに僧は、平家の公達薩摩守とばかり二の句が繼げないので、向うに上つてからと斷つたが思ひ出せぬ。ただのりののりを海苔の事から勘づいて、青海苔の引干とごまかし、船頭に愛想をつかされて面目を失ふ。

【構想】秀句、即ち口合（くちあひ）とか洒落とかを座興にする事は、當時上下一般に行はれたので、その事を加味した狂言の少くないことは、粟田口（別項）に註した通りである。又他から敎へられた文句を、いよ〳〵の場になつて忘れてしまつて失敗すると云ふ趣向は、萩大名（別項）と同樣である。この作に無知無學な出家を取扱つてゐるが、貪瞋痴の破戒無慚の僧侶を材とした狂言は、かなり多い。それは泣尼（別項）にも註した。世相の反映であるのは勿論、この種の物は、一面からは單なる滑稽がやゝ鋭い諷刺になつてゐるのである。〔野村〕

薩摩版（さつまはん）「刊本」を見よ。

薩摩琵琶（さつまびは）「琵琶」を見よ。

雜話續錄（ざつわぞくろく）隨筆　三卷【編者】山口安固（傳未詳）【成立】本書の末に寶曆十一年山口春水の跋がある。春水は安固の號であらう。（雜話筆記參照）〔和田〕

雜話筆記（ざつわひつき）隨筆　二卷　寫【編

源五兵衞を尋ね行くお万が船路の夢は、源五兵衞に殺され、彼も自刄する凶夢であつた。（源五兵衞宅）男の無事を見て喜んだのも束の間、繼母が乘り込んで來て、お万を連れ戻さうとする。鞘を走つた源五兵衞の刄は繼母を屹ふお万を傷けてしまつた。暴ぎの中に源五兵衞は現れて制止する。この時迄は、

者】山口安固【成立】本書の末に天明元年癸疑主人中村義方の跋がある。【解説】「雜話筆記」は、安固がその師淺見絅齋との問答、「雜話續錄」三卷は、彼が絅齋歿後、その高弟若林强齋との問答を仔細に記錄したもので、いづれも格物致知の道、又一般處世の法に關する話題が多く、中には問答以外に兩師の心術・言動を評論した項もある。絅齋・强齋の人物の非凡な樣が能く窺はれる。〔和田〕

雜話筆記（ざつわひつき）隨筆　正編十三卷後編二卷　寫【著者】神田勝久。白龍子と號す。享保中、兵學家を以て自ら居り、軍陣の講談を業とした。【成立】享保十五年の自序がある。【諸本】本書に二十卷本、その他異卷數の本が數部ある。內容に多少の出入があるらしい。【解説】主として戰國時代以來、德川初期の武家將士の行狀、戰陣武功の談、その他武器故實談、時俗談等を列擧したもので、著者の自序によれば、その五十一歲の頃起筆したといふ。〔和田〕

ザディズム（Sadism）【名義】虐待性淫亂症、又は動的疼痛淫亂症と譯す。フランスの小說家サード（Sade, 1740—1814）が書いたところから、この名を得たものである。【解說】變態性慾の一種であるが、マソヒズム（別項）とは反對で、相手を殘酷に取扱ふことによつて性慾を滿足せしめるものである。又相手を虐待するその事からして、性慾を高めることもある。卽ち相手をつねるとか、相手に嚙みつくとか、毆打するとか、或は相手に侮辱を與へ、脅迫し、監禁するとかいつたやうなことを好んでやり、甚だしいのになると、少女の美しい頭髮や衣服を切り、又は臀部を[illegible]

ある。フランスに自然主義が起つて以來、暗面描寫の傾向が著しくなつて來るや、露骨なる描寫を試みる作家が多く出て、性慾描寫が精細に行はれ、一段深刻なものとなつて、それ以後は、このザディズムの影響も非常に著しくなつて來た。〔宮島〕

左傳（さでん）「春秋左氏傳」を見よ。

サトウ（Earnest Mason Satow）日本學者【號】薩道【生歿】西曆一八四三年（天保十四年）六月三十日生れ、同一九二九年（昭和四年）八月二十六日、英國デヴオン州オッテリーに歿す。享年八十六。【閱歷】ロンドン大學在學中、「エルギン伯支那及び日本星槎記」とペリの「支那及び日本紀行」とを讀んで日本の風物に憧憬し、偶々校內の揭示場に於て、支那及び日本在勤通譯生見習の募集を見てこれに應じ、特に日本を選んでその志望地としたが、一六六一年（文久元年）八月任命を受け、同年十一月（十九歲）出發、途中日本語研究の階梯として、先づ北京に行き、支那語・滿洲語を學び、留まること數ケ月、翌文久二年九月八日橫濱に上陸、就任。慶應元年四月橫濱領事館勤務書記官、翌年十二月江戶公使館勤務書記官、明治十七年（四十二歲）暹羅國駐在總領事に轉じ、二十八年日本公使となつて來朝した。この年、多年の功によりナイトに叙爵。三十三年支那公使。三十八年辭任退職した。【業績】彼は來朝後間もなくヘボン・ブラカン

ウトサ・トスネーア

二氏に會し、その忠言によつて紀州の醫高岡要に就いて日本語を學び、又書を習つて御家流並に唐樣を書き、來朝一年の後には、老中からの書翰を解し得るまでに上達した。その後、彼の日本語は愈々熟達し、來朝二年後には、地方に一人旅するとも、聊も不便を感じなかつた。この語學の力は公使館に於ける彼の地位を高め、屢々命を帶びて鹿兒島・長崎・兵庫に到り、薩・長・土その他西南諸藩の有力者と會して親交を結び、殊に薩摩の諸士と親交があつた。彼がその名に因んで「薩道」と號したのもそれが爲めであつた。かくて彼は當時の我が國情に精通し、よく大勢の歸趨を洞察し、維新の大變に遭遇しても、英本國をして聊もその處置を誤らしめなかつた。彼は日本語の手引として「會話篇」を著し、石橋政方と共に口語の英和辭書を編し、馬場文英著「元治夢物語」（一名「開國史談」元治元年刊）、山口謙著「近世史略」（明治五年刊）、市川渡著「尾繼歐行漫錄」（文久三年刊）等を飜譯し、彼が我が日本に於ける外交官生活中、文久二年秋から明治二年初春に至る六年有半の自叙傳を作り、又祝詞（「祈年祭」より「御門祭」に至る九章）の飜譯をなして我が上代文化の紹介に努め、片山直人著「日本竹譜」を譯し、「薩摩に於ける朝鮮陶器」の研究を發表するなど、その研究や紹介は多方面で、その功績も亦偉大であつた。しかし彼の名を不朽ならしめるものは「日本耶蘇會刊行書志」の著作である。彼は初め日本に於ける印刷の歷史を研究し、日本の活字版印刷には朝鮮系統・ヨーロッパ系統の二つあることを知り、次いで耶蘇會士の印書事業に興味を覺え、當時の西敎關係の文獻を涉獵すると共に、耶蘇會士の手に成れる刊本を歐洲各地の由緖ある文庫にたづね、自らも亦蒐集して一々實物に就いて檢討し、正確に書志學的記載を試み、或る種の書は、その內容の一部分をも抄出した。かくして「サントスの御作業のうち拔書」以下十四部の切支丹文獻を收錄し解說した。これが「日本耶蘇會刊行書志」正編である。後パヂェス師の「日本書志」（一七八九年刊）を見て、彼の「書志」正編の收錄漏れを補ひ、併せてパヂェス師の所說を追補修訂してこれを附錄とし、正編と共に自費出版した（一八八八年）。その後、邦字本で慶長末の長崎刊と思はるゝ「太平記拔書」を得、更に慶長五年長崎刊行の「ドチリナ キリシタン」が、水戶侯の手に所藏せられてゐることを知り、その解說と後者にあつては全文の覆刊とを公にした（日本亞細亞協會雜誌一七ノ二）。これが書志の續編である。キリシタン版文獻はその後の發見があつて、今日でこそ、そのすべてを彼の書志に盡してゐないけれども、從來全く存在を忘れられてゐた文獻を學界に紹介し、日本耶蘇敎史の研究に根本史料を提供したばかりでなく、國語の歷史を調査する上にも得がたい資料を供給し、又一般文化史上にも新しい分野を示し、かくて近時盛んになつて來た所謂南蠻文學研究の源泉となつた功績は沒することが出來ない。「日本に於ける耶蘇會沒落の原因について」「一五五〇年より一五八六年に至る山口公敎會」、「一六一三年キャプテン・セリスの日本航海記」「山田長政事蹟考」、卽ち「十七世紀に於ける日暹關係の研究」等は、耶蘇會士の印書事業研究の副產物とも云ふべきものであつた。〔川野〕

【參考】E. M. Satow: A Diplomat in Japan. London, 1921. ○[illegible]

新村出○明治前後日本の事情に精通したアーネスト・サトー氏（義邊修二郎（明治文化發祥記念誌）○サトー氏と日本文化との關係　同上（反響一ノ四）○南蠻文學研究の源泉新村出（「日本耶蘇會刊行書志」解說）○サトウ先生著述目錄　池田榮三郎・吉野作造　○南蠻研究に於けるサトー氏の功績　石田幹之助（東京日々昭和四ノ八ノ三）○Fr. von Wenckstern: *Bibliography of Japan.* vol I. 1477—1893. ed. 1895. vol II. 1894—1906 ed. 1907.　〔寬〕

佐藤紅綠（さとうこうろく）俳人・小說家【本名】洽六【號】紅綠（本名を音譯したもので、正岡子規が命じたといふ。）【出生】明治七年七月六日、新潟市○明治前後日本の事情に精通したアーネスト・サトー氏（義邊修二郎（明治文化發祥記念誌）○サトー氏と日本文化との關係（同上（反響一ノ四）○南蠻文學研究の源泉新村出（「日本耶蘇會刊行書志」解說）○サトウ先生著述目錄　池田榮三郎・吉野作造　○南蠻研究に於けるサトー氏の功績　石田幹之助（東京日々昭和四ノ八ノ三）○Fr. von Wenckstern: *Bibliography of Japan.* vol I. 1477—1893. ed. 1895. vol II. 1894—1906 ed. 1907.　〔寬〕

佐藤紅綠（さとうこうろく）俳人・小說家【本名】洽六【號】紅綠（本名を音譯したもので、正岡子規が命じたといふ。）【出生】明治七年七月六日、新潟市○明治前後日本の事情に精通したアーネスト・サトー氏（義邊修二郎（明治文化發祥記念誌）○サトー氏と日本文化との關係（同上（反響一ノ四）○南蠻文學研究の源泉新村出（「日本耶蘇會刊行書志」解說）○サトウ先生著述目錄　池田榮三郎・吉野作造　○南蠻研究に於けるサトー氏の功績　石田幹之助（東京日々昭和四ノ八ノ三）○Fr. von Wenckstern: *Bibliography of Japan.* vol I. 1477—1893. ed. 1895. vol II. 1894—1906 ed. 1907.　〔寬〕

佐藤紅綠（さとうこうろく）俳人・小說家【本名】洽六【號】紅綠（本名を音譯したもので、正岡子規が命じたといふ。）【出生】明治七年七月六日、新潟市

を發表した。その間、新派俳優の頭目高田實と意氣投合し、高田のために、「雲の響」その他種々の脚本を執筆し、新派の興隆に與つて力ありと言はれた。後、通俗小說に力を注ぎ、大正三年發表の「光の巷」を初め、多くの長篇を書き、藝術的脚本としては「キリスト」などがある。【作風】俳諧で鍛へ、戲曲で練つた作家であるから、結構を按配する上に特殊の手腕があり、牽力强く描寫の逞しさは追隨するものが少ないと言つてよい。社會の中樞をなすべき問題を取扱つて、常識的ながら彼一流の人道的批判を下してゐる。「麗人」（昭和五年一月、新潮社）の如きは、その代表作と[illegible]

は、「語學指南」（四卷四冊。明治十二年刊、「同八卷」「詞の通路」「山口栞」（各別項）等に依つて、主として活用言を說いたものである）、「假名新說」「日本敎育史」（二冊）等が刊行せられて居り、未刊の稿本（律令考・韓國名義考等）は、神宮文庫に收められてゐる。

【參考】佐藤博士逝去（史學雜誌一九ノ四）○佐藤誠實先生小傳（國學院雜誌一四ノ四）〔龜田〕

佐藤惣之助（さとうそうのすけ）詩人【出生】明治二十二年十二月、川崎市に生る。【閱歷・作風】彼は一定の學歷をもたない。大正五年出した處女詩集「正義の兜」は、當時の人道主義思想の影響とうけ、人類愛と正義の意氣[illegible]

歌つた詩篇である。そのほか隨筆の著も三四ある。〔川路〕

佐藤春夫（さとうはるを）詩人・小說家【出生】明治二十五年四月九日和歌山縣東牟婁郡新宮町に生る。【閱歷】家は代々醫を業としてゐたが、幼少の時から文學的嗜好を有し、長ずるに及んで文學書を耽讀するやうになり、次第に强くその方面に傾倒し、縣立新宮中學在學中文藝講演會でなした談話が物議を釀したことなどもあつた。同四十三年同校卒業後直ちに上京、生田長江に師事し、傍ら與謝野寬に詩歌の批評を受けた。また同年九月には、

新村出○明治前後日本の事情に精通しアーネスト・サトー氏逝去修二郎（明治文化發祥記念誌）○サトー氏と日本文化との關係 同上（反響一ノ四）○南蠻文學研究の源泉新村出（「日本耶蘇會刊行書志」解說）○サトウ先生著述目錄 池田榮三郎・吉野作造 ○南蠻研究に於けるサトー氏の功績 石田幹之助（東京日々昭和四ノ八ノ三）○Fr. von Wenckstern: *Bibliography of Japan.* vol I. 1477—1893. ed. 1895. vol II. 1894—1906 ed. 1907. 〔寛〕

佐藤紅綠（さとうこうろく） 俳人・小說家 【本名】治六 【號】紅綠（本名を音譯したもので、正岡子規が命じたといふ。）【出生】明治七年七月六日、青森縣弘前市親方町に生れた。【閱歷】弘前中學を四年で退學して上京。法學院に學んだ。陸羯南の玄關番となつて二年

佐藤紅綠

一年日本新聞記者となり、後、富山日報主筆となつた。轉じて報知新聞に入り、北淸事件の際從軍した。傍ら俳諧を正岡子規に學び、石井露月等と交り、俳人として一頭角を現はし、俳諧に關しては「俳句小史」「蕪村俳句評釋」「三聖俳句選」「芭蕉論稿」「紅綠子」等の著書があり、この方面に於て重きを置かれてゐたが、三十八年、喜多村綠郎のために脚本「俠艷錄」を書いて大に歡迎された。更に三十九年十一月「中央公論」に「あん火」（別項）を發表するに及んで、自然派の機運盛んに起れる當時の文壇の好尙に投じ、小說家として認められ、翌年六月、更に「鴨」及び「ねぎ」等の短篇を發表した。その間、新派俳優の頭目高田實と意氣投合し、高田のために、「雲の響」その他種々の脚本を執筆し、新派の興隆に與つて力ありと言はれた。後、通俗小說に力を注ぎ、大正三年發表の「光の巷」を初め、多くの長篇を書き、藝術的脚本としては「キリスト」などがある。【作風】俳諧で鍛へ、戲曲で練つた作家であるから、結構を按配する上に特殊の手腕があり、牽力强く描寫の逞しさは追隨するものが少ないと言つてよい。社會の中樞をなすべき問題を取扱つて、常識的ながら彼一流の人道的批判を下してゐる。「麗人」（昭和五年二月、新潮社）の如きは、その代表作といつてよい。〔高須〕

佐藤誠實（さとうじやうじつ） 國學者 【生歿】天保十年十一月二十三日に生れ、明治四十一年三月十一日歿す。享年七十三【閱歷】江戸淺草に生れ、幼時から佛教學を修めた。長じて黑川春村に國學を、安積艮齋に漢學を學び、傍ら佛教を研究してゐた。明治五年文部省に出仕し、同十六年東京帝國大學文科大學の講師となり、次いで東京音樂學校の教授になつた。同二十八年宮內省の事業である「古事類苑」（別項）の編輯長に任ぜられた。同三十二年文學博士の學位を得、同三十五年國語調査委員會臨時委員を命ぜられ、同三十九年帝國學士院會員に勅選された。「古事類苑」は同四十年十二月に至つて編纂を終へ、功に依つて正五位勳五等に叙せられた。晚年には腦を患つてゐたが、「古事類苑」完成後四ケ月、その刊行がまだ終らない先に歿した。【業績・著書】誠實は學和漢洋を兼ね、佛教學・日本法制史にも造詣が深い碩學であつた。が、その生涯の大事業は「古事類苑」の編纂である。著書としては、「語學指南」（四卷四冊。明治十二年刊。「同八卷」）「詞の通路」「山口栞」（各別項）等に依つて、主として活用言を說いたものである。「假名新說」「日本教育史」（二冊）等が刊行せられて居り、未刊の稿本（律令考・韓國名義考等）は、神宮文庫に收められてゐる。

【參考】佐藤博士逝去（史學雜誌一九ノ四）○佐藤誠實先生小傳（國學院雜誌一四ノ四）〔龜田〕

佐藤惣之助（さとうそうのすけ） 詩人 【出生】明治二十二年十二月、川崎市に生る。【閱歷・作風】彼は一定の學歷をもたない。大正五年出した處女詩集「正義の兜」は、當時の人道主義思想の影響をうけ、人類愛と正義の道德的意志を振りかざして歩む戰士の如く自らを歌つたが、なほ粗笨の痕が多かつた。第二詩集に「狂へる歌」（大正六年）があるが、彼の特質を新しく示して來たのは「滿月の川」（同九年）以後で、彼の詩は著しく感覺的になつた。趣味として怪奇（グロテスク）を試み、奇聳を愛するが、また色彩に於ては、明るく絢爛なものを求めてゐる。象徵派の如き朦朧ではないが、の萬そ華鏡的な色彩の詞句は一つの感觸であつて、印象的に事物を表出する繪具のやうな役割をもつてゐる。詩に於ける一種の色彩主義である。この傾向は、「華やかな散歩」（大正十一年）に更に著しく發展した。彼の比喩と形容は、唐突であるが時に端的によく事物の相を示す。彼は自然を對象とし、それを喜悅的に歌ふ。往年の人道主義的空氣は全然現在の彼にない。而もそこに東洋的な情趣をも含む。彼は海洋を愛し、旅行を愛する。又俳句をも作り、その趣味性は豐かである。琉球に渡り、後「琉球諸島風物詩」をかき、琉球の土語を詩中に多く挿入してゐる。「颶風の眼」（大正十二年）は海洋を歌つた詩篇である。そのほか隨筆の著も三四ある。〔川路〕

佐藤春夫（さとうはるを） 詩人・小說家 【出生】明治二十五年四月九日和歌山縣東牟婁郡新宮町に生る。【閱歷】家は代々醫を業としてゐたが、幼少の時から文學的嗜好を有し、長ずるに及んで文學書を耽讀するやうになり、次第に强くその方面に傾倒し、縣立新宮中學在學中文藝講演會でなした談話が物議を釀したことなどもあつた。同四十三年同校卒業後直ちに上京、生田長江に師事し、傍ら與謝野寬に詩歌の批評を受けた。また同年九月には、當時慶應義塾大學に文學を講じてゐた永井荷風に敎を受けようとして、同大學豫科文學部に入學したが、散文小品及び詩作等を專らにした外、餘り學業に勉めず、大正

佐藤春夫

二年に同義塾を退學した。その後大正四五年の頃、無名の一女優と同棲し、翌六年六月の雜誌「黑潮」に、處女作「病める薔薇」（田園の憂鬱參照）を發表した。同年更に新たなる愛人を得、又、生田長江・谷崎潤一郎等先輩の推輓により漸く文壇に乘り出すと同時に、翌七年九月雜誌「中外」に、「田園の憂鬱」（別項）を發表し好評を博した。爾來新現實主義（別項）殉情派の作家として多くの小說を書き、大正末年以後は處女戲曲「暮春挿話」を初め若干の戲曲をも作り、大正文壇の中堅作家として活動した。その間、親交のあつた谷崎潤一郎と戀愛問題から一時交りを絕つたこともあつたが、後、大

正十三年三月小田中タミと結婚し、昭和六年再び谷崎との間に女房讓渡問題を起して世人の視聽をあつめた。大正九年に臺灣及び支那福建に、昭和二年には支那に旅行したことがある。

【作風】 唯美的な上品さ、高踏的な趣味、浪漫的な情感等を併せもつてゐる殉情的な作家で、谷崎潤一郎やエドガア・アラン・ポオ等の一面の影響を受け、一種の青白き熱情とも言ふべきものを創造したところに、大正文學に於ける獨自性が認められる。それは彼の文學の特色たる近代的な憂鬱味と、靈的な官能の匂と、神祕的な怪奇さ等から釀成されたもので、その境地は谷崎潤一郎の藝術の世界を更に小さく、その代り一層纖細にし、それに肉的分子の代りに精神的な要素を加へたものと思へばよい。即ち微妙鋭敏な感覺と神經的な弱々しさをもつ彼は、その境地に潜む微妙な陰翳をも巧みに描き出してゐる。彼の文學は藝術派に屬すべきもので、前期には主として泰西近代の頽唐美を描いてゐるが、又一面日本固有の風雅な心境にも觸れてゐる。後期には特にその傾きが強い。元來が詩人肌の作家で、初期には抒情詩を主として作つてゐたが、小説を書き出してからでも、その作品は、何れも詩人的な氣稟に富む文章で綴られた散文詩の如き趣を示してゐる。從つて空想的な分子が多いと共に、その文學は總じて異國的な肌合を帶びてゐる。そして時には支那風の題材を取扱つたものや、童話風な作柄のもの等をも好んで書いてゐる。【著作】〔短篇〕西班牙犬の家○或る女の幻想○指紋（別項）○李太白○お絹とその兄弟○笛吹きと王との話○海[illegible]

○佗しすぎる○一夜の宿○厭世家の誕生日○旅人○賣笑婦マリ○窓展く○霧社○砧○マダム・ルックスの遺書○女誡扇綺譚○新秋の記○FOU○晩春○惡魔の玩具○春風馬堤圖譜○陳述○ほるとがる文〔長篇〕田園の憂鬱○都會の憂鬱（田園の憂鬱參照）○聲笛○去年の雪いまいづこ。〔短篇集〕病める薔薇○お絹とその兄弟○美しき町○佐藤春夫選集○幻燈○佗しすぎる○玉簪花○美人○窓展く等。〔詩集〕殉情詩集○我が千九百二十二年（詩文集）○佐藤春夫詩集。〔感想集〕藝術家の喜び○退屈讀本○回想（自傳）等。右の外、別に單行本として、「田園の憂鬱」「都會の憂鬱」「暮春挿話」「女誡扇綺譚」「南方紀行」等がある。なほ現代小説全集第六卷・現代長篇小説全集第二十卷・現代日本文學全集第二十九篇・明治大正文學全集第三十八卷等に、各々數篇の作品が收載されてゐる。

〔湯地〕

佐藤露英（さとうろえい）「田村俊子」を見よ。

里神樂（さとかぐら）　神樂【名稱】宮中で行はれる神樂（別項）に對して、地方の諸鄕諸社で行はれる神樂をすべて里神樂と云ふ。御神樂（おかぐら）とも書く。宮中の神樂は雅樂に屬し、里神樂は何れも俗樂であると考へられてゐる。但し伊勢・石淸水・賀茂等の諸社に勅旨で神樂を遣はされる場合は、これを里神樂とは稱さない（樂家錄）。【種類】安居神樂（あんご）は男山八幡の神樂を云ふ。十二月朔日より十五日まで潔齋人あり、これを安居當人と名づけ、當人の執行する神樂であるから、安居神樂と云ふ（樂家錄）。蓋し潔齋人を安居當人と云ふのは、佛敎の安居より出た名稱である。この男山八幡の八幡里神樂は、諸社の神樂のうち最もその名があつた。[illegible]

家錄）。山神樂とは石淸水八幡宮の神樂を云ふ（樂家錄）。これを八幡（やはた）里神樂とも云ふ。稻荷神樂は稻荷神社の神樂である。貴布禰神社では芝神樂が行はれ、「芝神樂古記」と云ふ寫本も同社に藏せられる。その他、春日・平野等の諸社にも神樂が行はれたが、これ等は何れも、その作法歌詞は宮中の神樂と殆ど同じであつた。近世に至つては、伊勢大神宮より出た大神樂又は太々神樂が有名で諸社で行はれた。また座神樂があつて、七座の神樂より七十五座の神樂に至り、今最も多く行はれてゐる。これ等は演藝類似のもので、甚だ世俗化したものがあるが、これ等近代の里神樂に就いては各々別項に讓る。次に平安朝時代に行はれた里神樂のうち、特異なる歌詞の今日殘されたもの若干に就いて説明する。

【御饌歌（みけうた）】伊勢皇太神宮の御饌歌は、延曆二十三年に成つた「皇太神宮儀式帳」に見えてゐる。これは荒祭宮及び瀧祭宮の御饌祭の終つた後、神宮等が大神宮の直會所に參集して、御食直會（みけなほらひ）を行ふ時に奏する歌である。故に直會歌とも云ふ。御饌歌及びその後に奏する儺歌の二首は次の如くである。

さこ釧（くしろ）五十鈴の宮に御饌立つと打つなる膝は宮もとどろに（直會御歌）

百數の大宮人の樂しみと打つなる膝は宮もとどろに（儺歌）

外宮の御歌は、「大宮司常長記」「大物忌弘重記」に見えてゐる（古謠集）。上二句は「度會の豐受の宮に」とあり、第三句「御饌立つと」以下は、前の直會御歌と大方同じで、平安朝時代より行はれたものであらう。即ち「豐受大神宮儀式帳」に、御饌歌・伊勢歌・儺歌の名があつて、その歌の省略せられたものがこれであらう。春日若宮祭は、崇德天皇の保延三年九月十七日に、關白忠通の大願によつて創始せられた（春日若宮御祭禮略記）。一説に保延二年九月十七日と云ふ（春日御祭禮略記）。[illegible]

あらう。この他、倭舞も、大饗の直會に用ひられる事が、「皇太神宮儀式帳」に見え、鳥名子舞も直會歌として奏せられる事が、「延喜式」に出てゐる。春日神社の御饌歌は、古譜が同社の社司富田家に傳へられた（明治三年刊やまかづら）。

甕（みか）の腹滿て並べたる豐御饌の豐炊ぐ音は神もとどろに

【春日若宮神樂歌】 大和國春日祭若宮神樂舞歌と云ふものが傳はつてゐる。古正本も同社にあると云ふ。白拍子が加はつてゐるから、白拍子盛行時の歌であらう。三段に分れて各段とも、初の歌、白拍子（亂拍子の鼓）、中の歌、末の歌の四歌より成り、全部で十二首の歌がある。最初の歌を記すと、

初の歌　君が代の久しかるべきためしには神も植ゑけん住吉の松ヤレ

白拍子　春日山岩根の松は言はねども千年を綠の色に知る

亂拍子の鼓と同じ　峯の嵐は音せねど萬歲の響ぞ耳に立つ

中の歌　三笠山生添ふ松の枝毎に絕えずも君が榮ゆべきかなヤレ

末　榮ゆべきかな〳〵榮ゆべきかなや

末の歌　色變へぬ松と竹との〳〵しはる、手をかゆる松と竹との〳〵末の代に何れ久しとや〳〵君のみぞ見ん〳〵〳〵〳〵何れ久しとや君のみぞ見ん〳〵〳〵〳〵

の如くである。「春日若宮御祭禮略記」に、「御神樂所　御神樂　亂拍子　舞有之」と見えるものがこれであらう。春日若宮祭は、崇德天皇の保延三年九月十七日に、關白忠通の大願によつて創始せられた（春日若宮御祭禮略記）。一説に保延二年九月十七日と云ふ（春日御祭禮略記）。[illegible]

たもので、あらう。鼓の外に笏拍子や和琴の伴奏があり、巫女が一人舞、また相舞に舞つた。なほ春日神社に傳へられる神事歌は多く、就中、御田植祭（別項）の歌は名高いが、近世では寧ろ住吉神社の御田植式に盛大を奪はれた。鎌倉時代に至つては、正應元年正月より始まつたと云ふ水谷神樂があり、二首の歌を傳へた（明治七年刊「藤のしなひ」）。

水谷（みつや）こそ人の顧を滿て給ふいざ我ともに水遊びせん

【氣比の神樂】 越前國氣比大神宮で行はれる神樂歌である。由來古き同社の事ゆゑ、古くより神樂歌もあつたであらうが、平安時代の[illegible]し、佐渡には狐がゐるゐないの論となり、結局一腰を賭けて奏者に審判して貰ふことにする。そこで佐渡の百姓は賄賂を使つて奏者に賴み、狐の形・眼・尾・色を敎へられて越後の百姓を僞り賭（かた）に勝つが、越後の百姓はどうも奏者の態度が腑に落ちないとて、又改めて佐渡の百姓に、狐の啼聲は何といふかと問ふ。佐渡の百姓は、尾や眼の事を言つて逃げるが追付かず、遂に東天紅といつて啼くとて化の皮を顯はす。

【備考】 脇狂言の百姓物としては、複雜な形式を取つてゐるだけに異色のあるものである。鷺流・和泉流では、啼聲が「ちゝくわい」となつての意見、他俳優の逸事等を雜纂的に記述したもの。終に「しよさの心得」十一條がある。所作事に於て重要な歷史的地位を占めてゐる家系に出た著者の事とて、これに就いて幼時に受けた敎訓談は、自らなる藝道の解説であるが、更に「碁盤人形」や「七化け」や「六方」に就いての記述は甚だ有益で、「しよさの心得」と共に重要視すべきである。その他、當時の俳優の技藝を公平に批判した等、歷史的にも極めて意義深い書である。

〔守隨・增田〕

花街壽々女（さとすずめ）　人情本　三册【作者】鼻山人【畫工】白水漁人（溪齋英泉の匿名）【名稱】廓鑑（くるわかがみ）と角書。さと雀は復原雀を吉原[illegible]ら幸さんへの遣ひものと言つて、饅の蒲燒を持ち來る。幸介不思議に思ひ、その客の年や風體を聞き、少し思ひ當つたらしく、受取つて茶漬をたべる。やがてその客、幸介に會ひに來る。番頭の算六である。算六は、「若旦那の不身持が、大旦那の御病死以來一向改まらず、鎌倉の御伯父樣が、わざ〳〵江戸へ御出府、詳しいお咄を聞きなされ、親に代つて勘當するとの仰せ、手切れの一札持參しました」と一札を其所へ差出した。幸介はこれ全く繼母と算六の計略であると疑うて相手にせず。果ては主人の威光を見せて、算六を打擲する所へ伯父が來る。今まで算六を疑つてゐた幸

たものであらう。鼓の外に笏拍子や和琴の伴奏があり、巫女が一人舞、また相舞に舞つた。なほ春日神社に傳へられる神事歌は多く、就中、御田植祭(別項)の歌は名高いが、近世では寧ろ住吉神社の御田植式に盛大を奪はれた。鎌倉時代に至つては、正應元年正月より始まつたと云ふ水谷神樂があり、二首の歌を傳へた(明治七年刊「藤のしなひ」)。

水谷(みつや)こそ人の顧を滿て給ふいざ我ともに水遊びせん

【氣比の神樂】越前國氣比大神宮で行はれる神樂歌である。由來古き同社の事ゆゑ、古くより神樂歌もあつたであらうが、平安時代の神樂歌は、承德本「古謠集」(貴重圖書影本刊行會刊、日本古典全集歌謠集上所收)に出てゐる。それによると、本末二部より成り、兩者合して一首をなし、全部で七歌ある。最初の歌を掲げる。

本　道の口久末坂山のや葛の葉の搖(あゆ)げる我を夜獨り寢よとや神の夜獨り寢よとやおけ

末　葛の葉の搖(あゆ)げる我を夜獨り寢よとや神の夜獨り寢よとやおけ

【北御門の神樂】北御門と云ふのは、伊勢大神宮の末社の一である北御門神社の事と思はれる。然らばこれは、伊勢神樂の一とすべきである。その平安朝時代に行はれた事は、承德本古謠集に、北の御門の御神樂と題し、本末各別歌として十歌、但し終りの一歌は本末合して一首となし、合計九首の歌を載せたので明かである。〔藤田〕

佐渡狐(さどぎつね)　能狂言【格式】本神文濟相傳の部(大藏流)。

【梗概】越後の百姓と佐渡の百姓が、上堂へ御年貢を納めに行く道で出會ひ、色々お國話をし、佐渡には狐がゐるゐないの論となり、結局一腰を賭けて奏者に審判して貰ふことにする。そこで佐渡の百姓は賄賂を使つて奏者に賴み、狐の形・眼・尾・色を教へられて越後の百姓を僞り賭(かけ)に勝つが、越後の百姓はどうも奏者の態度が腑に落ちないとて、又改めて佐渡の百姓に、狐の啼聲は何といふかと問ふ。佐渡の百姓は、尾や眼の事を言つて逃げるが追付かず、遂に東天紅といつて啼くとて化の皮を顯はす。

【備考】脇狂言の百姓物としては、複雜な形式を取つてゐるだけに異色のあるものである。鷺流・和泉流では、啼聲が「ちゝくわい」となつてゐる。「ちゝくわい」は、「鷹巓波集」卷一に本勝寺日能の句として見えてゐる、「ちゝくはいと啼くは子がひのうづら哉」でも知られるやうに、鶉の啼聲である。なほ賭物に牛を賭けると云ふ書もあるが、この方が百姓には相應である。佐渡に狐がゐないと云ふ全曲展開の種は、彼の國の俚諺に、「佐渡に無いもの狐と盜人」と云ひ、又世俗に、「四國に狐無く佐渡に狸無し」と云ふ類に基いたものであらう。「耳袋」にも、「諺に云、三郡に狐なしと傳へし通り、佐渡の國に狐なき由」と見えてゐる。〔瀧田〕

佐渡七太夫(さどしちだいふ)「說經淨瑠璃」を見よ。

佐渡島日記(さどしまにつき)　演劇書　一卷

【著者】蓮智坊(佐渡島長五郎)【名稱】佐渡島長五郎の日記の義【成立】著者が折に觸れて筆錄したものを、歿後版行したと見るべきで、成立年月は未詳である。但し寬延・寶曆頃か。

【諸本】「役者論語」中に收められ、共に新群書類從・隨筆文學選集卷四・歌舞伎叢書等所收。

【解說】自己の經歷・批評並びに所作事に就いての意見、他俳優の逸事等を雜纂的に記述したもの。終に「しよさの心得」十一條がある。所作事に於て重要な歷史的地位を占めてゐる家系に出た著者の事とて、これに就いて幼時に受けた教訓談は、自らなる藝道の解說であるが、更に「碁盤人形」や「七化け」や「六方」に就いての記述は甚だ有益で、「しよさの心得」と共に重要視すべきである。その他、當時の俳優の技藝を公平に批判した等、歷史的にも極めて意義深い書である。〔守隨・增田〕

花街壽々女(さとすずめ)　人情本　三册【作者】鼻山人【畫工】白水漁人(溪齋英泉の匿名)【名稱】廓鑑餘興と角書。さと雀は葭原雀を吉原雀と轉用するのを、更にさとと洒落れたのである。廓鑑餘興とは、洒落本「花街鑑(さと)」(文政五年鼻山人作)の續編の義。【刊行】文政九年【諸本】人情本傑作集下卷(帝國文庫)所收。【題材】角書にもある如く、洒落本「花街鑑(さと)」の續編(餘興と云ふのは正確の意味の續編ではなく、單に連絡のある義に用ひる語)で、「花街鑑」は遊女玉菊を主人公としたものである。玉菊は新吉原角町中萬字屋勘兵衞抱への遊女で、二十五歲で病死した有名な妓である。本篇は玉菊の歿後の事を叙し、それにお菊・幸介の情話を結び付けたものである。

【梗概】萬壽屋玉菊は、情人瀧さんを松田屋の半部(はじとみ)と爭ひ、思ひ詰めて自殺した。その新造玉章も今は菊の井と改名して、呼び出しの遊女となり、禿小てふも菊里と改めて新造となつてゐる。今日も菊の井の情人幸介が來て居り、何かにつけて亡き玉菊の噂が出る。幸介は自宅の內情、實父は死し、繼母に自分の放蕩をやかましく言はれて面白くない事などを物語る。折柄新造の菊綴が、自分の初買客から幸さんへの遣ひものと言つて、饅の蒲燒を持ち來る。幸介不思議に思ひ、その客の年や風體を聞き、少し思ひ當つたらしく、受取つて茶漬をたべる。やがてその客、幸介に會ひに來る。番頭の算六である。算六は、「若旦那の不身持が、大旦那の御病死以來一向改まらず、鎌倉の御伯父樣が、わざ〳〵江戶へ御出府、詳しいお咄を聞きなされ、親に代つて勘當するとの仰せ、手切れの一札持參しました」と一札を其所へ差出した。幸介はこれ全く繼母と算六の計略であると疑うて相手にせず。果ては主人の威光を見せて、算六を打擲する所へ伯父が來る。今まで算六を疑つてゐた幸介も現在の伯父に出會つては一言もない。伯父から改めて勘當を言ひ渡された。伯父はそのまゝ歸らうとするのを、菊の井縋り付いて自分の罪を詫びる。伯父は菊の井に五十兩與へ、なほ幸介に手切れの一札をよく見よと注意して去つた。幸介は今更後悔しつゝ一札を見れば、上包みの中に二通の書付がある。一通は勘當狀、一通は意外にも菊の井身請の年季證文。始めて伯父の厚意が分つて二人は嬉し泣きをした。玉菊の情人瀧さんと呼ばれた紀國屋文右衞門は、今は剃髮して佛念坊と名を更へ、飯焚三介を相手の侘住居、ひたすら玉菊の追善供養の外はない。或る日三介と酒飲みながらの世間話に、三介は自分が玉菊を吉原へ賣つた惡者である事を懺悔する。折柄訪れたのは幸介と菊の井である。佛念坊は最初廓をぬけて來た駈落者かと疑つてゐたが、仔細を聞いて喜ぶ。かくて幸介夫婦はこの庵室近く家を借りて睦ましく暮すうち伯父の計らひで繼母を隱居させ、幸介夫婦が家名を相續した。菊の井は伯父の恩惠を恥ぢ、かねて許

嫁であつた伯父の末娘を幸介の本妻とし、自分は妾となつた。

【批評】筋は人情本としては類型的で、勝れた點も見えぬが、我が儘一杯の若旦那育ちの幸介の性格、玉菊を悼む情緒が全篇に溢れてゐる點などに新味が存する。〔山崎〕

鄙意氣地（さとのいきぢ）　洒落本　全一册【作者】十返舍一九【名稱】内題に倡客眞話傳授之卷と角書がある。【刊行】享和二年【口繪】自畫【諸本】洒落本大系第十卷所收【題材】凡例及び角書に依つてわかる如く、「傾城買虎の卷」「傾城買二筋道」（各別項）に暗示を得て作られたもの、作意は凡例に「通人化して野暮となり、倡妓變じて愚にかへるの一條なる意氣地の魂膽手管を著し」とあるので明瞭である。

【梗概】下總の片田舍に、里見家の浪人の後家おやをが、娘おなみと貧しい生活をしてゐる。江戸の或る富豪の若旦那伊三郎、放蕩の結果勘當されてこの地に來たが、折々尋ねては母子を慰めた。後家の病死後、伊三郎はおなみを妻としたが、父の病氣で迎へが來て、江戸に歸ると父は死んだので家督を相續した。或る日、伊三郎はかねて聞いてゐたおなみの姉が、吉原舞鶴屋で花園と名乘つてゐるのを尋ね、遂に深く契つて入りびたりとなつた。母親も妻のおなみも心配して諫めるが伊三郎は聞き入れない。おなみは思ひ餘つてこの事を花園の許へ手紙で知らせる。花園は始めて妹と伊三郎との關係を知つた。彼女には其夕と云ふためになる客があつたが、伊三郎と深くなつて以來、疎かに取扱ひ勝ちであつた。今は義理に縛られ、其夕と伊三郎と落ち合つた時、伊三郎と愛慰がかしを云つて別れようとすると共に閨に入る。その夜、病み細つたおなみが物凄く自分達を睨む樣子を、兩人共まざ〳〵と夢に見た。

【構想】本書は、洒落本から人情本へ展開する徑路を示す好資料である。描寫の粗笨な作者であるから、田螺金魚・梅暮里谷峨以上に一歩も出て居らぬが、田舍の寺子屋の描寫に「膝栗毛」を書いた彼の滑稽作者としての天分がほの見える。特に同書初編と同年の刊行である事を思へば、「膝栗毛」研究の一資料たり得る。特に本書の口繪は、彼が滑稽本に描いた鳥羽繪風の戲畫と異なり、精緻謹嚴な筆致で、北尾風の浮世繪を描いてゐる。これは一九の畫才を窺ふに足る好材料と云はねばならぬ。【影響】凡例に、「すべて人情愛着に逼るの趣を述べ」とある如きは、後世爲永春水が人情本に於ける常套語である。この書が後世の人情本に影響せる事は、鼻山人の手に依つて本書の一部分を改作し、「由佳里の梅」（別項）初編（天保元年）とし、更に二編・三編と補綴せられ、更に序の一部分を改めて爲永春水の名を挿入し、「春色由緣の梅」と改題再版したのが、天保十二年に出た事に依つても知り得る。〔山崎〕

里のをだ卷評（さとのをだまきひやう）　洒落本　一册【作者】風來山人【名稱】吉原細見と角書がある。卽ち吉原細見の一種、「里の緒環」の批評の意。【刊行】安永三年【諸本】風來六六部集・風來山人傑作集（帝國文庫）・風來山人集（有朋堂文庫）・狂文俳文集（近世日本文學大系）所收。【題材】吉原細見の一枚摺「里の緒環」に、深川土橋仲町櫓下の遊女が吉原の遊女となつて全盛を極めたことを記してあるのを採つた。當中「仙下にてとんだ茶釜」とある義であらう）を用ひたのである。主人公を麻布先生と云つたのは「氣の知れぬ麻布」と云ふ俗諺を採つたのである。

【梗概】山の手に草庵を構へ、麻布先生と號する人がゐた。同氣求むる習で、同じ遊び仲間古遊散人と云ふ男が殘暑見舞にやつて來た所へ、先生の門人花景と云ふ當世男が來り、懷中から小册を取出し、「これこそ吉原細見里の緒環、深川遊女が吉原で全盛を極むる說明、今吉原深川をつきまぜて、兩の手に梅櫻、遊びの喜見城、此上はありますまい」といへば、古遊散人、つく〴〵眺めてこれに反對し、「日本國中遊里多しと雖、江戸の吉原一というて二つなき所」と吉原の肩を持つて、深川を岡場所扱ひにして譏れば、花景は「深川の風流を知らず、只一口に岡場所とのみ覺えたるは傍痛き事である」と顏を赤めて論じた。麻布先生莞爾と打笑み「……色里は國々でない所なく、貴きと賤しきと善いと惡いの差別はあるが、情を賣るは一つで、極意に至つては粹もなく野夫もなく、貴いと美しいが面白いとは限らず、賤しいと醜いとが面白くないわけでもない、皆夫相應の樂みがあり、岡場所に遊ぶ人は岡場所を最上と心得、吉原よりも勝れたと思ふ、是れ深川に遊んで深川の穴を知らぬもの、流れ渡りの岡場所と萬代不易の吉原とはくらべ物にはなり難い。又古遊子の說も尤ながら、吉原の女郎三千に餘り、岡場所から流れ來る者多いと云つても五十人に過ぎまい、何れは吉原の風に變ずるであらう、廣いが吉原、つかえぬが吉原」と論ずる。

【構想】本篇は、當時通客の間に行はれた吉原と深川、吉原と岡場所の優劣を論じた洒落本の一種である。作者は吉原と岡場所の優劣を論じた洒落本に存するのであらう。【影響】洒落本中、遊里の比較優劣論をなせるものは本書が最も早いと見られる。以後「契國策」（安永五年）、「龍虎問答」（同八年）、「突當富魂短」（天明元年）、「通人の寢言」（同二年）等が續出した。必ずしも本書の影響とは斷じ難いが、同系統の書として注意される。〔山崎〕

廓の癖（さとのくせ）　洒落本　一册【作者】梅暮里谷峨【畫工】歌川國政【名稱】内題に「二筋道後編」とある。卽ち「傾城買二筋道」（別項）の第二編である。廓の癖は廓の習はしの義。【刊行】序に「未のはつ春」とあるから寛政十一年己未刊。【諸本】滑稽名作集上卷（帝國文庫）・洒落本大系第八卷所收。【題材】遊女一重が文里のため、金を工面すべく權と云ふ客にねだる。權が腕の刺青を消せと云ふ趣向は、蓬萊山人歸橋作「富賀川拜見」（別項）以來珍しく無いものである（傾城買二筋道參照）。

【梗概】遊女一重の部屋に居續けした文里は、家に歸れば女房の意見、自分に纏ひ付く子の恩愛、それでゐて一重が思ひ切れぬのである。一重も惡緣を歎きながら、今は廓の習ひ、金の工面に困つて、二人共、どうにもならなくなつた。又の夜も文里は來たが、上る金が無いので格子先きで逢つただけで歸らうとするのを一重はつい上げてしまつた。一重は權といふ客に無心を言ふ。權は腕に彫つてある文里二世の妻の字を消したらやらうと云ふ。一重は隣座敷の文里に氣がねしつゝいろ〳〵調子を合せてゐる内、權は遂に文里の醜男な事を惡口し始めた。今までこちへてゐた一重は慾も得も忘れて手ひどく權をやり込めた。一重は文里と別れ、唯無しさに病氣となつた。

し、年季の證文を卷いてやつた。一重も深くその恩を感謝したけれど、文里に逢へぬつらさに病氣は重る許りである。零落し盡した文里がそつと逢ひに來る。戀しい男の顏を見て始めて一重は莞爾（にこ）と笑つたのである。

【批評】全體を感傷的な筆致で蔽うたところ、全く「虎之卷」そつくりである。一重が權をあやつり巧に金を出させようとしながら、餘りの惡口に本性を現はして氣焰をあげる所は、未だ若い遊女の手管に慣れぬ樣をよく描いてある。文里が情の厚い好人物ではあるが、働きの無い愚圖な性格も、比較的よく寫されてゐる。ただ一重の病氣以下は讀者を立かさう

志した。四十三年四月、雜誌「白樺」（別項）の創刊號に小說「お民さん」を發表し、初めて里見弴と署した。その筆名は年少にして文を發表することを父が許さなかつたからだと云ふ。翌年には早くも雜誌「ザンボア」のために、「入間川」を執筆し、大正三年には夏目漱石の囑により東京朝日新聞に「母と子」を連載した。次いで四年四月には「中央公論」に執筆するなど漸く文名が定まるに至つた。この年、前年より放浪の旅に出て久しく大阪に留まつてゐたが、南地敎坊の人まさ女と結婚した。翌五年二月、無題の小說を「中央公論」に發表。同十一月には、鏡花の推挽にて春陽堂より短篇集

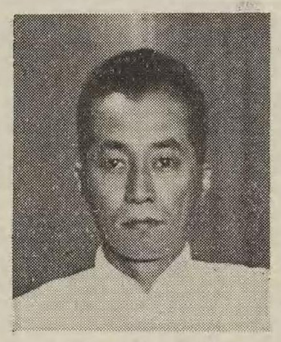
にも、その獨自の心境に腰を据ゑ、悠々自らの藝を樂しむの態度に住してゐる。【著作】現代日本文學全集第二十六卷・明治大正文學全集第四十三卷・長篇全集第六卷（新潮社版）・日本戲曲全集第四十二輯。なほ代表的作品を次に擧げる。善心惡心○幸福人○毒蕈○雪の夜話○大火○病牀記○或る年の初夏に○父親○直輔の夢○桐畑○潮風○おせつかい○多情佛心○四葉の苜蓿○大道無門○今年竹○不動○彼と小娘○鯉の巢○新樹等。【人物・作風】白樺派の一つの傾向であつた享樂主義的傾向を最も顯著に有つた人で、夙くから官能的樂

と並稱されてゐる。絢爛で技巧な技巧は時に內容を遊離して、單なる「藝」の感じに陷すこともあつたが、作者に於ては、餘りに全力を出し過ぎた結果である。又、彼は好んでコンマの多い紆餘曲折を極めた古い日本の句法を用ひ、よくこれを生かしてゐる。【史的地位】彼の最も主な活動期が新現實主義の時代であつたので、一般に新現實主義の作家と見られて居り、所謂新技巧派乃至人間派の頭目として、新理智派乃至新思潮派の芥川龍之介（別項）と屢々並稱された。が、その技巧の點では單に一方の旗頭といふだけでなく、大正期有產

し、年季の遊女を買いてやつた。一重も深くその恩を感謝したけれど、文里に逢へぬつらさに病氣は重る許りである。零落し盡した文里がそつと逢ひに來る。戀しい男の顏を見て始めて一重は莞爾と笑つたのである。

【批評】全體を感傷的な筆致で蔽うたところ、全く「虎之卷」そつくりである。一重が權をあやつり巧に金を出させようとしながら、餘りの惡口に本性を現はして氣焰をあげる所は、未だ若い遊女の手管に慣れぬ樣をよく描いてある。文里が情の厚い好人物ではあるが、働きの無い愚鈍な性格も、比較的よく寫されてゐる。ただ一重の病氣以下は讀者を泣かさうとする作者の慣用手段に過ぎぬ。【影響】默阿彌作「三人吉三廓初買」(萬延元年、市村座上演)の第五幕目根岸丁子屋別莊の場に、そのまゝ本篇が採つてある。ただ一重と文里との仲に子が生れたやうに書いてあるのは、本篇に文里の子が一重になついたと書いてあるのを、更に複雜化した技巧である。〔山崎〕

里見弴（さとみとん）　小說家【本名】山內英夫【出生】明治二十一年七月十四日、橫濱市月岡町橫濱稅關局長官舍に生る。【閱歷】父は有鳥武、母は幸子、山內氏。家兄に武郎・生馬(各別項)がある。出生に先だつこと二日、母の里なる山內家の當主が死亡したため、出生と同時に母方の姓を襲うたが、そのまゝ有鳥家に留まつて人となつた。學習院中等科の頃から次第に家兄等の影響を受けて文藝に親しみ、將來實業家になつて文藝のよき保護者(パトロン)たらん事を期してゐたと云ふ。四十二年高等科卒業と共に東大文科に入學したが、月餘にして退學、偶々養家の資產が彼の一生を保障するに足ると聞いて初めて專門に作家たらんことを志した。四十三年四月、雜誌「白樺」(別項)の創刊號に小說「お民さん」を發表し、初めて里見弴と署した。その筆名は年少にして文を發表することを父が許さなかつたからだと云ふ。翌年には早くも雜誌「ザンボア」のために、「入間川」を執筆し、大正三年には夏目漱石の囑により東京朝日新聞に「母と子」を連載した。次いで四年四月には「中央公論」に執筆するなど漸く文名が定まるに至つた。この年、前年より放浪の旅に出て久しく大阪に留まつてゐたが、南地教坊の人まさ女と結婚した。翌五年二月、無題の小說を「中央公論」に發表。同十一月には、鏡花の推輓にて春陽堂より短篇集「善心惡心」を上梓。更に六年十一月には、「中央公論」の「兄弟號」に小說を寄せた。この頃主張の乖離から白樺派(別項)と手を分ち、なほ「善心惡心」中、モデルのことで最も親しかつた志賀直哉とも交を絕つに至つた。同十七年には激烈な丹毒のために一時危篤が報ぜられた。次いで九年十一月には吉井勇・久米正雄・田中純等と共に、雜誌「人間」を起した。なほ彼が同誌廢刊(十年六月)の少し前に、吉右衞門のために書いた處女脚本「新樹」は十年六月新富座に上場された。その中、大正十二年には長兄の計と大震災に逢つて愈々藝術主義に執する氣持を强め、この年發表の「多情佛心」(別項)は、前年來提唱し來つた所謂「まごころ主義」を具象化したものである。その後、無產派文學擡頭に伴ふ文藝界の搖蕩時代にも、その獨自の心境に腰を据ゑ、悠々自らの藝を樂しむの態度に住してゐる。【著作】現代日本文學全集第二十六卷・明治大正文學全集第四十三卷・長篇全集第六卷(新潮社版)・日本戲曲全集第四十二輯。なほ代表的作品を次に擧げる。善心惡心○幸福人○毒蕈○雪の夜話○大火○病牀記○或る年の初夏に○父親○直輔の夢○桐畑○潮風○おせつかい○多情佛心○四葉の苜蓿○大道無門○今年竹○不動○彼と小娘○鯉の巢○新樹等。【人物・作風】白樺派の一つの傾向であつた享樂主義的傾向を最も顯著に有つた人で、夙くから官能的樂慾に沈湎した後に初めて「晩い初戀」を味はつたといふやうな經歷をさへ有つてゐた。さうした經歷にも拘らず、所謂世俗的な通人からは遠く、純情と謙抑さを失はず、寧ろ折目正しい格式張つた一面を持つてゐる。細い神經の持主でありながら、割合に單純な、明るく信じ易い性格の一種の道德家であると云つてよい。作者として、初めには善と惡、强さと弱さ、明と暗、知と情と意。さういつたものの對立と相剋とを描き、それを通してその對立を孕んだ儘の大きな人生の調和を讃嘆しようとした。善惡無差別の大調和——それを讃仰すると共に、その無差別の中に價値あるものと價値なきものとの差別を觀た。そしてその標準を、眞と僞とに置いた。卽ち「まごころ主義」である。それは哲學的とか科學的とか云ふよりも、寧ろ一種の神祕的な信仰的な想念であつた。殊に中期以後の作品には、それが徹底してゐる。それから作者が遊里の戀愛を多く取扱つてゐるのは、この相剋關係を盛り込むにふさはしい舞臺だと信じたからである。さうした點で作者は屢々永井荷風(別項)と並稱されてゐる。構成で故意な技巧は時に內容を遊離して、單なる「藝」の感じに墮することもあつたが、作者に於ては、餘りに全力を出し過ぎた結果である。又、彼は好んでコンマの多い紆餘曲折を極めた古い日本の句法を用ひ、よくこれを生かしてゐる。【史的地位】彼の最も主な活動期が新現實主義の時代であつたので、一般に新現實主義の作家と見られて居り、所謂新技巧派乃至人間派の頭目として、新理智派乃至新思潮派の芥川龍之介(別項)と屢々並稱された。が、その技巧の點では單に一方の旗頭といふだけでなく、大正期有產者文學の頂點を示す作家だと云はれた。殊にその「まごころ主義」の主張は、同期を貫く個人主義的自由思想に立脚した理想主義的道德思想としては、一つの限界線に到達したものと見ることが出來る。なほ中戶川吉二等、直接の影響を受けた人々も少くなかつた。



里見弴

【參考】里見弴氏の初期の作品に現れた諸傾向　片岡良一(國語と國文學五〇・五二)○里見弴氏とまごころ同上(國文教育六ノ二)○「多情佛心」以後の里見弴氏同上(同六ノ八)　〔片岡〕

里見八犬傳（さとみはけんでん）　「南總里見八犬傳」を見よ。

花街模樣薊色縫（さとのやうあぢ みのいろぬひ）　脚本　四幕　世話物【作者】二代河竹新七(默阿彌)【通稱】「十六夜淸心」(いざよひせいしん)【別名題】「鬼薊達染絲」(おにあざみさとのしぼり)「白時遊形薊新染」(しらじかあそびあざみのしんぞめ)「柳巷春雨薊色縫」(さとのはるさめあざみのいろぬひ)「鬼薊廓色縫」(おにあざみさとのいろぬひ)「鬼薊花街十六夜」(おにあざみさとのいさよひ)「花街小袖薊色縫」(さとのこそでのあざみのいろぬひ)「柳巷晴雨薊色縫」(のはるさめあざみのいろぬひ)等の名稱によつても上演せられた。【初演】「小袖曾我薊色縫」(こそでそがあざみのいろぬひ)の二番目狂言として作られたもの。安政六年二月、江戶市村座。

〔役割〕淸心後に淸吉(市川小團次)、十六夜後にお里二世の妻の字を消したらやらうと云ふ。一重は隣座敷の文里に氣がねしつゝいろ〳〵調子を合せてゐる內、權は遂に文里の醜男(ぶをとこ)な事を惡口し始めた。今までこらへてゐた一重は慾も得も忘れて手ひどく權をやり込めた。一重は文里と別れ、絕縁した病氣となつた。

さよ（岩井粂三郎）、白蓮實は大寺正兵衞（關三十郎）等。

【諸本】默阿彌全集第三卷・歌舞伎脚本集（日本名著全集）所收【題材】當時、御金藏を破つて四千兩の金子を盗んだ藤岡藤十郎の事件を當て込んで作られ、大寺正兵衞なる人物は暗に藤十郎を諷したもの。このため初演の興行は中止を命ぜられた。

【梗概】〔序幕〕極樂寺の所化清心は、頼朝公から同寺へ奉納した三千兩を盗んだ賊の嫌疑を受け、その言譯は立つたが遊女十六夜に馴染んだ女犯の罪に問はれ、追放を申渡される。そこで心を改め修行しようと決意した所へ、廓を拔け出して來た十六夜に逢ひ、身重になつた話を聞かされて、思案に盡きた二人は稻瀬川へ身を投げる。併し十六夜は俳諧師白蓮（はくれん）の網舟に助け上げられ、清心も習ひ覺えた水練のため死に後れたところへ、寺小姓求女が父親に賴まれて調へた五十兩を持つて通りかかり、癪に惱む。それを介抱して、ふと手に障つた財布から、十六夜の親にその金を惠んで、非業に死んだ娘の弔ひをさせようとして奪ふ拍子に求女を殺してしまふ。殺して取つた金では供養にならぬ、死んで言譯をと一度は思つたが、「一人殺すも千人殺すも取られる首は唯一つ」と心替りをし、盗賊になる。〔二幕〕白蓮は十六夜を身請して名ばかりの妾とし、その父親の世話までしてゐたが、十六夜が毎晩ひそかに清心の位牌に回向する貞節に感じて望むが儘に暇を遣る。十六夜は清心の菩提を弔はうと剃髮し、父親共々諸國修行に出る。〔三幕〕今は盗賊鬼剃の清吉となつた清心と十六夜のおさよとは、白蓮を強請つて

の三千兩を盗んだ賊と分り、白蓮も實は大寺正兵衞だと素性を打ち明ける。而も正兵衞と清吉とは實の兄弟であることも知れた處へ捕手が押寄せる。正兵衞の妻お藤は訴人と見せて夫の刄に死し、三人を落ち延びさせようとする。正兵衞とおさよ、清吉とは別れ〳〵に逃げる。〔四幕〕正兵衞は早桶の中に入つて手下の者に無緣寺まで運ばれ、闇夜を幸ひ逃れようと、そこで日の暮れるのを待つうち、湯灌場買ひに見破られる。おさよの父で今は出家の西心は、この無緣寺の墓守となつてゐるので、おさよと清吉も生れた子供を抱いて逢ひに來る。こゝで求女がおさよの弟で、而も持つてゐた金は、清吉のため父親に賴まれて都合したものとわかり、更に清吉の盗んだ重寶綠丸の短刀で疑ひを受けて切腹した八重垣紋三が、清吉の父親並に西心の故主であつたことも分明して、清吉は兄正兵衞の詮議も自分の强請がもとであることを思ひ合せ、申譯に死なうとする。それを留めたおさよを誤つて手に掛けた清吉は、子供諸共、その跡を追はうとしたが、流石無心の子供には刄が當てられず、自分だけ腹を切る。そこへ正兵衞・西心・紋三の義弟等が現はれ、子供は西心が引受け、短刀は義弟の手に渡り、清吉は兄正兵衞の介錯で果てる。

【解說】前述の通り、「小袖曾我薊色縫」の二番目狂言で、一番目は八重垣紋三を主人公とした御家狂言である。情話中心の世話物としても白浪物としても、代表的な作品と一般に認められてゐる。殊に心中を一種奇巧な構想を以て描いた點は、注目すべき價値を持つてをり、江戸末期の頽廢的傾向或は享樂的傾向を

【參考】河竹默阿彌○續歌舞伎年代記〔河竹〕

讃岐典侍（さぬきてんじ）

歌人【姓名】古來讃岐典侍を源三位頼政の女二條院讃岐とする說があり、藤岡作太郎博士も同說であるが（日本文學史平安朝篇）、この說は明かに誤りで、現在では「中右記」嘉承二年十二月一日鳥羽天皇卽位の條を根據として、讃岐典侍を伊豫三位藤原兼子とする說（「宮廷女流日記文學」池田龜鑑、「讃岐典侍考」櫻井秀）と、伊豫三位の妹が讃岐典侍兼子とする說（「歷史上に於ける乳母の勢力」和田英松）及び「中右記」康和四年正月一日の條、「天祚禮祀職掌錄」「伯家雜記」「卽位褰帳並役人事」等の記錄を準據として、兼子の妹藤原長子となす說（「讃岐典侍日記の作者に就て」櫻井秀、「讃岐典侍日記の作者に就て」玉井幸助）とがあるが、そのうち長子說が最も妥當であらう。

【閲歷】（一）讃岐典侍を藤原長子とすれば、その閲歷は、康和三年十二月晦日堀河天皇の典侍となり、讃岐典侍と呼び、同四年元旦の御陪膳を勤めた（中右記）。奉仕すること約八年、嘉承二年七月、堀河帝の重患に際して病床に侍し、帝の大漸に當り素服を賜つた（讃岐典侍日記）。その後、鳥羽帝の典侍となり、その年の十二月一日、同帝の卽位式に於て褰帳に奉仕し（天祚禮祀職掌錄）、それ以後約十年間、讃岐典侍と稱し新帝に仕へた。退職後も鳥羽院の信任厚く、時折天機を奉伺した。元永の初年精神に異狀を呈し（長秋記）てからの閲歷は未詳である。（二）讃岐典侍を兼子とすれば、その閲歷は「中右記」の歿年より逆算すると、永正五年に出生し、承曆三年三十歲の時、敦家との間に敦兼をまうけた（尊卑分脈）。丁度その時、御誕生の堀河帝の乳母として宮中に出仕して乳を進め奉つた。嘉承三年十二月十九日、堀河天皇の御卽位式に、從五位上で褰帳に奉仕し（天祚禮祀職掌錄）、寛治元年四月十六日には賀茂祭に使となる（長秋記）。同年六月十日には既に讃岐典侍と呼ばれて居り（爲房卿記）、寛治二年十二月十七日には八十島の使となつて京都を出發した（中右記）。寛治四年、敦家頓死（尊卑分脈）の後、同七年二月二十二日には既に三位となつて居り（中右記）、康和三年五月十六日には伊豫三位と呼ばれてゐる（殿暦）。又嘉承二年七月二十四日には堀河院の素服を賜ひ（爲房卿記・中右記）、嘉承二年八月五日には出家し（中右記）、長承二年七月十三日、八十四歲を以て死去してゐる（中右記）。【作品】讃岐典侍日記一卷（別項）その他、千載集卷十四戀四に伊豫三位の歌を一首載せてある。

【參考】讃岐典侍考　櫻井秀（國學院雜誌明治四二ノ七・八）○讃岐典侍日記の作者に就て　同上（わか竹大正六ノ二）○歷史上に於ける乳母の勢力　和田英松（國學院雜誌明治四五ノ一）○讃岐典侍日記の作者について　玉井幸助（史學雜誌四〇ノ九）

〔池田〕

讃岐典侍日記（さぬきのすけのにつき）

一卷

【作者】讃岐典侍。「今鏡」卷二たまづさに「その御ありさま、內侍のすけ讃岐とか聞え給ひし、こまかにかかれたるふみ侍りとかや」とあり、「新勅撰集」一八雜三に「同じ頃香隆寺に參りて紅葉をみてよみ侍りける。堀河院讃岐典侍」と詞書して、日記中の和歌がをさめてある。【名稱】「さぬきてんじにつき」と普通に呼ばれてゐるが、「さぬきのすけのにつき」と呼ぶ方が正しからう。「本朝書籍目錄」に、讃岐典侍日記三卷と見え、「本朝書目」にも同樣に見え、「徒然草」には讃岐典侍が日記と出て、また、「八雲御抄」の歌記の條に、「堀河院日

記讃岐典侍」と見え、また寫本「和歌色葉集」卷一に「讃岐典侍の書たる堀川院日記云々」とある。【成立】前記「今鏡」の記事によれば、その當時已にこの日記が一般に流布してゐたことが明かである。「今鏡」の執筆を高倉天皇の嘉應元年（黑川春村の說）であるとすれば、鳥羽天皇の天仁元年を距る六十一年の頃には、已にこの日記は世に行はれてゐる。按ふにこの日記は、著者が里に籠つた時に、つれづれなるまに過ぎにし事を思ひ出でて、筆を執つたものであらう。日記には天仁元年十月の秋、香隆寺にまゐり、紅葉を見るにつけて先帝を戀

までの事を書いた日記である。全篇の梗概を示せば、六月二十日の頃、堀河院は俄かに御惱づかせられ、七月六日にはいたく重らせ給ひ、日のたつまゝに段々御衰弱になる。內大臣は夜晝となく、度々御見舞に參上される。やがて御修法の事がきまる。中宮が參內される。十七日の晝ごろ、御惱は益々加はつて來る。行尊僧正が召されてまゐり、千手經を尊く讀まれる。受戒のあと定海阿闍梨を御枕上にお召しになり、方便品の一部を誦せしめられる。この日、帝はつひに崩御ます。神璽寶劍渡御の儀があるのも悲しい。作者は一

が、傳本の奥書にも見える通り、寛永十六年の頃已に諸本が亂れて、脫文や衍文が多かつた。群書一覽も、卷末に脫文あるべしと云つてゐる。

【史的地位】「讃岐典侍日記」の、表現上の技巧には物足りない所がある。加ふるに傳本の錯簡誤脫甚だ多く、後人の加筆らしい所もあつて、本文を讀む上に非常な困難があり、且つ又內容も甚だ地味で、他の物語や小說のやうに一般の階級に廣く愛讀せられず、從つてこれに對する俗評も盛んでなかつたから、古來批評の埒外に置かれて來てゐる。しかしこの日

でゐる。家集に中務との贈答歌二首、敦慶親王の女との贈答歌八十三首とがある。前者は「中務集」にも見えるが後者は見えない。「後撰集」「拾遺集」は、その一部を載せて中務・信明の贈答としてゐる。作風は無頓着な詠み放しな所がある。【作品】家集「信明集」は、群書類從卷二四九所載本と歌仙歌集本とは大略等しいが、後者は一首多くて百四十七首である。初めに屛風歌があり後に贈答歌がある。なほ勅撰集に入る歌は後撰五、その他凡そ十八首、合計凡そ二十三首。

【參考】歌仙傳

〔西下〕

記讃岐侍」と見え、また寫本「和歌色葉集」卷一に「讃岐典侍の書たる堀川院日記云々」とある。

【成立】前記「今鏡」の記事によれば、その當時已にこの日記が一般に流布してゐたことが明かである。「今鏡」の執筆を高倉天皇の嘉應元年（黒川春村の說）であるとすれば、鳥羽天皇の天仁元年を距る六十一年の頃には、已にこの日記は世に行はれてゐる。按ふにこの日記は、著者が里に籠つた時に、つれづれなるまに過ぎにし事を思ひ出でて、筆を執つたものであらう。日記には天仁元年十月の秋、香隆寺にまゐり、紅葉を見るにつけて先帝を戀しく偲び奉り、歌を詠んだことが見えてゐるから、その後二三年の間の作と見て差支なからうと思はれる。【諸本】この日記の傳本は甚だ稀れである。今傳はつてゐる本は、群書類從にをさめられた系統の本ばかりである。類從本は、その奥に「右讃岐典侍日記以奈佐勝臭本書寫以百花庵宗固本校合」とあつて、由來を示してあるが、この本の原本と、神宮文庫所藏本・住吉文庫所藏本・彰考館所藏本・南葵文庫所藏本、その他私人の藏本が三四本あるが皆同系統の本である。類從本の上卷の末には「右拜借　仙洞御本、使安中書廣端、太神景明奥、書寫之、與淸閑亞相具房卿、一校了、落字魚魯等不可勝計、重可加校正者也、寛永十六稔二　祕書郎」とあり、下卷の末には「右申請　官本俾源藹俊治書之、與光倉中將、一校畢、寛永十六稔臘十六　祕書郎」とある。これによつて、現存諸本の由來がわかる。

【內容】本書は、嘉承二年六月のころから、堀河院御惱づかせ給ひしことに筆を起し、七月つひに崩御まします間のことをこまごまと述べ、翌年鳥羽天皇御卽位から、大賞會に至るまでの事を書いた日記である。全篇の梗概を示せば、六月二十日の頃、堀河院は俄かに御惱づかせられ、七月六日にはいたく重らせ給ひ、日のたつまゝに段々御衰弱になる。內大臣は夜晝となく、度々御見舞に參上される。やがて御修法の事がきまる。中宮が參內される。十七日の晝ごろ、御惱は益々加はつて來る。行尊僧正が召されてまゐり、千手經を尊く讀まれる。受戒のあと定海阿闍梨を御枕上にお召しになり、方便品の一部を誦せしめられる。この日、帝はつひに崩御ます。神璽寶劍渡御の儀があるのも悲しい。作者は一旦里に退出する。十月ばかりになつて、新帝に出仕すべき由の院宣を受け、止むを得ず再び宮仕を思ひ立つ。霜月十九日、先帝の月の御命日に、雪ふる夜一人香隆寺に向ふ。十二月、新帝の御卽位には、作者は心にもあらず褰帳の役をつとめる。嘉承三年の朔日、夕方參內して陣に入る程、往事を思ひ出して哀愁に沈む。翌日、ふれふれ粉雪と童謠をうたひ給ふ幼帝のいとけなき御姿を拜す。夜、帝に御膳をすゝめ奉る。御寢につかせ給ふ御姿に向つて涙せずにゐられない。三月堀河院にまゐる。昔のまゝのものは花だけで、院はことごとく僧坊になつてゐるのを見て、淋しさ言はむ方もない。四月、灌佛の御有樣を見て昔の事を思ひ出す。諒闇が明けると御所のしつらひが古の通りに變る。素服をぬいで、常の服になるのが名殘をしい。八月二十一日、鳥羽帝は小六條殿から、大內裏におうつりになる。先帝在せし日の思ひ出が作者をして涙をしぼらしめる。再び里に下つた或る秋の日、人知れず香隆寺に詣でて故院をしのび奉る、「讃岐典侍日記」は、このあたりで終つてゐるが、傳本の奥書にも見える通り、寛永十六年の頃已に諸本が亂れて、脫文や衍文が多かつた。群書一覽も、卷末に脫文あるべしと云つてゐる。

【史的地位】「讃岐典侍日記」の、表現上の技巧には物足りない所がある。加ふるに傳本の錯簡誤脫甚だ多く、後人の加筆らしい所もあつて、本文を讀む上に非常な困難があり、且つ又內容も甚だ地味で、他の物語や小說のやうに一般の階級に廣く愛讀せられず、從つてこれに對する俗評も盛んでなかつたから、古來批評の埒外に置かれて來てゐる。しかしこの日記は、他の日記文學に比して、深刻なものがあり嚴肅なものがある。「更級日記」（別項）が日本文學に於て最初に「夢」を見出した作品であるとすれば、「讃岐典侍日記」は、第一に「死」を見出した作品である。この日記は、さういふ意味に於て、注目すべきものの一である。

【備考】古來未だ一册の註釋書も知られてゐない。文政二年の刊にかゝる長野美波留の「百人一首抄」によれば、同じ著者の手になる「日記圖繪」三卷といふものがあるらしいが、これは多分註釋めいたものであつたらうと思はれる。東京帝國圖書館藏の「讃岐典侍日記標目」寫本一卷は日記中の事項を類別したものである。

〔池田〕

讃岐入道（さぬきのにふだうの）「顯綱朝臣集」を見よ。

信明（さねあきら）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】源【生歿】延喜九年に生れ、天祿元年（一六三〇、一說康保二年）歿す。享年六十一【閱歷】若狹・備後・信濃・越前・陸奥等の守に任じ、安和元年從四位下に叙した。承平元年亭子院の崩御を、天曆二年のころ父公忠の死を、同六年朱雀院の崩御を、それ〴〵悼み奉る歌を詠んでゐる。家集に中務との贈答歌二首、敎慶親王の女との贈答歌八十三首とがある。前者は「中務集」「拾遺集」には、その一部を載せて中務・信明の贈答としてゐる。作風は無頓着な詠み放しな所がある。【作品】家集「信明集」は、群書類從卷二四九所載本と歌仙歌集本とは大略等しいが、後者は一首多くて百四十七首である。初めに屛風歌があり後に贈答歌がある。なほ勅撰集に入る歌は後撰五、その他凡そ十八首、合計凡そ二十三首。

【參考】歌仙傳

實陰（さねかげ）　歌人【姓】武者小路。本姓藤原【號】閑翁と書いてゐる場合もあるが稀である。位の方から、儀同三司とか亞台とか呼ばれてゐる。【生歿】寛文元年に生れ、元文三年（一三九八）九月晦日薨去。享年七十八。〔西下〕

【諡號】超嶽院【閱歷】實陰は、同族刑部大輔實信の子であつたが、武者小路公種の養子となつて、その家を繼いだ。門下似雲が師の述懷を記錄した「磯の波」の中に、實陰は十歲頃から「三代集」の諳記を命ぜられて、十四五歲頃まで記憶し終へた由が出てゐる。天和三年（一十三歲）東海道の旅をしてゐるが、歌想を練るに最好の機會となつたであらう。貞享元年八月放生會の行幸に供奉して歌を詠進してゐる。元祿十五年には右中將に參議を兼ね、翌年正三位に敍された。帝は實陰より七八歲の年長に渡らせられ、特にその才學を愛し給ひ、三條西實隆以後の歌才と讃へられたと云ふ。寶永四年（四十七歲）一旦參議を辭し、翌々年には再度關東への旅をした。その後、官は權中納言・權大納言と云ふやうに昇つたが、任官の年に辭し、公務に從はなかつた。恐らく享

保六年九月や同九年十月に、靈元上皇の修學院觀紅葉御幸に侍してゐるやうに、風流の生活を好愛したものと思ふ。かくて「古今傳授」（歌道傳授參照）を受くるに及び、完全に歌壇の元老となることが出來た。享保十五年の七十賀には、烏丸光榮、その他多くのものから賀詞を贈られた。上皇の崩御はその翌々年であり、彼は元文三年九月に叙從一位准大臣に任ぜられて薨去した。

【著作】初學考鑑（一卷、竹柏園蔵、活字本として和歌叢書の中の和歌作法集に收む）、初學者のために書いた歌道の書で、歌の沿革を述べるところ、實陰の學者的面目が窺へる。保守的の二條派（別項）でない點は特に注意すべきで、三代集復歸を大理想としてゐることがわかる。卷の後半は全くの童蒙のために、諸抄物に載せてない思ひつきを書き連ねただけのものである。○芳雲集（別項）（超獄院儀同集とも）○芳雲和歌集類題（六卷、天明七年刊、武者小路家藏版）歌數は、春部一千百三首・夏五百十一首・秋一千二十五首・冬五百九十一首・戀九百十二首・雜一千百八首。○超獄院集（一卷、寫、實陰公集とも）內閣文庫藏の一本は、初めに歌題目錄あり、四季・戀・雜一千首の外に、「超獄院集追加」として、同じく六部立による百十七首が附加されてゐる。凡て題詠である。實陰の文章と云ふものは殘存してゐない。「興福寺再建之勸化疏假名文」と云ふ享保十一年一乘院宮の所望で書いた短章が家集の終りに附けられてゐるに過ぎない。【作風】「橘窓自語」に、實陰の幼かつた時、眞盛の豆を賜はり、卽興的に「君が代は千代にやちよにさゞれ石のいはほとなりてこけのむす豆」と詠出したと云ふ逸話が傳つてゐる。靈元院は、古今の五大歌人をあげて、人麻呂・貫之・定家・逍遙院（實隆）及び朕の弟子の實陰であると仰せられたと云ふ。確かにその歌才が一世に卓越してゐたことは考へられる。多くの二條派歌人が、制詞や季句を問題にしてゐる間に、彼が直ちに三代集の精神に復歸せんとした氣概を受取ることが出來る。但し背景に元祿と享保の時代を持つた彼として、その作風が革新的でなかつたことはやむを得ない。

霜さえし尾上のみねも明るよの空に和らぐ春は來にけり（立春曉）

飛ぶ鳥は歸りつきぬる山の端に殘る夕べの雲ぞしづけき（秋夕雲）

末なびく雲には近く見し里もかすみて遠き竹の一村（遠村竹）

彼には多くの門下があつた。中にも似雲（別項）はその秀でたものであり、孫弟子にも澄月（別項）の如き詠み手があつた。〔齋藤（清）〕

【參考】似雲聞書○知譜拙記○翁草○一話一言○橘窓自語○大海のはし○野史

實方（さねかた）　歌人（中古三十六歌仙の一）

【姓】藤原【通稱】實方中將【生歿】生年未詳。長德四年（一一六五八）陸奥に歿す。【閱歷】父は定時、母は源雅信の女、父が早世したので叔父濟時（小一條大將）の養子となる（榮華物語月宴）。天元元年右兵衞權佐に任じ、永觀元年宇佐に使し、勞によつて正五位下に叙し、寬和二年從四位下に叙し、三年左近衞中將、長德元年陸奥守に任じた（歌仙傳）。宇佐に使した時の歌は家集に多く見える。陸奥に下る時には中納言隆家から餞の歌を受け、右衞門督公任から下鞍を贈られ、大江匡衡からも歌を送られた。特に花山院の御寵愛を受け常に御前に侍して折々の歌を詠んだ。陸奥に下るにつけて院より御弓を賜はり、出發の日が延びて猶豫してゐると「誠にはいつばかりか」と仰せられた。寬和二年俄かに御讓位になつた事を歎いた歌、熊野御幸を猪隈まで御見送りした時の歌もある。圓融院からも御寵愛を蒙つたものの如く、彼が小馬命婦と物語をしてゐると、山吹の花を屛風の上から投げこし給うた時の歌、御讓位や崩御に際して詠んだ歌等がある。淸少納言と戀愛關係があつたことは、家集及び「淸少納言集」を見ても明かで、なほ「枕草子」にも實方の事は數ケ所に記されてゐる。家集に名の見える女性は凡そ二十人であるが、特に小一條殿の少將のおもととは戀愛關係が深かつたやうである。男性では、道綱・道信（共に中將）と親密であり、公任との贈答歌も多く、重之は陸奥に彼を訪ねて下つた。なほ行成との不和から奥州に遷され、その地で薨じたことは有名な傳說として知られてゐる。【作品】家集「實方朝臣集」（別項）。勅撰集に入つた歌は、拾遺七、後拾遺十三、その他凡そ四十二首、合計凡そ六十二首。【批評】歌集を通して見る彼には、爛熟した生活意識があり、進んでは生活を享樂する頽廢的氣分も見える。表現は自由で餘情を含んでゐる。

【參考】中古歌仙傳○大日本史二百二十○尊卑分脈〔西下〕

實方朝臣集（さねかたのあそんしふ）

藤原實方の歌集一卷【傳本】群書類從卷二五一所載本と、別本（一冊寫、圖書寮藏）とがある。【解說】歌の數は類從本百六十一首（內連歌十三）、別本百四十五首にて共通の歌は九十七首である。別本には右の外に、「實方集異本也」として二十九首、「又異本」として三十五首、合計六十四首の增補があつて總計二百九首となるが、二つの增補は共にその全部が類從本に見えない。隨つて類從本・別本・異本・又異本の四つは、互に異なる事になる。【批評】本集は、實方の豐富な生活內容が歌及び詞書の上に出てゐて、半ば物語の如き感がある。例へば（一）戀愛の場面を描寫した詞書を始め、（二）生活の實狀を描寫したもの、「男に髮きられたりと聞きて」「思ひかけたる女の寢たるを見て」「童より見ける人を心がけて」「或る女の許に實方の兵衞佐となのりてこと人の行きたりけるを」「人の女の親のねたるまに尼になりたるかたを繪にかきたるを見て」「柴つみたる車のゆきわづらふを見て」「網代にさそひければ」、（三）宗教的色彩のあるもの、「世の中の人いみじう道心ありしころ」「世の中はかなき物語して」「道心がり給ふより殺生このみ給ふこそとて」「蓮の葉に空蟬をつゝみて」等の如き詞書がある。その他の特質として表現も自由で、「神のもるいつきの馬にあらねども」「塵たゝぬ花の都」の如きものがあり、又集中に連歌があるが、すべて諧謔的で、「足の下膝よりかみの冴ゆなるは腰のわたりに雪やふるらん」の如きその一例である。現實描寫の傾向が濃厚であつて、作爲が少ない。〔西下〕

實定（さねさだ）　歌人

【姓】藤原【別稱】後德大寺左大臣【法號】如圓【生歿】保延五年に生れ、建久二年（一八五一）閏十二月十六日（又十七日）歿す。享年五十三歲說（吾妻鏡・百錬抄）、六十三歲說（玉葉）【學統】歌道は、母方の叔父俊成の系統をうけ、音曲特に神樂道に於ては、好方の傳統をうけ、これを子公繼に傳へてゐる。【閱歷】父は中納言右大將、母は權中納言の娘である。保元元年彼が十八歲の時、後白河帝の中宮に、その妹呈子が選ばれて入つたため、中宮權亮を兼ね、永曆元年の秋、二十二歲の彼は、中納言兼右衞門督の地位を得ると云ふ幸運なために、彼の性格を自ら傲岸ならしめた。保元二年祖父實能を失ひ、四ケ年の後、父公能に別れ、加ふるにその年、後輩實長のために越階され、その後、長寬二年には權大納言に昇りながら、心中悶々たるところが多かつた。嘉應二年（三十二歲）には、皇后宮大夫の職すらも俊成に讓り、全くの遁世者となつたほど厭世的であつた。ほぼその時代、恰も寂蓮が出家したことを耳にして、「世の中を出でぬとなどか告げざりし後れじと思ふ心あるものを」（續千載集）と感慨を洩らしてゐる。左行がその邸に出入したことは「徒然草」に記されてある。俊成が「千載集」を撰するに當り、血緣にも因るであらうが、實定の作を十五首採つてゐる。文治五年（五十一歲）左大臣の榮職に任ぜられたけれど、その翌年には辭官して子公繼に參議を乞ひうけた。「玉葉」によれば、持病のため日常より健康ではなかつたらしい。その翌年卽ち建久二年六月二十日、出家して如圓と號したが、永年の病おもり、同年閏十二月十六日薨去した。【著作】林下集（日本歌學全書第八編所收）、彼の歌集で弘化二年五月仲田顯忠が校合して上梓したものが行はれてゐる。○庭魂沙一册（群書類從卷三四・歷代

白浪（新古今集、春）

夕凪にと渡る千鳥渡まよりみゆるこじまの雲に消えぬる（同、冬）

がある。更に「歌仙落書」の批評に、その歌風を賞讃して、「風情けだかく、又おもしろく、艶なるさまもぐしたるにや。（中略）冬の夜の月白くさえ渡るに、霰時々打亂れ、內侍所の御神樂の拍子の、九重にひゞきたる聞心地こそすれ」といふやうな特殊の趣がその風格の中に忍ばれないでもない。しかし、

月見ればはるかに思ふ更科の山も心の中にありける（千載集）

初期のこの一首などは、淡落せんとする所をいで、敢然色を正しうして正義を維持するに努めたので、三條天皇も亦竊に實資に倚頼せられた程であつた。かく嚴正を以て世に聞えたので、世の人實資を稱して賢右府と言つた。有職故實に通じその說を奉ずるものを小野宮流といふ。【著書】小右記（別項）○小野宮年中行事一卷（群書類從卷八四公事部六所收。年中行事の外、神事・御服・御書・免者・廢朝・雜穢、五等親姉妹之子無服、致敬及び下馬等のことを載せ、舊記を採錄したもの。）〔石村〕

實隆（さねたか）　歌人

【姓名】姓は三條西。本姓は藤原。別名は久世・公延等【法名】堯空。逍遙院と呼ぶ。【號】聽雪・逃避子【生歿】康

め、中宮權亮を兼ね、永曆元年の秋、二十二歳の彼は、中納言兼右衞門督の地位を得ると云ふ幸運なために、彼の性格を自ら傲岸ならしめた。保元二年祖父實能を失ひ、四ケ年の後、父公能に別れ、加ふるにその年、後輩實長のために越階され、その後、長寛二年には權大納言に昇りながら、心中悶々たるところが多かつた。嘉應二年（三十二歳）には、皇后宮大夫の職すらも俊成に讓り、全くの遁世者となつたほど厭世的であつた。ほぼその時代、恰も寂蓮が出家したことを耳にして、「世の中を出でぬとなどか告げざりし後れじと思ふ心あるものを」（續千載集）と感慨を洩らしてゐる。佐藤兵衞尉近宗を一人近侍せしめて、專ら東山などに隱栖してゐたものらしい（千載集・新古今集）。その頃愛妻（師長女、公守母）の病死したのも、やはり厭世と悲哀の心を深めたに違ひない。堪へ難き追弔の歌を幾首も殘してゐる。時は平家横暴の時代で、藤氏の公達は多く失意であつたが、實定は巧に嚴島内侍有子に取り入り、清盛の心を動かし、宗盛のために官を越えられた憂を訴へ、左大將の官を贏ち得たと云ふ（平家物語）。治承四年福原遷都と共に、廢都の荒れゆく悲壯をば今樣調に託し、「古き都を來て見れば淺茅が原とぞ荒れにける云々」と詠じたと云ふ條は、大將の持つ風韻を深く印象せしめるに足る物語である。彼は平家の沒落に際しても、巧に源家と結んで、内大臣から右大臣と云ふやうに昇進した（文治元年、四十八歳）。梶原景時の如きも、實定の推擧を得て美作の目代になつたと云ふ。その邸宅の寢殿西角を歌の間と號し、歌合等の會席として文人を出入せしめ、音曲を好み、特に神樂は既にその堂に入つてゐたと云ふ。西行がその邸に出入したことは「徒然草」に記されてある。俊成が「千載集」を撰するに當り、血緣にも因るであらうが、實定の作を十五首採つてゐる。文治五年（五十一歳）左大臣の榮職に任ぜられたけれど、その翌年には辭官して子公繼に參議を乞ひうけた。「玉葉」によれば、持病のため日常より健康ではなかつたらしい。その翌年即ち建久二年六月二十日、出家して如圓と號したが、永年の病おもり、同年閏十二月十六日薨去した。【著作】林下集（日本歌學全書第八編所收）、彼の歌集で弘化二年五月仲田顯忠が校合して上梓したものが行はれてゐる。○庭槐抄一册（群書類從卷三四・歷代殘缺日記二七に收む）。「槐林記」「宮槐記」「實定公記」などとも呼ばれ、治承元年九月より壽永二年六月に至る漢文體の日記で、特に行幸記事を主としての抄錄らしい。有職的記錄で、筆者の個性など描かれた點は殆どない。その他實定の歌は、「千載集」以下各勅撰集に選出され、前記の如く「平家物語」には、今樣が一首載つてゐる。【人物・作風】「無名祕抄」の中に、俊惠の實定評として、「左右なき手だりにいませしかど、その故實なく高慢にして、今はよみ口後手になり給へり」と云ふ一節があるが、いかにもと首肯される筋がないでもない。彼はその職權を濫用しすぎた嫌ひがあるのではないか。西行が實定を嘲り遠ざかつたと云ふのも、一つの理由がこの邊に潛んでゐるであらう。實定の歌としては、「小倉百人一首」中の「時鳥なきつる方を眺むればただ有明の月ぞのこれる」があるが、彼の佳作は「千載集」や、「新古今集」に採られたものに盡きてゐる。その代表作に、

なごの海の霞の間より眺むれば入日をあらふ沖つ白浪（新古今集、卷夕風にと渡る千鳥波まよりみゆるこじまの雲に消えぬる（同、冬）

がある。更に「歌仙落書」の批評に、その歌風を賞讃して、「風情だかく、又おもしろく、艶なるさまもぐしたるにや。（中略）冬の夜の月白くさえ渡るに、霰時々打亂れ、内侍所の御神樂の拍子の、九重にひゞきたる聞心地こそすれ」といふやうな特殊の趣がその風格の中に忍ばれないでもない。しかし、

月見れば はるかに思ふ更科の山も心の中にありける（千載集）

初期のこの一首などは、墜落せんとする所を危く一歩抑へ得てゐる秀吟であると思ふ。彼の得意とするところは、叙景歌にしても主觀味の交るものであつて、これはその晩年の作として纏まつてゐる「女御入内屏風歌」（建久元年、薨去の一年前）によつて、最も明瞭に窺へる。歌材としては、比較的海の歌の多いことが、他の家集に比して異色がある。

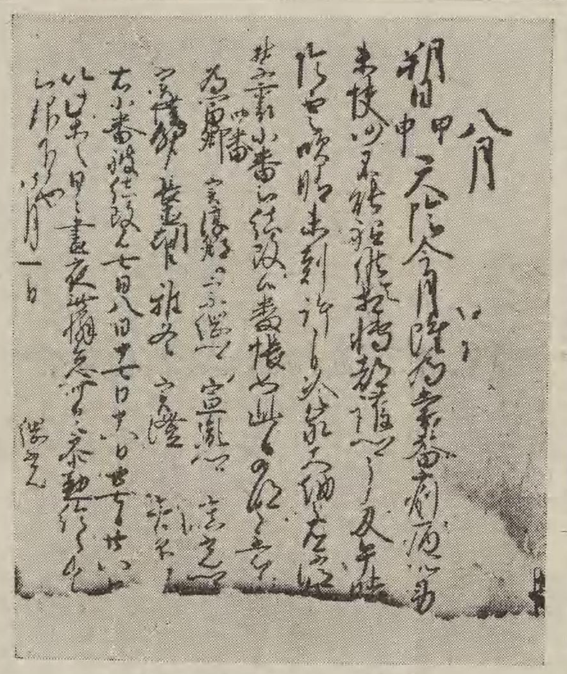
【參考】吾妻鏡○平家物語○古今著聞集○無名祕抄○徒然草○鹽尻○百人一首一夕話○大日本史料四ノ三　（齋藤（清））

實資（さねすけ）　有職家　【氏名】藤原氏。通稱は小野宮。幼名は大學丸　【生歿】天德元年に生れ、寛德三年正月十八日薨去。享年九十。【閲歷】齊敏の子、少くして近衞少將・藏人頭等に任じ、長保三年權大納言に任じ、右近衞大將を兼ね、治安元年右大臣に拜し、長曆元年從一位に敍せられた。資性明達方正、權貴に阿らないことで世に知られた。時の左大臣道長が累代の權勢を恃んで外戚の威を振ひ、滿朝の公卿悉く慴服追從しないものがない時に當つても、實資のみは毫もその威權に屈しないで、敢然色を正しうして正義を維持するに努めたので、三條天皇も亦竊に實資に倚頼せられた程であつた。かく嚴正を以て世に聞えたので、世の人實資を稱して賢右府と言つた。有職故實に通じその說を奉ずるものを小野宮流といふ。【著書】小右記（をうき）（別項）○小野宮年中行事一卷（群書類從卷八四公事部六所收。年中行事の外、神事・御服・御書・兔者・廢朝・雜穢、五等親姉妹之子無服、致敬及び下馬等のことを載せ、舊記を採錄したもの。）　（石村）

實隆（さねたか）　歌人　【姓名】姓は三條西。本姓は藤原。別名は久世・公延等　【法名】堯空。逍遙院と呼ぶ。【號】聽雪・逃避子　【生歿】康正元年に生れ、天文六年（一一九七）薨去。享年八十三　【家系】實隆の曾祖父公時が三條北、朱雀西に住んでゐた爲め、三條西といふ名が出てゐる。初めは西三條といふ。【學統】飛鳥井雅親及び宗祇の高弟であつて、肖柏や兼載と同門關係になつてゐる。子孫が彼の學統を繼いで後世に傳へた外に、特に門下といふ者をもつてゐない。【閲歷】家は世々相ついで文事に關係が多い。實隆は公保の次男であるがその晩年の所生であり、且つ實隆の四歳の時、兄實連が夭死したため、彼は家督を繼いで從五位下に叙せられ、侍從に任じ、翌年には越中權介を兼ねた。長祿四年彼の六歳の年、父は六十三歳で薨去した。後、稱名院入道前内大臣と稱された人である。遺孤なる實隆は文明元年（十五歳）左近衞少將となり元服を遂げた。有名な「實隆公記」はその翌年から書き始められたものである。十七歳の時に詠んだ作として、「一聲を待つことにせし郭公今やかたらふねざめなるらん」と云ふ一首が、「雪玉集」の中に傳へられてゐる。二十一歳（文明七

年）の時、飛鳥井雅親に就いて、歌道の實際研究を始めた。その豐富な天賦は、文明十三年の千首歌、同十六年の結題千首歌に依つて明かに左證されてゐる。同十七年には「源氏物語」の筆寫を終へ、宗祇や肖柏と清談の宴を催した。折しも宗祇は雅親より二十歳の年少でありながら、常緣より「古今傳授」を授かり、衆望を已一人に聚めかけてゐた。明應の頃、實隆は宗祇と交ること日に深くなり、その啓發を受けるに至つて、歌道熱は一層深くなつていつたらしい。宗祇・肖柏は、常に携へて實隆の邸を訪うた。文明十七年閏三月、實隆が永年の希望であつた源氏五十四帖を筆寫し終へた時など、共にその歡喜を分つてゐることが「實隆公記」の中に窺へる。かくて長享元年宗祇は遂に「古今傳授」をその最高弟として實隆に與へたのであつた。實隆はかくて延德元年（三十五歳）正二位權大納言に陞進するに及び、宮廷に缺くべからざる人物として仰がれた。文道に於て毎日宗祇や兼載等の訪問をうけ、歌道の庇護者として、兎毫・紙類を彼等に給與してゐたのみならず、その好學の性は萬般の古典學に博通して一世の師範であつた。即ち文龜元年後柏原帝の御踐祚に際しては、皇室費不足にて典禮を擧げ難かつたのを、實隆の奔走で幕府から一萬匹を獻金せしめたなど、彼の尊王の精神の輝かしい一發露と見るべきである。その頃十年ばかりの間に、常緣・雅親等相ついで逝つたが、宗祇も御踐祚の翌年示寂した。文明より明應にかけ、朝野に歌道の普及して行つたことは、眞に驚異に値する。月次會・法樂歌會の外に、樣々な機會ごとに會合が催され、勅點あることは勿論、義政の撰集點もあれば、勅撰の合點も行はれた。

宗祇・兼載歿後の實隆の地位は、益々自重すべきものがあつた。永正十二年（六十一歳）主上が彼をして大臣上位に列せしめられんとされた時これを固辭し、翌年四月薙髪したに就いても、いろ〳〵の關係はあつたにせよ、彼の文事上の使命を悟つた結果だらうと臆測される。昭金刺斗に受戒し、自らを科陰刺斗と云つた。大永六年後奈良帝の御即位後は、特に自由の身となり得て、佛寺參籠や古跡行脚に餘生を送つた。石山參籠の際、奉納した「詠源氏物語卷々和歌」や「高野參詣日記」は、天文二年即ち薨去の三四年前に出來たもののやうである。八十歳近い人の作として、その堅實さ崇敬に値する。大正四年その忠誠の德に基き更に從一位の贈位が行はれた。



實隆公記（文明六年の條）

【著作】和歌作法一卷。（寫）（歌會の儀式に關したもの）○細川右京大夫自歌合跋一篇。（寫）（細川勝元の孫高國の自歌合に與へた跋文。斷片にすぎない）○再昌草三十七卷。（寫）（歌日記で、文龜元年より天文五年に及ぶもの。現今寫本に永保三年の寫本があるが、文龜三年の一冊を缺いてゐる）○雪玉集（別項）（聚雪集ともいふ。彼のものには定數歌集が多く、「雪玉集」に於てもその半以上を占めてゐる。それが獨立されて次のやうに各種の寫本として傳へられてゐる。「逍遙院内大臣百首」「逍遙院内大臣百首四ヶ度」「逍遙院内大臣百百五ヶ度」「逍遙院内大臣百首九ヶ度」「逍遙院内府百首十一ヶ度」「逍遙院百首」「逍遙院基綱卿兩吟百首」「逍遙院五十首韻」「逍遙院五十首部類」「逍遙院春日祭百首」「その他斷片的のものに「逍遙院雜歌」「逍遙院三十六首」「逍遙院詩和韻和歌」等も遺存する。多くは圖書寮・高松宮家等に藏されてゐる）○聽雪集一卷。（寫）（内閣文庫藏。雪玉集中の六部立以外の歌を抄出したもの。例へば、中納言入道宋世點のもの等）○高野參詣日記一卷。（群書類從卷三三八所收。四月十九日京師出立、天王寺から高野山にかけての旅日記。五月三日歸洛してゐる）○源氏物語細流抄二十卷。（國文註釋全書所收。これは實隆の子の公條の筆になつたものであるが、その源氏物語の註解には實隆の說が多く參考されてゐる）○裝束抄一卷。（群書類從卷一一六所收。但し類從本では逍遙院殿裝束抄となつてゐる）○有職書。實隆公記百四十一册。（寫）（作者の漢文體日記。作者研究の上に重要の資料である）【作風・批評】實隆の詠詩の中に、「三十年來朝市塵、扁舟歸去五湖春、平生慚愧無二功業一、合下對二白鷗一終二此身一」と云ふ絶句があるが、これはよく彼の面目を表はしてゐるものと思ふ。即ち彼は多分に貴族的精神を持ち、文學に對しても恰好のパトロン以上に解說することは出來なかつた。形式的の古今傳授をこそ宗祇から受け得たが、宗祇の持つた純眞性をわがものにする事を得なかつた。その家集は「三玉集」の一として後世二條派より尊重せられもしたらうけれど、高い價値を持たすことを許され難い。彼は終始、學的趣味を弄んでゐるやうに、和歌に於ても一享樂者の域を超える上に無力であつた。但し宮廷を中心として一大文運を育くんでいつた功績は、これを重視すべきこと言ふまでもない。（雪玉集參照）

【參考】大日本史○野史○大海のはし○落栗物語○室町時代の一縉紳の生活（原勝郎）（日本中世史の研究）（齋藤（清））

實時（さねとき）　藏書家【姓名】北條氏。所領が武州金澤なるため、金澤とも稱す。又稱名寺とも號す。【生歿】建治二年（一九二六）十月二十三日歿。享年五十三（關東評定傳）【家系】實泰の子、執權義時の孫に當る。實時の子に實村、孫に顯時、曾孫に貞顯、玄孫に貞將がある。【閲歷】天福元年十歳にて元服、陸奥太郎實時といふ。同二年小侍所の別當となつたのを初めとして、近習結番、三番引付衆、評定衆、弓馬藝の奉行、三番引付頭、廂御所結番、二番引付頭、越訴奉行、一番引付頭を歷任し、その間、嘉禎四年掃部助に、建長七年越後守に任ぜられ、文永元年從五位上に叙せられた。建治元年五月所勞のため、領地武藏國久良岐郡金澤村六浦莊に籠居し、翌年そこで歿した。【人物・業績】彼は北條氏の一族として幼年より幕府の重職にあつたが、夙に學を好み、清原敎隆に師事して研鑽の功を積み、又書籍を愛して連年稀覯の書籍を繕寫校訂した。然るに文永七年十二月、緣倉の自邸は火災に罹つて折角蒐集した書籍を燒失した。併しこれに挽まず、再び繕寫校訂加點に努め、また當時舶來した宋本等の購藏を計つたが、金澤引退の後も典籍の蒐集を止めなかつた。金澤文庫の創立者をこの實時とするのが普通であるが、實時の子孫、顯時・貞顯等によつて金澤家の藏儲益々增加し、稱名寺内に保管せられて、金澤氏滅亡後も亡びず、後世に傳へられた。（金澤文庫參照）

【參考】右文故事附錄（近藤正齊）○金澤文庫と足利學校（平泉澄）（中世に於ける精神生活）（植松）

實朝（さねとも）　歌人【姓】源【幼名】千幡（せんまん）【家系】父は頼朝、母は政子、兄は頼家【生歿】貴客の前生は宋朝育王山長老であり、自分はその長老の門弟であるといつた。實朝も同樣の夢を見てゐたので、大に好奇心を起し、一つには自分の前生住んでゐたところを見、一つには海外旅行を試みようと考へ、人々の反對を顧みず、陳和卿に命じて唐船を修造させた。翌年四月船は出來たが、由比ケ濱では進水し得られなかつたので、渡宋は實現しなかつた。建保六年六月、鶴ケ岡に左大將の拜賀を行つたが、裝束調度輿車などすべて後鳥羽院から下し賜つたものであつた。十二月二日右大臣に任じ、翌承久元年正月二十七日亥、雪を冒して鶴ケ岡に拜たので實朝は非常に悅んだ。承元三年七月夢想によつて和歌二十首を住吉神社に奉納し、併せて建永元年以來の作歌三十首を定家に送つて合點を乞うた。翌月定家から合點して返進し、別に「近代秀歌」（別項）を贈つた。彼は靈感によつて作歌に專念するに至つたのである。承元四年聖德太子の御影を供養し、その後も二三度行つた。建曆元年十月鴨長明が鎌倉に下つてゐたので度々これを召された。この活潑的現實的な發剌氣を味ひ、文化の發れてゐる鎌倉にあつて京都の文化に渴仰し、これを吸收して固有の武士氣質と調和させた。その時代は平安朝文化の行詰りが、政治的社會的變化に伴つて打開せらるべき機運にあつたので、彼の思想の中には時代的に見て新しいものがある。彼は自我をはつきり意識すると同時に他人の人格をよく理解してをり、天子將軍人民、國家社會といふ全體的な考も相當にもつてゐた。即ち近代的精神の萌芽を彼の思想の内に見ることができる。彼の生涯は僅

れに繞まず、再び續宮校訂加點に努め、また當時舶來した宋本等の購藏を計つたが、金澤引退の後も典籍の蒐集を止めなかつた。金澤文庫の創立者をこの實時とするのが普通であるが、實時の子孫、顯時・貞顯等によつて金澤家の藏儲益々增加し、稱名寺内に保管せられて、金澤氏滅亡後も亡びず、後世に傳へられた。（金澤文庫參照）

【參考】右文故事附錄近藤正齋○金澤文庫と足利學校平泉澄（中世に於ける精神生活）

實朝（さねとも）

〔植松〕

歌人【姓】源【幼名】千幡（せんまん）

【家系】父は頼朝、母は政子、兄は頼家【生歿】建久三年八月九日、名越の濱御所に生れ、承久元年（一八七九）正月二十七日、甥公曉に弑される。享年二十八【墓所】「吾妻鏡」に依れば、鎌倉勝長壽院にあるべきであるが、今は壽福寺にその墓と稱するものがある。【閲歷】建仁三年八月、將軍頼家が大患に罹つたので、天下を二分して長子一幡と舍弟千幡とに與へようとの沙汰があつた。一幡の外戚比企能員は憤怨して亂を起したが、失敗に終つて千幡即ち實朝が將軍となり、九月七日に宣下があつた。元久元年十二月坊門黄門信清の女が御臺所として下着した。初めは足利滿兼の女と定められてゐたのを京都から迎へた一事を見ても、實朝が京都の文化に憧憬してゐたことが分る。元久二年四月始めて十二首の歌を作つた。九月京都からは未だ竟宴も行はれない「新古今集」が屆いた。二月中將の拜賀を鶴ケ岡に行つた。鎌倉に育つた武士として京都の文化形式を悦んだのである。五月文殊供養を行ひ、一生の内に五十回續ける祈願を立てた。承元二年五月御臺所の侍兵衞尉清綱が京都より下着して、基俊筆と稱する「古今集」を奉つたので實朝は非常に悦んだ。承元三年七月夢想によつて和歌二十首を住吉神社に奉納し、併せて建永元年以來の作歌三十首を定家に送つて合點を乞うた。翌月定家から合點して返進し、別に「近代秀歌」（別項）を贈つた。彼は靈感によつて作歌に專念するに至つたのである。承元四年聖德太子の御影を供養し、その後も二三度行つた。建曆元年十月鴨長明が鎌倉に下つてゐたので度々これを召された。この時、長明は「方丈記」に見えるやうな無常觀を說いたと想像する說もあるが、信じられない。建保元年五月、和田義盛の亂があり、幕府方も苦戰し、實朝は戰捷を鶴ケ岡に祈るといふ程であつたから、彼の受けた精神的影響も可なり大きかつたと思はれる。十一月定家に「萬葉集」を求めて相傳の私本を得、大に悦んだ。建保四年六月豫て東大寺の大佛を修理してゐた宋人陳和卿が下着し、實朝に謁して

源實朝木像（京都大通寺藏）

貴客の前生は宋朝育王山長老であり、自分はその長老の門弟であるといつた。實朝も同樣の夢を見てゐたので、大に好奇心を起し、一つには自分の前生住んでゐたところを見、一つには海外旅行を試みようと考へ、人々の反對を顧みず、陳和卿に命じて唐船を修造させた。翌年四月船は出來たが、由比ケ濱では進水し得られなかつたので、渡宋は實現しなかつた。建保六年六月、鶴ケ岡に左大將の拜賀を行つたが、裝束調度輿車などすべて後鳥羽院から下し賜つたものであつた。十二月二日右大臣に任じ、翌承久元年正月二十七日夜、雪を冒して鶴ケ岡に拜賀式を行つたが、退出に當り、石階の際で公曉のために害された。公曉は義時の使嗾に乘つて實朝を弑し、又自らも亡んだのであるとする說もあるが、容易に信ぜられない。

【作品】「金槐和歌集」（別項）がある。外に「夫木集」を初め、その他の歌集に、凡そ二十一首集外の歌がある。【人物・作風】實朝は感受性が强く、時としては我意を通してをり、ロマンテックな精神に富んでゐて、時には好奇心に驅られることもあつた。彼は京都の文化を憧憬し、京都文化の所產たる衣服調度繪畫等を無上に悦んだ。又夢を信じ物語を好んだ。京都から得た奧州十二年合戰繪の如きは、繪畫と物語の兩方面から彼を滿足させた。又古代を慕ひ英雄を崇拜し、外國趣味を悦んだ。當時鎌倉には榮西がゐて實朝に接近してゐたが、なほ彼の思想的背景となつてゐるものは天台止觀である。彼は武士の間に育つたので活動的現實的な雰圍氣を味ひ、文化の發れてゐる鎌倉にあつて京都の文化に湯仰し、これを吸收して固有の武士氣質と調和させた。その時代は平安朝文化の行詰りが、政治的社會的變化に伴つて打開せらるべき機運にあつたので、彼の思想の中には時代的に見て新しいものがある。彼は自我をはつきり意識すると同時に他人の人格をよく理解してをり、天子將軍人民、國家社會といふ全體的な考も相當にもつてゐた。即ち近代的精神の萌芽を彼の思想の内に見ることができる。彼の生涯は僅か二十八年であるが、十八歲・二十二歲を轉機として、凡そ三つに分けて彼の精神生活を考へる事ができる。第一期は少年らしいロマンテックな時代で、驚きと悦びに滿たされてゐる。作歌に於ては「新古今集」を粉本とした時代である。第二期は第一期の花やかさがやゝ澁滯し、繪畫・物語・英雄を悦び、古代趣味を呈し、「古今集」を粉本として作歌した時代である。第三期は著しく流動的になり外國趣味を加へ、「萬葉集」を粉本として作歌した時代である。彼のもつてゐた新鮮な感受性と情熱

實朝筆蹟

的な力はこゝに至つて發揮せられ、多くの萬葉ぶりの傑作を後代に遺したのである。天もし彼に今少しく齡を假したなら、更に歌境の發展を見るに至つたであらう。題材に就いて自由であるが如く、用語に於ても、佛語・漢語等を自由に使ひこなしてゐる點は、注目すべきである。【影響】彼が萬葉調の歌を詠み、現に「萬葉集」一部をもつてゐたことは賴經を動かし、親行をして「萬葉集」を校訂させることになり、それが仙覺に及ぶことになつた。また宗尊親王が「萬葉集」殊に東歌を本歌としたことは實朝の影響であらう。（金槐集參照）

【參考】吾妻鏡○金槐集研究齋藤茂吉（日本文學講座）○源實朝同上（改造昭和三ノ一）○名殘の星月夜　坪内雄藏　〔西下〕

實熙（さねひろ）　有職家　【姓名】洞院氏。本姓は藤原。初名は實博、法號元鏡　【生歿】應永十六年（一四〇六九）生る。歿年未詳　【閲歴】内大臣滿季の子。左中將・權中納言・權大納言・右大將・左大將を歴任して、文安三年正月内大臣に任ぜられたが、寶德二年五月辭し、尋いで又享德三年七月右大臣となり、康正元年八月左大臣に轉じ、長祿元年四月致仕し、六月五日四十九歳で出家した。實熙は有名な公賢の後裔で、家傳の文書を受け、能く朝儀に熟してゐたので、洞院家又その人に乏しからずとの評が高かつた。致仕後東山に閑居したので、世の人に東山左府と呼ばれた。【著書】名目鈔○拾芥抄（各別項）○行類抄等。　〔石村〕

實盛物語（さねもりものがたり）「源平布引瀧」を見よ。

實賴（さねより）　歌人　【姓】藤原　【別稱】小野宮殿　【生歿】昌泰三年に生れ、天祿元年（一六三〇）五月薨ず。享年七十一。岩屋公と號す。

【家系】忠平の長子、師輔の兄、母は宇多天皇の皇女、敦敏・賴忠・齊敏等の父。【閲歴】朱雀・村上・冷泉の三天皇に仕へ、承平元年三十二歳の時參議、同四年中納言從三位となり、更に大納言、右大臣を歴任して從一位太政大臣に陞り、攝政關白に任じた。康保四年村上天皇崩御、冷泉天皇御即位に當り、御病氣のために大極殿に出御になるのが困難だつたので、大禮を紫宸殿に行ふやう建議した。天祿元年、病むに及んで天下に大赦を行ひ、薨ずるに及び、正一位を賜はつた。邸の南庭からは稻荷山の森が見えるので、南庭に下りる時は常に冠をつけ、時に忘れることがあると、袖で頭を覆うたといふほど謹嚴であつた。又藤原忠文は出征したのみで戰はなかつたのだから、賞するに及ばないと主張する潔癖でもあつたが、一面には果物を門前に積んで兒童に自由に食はせ、自ら垣の内にあつてその談ずるところを聞いて世態人情を知らうとした程、くだけた所もあつた。天德四年内裏の歌合には自ら判者となつた。長子敦敏の早逝に會ひ、その悲しみを詠んだ作が「後撰集」に出てゐる。【著作】水心記○清愼公集一卷（内閣文庫・圖書寮等に寫本がある）。勅撰集に入る歌は後撰集十首、拾遺集九首、新古今集以下凡そ十六首、合計凡そ三十五首である。

【批評】「後撰集」に入つた歌が當時の歌人として弟師輔に次いで多い。梨壺の五人は前時代の歌人の作は遠慮なく採つてゐるが、當時の歌人のは、撰者自らのをさへ殆ど入れない位であつたのに、ただ師輔・實賴を筆頭としてゐるのは、微官の彼等が權門の前には何等の見識を出し得なかつたからであらう。併し實賴に歌才がないといふのではない。生活氣分を讀んだ歌に相當よいのがある。ただ師輔に比すれば單純で深みがないといふのである。

【參考】大鏡○公卿補任○尊卑分脈○大日本史一三五　〔西下〕

佐野川市松（さのがはいちまつ）　俳優　【初名】甚之助　【家號】新萬屋、俳號盛府　【生歿】享保七年に生れ、寶曆十二年（一七四二）十二月五日歿す。享年四十一。【法名】盛府院普聞日信　【墓所】谷中瑞輪寺塔頭玄妙院　【閲歴】伏見に生れ、父は武士だつたといふ。京四條南側芝居の出方甚藏に養はれ、女方佐野川萬菊の門に入つて始めて市松といひ、若衆方を專門にした。寛保元年春、中村座へ下り、「高野山心中」の小姓粂之助をつとめ、石疊模樣の袴を着けたのが、市中の流行となつて、これを市松染と云つた。延享元年、京都へ歸つたが、その冬、再び江戸へ下り、寶曆の中頃から女方をも兼ね、その方では世話物が得意だつた。　〔伊原〕

佐野報義錄（さのはうぎろく）　讀本　五編二十六册　【作者】知足館松旭　【畫工】知足館松旭・千錦亭富雪。【名稱】詳しくは「繪本佐野報義錄」。佐野鹿十郎が恩義に報ゆる仇討話なるによる。【刊行】文久元年　【諸本】「實傳小說」（大正六年米山堂刊）第四・五編に「佐野義勇傳」と改稱し、僅かに修正を加へてこれを收めてゐる。

【梗概】九州の菊池肥後守武胤の四老職の一人、佐野清安に主水・鹿十郎といふ二人の子があつた。弟鹿十郎は武藝に熟達して家中に稱讃されてゐたが、四老職の一人、奥村元房の子臺藏に憎まれ、その奸計に陷つて病を得、狂亂の果て家出する。偶々四國阿州の香川右京大夫顯元の極秘臺浮田近時に剛けられ、鹿藏と改名してその家僕となる。然るに浮田家の繁榮を妬む同家中の指南役大館義廉は、香川家の寶劍を盜み罪を正晴の長子爲十郎に歸して死罪とするが、爲十郎は辛うじて身を以て免かれ、密かに寶劍の探索に國を出る。而も亦義廉は正晴を誹謗して失脚させ、遂に暗打にして出奔する。そこで正晴の次男民助は仇討の免許を請ひ、銘刀志津三郎を拜受し、鹿藏を伴つて敵討に出で、大和路で義廉と逢つたが、義廉の從弟柾河三左衞門に計られて取逃し、且つその奸計によつて投獄される。併し名奉行鵜飼因幡の明斷により却つて感賞され、その紹介で阿州の淡路屋佐兵衞を賴つて行く。ところが民助は旅に病んで、天王寺の森の非人の群に入り、寒氣のために躄となつて義廉のために狙はれて殺される。一方鹿藏は、尾州岩倉山城府に出で、劍道指南の小戸田彌兵衞の客となり、道場破りの武者修業者象潟昇之助を懲し、尾州公に聞えて出仕を勸められるが、志を述べて辭退し、それより秋葉山へ赴き、盜賊十三人を捕へて郡代に渡したり、廢寺の妖怪、實は嘗て情死した者の亡靈を供養して村民を安堵させたりした。又大井川のほとりで、計らず義廉に謀殺されようとし、その武勇によつて事なくすんだが、破傷風を病み、年を越して信州へ向ひ、十文字峠で山賊數十人を塵にし、その小頭柾河三左衞門を討ち、奥州會津の豪家松浦山左衞門の妻卷絹、女滋子主從及び多くの婦女を救ひ、滋子に緣慕されて、松浦主從の懇請により將來を約することになる。然るに郡内に入つて破傷風再發、酒屋藏六の家に保養中、藏六夫婦が甥の博奕打治太郎に殺害された事件に嫌疑を受けて獄に下り、中文字峠の大之進のため

に罪に陷れられんとするが、武田求馬の明察によつて大之進は切腹、治太郎は死刑に處せられ、鹿藏は許されて鎌倉に赴き、豫て聞き及ぶ駿慶安の道場を訪うて武術を現はし、慶安が一味に加へようとするを辭して、武州に入り埴生郡成田不動の緣日に果し合ひの助太刀をしたり、象潟昇之助に邂逅して武術を指南したりして奥州に上つたが、寒氣のために道に行き倒れ、銘刀志津三郎や衣類等を賊に奪はれて苦しんでゐる所を、綿屋久兵衞といふ律義者に援けられ手厚い看病を受ける。そこで會津の松浦山左衞門へ書を送り、金を借りて久兵衞の恩に報ゆ、松浦家に引き渡され、

佐橋富三郎（さばしとみさぶらう）　脚本作者　【生歿】生年未詳。明治二十六年一月十四日歿。享年は五十前後。【墓所】東京築地本願寺内淨泉寺　【閲歴】生國は名古屋。彼は幕末上方で草雙紙を綴つたこともあつたが、明治初期には京阪歌舞伎劇界に、立作者として活躍してゐた。五年には京都南北兩側の芝居に、自作西國立志篇の一部「鞋補童致學」（南）と「其彩色陶器交易」（北）といふ飜譯劇を上演してゐる。この兩座の競演は明治演劇史上特記すべき事と稱せられる。殊に後者は後日榎本虎彦作「名工柿右衞門」（別項）の粉本と同一種物の脚色、鹽原の通し狂言「貴族金春馬史稱」（二十一年十月）がある。その他「新形時繪護謨櫛」（二十一年七月、繪入新聞の續物）、「遲櫻榛名の梅香」（二十二年四月、やまと新聞連載の圓朝物）等の新聞物や圓朝物があり、珍奇なものとしては、前述の「當世書生氣質」（別項）や、末松謙澄の「谷間姫百合」（別項）等が數へられる。特に「書生氣質」は土地柄だけに歡迎された。

【參考】南座堂本寒星○續々歌舞伎年代記○歌舞伎新報（一四三八）　〔尾澤〕

寂（さび）「蕉風」を見よ。

寂栞（さびしをり）「俳諧寂栞」を見よ。

寂蓮（さびれん）　歌人　【姓名】藤原定家の母の兄弟。俗名は藤原定長。【生歿】生年未詳。建久二年頃に歿。享年は七十餘歳。【閲歴】俊成の養子となり、出家して寂蓮と號した。後鳥羽院の和歌所の寄人となり、新古今集の撰者の一人となつたが、その完成を見ずして歿した。【著作】寂蓮法師集（別項）○寂蓮法師百首○寂蓮法師歌合○寂蓮法師結藻集○寂蓮法師宮内卿歌合○寂蓮法師家集○寂蓮法師集

に歸に陷れられんとするが、武田求馬の明察によつて大之進は切腹、治太郎は死刑に處せられ、鹿藏は許されて鎌倉に赴き、豫て聞き及ぶ駿慶安の道場を訪うて武術を現はし、慶安が一味に加へようとするを辭して、武州に入り埴生郡成田不動の緣日に果し合ひの助太刀をしたり、象潟昇之助に邂逅して武術を指南したりして奥州に上つたが、寒氣のために道に行き倒れ、銘刀志津三郎や衣類等を賊に奪はれて苦しんでゐる所を、綿屋久兵衞といふ律義者に援けられ手厚い看病を受ける。そこで會津の松浦山左衞門へ書を送り、金を借りて久兵衞の恩に報い、松浦家に引き渡されて、志津三郎をも買ひ取ることを得、又領主蘆名連高の狩に從ひ、雷獸をしとめて召抱へられようとするを辭して上野に向ひ、更に近江長濱に出て、圖らずも爲十郎と會し共に旅を續けた。或は馬方を戒めたり、或は莊官を懲したりして福井の城下に到り、斯波家の師範役星名彈正を大館義廉と知り、老臣譽田雅樂之助に訴へて仇討を許され、義廉を討つて仇を報い、寶劍を取り返す。かくて爲十郎は歸國し、鹿藏は尾州・奥州・阿州・越前・肥後の諸家が召し抱へようと爭ふのを、檢使大坪新助の裁きで佐野家に歸り、菊池侯及び母兄にも對面し、暫くの暇を請うて各地に恩義を受けた人々の許を廻禮し、滋子と結婚して目出たく歸國する。

【構想】恩義に報ゆる仇討話を骨子とし、佐野鹿十郎の武勇を武者修業記風に叙して、筋の複雜を計り興味を持たせようとした。しかしそれが却つて主題の上には力弱いものとなつて、讀本末期の興味に墮した行き方を示してゐる。〔笹野〕

佐橋富三郎　脚本作者　【生歿】生年未詳。明治二十六年一月十四日歿。享年は五十前後。【墓所】東京築地本願寺内淨泉寺【閲歷】生國は名古屋。彼は幕末上方で草雙紙を綴つたこともあつたが、明治初期には京阪歌舞伎劇界に、立作者として活躍してゐた。五年には京都南北兩側の芝居に、自作西國立志篇の一部「鞋補童致學」(南)と「其彩色陶器交易」(北)といふ飜譯劇を上演してゐる。この兩座の競演は明治演劇史上特記すべき事と稱せられる。殊に後者は後日榎本虎彦作「名工柿右衞門」(別項)の粉本と同一種のもので、佐橋の代表作になつてゐる。八年頃には大阪中の芝居・角の芝居等に出勤し、尾上多見藏・市川右團次に附人として活動してゐる。十三年頃何か惡い評判を立てられた事があるらしい。東京春木座へ上つたのは明治十八年鳥熊芝居と同道したものか、或は鳥熊引退後の十九年・二十年頃であるか未詳である。が併し二十年四月には、市川九藏一座のために坪内逍遙原作の「當世花書生氣質」を脚色してゐる。爾後彼は座主溝口權三郎の下に立作者として、九藏・家橘・駒之助・芝鶴・猿之助等、東京・大阪の俳優と共に二十六年一月まで同座に立籠つてゐた。兩國回向院の相撲見物中に倒れ、その日の中に本郷元町の自宅で死去した。妻は品川の引手茶屋(岡田か)の娘であつたといふ。【作風】新聞の續物、圓朝の語りもの、或は帳元坂野久次郎氏の座談等を巧妙に脚色して、その要領の好さが重寶がられてゐたもので、脚本作者としては餘り優れてゐなかつたといふのが定評である。また彼は奥役をも兼任してゐたと傳へられる。代表作としては、前述の「其彩色陶器交易」と圓朝物の脚色、鹽原の通し狂言「[illegible]」(二十一年十月)がある。その他「新形[illegible]」(二十一年七月、繪入新聞の續物)、「遲櫻榛名の梅香」(二十二年四月、やまと新聞連載の圓朝物)等の新聞物や圓朝物があり、珍奇なものとしては、前述の「當世書生氣質」(別項)や、末松謙澄の「谷間姫百合」(別項)等が數へられる。特に「書生氣質」は土地柄だけに歡迎された。【參考】南座堂本寒星○續々歌舞伎年代記○歌舞伎新報(一四三八)　〔尾澤〕

寂　「蕉風」を見よ。

寂栞　「俳諧寂栞」を見よ。

寂しき曙　詩集　一册　【著者】三木露風　【刊行】明治四十三年　【解說】本詩集の作風は同じ著者の「廢園」(別項)に比すれば、より瞑想的に、また觀念的に、官能と思想との混融を示し、內省的な靈の靜かな落着を示し來つた作風となつて來た。そこに見るものは薄暮の諧調で、「廢園」を日光の眩しき初夏、或は秋晴の爽やかさに比べると、これは初冬の曇り日、雪解の響きを聞く春の初めのやうな明るき中の陰影と冷たさとを看取する。裝幀及びエキスリブリスは川路柳虹の筆に成る。　〔川路〕

左方　「雅樂」を見よ。

佐保川　歌集　二卷一册　【著者】鵜殿餘野子　【名稱】卷頭歌「ふるさとのさほの川水ながれての世にもかくこそ月はすみけれ」より出てゐる。【諸本】山田常典や伴直方の古寫本が遺つてゐるのみで、古刊本は無い。女流文學全集第四卷・近代諸家集第一卷(國歌大系)所收。【內容】上下兩卷に分れ、別に部立は立つてゐない。三百七十餘首の短歌(この中には、贈答歌として他人の作も交つてゐる)と、八首の長歌を合む。餘野子は、筑波子・倭文子と共に賀茂眞淵に師事し、鵜門三才女の一に數へられた。暫く紀伊侯に仕へてゐたので、「きよい子」と云ふやうな異名もついてゐる。その兄は南郭門の漢詩人であつた關係で、餘野子は漢詩をも作つた。その歌集は、「佐保川」以外に「涼月遺草」(涼月は作者晩年の號)がある。

【作風】歌は、可なり多方面に亙つてゐる。「佐保川」に就いて見ても、上卷と下卷とは、甚だ格調を異にしてゐる。前者は大體三代集調であるが、後者には著しく萬葉風が加味されてゐる。しかし餘野子の特色は、その下卷の方に著しいと思ふ。上卷にも頓呼法や字餘りを見せ、自由な表象を求めてゐる意嚮は仄見えるが、なほ型に篏つたところがある。同じ上卷の中でも、先師の一周忌に詠んだ次の歌の如きは純然たる萬葉調と云つてよい。

おきつ波きよるありそのこなたなる山の岩根しまける君かも

その際詠んだ長歌も、女流の作としては注目すべき秀逸である。下卷の大半は、「萬葉集」に見える相聞風の歌で、同集の影響が顯著である。

門ちかきいさゝむら竹な刈りそねせこがたなれの駒なづくがに

の如く線が太く格調の高い點は、筑波子の優美纖麗な歌風と全く異つてゐる。　〔齋藤(清)〕

佐保山　「神事物の謠曲」を見よ。

左舞右舞　「舞樂」を見よ。

三味線　樂器　【名稱】三絃を張つてこれを鳴らすより三絃又は三線といひ、琉球に於て、三線をサミセンと發音するより我が國でその發音を移して、三味線の字を當て

嵌めたと稱せられる。俗に「しやみせん」といふ。異名に三線・三尾線・三絃・三絃子・絃子等がある。【性質】絃樂器の一。廣く東洋各地に行はれ、各國に依つて皆多少その形狀及び構造を異にする。その中で支那の三絃及び琉球の三線(共に蛇皮を張る故、俗に蛇皮線といふ)、我が國の三味線は最も多く人に知られてゐる。

【我が國の三味線】その形は第一圖に示す如く、大體に於て胴と棹と天神との三部から成つてをり、胴は音を出す部分で、曲線方形の箱形になり、直徑五六寸位、厚さ三寸餘。四方は欅・桑・花李等で作り、表及び裏に猫皮を張り(廉價の品は犬皮を張る)、表には乳のある方を用ひる。なほ表皮の上部、撥の當る所に撥皮と稱して半月形の薄い皮を張る。棹は指で絃の各部(ところといふ)を抑へて種々の律を持つた音を出すために加減する所で、胴から張り渡した三本の絃がその上面に沿うて平行し、上部の天神まで通つてゐる。その上部の天神は三個の糸卷(轉手ともいふ)を備へ、三本の絃の端を卷き付けてある。糸卷の挿入された部分を糸藏といひ、それより上部即ち上端の廣い部分を海老尾といひ、糸藏と棹との間の少し擴がつた部分を乳袋といふ。乳袋の上端に絃が糸藏から出て棹に平行にならうとする部分に象牙製の小さな駒がある。これを上駒といふ。これは二と三との糸だけを支へる所の短い棒である。棹と天神とは一つの材料で作られ、棹の下端は細い棒として胴を貫き、その先端は胴の下に少し突出してゐる。その下端に突き出した部分を猿尾といふ。棹及び天神は櫻・桜・紫檀・紅木等で作り、紅木を以て最上とする。長さは上駒から鳩胸の所まで凡そ二尺六分程ある。その太さは流派に依つて異り、義太夫節に用ひるものは最も太く、これを太棹と呼び、長唄の如きは細くてこれを細棹と呼ぶ。細きものは幅七八分位、太きものは一寸内外である。絃の下端は猿尾に掛けた所の根緒と稱するものに結び付ける。絃は精良な蠶糸を燃つて作つたもので、三本共その太さが異り、最も太いのを一の糸、中間を二の糸、最も細いのを三の糸と呼び、一の糸は向つて左の端、三の糸は右の端に張る。但し太棹に於ては一般に比較的太いものを用ひ、細いものを用ひる。その糸の太さを示すには、その一定長の目方を以て呼ぶ。例へば十二の糸と言へば百掛で十二匁の目方の糸で、それの百分の一である一掛が一本の絃を輪にしたもので、この一掛の絃を中央から切り、その半分を以て三味線に張るのである。駒の大きさも流義に依つて異り、太棹では大きくて高いものを、細棹では小さくて低いのを用ひる。その高さは三分乃至四分位。安いものは竹(黑漆塗)で作り、高値のものは象牙で作る。撥は桜・櫻・黃楊・水牛・象牙等を以て作られるが、象牙を以て最上とする。なほ演奏に當り、胴の上に右手首を載せる時、手首が滑らぬやうにするために、胴のその部分の側面に胴掛と稱するものを用ひる。これは厚紙の上に布を張つたもので作り、胴の側面に被せるのである。三味線を奏するには、正坐して右膝の上に胴を載せ、皮面は正面に向け、棹は四十五度位の角度に斜に持ち、天神は肩又は耳と平行する位に上げ、左手の指(食指・中指・無名指を用ひる)で勘所を押へ、右手に撥を持つて、撥皮の部分に當る位にして撥の角で絃を打つて彈ずる。また時として絃を撥ですくつて彈ずることもある。これを「すくひ」といふ。時として撥を用ひずに、駒から一寸位上に於て、絃を食指の爪で彈いて奏することも行はれる(例、江戸小唄の如き)。これを爪彈といふ。左手指は絃の各部を勘所に於て抑へるのみの働をなす許りでなく、時として指頭で強く絃を打つて音を出し(これを「打ち」といふ)、又指で絃をはじいて音を出す(これを「はじき」といふ)こともある。三味線の調律は極めて普通には三種あり、本調子・二上り及び三下りである。この外一下り・六下り等の調子が用ひられる。今一の糸・二の糸、及び三の糸の間の各音の音程を示すと次のやうになつてゐる。

音程	一と二との間	二と三との間
本調子	完全四度	完全五度
二上り	完全五度	完全四度
三下り	完全四度	完全四度
一下り	完全五度	完全五度
六下り	完全四度	長二度

三味線に於てはその各絃音の絶對の高さは固定されてゐないで、幾分自由に變化することが出來る。その際これを調子笛に合せて、一本・二本……等といふ。これは一の糸をとつてその音を調子笛に合せ、一本は黃鐘に、二本は鸞鏡に、以下順に十二律の順になり、六本は壹越になる。近來三味線の旋律を洋式五線譜を假り用ひて記すに當り、かくの如き自由變化をも一々その絶對音の高さで記載することは不便であるから、一種の便法を用ひて、その各絃の開放音を第二圖に示すが如くに記すことが行はれてゐる。

三味線は、語り物及び唄物に於ては、歌の伴奏として用ひられる外に、又その中間に於て特に歌なくて樂器の演奏のみを聞かすためにも用ひられ、これを「合の手」といひ、又歌の出る前に樂器だけを聞かすためにも用ひられ、これを前彈といふ。又特に歌なくして三味線だけ、或は箏・尺八等と合奏する曲がある。換言すれば器樂獨奏としても、器樂合奏としても、或は聲樂伴奏としても用ひられる。若し特殊な場合に於て、普通の手法以外に複雜な技巧を用ひて奏する時は、これを曲彈といふ。

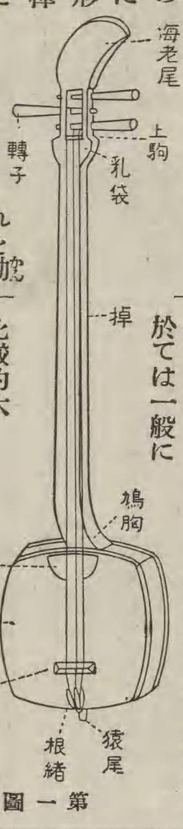
【支那の三絃】支那の三絃は一に絃子と呼び、廣く行はれてゐる。その形は我が國の三味線と似てゐるが、全體が少し大きい。但しこれに二種類あつて、南方から北平・天津邊までは胴の小形のものが行はれ、滿洲邊では大形のものが行はれてゐる。大形のものの胴は我が義太夫三味線位あり、小形のものの胴は我が三味線よりも少し小さく且つ胴が多い。海老尾の形も少しく異なつてゐる(第三圖)。その各部の名稱を圖に示す。皮は蛇皮を張り、駒は竹製で小さい。これを彈ずるには右手の食指と拇指との爪を以てする。若し爪が伸びてゐない場合には、象牙又は牛角製の細長い爪形のものを、糸で爪の上に結び付けて用ひる。又これを彈ずる際は椅子に腰をかけ、兩股の間に胴を載せて彈奏する。その各絃の調律には平調・月調・反調の三種がある。

調子名	第一絃	第二絃	第三絃
平調	合	四	六
月調	合	凡	合

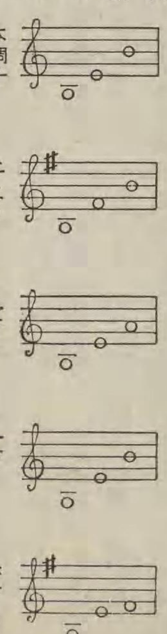
球では第一絃を男絃、第二絃を中絃、第三絃を女絃と呼ぶ。持ち方は我が三味線と全く同じい。但し左手指で勘所を押へるのに、小指まで凡て用ひるのが異つてゐる。撥は使用せず、その代り、第五圖に示す如き木製又は角製の義爪を用ひる。これを右手の食指にはめて拇指で抑へつゝその先端で絃を彈ずる。琉球三絃の調子は次の四種類ある。

調子名	第三絃	第二絃	第一絃
本調子	鸞鏡	斷金	鸞鏡
一揚ゲ調子	鸞鏡	斷金	壹越
二揚ゲ調子	鸞鏡	勝絕	鸞鏡

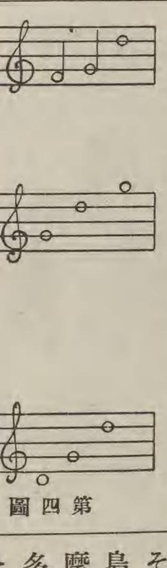
胴に羊皮を張り、それに長い棹が附いて、三絃の張つてあるもので、その奏法は三味線と同じである。これは西亞細亞から起つて埃及に入つたものであると、考古學者は説明してゐる。この器が波斯地方に入つて、羊皮を馬皮などに變へられたものも見られる。これがなほ東遷して印度地方に入つてから、全く蛇皮に變へられたやうである。蛇皮を用ひ始めといふ者が出て、大にこれを改良し、琉球歌謠の伴奏樂器として完成せしめた。玆に於て大體今日見る如き琉球三絃が現れた。但し今日の形は、今から二百餘年前に出た琉球の名匠眞壁の作つた型である。眞壁の作つた三絃は古今無比の優秀三絃として、今日に至る迄尊重されてゐる。赤犬子以後三絃は琉球に普及し、婦女子のこれを玩ぶ者が多くなつた。その後約百年を經て、我が慶長年間に薩摩の島津家は琉球征伐をなし、遂に琉球は我が薩摩の保護國となつたので、我が内地の音樂が多く輸入され、琉球音樂は大に内地化して來



第一圖



第二圖


第四圖

老尾の形も少しく異なつてゐる（第三圖）。その各部の名稱を圖に示す。皮は蛇皮を張り、駒は竹製で小さい。これを彈ずるには右手の食指と拇指との爪を以てする。若し爪が伸びてゐない場合には、象牙又は牛角製の細長い爪形のものを、糸で爪の上に結び付けて用ひる。又これを彈ずる際は椅子に腰をかけ、兩股の間に胴を載せて彈奏する。その各絃の調律には平調・月調・反調の三種がある。

調子名	第一絃	第二絃	第三絃
平調	合	四	六
月調	合	凡	合
反調	尺	合	尺

これを洋式五線譜を借りて記せば、第四圖の如くになる。このうち、平調は古曲及び時調に、月調は新曲に、反調は花柳の情歌に多く用ひられる。

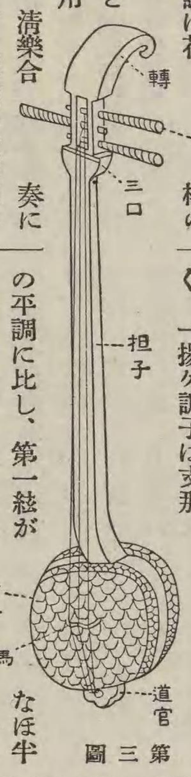
支那三絃も歌謠の伴奏と器樂合奏、器樂獨奏に用ひられ、劇場音樂にも、清樂合奏にも、廈門の御前清曲にも、又巷閭の太鼓詞の如きにも、藝妓の歌伴奏にも、凡て用ひられてゐる。

【琉球の三線】琉球の三線は、近來琉球では三味線と呼び、我が內地では蛇皮線又は蛇味線と呼んでゐる。その形は我が三味線と殆ど全く相同じく、唯それよりも非常に小さくて、約三分の二である。併し古いものは近來のものよりも大きい。皮は蛇皮を張る。蛇皮には主として海蛇を用ひるといふ。又轉手（糸卷）に絃をかける掛方は我が三味線と逆になつてゐて、一の絃を最下の轉手に、二の絃を中央の轉手に、三の絃を最上の轉手に掛ける。琉球では第一絃を男絃、第二絃を中絃、第三絃を女絃と呼ぶ。持ち方は我が三味線と全く同じい。但し左手指で勘所を押へるのに、小指まで凡て用ひるのが異つてゐる。撥は使用せず、その代り、第五圖に示す如き木製又は角製の義爪を用ひる。これを右手の食指にはめて拇指で抑へつゝその先端で絃を彈ずる。琉球三絃の調子は次の四種類ある。

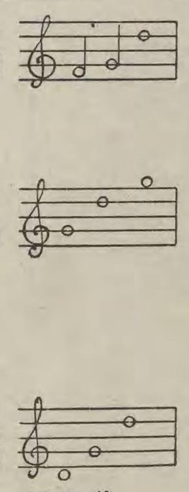
調子名	第三絃	第二絃	第一絃
本調子	鸞鏡	斷金	鸞鏡
一揚ゲ調子	鸞鏡	斷金	壹越
二揚ゲ調子	鸞鏡	勝絕	鸞鏡
三下ゲ調子	鳧鐘	斷金	鸞鏡

即ち本調子は我が本調子に、二揚ゲ調子は我が二上りに、三下ゲ調子は我が三下りに同じく、一揚ゲ調子は支那の平調に比し、第一絃が音高くなつてゐる。琉球なほ半に於ては主として歌謠の伴奏に用ひられる。又多くの樂器と合奏するにも用ひられる。その特に技巧的な奏法を草彈といひ、藝術家から賤しめられてゐる。

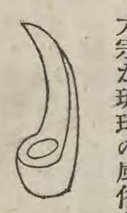
【沿革】今日三絃の行はれてゐる地方は、西は波斯に及び、東は日本に至り、その間の各地即ち南亞細亞及び東亞細亞のすべてに行はれてゐる。その形狀及び奏法は皆多少違つてゐるが、その變化の狀態を見るに、西から東に移つたことを明かにしてゐる。その最も原始的の形と見られるものは、古代埃及の墳墓から得られる所のネフエルの一種で、舟形の胴に羊皮を張り、それに長い棹が附いて、三絃の張つてあるもので、その奏法は三味線と同じである。これは西亞細亞から起つて埃及に入つたものであると、考古學者は說明してゐる。この器が波斯地方に入つて、羊皮を馬皮などに變へられたものも見られる。これがなほ東遷して印度地方に入つてから、全く蛇皮に變へられたやうである。蛇皮を用ひ始めたのは中世紀の初頃にあるらしく、唐の頃にはその名が既に支那に知られてゐて、支那の一部で行はれたこともあるやうであるが、これが支那に入つて國民的樂器となつたのは元の時である。四川省から揚子江を下つて、江蘇・浙江・福建あたりから擴まり始めたものらしい。明の時に至つて全國的に擴まり、各種の合奏に用ひられ、清朝になつて劇樂にも多く用ひられるやうになつて今日に至つた。琉球三絃は支那から傳へられたもので、その初めて琉球に入つたのは、西曆一三九二年、明の太宗が琉球の風俗を支那化するために閩人三十六姓を送つた時にあるやうである。當時はこの地方が支那三絃の中心地であつて、各戶悉く家庭に三絃を用ひてゐた。琉球に於ては初はこれを支那風に扱つてゐて、その形及び奏法とも大した工夫を施さなかつたが、その後百年を經て尙眞王の時に至り、琉球音樂の神と稱せられる赤犬子といふ者が出て、大にこれを改良し、琉球歌謠の伴奏樂器として完成せしめた。玆に於て大體今日見る如き琉球三絃が現れた。但し今日の形は、今から二百餘年前に出た琉球の名匠眞壁の作つた型である。眞壁の作つた三絃は古今無比の優秀三絃として、今日に至る迄尊重されてゐる。赤犬子以後三絃は琉球に普及し、婦女子のこれを玩ぶ者が多くなつた。その後約百年を經て、我が慶長年間に薩摩の島津家は琉球征伐をなし、遂に琉球は我が薩摩の保護國となつたので、我が內地の音樂が多く輸入され、琉球音樂は大に內地化して來たが、同時に國家の存立が危くされたので、悲調を帶び頹廢的になつて來た。その後五六十年を經て湛水といふ者が出て、この頹廢的氣分に憤慨して覇氣に滿ちた作曲をやつた。これを湛水流といふ。湛水より三代を經て聞覺といふ者が出て、三絃の形式的發展に力め、聞覺流を開いた。その弟子の屋嘉比朝寄は琉球三絃樂の中興の祖と稱せられる大家で、その流を當流といふ。今日琉球に最も廣く行はれてゐるのはこの當流である。屋嘉比から三傳して天才知念績高が出たが、この人は近代琉球三絃の第一の名手で、平民であつたが、尙溫王が一度その演奏を聞かれて、忽ちこれを士族として王宮の樂人となしたといふ。知念の弟子に安富祖正元と野村安趙との二人の天才がゐて、互に派をなし、遂に安富祖派と野村派との二つに分れ、互に對立して以て今日に至つてゐる。我が國の三味線は、足利時代の末年に琉球から傳へられたものである。その傳來に就いては多くの異說があるが、最も信ずべき所をとれば、永祿年間に琉球の貿易船が堺港に到り、初めて堺へこれを傳へた



第三圖



第四圖


第五圖

二上り	完全五度	完全四度
三下り	完全四度	完全四度
一下り	完全五度	完全五度
六下り	完全四度	長二度

三味線に於てはその各絃音の絕對の高さは固定されてゐないで、幾分自由に變化すること

ものであるらしい。石村檢校が琉球に行つてこれを持ち歸つたといふ說の如きは信ずるに足らぬ。始めてこれを手にしたのは堺の仲小路と稱する法師であるといふ說が多く世に信ぜられてゐるが、一說には仲小路は地名であつて人名ではないと稱せられる。要するに初めは何者か無名の人の手に入り、轉々して琵琶法師の手に入つたものらしい。その法師の中には有名な石村檢校もあつて、これに改良を加へ、遂に蛇皮を猫皮に代へ、又琵琶の撥を用ひてこれを彈じ、以て今日見る如き三味線となすに至つたものと思はれる。尤も江戸時代の初期に古近江と呼ばれる名匠が出て、三味線製作の上に多大なる工夫が施されてから、全く今日の形となつた。この古近江の製品は我が國三味線の古今無比の逸品として尊重されてゐる。石村檢校は織豐時代の人で、始めて琉球組と稱する組歌を作り、三味線を伴奏として用ひ、以て三味線の手法を定めた。その後その弟子虎澤檢校と共に、その手法を應用して本手組と稱する多くの組歌を發表した。虎澤檢校は、又その弟子柳川檢校等と共に、その手法を技巧的に發展せしめ、破手組と稱する多くの組歌を作つた。柳川檢校は江戸時代初期の大家であつて、當時の小唄類にも多く三味線を用ひ、後の小唄及び長唄發達の基を作つた。これ等の法師達が作つた三味線唄は主として關西に行はれ、これを地唄と呼び、今日に至るまで柳川流として地唄三味線の中心をなしてゐる。後に野川流といふものが起り、大阪に多く行はれた。又小唄の名手が江戸に行き、歌舞伎劇場に於て小唄を用ひるやうになり、それに伴つて三味線が劇場に於て用ひられ、遂に江戸長唄が發達せられたのである。これは杵屋喜三郎といふ者に始まり、杵屋六左衞門これを繼いで以て代々江戸長唄三味線の中心勢力をなしてゐる。この長唄は合の手を多く用ひ、技巧的手法が最も多く進歩するに至つた。我が三味線手法の進歩は最も多く長唄三味線に負うてゐると思はれる。殊に本手の外に替手を用ひ、また上調子を用ひ、複音的奏法にまで發達した。三味線がかく技巧的に發達する一方に於て、德川家康の頃澤住檢校等はこれを語り物なる淨瑠璃に用ひ、以て淨瑠璃三味線が發達した。尤も澤住檢校以前に於て既に語り物にこれを用ひてゐたが、それは單に地方的であつた。淨瑠璃（別項）は薩摩淨雲以後急速に發展し、各種の流派を作り、大阪の義太夫、京都の一中、江戸の河東・常磐津・富本・新內・淸元（各別項）等、皆悉く三味線手法に就いて獨特の研究をなし、かくして聲樂に對する伴奏的用法は異常なる發達をなした。今日に於ては、三味線は我が國民的樂器として、最も廣く且つ深い勢力を持つてゐる。

〔田邊〕

五月雨草紙（さみだれざうし）　隨筆　一卷　【著者】喜多村直寬【諸本】寫本で傳はつてゐたのを明治四十五年國書刊行會の「新燕石十種」第二册に編入刊行された。【解說】著者は德川幕府の醫官で、文化元年の末に生れ、幕府末期の世變を實見した人である。その幼時から視聽した江戸の俗事を記して、慶應四年（明治元年）五月、上野の戰爭直後までに及んだのが本書である。約九十條を收めてゐる中に、古今米價の變遷、その他諸物價の事、上野兵火前の諸堂、同山下邊の飲食店、山王神田以下諸社の祭禮、兩國の花火、芝居類見世、大名諸侯の行列、八百屋の料理、芝居の流行、針醫杉山檢校・多紀安元・喜多村槐園・儒家佐藤一齋・安積艮齋・寺門靜軒等の逸話や、中野石翁の橫暴奢侈の噂などが面白く錄されてある。卷尾に慶應四年戊辰七月小石川大塚で記した由の跋語があり、卷首に著者の弟栗本鋤雲の序がある。

〔和田〕

鞘當（さやあて）　「浮世柄比翼稻妻」を見よ。

亮々遺稿（さやさやゐかう）　歌文集　三卷　【作者】木下幸文（たかふみ）【刊行】文化五年【諸本】近世名家家集上卷（續日本歌學全書）・近代諸家集第四（國歌大系）所收。又校註和歌叢書の近代名家歌選には、貧窮百首を收む。【解說】千種有功の序文がある。亮々遺稿類題と題し、春・夏・秋・冬・戀・雜・畫賛の七部の外、組題百首・貧窮百首を附し、別に、長歌の部・文章の部がある。就中文化四年の大晦日より翌五年正月三日にかけて詠じた貧窮百首は、集中の異色ある連作であり、眞情流露せる傑作として名高い。【歌風】桂園派の長所を最もよく發揮して、感情の自然を以て勝れてゐるが、時として平弱の弊に陷つた歌もある。又萬葉の影響をも受けて、貧窮百首の如き淸新な題材をも詠んでゐる。その作例を次に示す。

遠く行く人をおくりてやすらへば堤の柳うち霞みつゝ
大丈夫のをのこさびすと打あげて泣かぬ心ぞまこと悲しき

〔佐佐木〕

さやゝ草紙（さやゝざうし）　隨筆　三卷　【著者】木下幸文【刊行】文政三年【解說】同年著者の自序中に、「年ごろ古書よむ片手にしるしおける事、ふる歌の考めきたる事、また月花のをり〳〵の事など、何くれかい捨つるほどもの云々」とあつて、「三卷ばかりの隨筆めくもの」となつた由に記してある。卷一に四大人の論以下二十四條、卷二に三山歌以下二十三條、卷三に櫛のあか一條を收む。歌詞・古言の考證、歌論、歌人の紹介、その他を雜集し、中にも卷三の櫛のあか一篇は、本居宣長の著「玉の小櫛」を批評した堂々たる論文で、鈴の屋の歌論を痛擊してゐる。又卷一の「榮花物語總論」二篇なども一見識ある所論である。

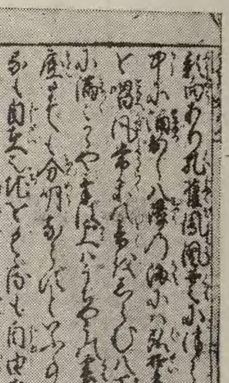
〔和田〕

座右書（ざいしよ）　故實　十四册　【著者】伊勢貞丈【成立】安永七年六月二十七日【解說】凡例に、室町將軍の時、伊勢家は將軍殿中の禮法を掌り、小笠原家は將軍弓馬の師範として仕へ、兩家互にその家の流を聞き糺し合つたので、小笠原家の古傳も多く伊勢家に傳はつてゐるが、その古傳書及びその門弟の人々の聞書の古書どもから書き拔いたのがこの書であることを記してある。同じく凡例に、「是れ常に座の傍に置てみるべきものなれば、座右書と名付る也。」とある。武藝の故實、即ち弓矢・射・的・箙・引目・鎧・馬等に就いて記したものである。

〔石村〕

小夜嵐（さよあらし）　浮世草子　十册　【作者】未詳。卷末に「西鶴書」とあれど、僞署であることは疑なからう。【名稱】題簽には「小夜嵐物語」とある。【刊行】元祿十一年【諸本】德川文藝類聚第三遍歷小說所收。【梗概】釋迦の二千五百年忌に當つて、無佛世界預彌國地獄の主閻魔大王は、その追善のために、二月八日より同月二十二日まで十五日間大赦を行うて、地獄に落ちた衆生のうち源平の將士達が會合して、年頃苛責の苦患を語り、この無念を散ぜんと、御義家・朝光・頼政・俊成・義經・朝

朝・義經・本持坊・重盛・教經・知盛等各々軍を集め、閻魔の城を攻めて地獄を滅さうと相談を定めた。そこで寸鐵なくては戰ふべくもないので、多くの夜盜、力者を集めて地獄の釜の蓋を盜み來らしめ、これを以て武器を造らせ、次いで、畜生道より多くの軍馬を曳き來らせた。かくて部署を定めて閻魔王の城を攻め、火を掛けてこれを攻略した。大王は那須與市の矢に中つて傷つき、部下と共に王宮を落ち、三途川を渡つて敵の追擊を避けた。源平の諸將卒はこの大河にも屈せず、多數の舟大工を集めて多



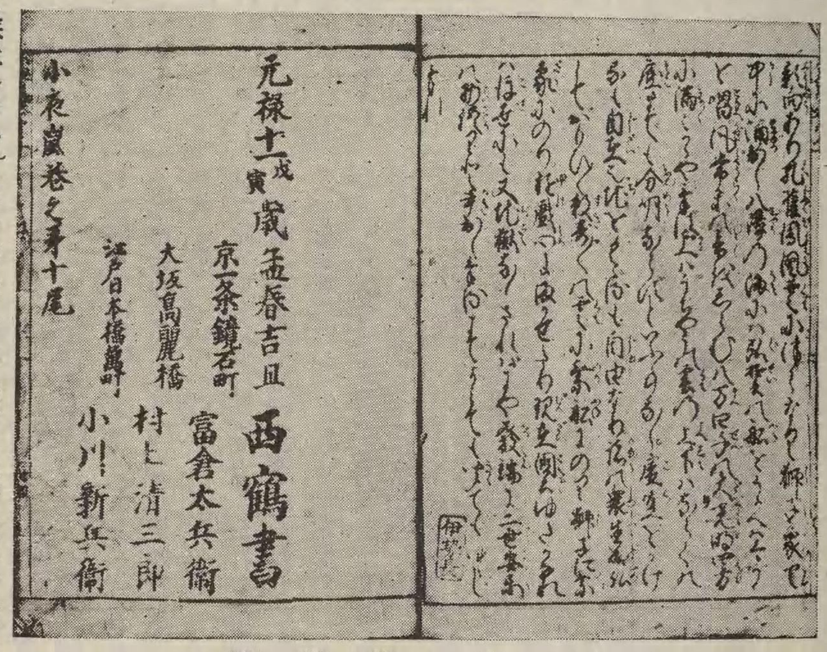
に依つて有名ではあるが、さして文學的價値のある作ではない。【影響】地獄巡りの趣向は江戸文藝中に數々ある。その起原は明かでないが、「西鶴冥途物語」（別項）と本書とはその最も古いものであらう。なほ同趣向の作に「寬闊鎧引」（別項）（後、新小夜嵐と改題）、「續小夜嵐」（二卷、作者未詳、正德年間刊か。德川文藝類聚いふ物語である。

〔藤村〕

小夜衣（さよごろも）　物語　三卷三册　【作者】未詳【別名】異本堤中納言物語【名稱】小夜衣は、兵部卿宮と山里の姫君の贈答の歌に「心にもあらずへだつる小夜衣かさねし袖のかわくまぞなき」「小夜衣うつればかはるならひとて憂き身にしらる袖の涙を」とあるのから出てゐる。「異本堤中納言」の方は、この名を題した諸本が、すべて「小夜衣」では按察大納言とあるのを堤中納言にしてゐる所から來てゐるらしい。この二つの題名、及び「異本堤中納言物語」と「堤中納言物語」の關係については、なほ確說がない。【成立】宮內省圖書寮藏本で、これを傳立として通ひ給ひ、やがて深く契をこめられた。然るに院は宮の夜毎の御歩きを心苦しく思されて、關白の妹姫君を强ひて配はせられた。この關白は三條院の御弟で冷泉院とも近い間柄で、姉君は弘徽殿の女御となつてゐる。兵部卿宮は心のまゝにならぬを嘆き、文ばかりは常に通はせられたが、世の聞え、又周圍の事に氣を置かれて山里へは暫く途絕えられた。さりとて又關白の方へも繁くは通はれずに、ひたすら嘆きに沈まれ、出家遁世の志を起される。按察大納言は娘を入內させようとして忙しい頃、彼の山里を訪ね

朝・義朝・平清盛・重盛・教経・知盛等各々軍を集め、閻魔の城を攻めて地獄を滅さうと相談を定めた。そこで寸鐵なくては戰ふべくもないので、多くの夜盜、力者を集めて地獄の釜の蓋を盜み來らしめ、これを以て武器を造らせ、次いで、畜生道より多くの軍馬を曳き來らせた。かくて部署を定めて閻魔王の城を攻め、火を掛けてこれを攻略した。大王は那須與市の矢に中つて傷つき、部下と共に王宮を落ち、三途川を渡つて敵の追擊を避けた。源平の諸將卒はこの大河にも屈せず、多數の舟大工を集めて多くの船を造り、川を渡つて攻め寄せたので、大王は劍の山に逃げ込んだ。けれども源平の諸將は又鑄物師を多數集めて劍の山の劍を韋嚢を以て鎔かして、ことをも攻略した。大王は愈々窮して極樂に訴へた。極樂にては釋迦・彌陀の二尊が相議して、大王にも過失あれどこれを赦すべしとて九惡寺に居らしめる事とした。源平の勇士達は、なほ惡虎・惡龍・化鳥を初めとして樣々の惡鬼惡獸の類を滅ぼした。かくて地獄亡びて極樂愈々榮えることとなつた。以上は一度死して蘇生した人の物語つた所である。

【解説】冥途物語の形にして、通俗的に佛教の信仰を弘布せんと期して作られたもので、到る處に經文等の中から引き來つた説話や説教がある。のみならず、和歌や諸藝等に關する作者の博識を並べた所もある。西鶴の名あるに依つて有名ではあるが、さして文學的價値のある作ではない。【影響】地獄巡りの趣向は江戸文藝中に數々ある。その起原は明かでないが、「西鶴冥途物語」(別項)と本書とはその最も古いものであらう。なほ同趣向の作に「寛濶鎧引」(別項)(後、新小夜嵐と改題)、「續小夜嵐」(二卷、作者未詳、正德年間刊か。德川文藝類聚第三所收)がある。後者は上卷八話、下卷四話より成る。「小夜嵐」を摸して、地獄極樂の確執より閻魔王は城郭を構へ、第六天の魔王閻魔王に味方をすれば、佛菩薩、甲冑を帶して追討の兵を擧げ、觀音地藏、先陣を爭ふなどのことあつて、閻魔王は遂に生捕られて出家となり、三千世界盡く佛界に統一せられたと



小夜嵐（附）

さや〳〵草紙 さやさうし 隨筆 三卷

【著者】木下幸文 【刊行】文政三年 【解説】同年著者の自序中に、「年ごろ古書よむ片手にしるしおける事、ふる歌の考めきたる事、また月花のをり〳〵の事など、何くれかい捨つるほどに、ものの云々」とあつて、「三卷ばかりのいふ物語である。

小夜衣 さよころも 物語 三卷三册

【作者】未詳 【別名】異本堤中納言物語 【名稱】小夜衣は、兵部卿宮と山里の姫君の贈答の歌に「心にもあらずへだつる小夜衣かさねし袖のかわくまぞなき」「小夜衣うつればかはるならひとて憂き身にしらる袖の涙を」とあるのから出てゐる。「異本堤中納言」の方は、この名を題した諸本が、すべて「小夜衣」では按察大納言とあるのを堤中納言にしてゐる所から來てゐるらしい。この二つの題名、及び「異本堤中納言物語」と「堤中納言物語」の關係については、なほ確説がない。【成立】宮内省圖書寮藏本の奥書に「此一册大納言爲明以本令校合畢 貞治三甲辰年二月日」とあるに依つて鎌倉の末に既に存した事が知られる。併しそれ以前の文獻「無名草紙」「色葉集」「風葉集」にも見えないから、鎌倉時代中期以後の作とすべきであらう。【諸本】宮内省圖書寮・無窮會文庫・神戸第一高等女學校等の藏本は「異本堤中納言」の題を附してゐる。この外、圖書寮藏の「小夜衣」の題のある一本、帝國圖書館本・李花亭文庫藏本があり、藤井紫影・石田元季二氏等の藏本がある。又昭和三年に龍谷大學から發行されたのが刊本としての最初である。

【梗概】〔上の卷〕時の帝の御兄冷泉院に御子二人あり、一人は今の中宮。御弟は兵部卿宮といつて御歳十八ばかり、美しさは並ぶ者なく、學藝に優れたので、院並に母大宮の御寵愛は一方でない。按察大納言(一本堤中納言)の本妻腹の姫君も美しいが、傍腹の子で今は山里の祖母尼君の許にゐる姫君は、世に類ひない程の美しさである事を聞かれ、この姫君の異父姉である宰相の君が宮仕へをしてゐるので、これを仲立として通ひ給ひ、やがて深く契をこめられた。然るに院は宮の夜毎の御歩きを心苦しく思されて、關白の妹姫君を强ひて配はせられた。この關白は三條院の御弟で冷泉院とも近い間柄で、姉君は弘徽殿の女御となつてゐる。兵部卿宮は心のまゝにならぬを嘆き、文ばかりは常に通はせられたが、世の聞え、又周圍の事に氣を置かれて山里へは暫く途絶えられた。さりとて又關白の方へも繁くは通はれずに、ひたすら嘆きに沈まれ、出家遁世の志を起される。按察大納言は娘を入内させようとして忙しい頃、彼の山里を訪ねて、姫君の頼りなげなのを見て、これを引取る事にする。尼君も宮の間遠いのを心許なく思つて同意する。宮はこの君の事のみ心にかかつて、別の近い所へ移さうとも思ひながら周圍を憚つて居られる。姫君の引取られる事が近づく頃、久し振りに訪れたが、女君は憂ひに沈むのみで、遂にその事を打ちあけない。〔中の卷〕北の方は山里の姫君を見て、これを自分の娘の母代として添へて入内させる。山里の君は、梅壺に入つて對の君と云ふ。帝は梅壺に通ひ給ふ折、この對の君の優れて美しいのを見給ひ、それよりは晝も通ひ給うて、時々仰せ言があるが對の君はつれなくのみもてなす。宮は自分に告げず父の許へ去つた姫君の心變りを恨まれ、やがて對の君こそ、その人であると知つたけれど、近づく折とてもない。然るに北の方は、對の君の噂を聞いて安からず思ひ、乳母の子の民部丞に言ひつけて、山里の尼君の病氣と欺き、對の君を連れ出してその家に押し籠めさす。大納言、山里の尼君など手を盡して姫君の行方を求めるが知れない。宮は愈々世をはかなみ、内に籠つ

てうち嘆くばかりである。帝はもし宮が取られたのでないかと疑はれたが、その樣子も無いので明暮れ對の君の事をのみ偲び給うた。〔下の卷〕民部丞の妻は、對の君の美しいのを見て痛はしく思ひ懇ろに仕へる。然るに民部丞は、この君を見て戀心を起し、妻を追ひ出さうとする。關白の姫君は宮のつれなさを怨み嘆いてゐたが、遂に病となり空しくなる。民部丞の妻は、或る時對の君と物語の序に、宰相の君の許なる中務の姪である事がわかり、いかにもして逃がし參らせようと決心して、姫君の文を宰相の君に屆ける。それによつて大納言は方違へと稱して民部丞の家へ行き、偶然見付けた態にして姫君を伴ひ山里に預ける。北の方は惡事露はれて、昔棲んでゐた四條の家に籠る。民部丞もやがて法師になる。梅壺には今は帝の御通ひも絶えて、わびしげに暮してゐる。さて兵部卿宮は、宰相の君から山里の姫君の戻つた事を聞き、今は强ひて連れ歸られる。大納言はこの事を聞き嬉しく思はれる。帝は對の君が行方不明になつてからは御心も亂れがちでおはしたが、遂に降りさせられて嵯峨にゐます。東宮御位に立ち、兵部卿宮は春宮と定まる。姫君との御仲らひ睦じく、院大宮も喜びおはします。梅壺はやがて出でられる。民部丞の妻は東宮御息所に參り仕ふ。東宮には若宮が生れられた。新帝は即位の後程なく御病あり、遂に御讓位あつて東宮御踐祚、御息所は中宮となる。かくて御子も多く御代益々榮え、大納言はやがて關白を讓られ、その一族は榮えた。

【構想】繼子いぢめが說話の中心をなして、この種の構成法はつてゐる。この種の特長として、一種に種種の事件を盛り込むこと。繼子いぢめ

めにしても「落窪物語」（別項）のやうな辛辣な描寫は無く、又同じく姫君を盜み出させるにしても、民部丞にこれを與へるとは約してゐない。又後の報復も殊更に手段を考へることなく、自然のなすが儘に任せてある點は「住吉物語」（別項）に近いが、一層道德的である。又對の君が帝の御意に從はず、遂に兵部卿宮と契を全うするのも、倫理的意識によるのであらう。併し宗教的色彩は明かでない。僅に兵部卿宮が常に出家遁世を思はれた點に、それを認め得られるばかりである。冒頭が普通の物語と違つて、「いつの年とはいひ乍ら、日を經て降りつゝ、五月雨ひまなくして」と或る場面の叙述から出てゐるのは、特異な點であるが、これは既に「狹衣物語」（別項）に先例がある。又末尾に、「かまへて人の爲には情ある事と見えたり。腹黑からん心持ちたる人は、末までも此の世も後の世もいかでよかるべき云云」と敎訓的の言葉を添へたのは、「住吉」等と同じくこの時代の特徵である。〔小木〕

【參考】異本堤中納言物語 清水泰 ○堤中納言物語 藤田德太郎（日本文學講座）○異本堤中納言と小夜衣 後藤丹治（國語と國文學五ノ五）○異本堤中納言物語 清水泰（書物の趣味一號）

小夜時雨（さよしぐれ）　語學書　一卷一册【著者】萩原廣道【刊行】嘉永二年。秋元安民の序。自序及び鈴木高輌の跋（嘉永元年六月）がある。【內容】本居宣長の「玉霰」（別項）にならつて、正雅な詞を用ひ、俗意俗語を斥けるために作つたもので、勅撰集の詞は「玉葉」「風雅」の二集を除いては、特に退けるべき點はないが、家々の集、特に「夫木集」「散木集」等には、古への風と異なつて感心せぬ點がある。又元來、萬葉風の歌を詠む者が多いが、その中に、「萬葉」の言葉遣を十分知らずに詠んだ歌には誤りも亦少くない。これ等の點について世人に警告するために、この書を著したのである。本文は大人、をしへ子、名を呼ぶ、號の下に名をかく、古語をまじふる、傍題・落題・片題、虛字・實字、類題集、俗情・俗語、軍記・謠・淨瑠璃の語、歌の書きざま、造語、歌合の判、俳諧の心詞、せしとしし、たい松にさす、涙におく、月にさゆる、その他約九十項について、正しい語義・用法等を說いてゐる。なほ附錄として、「辨玉霰論評五條」「辨玉あられ論脫漏」の二項を收めてゐる。これは「玉霰」（別項）の批評として注意すべきものである。

【備考】井上文雄の「伊勢のいへづと」（二卷。第一卷は安政六年刊。第二卷は文久二年刊）の中に、本書に對する批評がある。併せ見るべきものである。〔龜田〕

小夜中山石言遺響（さよのなかやませきげんゐきやう）「石言遺響」を見よ。

小夜寢覺（さよのねざめ）　隨筆【著者】一條兼良【名稱】終りに、「小夜のねざめに思ひのこさぬふしぶしを曉の燈のかすかなる閨におきゐてかきつけ侍るなり」とある所から「小夜寢覺」と題されたのである。【成立】本文の中に「老のあらましにはし侍る」とあつて老年に成つたものであらう。文明年中成るか。【諸本】群書類從（正）及び國文大觀所收【內容】最初には文學的美的方面を記して支那では春を愛し、日本人は昔から秋に心を寄せたとし、「源氏物語」その他の文學作品を例證してゐる。さうして作家や作品に就いても種々記して居り、仙覺が「萬葉集」の點を加へたこと、光行が「水百首」「五十番歌合」を作つたこと、俊成・定家・爲家等の「萬葉集」を重んじたこと、更に歌合の判や連歌に關しても說いてゐる。文學的記述の次には兼良の人生批評とも言ふべき見解をのべてゐる。人間の善惡は天下の人の見る所によつて定まるのであつて、一二の人の批評によつては容易に定められないとし、忠臣が讒にあふのも一二の言に從ふためであるとしてゐる。また人間は恩を知るべきであり、更に道を重んずべきであるとする。次に慈鎭の「愚管抄」を引いて道理を尊重すべきを說き、弓矢とる人は殊に約を守るべきであるとする。終りによき人として聖人を擧げ、賢人君子はこれにつぐとする。その他種々の方面にわたつて、君が世を治め、人が世に處すべき道をのべてゐるのである。【價値】本書は隨筆ではあるが、文學者であり政治家でもあつた兼良が、豐富な知識と鋭い人生觀とを說いたのであるから言々聞くべきものが多い。さうして支那の聖人の道を說くことの多い點に、兼良が儒敎的影響も相當に受けたことを示してゐる。（兼良參照）〔久松〕

さよひめ　御伽草子　三卷【作者】未詳【名稱】女主人公の名を題號としたもの。そして命名の由來は、姫が長谷觀音の申子で「乃ち御名をば御夢想のじせつに準へてさ夜姫御前とぞ申ける」とあるに明かであるが、兩親を松浦長者夫妻とする以上、さよ姫の名も、萬葉以前から知られた領巾振山傳說の松浦佐用比賣に基くものと推測し得る。【成立】不明。謠曲「隅田川」「松浦物狂」（及び或は「池贄」）等以後の作であることは言へよう。「法妙童子」（別項）も刊行は寬文に入つてからであるが、寫本が早くあつたかも知れないから、

時習考（じしうかう）　歌書集　【名稱】詳しくは歌曲時習考【刊行】文政年中【解說】上方歌を輯めたもの。所收歌四百七十餘首。後とれに修訂を施し、新に二百十餘首を加へて、嘉永元年に大阪の積典堂で版行した。挿畫は松川半山、校訂は南郊翁、歌の題を假名書にし、その字數によつて部を分つた。二字の部に、ゆき・はなの類、三字の部に、しのぶ・よるべ等を入れて十二字の部に及んでゐる。而して目錄に作者と調者（作曲者）を記し、本文の題下に調子を記してある。世に流布する本には、まゝ嘉永三年南郊翁の校訂した八橋・生田・繼山・藤池四流の琴曲目錄とその唱歌とが

期以後の作として不都合はなからう。【諸本】京都帝國大學文學部藏寫本は、奈良繪入十行堅本で、金砂子雲形金泥草花模樣紺表紙の粘葉綴、舊霞亭文庫本は織物表紙である。內容はほぼ同じであるが詞章に異同がある。前者を「近古小說新纂」（初輯）に收めて刊行。「近古小說解題」には、「さよひめ　寫一本」として祖父延齡の「涉獵書目」の文を揭げ、次に「余未だこの書を見ず」と記してあるが、本書の一本たる事は疑ひなく、若しこれが本書の原本乃至古本であつたとすれば、素材・構想の上にも攻究すべき問題が增すこととなる。【題材】本地物（辨財天女の本地物語で、而も竹生島の祭

へて、さ夜姫と名付けて愛でうち、長者はふとした病から他界した。月日の經つ儘に家來も財も散り失せ、荒れた邸に母子は露の命を繫いでゐたが、長ずるに隨つて、姫の美しさは輝くばかりであつた。姫十六の時、父の十三回忌が來た。親の菩提を弔ふには身を賣つても營むと云ふ。姫は春日の明神にその由の祈願を籠め、歸途興福寺の上人の法談を聽聞して、愈々決心の臍を固めたが、折しも南大門の傍に高札あり、何心なく見ると、少女を一ば價を限らず買ふと云ふ。それは陸奧國安達郡の大池に棲む氏神の大蛇のため、每年美しい姫一人を贄にして八鄕八村の平安を祈る事あり、今度番に當つた里の同じ八つの大夫が

だ沈かれるばかりであつた。やがてその日になると、池の周りに棧敷を設けてざんざめく見物人、姫は形見を屆けようとの大夫の妻の言葉に、文書く手もたゆみがちに一通を認め、切り取つた鬢の毛を卷き納めてからその贄の席に送られ、今は覺悟して一心不亂に法華經五の卷を誦し念じてゐた。送りの人々も急ぎ池の岸邊に漕ぎ返り、影向いまかと固唾を呑んだが、大蛇は一向現はれるけしきなく、神怒と怖れた人々は先を爭つて逃げ歸つてしまつた。俄に一天搖き曇り雷電はためき、十丈ばかりの大蛇が現はれ近付き寄つて姫をば一呑にせんとした刹那、姫は騷がず高らかに事

明以後の作として不都合はなからう。【諸本】京都帝國大學文學部藏寫本は、奈良繪入十行堅本で、金砂子雲形金泥草花模樣紺表紙の粘葉綴、舊霞亭文庫本は織物表紙である。内容はほぼ同じであるが詞章に異同がある。前者を「近古小說新纂」（初輯）に收めて刊行。「近古小說解題」には、「さよひめ　寫一本」として祖父延齡の「渉獵書目」の文を揭げ、次に「余未だこの書を見ず」と記してあるが、本書の一本たる事は疑ひなく、若しこれが本書の原本乃至古本であつたとすれば、素材・構想の上にも攻究すべき問題が增すこととなる。【題材】本地物（辨財天女の本地物語で、而も竹生島の祭神に關する一傳說として語られ、大和國壺坂の觀世音の本地の說明が附隨せしめられてゐる）。說話の形態としては、孝行談式人身御供說話で、それに關聯して梅若型人買說話と、法力說話としての魔界得脫譚（龍女成佛傳說の系統を引く法華經禮讚說話）と、如意寶珠奇特說話とを含んでゐる。全體の色調から佛法物語で且つ孝德說話であると言ひ得る。宗教的要素と倫理的要素とが合體し、童話的寓話的成分を加へ、一方に地方的口碑と時代色とを强調してゐる。その母の愛子に離れた後、盲となつての狂氣は、また能樂・謠曲文學の狂女物の趣向である。女主人公の誕生は申子說話の形を取り、大蛇の素性に關しては挿話的に解說的に複雜な要素を含み、繼子傳說・人買傳說・人柱傳說・人蛇（怨念蛇生）傳說・九十九傳說等を凝集させてゐる。

【梗概】昔、大和國松浦谷壺坂の松浦長者は京極殿と呼ばれ、何不足の無い中に、唯一事子なきを歎き、夫婦連れ立つて長谷觀音に立願した結果、美しい姫を擧げ、夢想の時刻に準へて、さ夜姫と名付けて愛くうち、長者はふとした病から他界した。月日の經つ儘に家來も財も散り失せ、荒れた邸に母子は露の命を繋いでゐたが、長ずるに隨つて、姫の美しさは輝くばかりであつた。姫十六の時、父の十三回忌が來た。親の菩提を弔ふには身を賣つても營むと云ふ。姫は春日の明神にその由の祈願を籠め、歸途興福寺の上人の法談を聽聞して、愈々決心の臍を固めたが、折しも南大門の傍に高札あり、何心なく見ると、少女をば價を限らず買ふと云ふ。それは陸奥國安達郡の大池に棲む氏神の大蛇のため、毎年美しい姫一人を贄にして八鄕八村の平安を祈る事あり、今度番に當つた里の司こんかの大夫が一人娘を供へるに忍びず、遙々と代りの人を買ひに上洛したが、探しあぐねての高札とは知らず、姫は神の引合せと打喜び、今一度母上に暇申してと立ち歸つたが、大夫は春日明神のお告で京極殿へ尋ね行き五十兩を渡し、五日の猶豫を約して引上げた。持佛堂で念佛して居られた母上に、姫は門外で拾つたと、こんかの大夫から受取つた金子を差出し、本望の如く父のため盛大な法要を營んだ後、身賣の事を打明けたので、母は我を忘れて泣き口說く處へ、約束の日の時刻が迫つて、大夫は迎へに來たが、盡きぬ母子の歎きに立腹し、蹈み込んで引立て、縋り付く母を威し賺して立ち去つた。取殘された母は遂に狂亂し、眼も泣き潰して松浦物狂と童どもに囃される淺ましい身となつた。一方姫は、行手を急ぐ大夫に叱咤打擲されながら、慣れぬ旅路の苦しさに惱みつゝ、日數重ねて安達郡に到着すれば、嚴肅な潔齋の樣子に訝り尋ねて、初めて事情を知り、せめての便りを待つ母を思へば、たゞ泣かれるばかりであつた。やがてその日になると、池の周りに棧敷を設けてざんざめく見物人、姫は形見を屆けようとの大夫の妻の言葉に、文書く手もたゆみがちに一通を認め、切り取つた鬢の毛を卷き納めてからその贄の席に送られ、今は覺悟して一心不亂に法華經五の卷を誦し念じてゐた。送りの人々も急ぎ池の岸邊に漕ぎ返り、影向いまかと固唾を呑んだが、大蛇は一向現はれるけしきなく、神怒と怖れた人々は先を爭つて逃げ歸つてしまつた。俄に一天搔き曇り雷電はためき、十丈ばかりの大蛇が現はれ近付き寄つて姫をば一呑にせんとした刹那、姫は騷がず高らかに事の始終を語り聞かせ、なほ暫くの暇を乞うて、今一卷提婆品を讀み上げて、大蛇の頭に當てると、角も鰭もはら〳〵と落ちてしまつた。大蛇は御經の功力による成佛得脫を喜び、一度池に入り十七八の女房と變じ、自らはもと伊勢國二見浦の者、繼母に憎まれて迷ひ出で、人買に騙され、轉々として此處の栗原の十郎の許にあつたが、この池が川であつた昔、橋を架け惱んだ時、人柱の闔に當つた怨に蛇身と現じ、池の主となつて九百九十九年が間、隙なき三熱の苦しみを受ける筈を、いま救はれた布施物にと如意寶珠を捧げた上、生國へ送らうと約して姫を乘せ、水を潛つて猿澤の池にかづき上げた。狐狸の棲處と荒れ果てた我が家の有樣に驚いた姫は、路行く人に問ひ聞き、大路を狂ひ歩く母に出會ひ、彼の寶珠によつて狂氣も盲も癒し財寶も降らせ、その後、大和の國司と婚して子孫繁榮し、遂に近江國竹生島の辨財天女と現じた。彼の大蛇の本地は、壺坂の觀音であると云ふ。

【參考】近古小說新纂初輯（考說）　〔島津〕

時習考（ときならひかう）　歌曲集　【名稱】詳しくは歌曲時習考　【刊行】文政年中　【解說】上方歌を輯めたもの。所收歌四百七十餘首。後これに修訂を施し、新に二百十餘首を加へて、嘉永元年に大阪の積典堂で版行した。挿畫は松川半山、校訂は南郊翁、歌の題を假名書にし、その字數によつて部を分つた。二字の部に、ゆき・はなの類、三字の部に、しのぶ・よるべ等を入れて十二字の部に及んでゐる。而して目錄に作者と調者（作曲者）を記し、本文の題下に調子を記してある。世に流布する本には、まゝ嘉永三年南郊翁の校訂した八橋・生田・繼山・藤池四流の琴曲目錄とその唱歌とが合載されてゐる。上方歌の集としては、他に「絲の調」「鶴の聲」など網羅を期して編纂したものもあるが、集成はこの嘉永版の「增補改正本時習考」が第一である。　〔高野〕

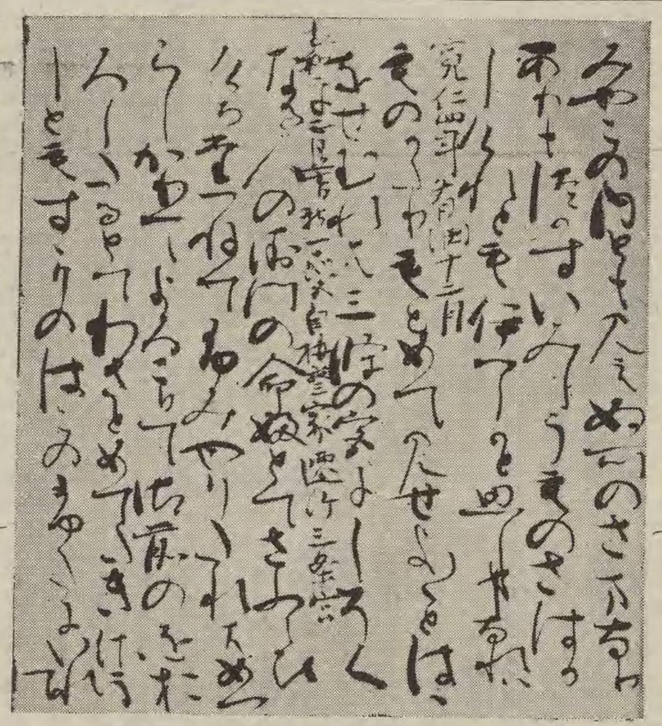
更科記（さらしなき）「悅目抄」を見よ。

さらしな紀行（さらしなきかう）　俳諧紀行　一册　【著者】松尾芭蕉　【名義】更科の里姨捨山の月見の記なるが故の題號　【成立】元祿元年冬　【刊行】寶永元年岱水の「木曾の谿」に收められたものが最初の出版であるが、これは初稿らしい。寶永五年刊「笈の小文」（別項）に附錄されたもの、寶政十一年、杉風の筆寫本を梅人が出版したものが、普通行はれてゐる。【諸本】百我の敷寫した芭蕉實筆本がある。芭蕉翁文集・芭蕉翁文集（風德編）・俳諧一葉集・俳諧袖珍鈔・芭蕉翁一代集・芭蕉全集（俳諧文庫）・芭蕉一代集（俳書大系）・芭蕉全集（沼波瓊音編）等所收。【解說】芳野紀行の旅の末に、須磨・明石を遊覽した芭蕉は京へ上り、近江・美濃・尾張を遍歷して、更科の月見に向つた。即ち元祿元年八月、芭蕉は越人や荷兮の奴僕を

連れて岐阜から木曾街道に入つた。途中六十餘の道心坊をいたはり、十五日に姨捨山の月見をした。十六日善光寺參詣。歸途「十六夜」「淺間」の吟がある。この月見の吟行を紀行として記したのである。芭蕉の紀行中では、「鹿島紀行」(別項)と共に小紀行に屬するが、筆致には變りはない。百我の眞筆數寫本は杉風本よりも句が多い。〔萩原〕

更級日記(さらしなにつき)　日記　一卷【作者】菅原孝標の女【名稱】古くは「さらしなのにき」と、「の」の字を附してよんだものであらう。「さらしな」の文字は、更科とも更級ともあてられるが、「更級」の方が今一般に用ひられる(明月記・御物本更級日記)。また別に、「更級記」とのみある本も傳はつてゐる。「さらしなのき」とよんだものであらう。この日記を「さらしな」と名づけた理由につき諸說がある。(一)作者の夫俊通の信濃守となつた事があるから、その故に名所の名を取つたのであらうとするもの。(二)夫俊通歿後、その甥が作者の許を訪ね來つた時、「月も出でで闇にくれたる姨捨に何とてこよひ尋ね來つらむ」と詠んだ事があるから、それに據つたのであらうとなすもの。(三)「月もいでで」の歌は「古今集」に、「我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」とある姨捨の故事をもととしたのであるから、作者の今の境遇をば、夫におくれて唯一人世に捨てられた「をばすて」に觀じ、且つ夫の任國信濃なる因みもあれば、かたがた更科とつけたのであらう。即ち「をばすての日記」と云ふべきを「をばすて」に緣のある「さらしな」に含めて、かく名づけたのであらうとなすものとの三說が主なるものである。

月三日、父の任國上總の國を出發した時のことに筆をおこし、後冷泉天皇の康平二年らしく思はれる頃の記事に終つてゐる。この日記は、その日その日に書かれたものでなくて、後にまとめて追記したものであるから、康平二年以後一二年の間の作と見るのが穩當であらう。【錯簡】この日記には、古來七ケ所の錯簡があつて、如何なる學者にも正しくは讀み下されなかつた。然るに大正十三年八月、佐



佐木信綱・玉井幸助兩氏が、帝室御物定家自筆本を調査の結果、錯簡七ケ所の生じた原因が、御本の綴ぢあやまりに在ることがわかつた。【諸本】この日記の現存傳本は、帝室御物即ち定家自筆本の系統のものである。主なる諸本は、宮內省圖書寮藏の御物本摸寫一帖で、定家自筆本を最も忠實に摸寫し、奥に「先年傳得此草子、件本爲人被盜失、仍以本書寫人本更書加之、傳本之間字句有異、不審事多付本」

若得證本者可見合之、爲見合時代勘付舊記等」と、自筆本と同樣の奥書がある。次に脇坂安元舊藏本(松井簡治博士藏)・彰考館藏本(扶桑拾葉集の底本)等は、御本を忠實に寫さうと努めたものである。南葵文庫には、齋藤彥麿舊藏本、伴直方舊藏本、太郎齋圓頓の奥書ある本、佐佐木信綱博士藏本、帝國圖書館藏本、宮內省圖書寮藏の一本等が玉井氏によつて紹介せられた。なほ私人の藏にかゝる數種の寫本が傳はつてゐるが、錯簡を有する定家本系統のものである。板本としては扶桑拾葉集所收本、元祿十七年版本、群書類從所收本、西門蘭溪校本等がある。日本文學全書・國文大觀・有朋堂文庫・國文叢書・日本文學大系・日本古典全集等所收。

「更級日記」(御物)
定家自筆本

【內容】後一條天皇の寬仁四年、作者十三の少女にて、父の任國上總を出發し、十二月二日京に着し、三條の宮の西なる處に落ちつく。治安元年、梅の花にそへて別れた繼母に歌を贈ること。侍從大納言行成の女の死を悲しむこと。をばなる人から「源氏物語」及びその他の物語を贈られ、几帳のかげで耽讀すること。治安二年五月の頃、怪しき猫出で來ること。七月七日、或る人の許へ、長恨歌の物語を借りにやること。翌三年四月の或る夜、火事があつて家が燒けること。萬壽元年五月一日、姉が產後に死したこと。翌年四月末、東山に詣で、終り京に歸ること。十月の末頃、東山の尼を訪ね、翌春再訪を約すること。同三年三月十餘日、尼より來訪を促す歌が來ること。萬壽四年より長元四年まで五ケ年間、年代について考ふべき記事が見えない。長元五年父の任國定まり、七月十三日、父、その任國常陸に下ること。八月頃太秦に詣で、父の無事歸京せんことを祈ること。長元六年から同八年まで、三ケ年間、たしかに年月の分つた記事が見えない。長元九年(?)父は歸京して西山に居り、十月頃京に移ること。長曆元・二の兩年には、明確に年月の見える記事がない。長曆三年、中宮嫄子の崩後、祐子內親王家に出仕すること。長久元・二年、さしたる記事はない。長久三年四月、內裏に參り內侍所を拜む。十月一日頃、關白賴通の高倉殿で不斷經がある。その夜、右大辨源資通と春秋の趣について語り合ふこと。翌年八月、宮の御供で內裏に參つた際、資通に會つて歌をよむこと。寬德元年の頃、橘俊通に嫁し、翌二年仲俊を生んだやうに思はれる。永承元年十月二十五日、大嘗會御禊の日、初瀨詣でを思ひ立つて京を出で、二十七日初瀨寺に着き、三日參籠し歸途ならさかの近くの怪しい家に宿ること。永承二年から天喜四年の頃まで八ケ年間、年月のはつきりと分つた記事が見えない。この間に石山に籠り、再び初瀨に詣で、西山の花を見、太秦に籠つた事があつたらしい。天喜五年八月二十七日、夫は任國に下り、仲俊も共に下つたこと。康平元年四月、夫は任國より歸り、十月五日病のために死去したこと。この後、甥が訪ねて來て、「月もいでで」の歌を詠んだのは、親二年の事であらうか。時に作者五十二歲であるとこれがはじまりとして

いてある。【價値】「更級日記」には、夢と幻とが纏りに描かれてゐる。日記中にはすべて十一の夢の記事が見える。その中作者の見た夢は九つある。これ等の夢は、いづれも作者の情緒生活を本質的に指導したものである。この浪漫的な精神は、紫式部の理想主義的な精神の發展したものと解すべきである。即ち紫式部の漠然とした美の先驗的解釋には安住が出來ず、無意識的な「もの」を、はつきりと具象的に認識しようとする心持や、實生活を夢幻にまで引き上げようとする努力が認められる。この意識が、「更級日記」の本質的なもの

晒女・お蔭が怪力を現はす件である。【諸本】長唄正本。常磐津節正本。日本歌謠集成卷九・歌謠音曲集(日本名著全集)等所收。

【解說】琵琶湖のほとり、近江のお兼(十代市川團十郎)は洗濯に來て、驅け出して來る荒馬の手綱を踏まへて止める。それより相撲の手事の振、力持ちからクドキになり、中途より盆踊の所作を見せ、終りに布晒し(別項)の振になる。唄は盆踊の件が眼目で、晒しになつてからは、越後獅子(別項)と大同小異であるが、寧ろ三味線の持ち場である。乙姫・浦島・景淸・冷水賣・節季候・心猿・石橋と組合せて、

た彼が隆盛時代の記念である。〔日夏〕

去嫌(さらひ)「指合」(さしあひ)を見よ。

蓑笠雨談(さりふだん)　隨筆　三卷【著者】瀧澤解(馬琴)【刊行】享和三年、永樂屋・河內屋・蔦屋版【解說】享和二年著者京阪に遊行して見聞した奇事等を錄した隨筆で、その年既に別著「羇旅漫錄」を出版したが、更に同書の中で殊に興味ある二十章ばかりを抄して加筆したものである。卷一に富士の農男井淺間の辯以下八項、卷二に吉野が傳井蟹の盃の圖說以下六項、卷三に俳諧師鬼貫が傳同道引以下六項を收め、多く圖畫を加へてゐる。烟花

成するまでは、淸雅な歌舞・物眞似が主流をなしてゐたといひ得よう。

【沿革】〔奈良期〕唐の散樂(別項)は奈良朝に輸入されて、朝廷の保護をも受けてゐたもので、これが猿樂の源流であらうと思ふ。併し我が國の古代から滑稽を旨とした戲は存在して居り、これが散樂の影響を受けて猿樂となつたものらしい。〔平安期〕奈良朝、唐散樂の輸入せられた當初は外來の定型を破つて、「曲はのこりて歌は絕え」(雜祕別錄)、「無舞」(體源抄)、「おもひ〳〵のわざをする」(龍鳴抄)やうにな

いてある。【價値】「更級日記」には、夢と幻とが頻りに描かれてゐる。日記中にはすべて十一の夢の記事が見える。その中作者の見た夢は九つある。これ等の夢は、いづれも作者の情緒生活を本質的に指導したものである。この浪漫的な精神は、紫式部の理想主義的な精神の發展したものと解すべきである。即ち紫式部の漠然とした美の先驗的解釋には安住が出來ず、無意識的な「もの」を、はつきりと具象的に認識しようとする心持や、實生活を夢幻にまで引き上げようとする努力が認められる。この意識が、「更級日記」の本質的なものであると同時に、又獨特の文學的價値でもあらうと思ふ。

【參考】更科日記西門鷗溪校○校註更科日記佐佐木信綱○更科日記講義大塚彦太郎○改訂更科日記略解關根正直○更級日記錯簡考玉井幸助○更級日記新註同上○更級日記評釋宮田和一郎　〔池田〕

晒女（さらしめ）　所作事　變化物　【本名題】ことし流行と御ひゐきのア、つがもないおすゝめに　閨玆姿八景（ねやのたまくしすがたはつけい）【別名】晒女の落鴈。近江のおかれ。【初演】文化十年六月二十日初日、江戸森田座「尾上松緑洗濯話（をのへしようろくせんたくばなし）」第二番目大切〔作詞〕二代櫻田治助〔曲節〕常磐津節と長唄との掛合〔太夫〕二代常磐津小文字太夫（後の三代文字太夫）〔立唄〕芳村孝次郎〔作曲〕常磐津は、三代岸澤古式部。長唄は四代杵屋六三郎（後の六翁）〔振附〕藤間勘十郎【傳來】曲は長唄のみ傳存。振も殘つてゐる。【題材】「古今著聞集」などに見えた近江の大力女の傳說に據つたものであらうが、直接本曲の原據となつたものは享保十三年五月、大阪竹本座上場の竹田出雲・長谷川千四合作「白髮實盛・黑髮實盛」加賀國篠原合戰」第二段、晒女お兼が怪力を現はす件である。【諸本】長唄正本。常磐津節正本。日本歌謠集成卷九・歌謠音曲集（日本名著全集）等所收。

【解說】琵琶湖のほとり、近江のお兼（六代市川團十郎）は洗濯に來て、驅け出して來る荒馬の手綱を踏まへて止める。それより相撲の手事の振、力持ちからクドキになり、中途より盆踊の所作を見せ、終りに布晒し（別項）の振になる。唄は盆踊の件が眼目で、晒しになつてからは、滅後獅子（別項）と大同小異であるが、寧ろ三味線の持ち場である。乙姫・浦島・景清・冷水賣・節季候・小猿・石橋と組合せて、近江八景に准へた市川團十郎八變化所作事の一。

沙羅の木（さらのき）　詩歌集　【著者】森鷗外　〔渥美・秋葉〕

【刊行】大正四年九月、阿蘭陀書房【內容】譯詩・沙羅の木・我百首の三部から成り、譯詩は獨逸抒情詩デエメル、クラブンド、モルゲンステルンを初めに、ビョルンソンの散文の改作と、グルックのオペラの逐音譯とショッテリウスの「アテネ人の歌」とを收め、「沙羅の木」には、「明星」後期に揭げた試作を收め、「我百首」には短歌が集められた。【批評】デエメルの譯詩は純然たる自由な口語體で、これは後の口語自由詩體に少からず感化を與へ、その派の詩人を勢ひづけたエポックメイキングの意義ある藥味であつた。「沙羅の木」その他の市井調は寫生詩であつて、文語を中心として口語も挿まれたものも見える。詩材を街頭に求めよといふ要求に卒然と應じたかの如くに習作せられた數篇で、淸新はあつたが、このまゝでスタイルは固まらなかつた。「我百首」は雜誌「アララギ」と「明星」（各別項）とを接近せしめる目的で、双方の作者を觀潮樓に請じた彼が陸奥時代の記念である。〔日夏〕

去嫌（さらひ）「指合（さしあひ）」を見よ。

蕉笠雨談（さりふうだん）　隨筆　三卷　【著者】瀧澤解（馬琴）【刊行】享和三年、永樂屋・河內屋・蔦屋版【解說】享和二年著者京阪に遊行して見聞した奇事等を錄した隨筆で、その年既に別著「羇旅漫錄」を出版したが、更に同書の中で殊に興味ある二十章ばかりを抄して加筆したものである。卷一に富士の農男幷淺間の辯以下八項、卷二に吉野が傳幷蟹の盃の圖說以下六項を收め、多く圖畫を加へてゐる。烟花書畫帖展覽會の目錄、八文字や自笑及び其磧の傳、近松門左衞門の作文の自序等、讀書家の注意を惹く記事が少くない。享和二年著者の自序、例言があるばかりで、「羇旅漫錄」に出した旅泊日次等が闕如してゐるのは、本書を純然たる隨筆に取直した故である。後、「曲亭漫筆」と改め、更に弘化五年本書を「著作堂一夕話」（別項）と改題し、序文を初め內容全部の版木をそのまゝ用ひた本がある。これはやゝ大型の本に仕立ててある。　〔和田〕

猿樂（さるがく）　能樂　【名稱】能樂（別項）の古態に與へられた名稱で、能樂そのものをも明治初期までは「猿樂」又は「猿樂の能」、略して「能」ともいつてゐた。猿樂、古くは「散樂」又は「散更」とも書き、「さるがう」又「さるがう」と呼び、平安末期頃から「猿樂」の名目に統合せられ、次いで室町初期世阿彌の頃から、猿の字を忌んで「申樂」とも書くやうになつた。

【性質】猿樂は正樂に對し、奈良期から室町期まで世に行はれた樣々な雜伎・雜藝の總名として用ひられたもので、その內容・性質を一律に論ずることは出來ないが、觀阿彌父子が大成するまでは、滑稽な歌舞・物眞似が主流をなしてゐたといひ得よう。

【沿革】〔奈良期〕唐の散樂（別項）は奈良朝に輸入されて、朝廷の保護をも受けてゐたもので、これが猿樂の源流であらうと思ふ。併し我が國の古代から滑稽を旨とした戲は存在して居り、これが散樂の影響を受けて猿樂となつたものらしい。〔平安期〕奈良朝、唐散樂の輸入せられた當初は外來の定型を守つてゐたであらうが、次第にその型を破つて、「曲はのこりて歌は絕え」（雜祕別錄）、「無レ舞」（體源抄）、「おもひ〳〵のわざをする」（龍鳴抄）やうになつた。そしてこの新伎は、「三代實錄」に「新伎散樂競盡二其能一」「伎善二散樂一令二人大笑一」などとあり、演者各自の工夫した人をして大笑せしめる滑稽伎であつて、一般にこれを滑稽といふ意の普通名詞に用ひて、「さるがう」（宇津保物語藏開・源氏物語乙女・蜻蛉日記・枕草子）といひ、「さるがひ」「さるがふ」（枕草子）と動詞にもはたらかせるやうになつた。尤も猿樂とは、かゝる滑稽新伎のみを指すやうになつたのではなく、「本朝文粹」の散樂策問（村上天皇）及びその對策（秦氏安）によれば、「揚レ鞭騎二半蔀一」「傍レ柱負二胡籙一」「憑二圓座一而放二月光一」などの新案滑稽伎の外に、相撲・傀儡のやうな雜伎や、新韎鞨のやうな高麗樂（別項）をも散樂に數へてゐて、「舞樂要錄」の舞番目錄によれば、相撲節會に演ぜられるものは、舞樂の最後の左舞（雅樂參照）として擧げられて居り、唐樂（別項）の一種として、舞樂の餘興に演ぜられたのであるから、その猿樂の內容も、そこに新奇の工夫があつたにもせよ、大體は外來樂に近いものであつたらうと想像せられる。併し又一面、この猿樂が神樂の餘興として演ぜ

られる場合などは極めて自由なものであつたらしく、「宇治拾遺物語」「十訓抄」には、堀河院の御時、内侍所の御神樂及び賀茂臨時祭の歸立の御神樂に、陪從の家綱とその弟行綱とが、卑俗な輕口又は猥雜な歌謠を以て猿樂の功を爭つた事を記してゐる。これを要するに平安朝の猿樂は種々の雜伎をも含めつつ次第に新しい滑稽伎が考案されて行つたのであるが、この傾向の著しく發達したものが、藤原明衡の、「新猿樂記」に記された所のものである。即ちこれには、呪師・侏儒舞・田樂・傀儡師など、從來の雜伎雜藝をも包含して猿樂といつてゐるのであるが、その中に福廣聖之袈裟求、妙高尼之襁褓乞、目舞之翁體、京童之虛左禮、東人之初京上など、滑稽な物眞似が演ぜられてゐるのであつて、而もその頃の著名な猿樂師として、百丈・仁南・定緣などの名を擧げ、その科白や所作をも批評してゐる所を見ると、かなり劇的なもの、後の狂言（別項）に近いものに進んで來たことが知られる。

〔鎌倉期〕平安末期には、猿樂が狂言に近い喜劇にまで發展したのであるが、その頃から又朗詠・今樣（各別項）の後にも演ぜられるやうになり（中右記・古今著聞集）、鎌倉期に入ると、この傾向が一層著しくなつて、佛寺の延年會や武士の酒宴に、稚兒や遊女の優美な歌舞と、大人猿樂師や狂僧や官人の滑稽猿樂とが並び行はれるやうになつた（吾妻鏡・東大寺續要錄）。そしてこの猿樂の種類として、開口猿樂（別項）・答辯猿樂などの名目が出て來た。この開口猿樂・答辯猿樂の詞章を記したもので、稚兒の歌舞との關係を明かにしたものに、やゝ後の康正年間、興福寺三藏院現證房の時の延年舞式（「大和古文化研究」所收）がある。

開口猿樂は駄洒落を列べた前口上であり、答辯猿樂は一種の滑稽掛合噺で、その次に亂拍子一聲や越天樂歌物などが謠はれてゐるのである。この滑稽掛合噺が優雅な歌舞と結びついて、「法隆寺祈雨舊記」曆應三年八月十三日の條に記してゐる「龍田川のみな上を尋ねたる」連詞（連事とも書く）や「崑崙山を尋ねて八仙にあうたる」風流の如き、眞面目な劇に進展して行つたのであつて「興福寺延年舞式」に記された連事、高野博士の「日本歌謠史」に示された連事及び風流（各別項）の詞章を見れば、かなり樂劇的なものに發達してゐるのである。この後を承けて、更に當時行はれてゐた雜藝・文藝を採り入れ、今日の如き能樂に大成したのが、室町初期の觀阿彌・世阿彌（各別項）である。

猿樂古圖（歌舞音樂略史に據る）

【演者】散樂の輸入せられた當初は、官制を以て官職樂師以下の樂人を置かれてゐたが、延喜式中に「猿樂」とあるのは、官人の隨時これを演じたものであるが、次第に發達して行くにつれ、佛寺の遊僧や素人の武士もこれを演ずるやうになり、更にこれを職業とする者も出て來た。「新猿樂記」に見えてゐる百丈・仁南・定緣などがそれであり、「明月記」に奈良猿樂法師とあり、「吾妻鏡」に下衆猿樂とあるのがそれであらう。この傾向は鎌倉期以降、卑近な民衆的演藝の歡迎せられる時代的風尙に應じて、愈々盛んになり、各地に職業猿樂師の團體が出來て、多くはその地方々々の大きな社寺に附屬して、猿樂座を稱へてゐた。かうして鎌倉末期・室町初期に猿樂を職業としてゐた主な座に、次のやうなものがあつた。

（一）丹波猿樂（法勝寺の御修正及び賀茂・住吉の御神事に奉仕）
　本座（矢田）　新座（榎並）　法成寺（宿）

（二）大和猿樂（春日神社に奉仕）
　圓滿井（金春）　結崎（觀世）　外山（寶生）
　坂戸（金剛）

（三）近江猿樂（日吉神社に奉仕）
　上三座——山階・下阪・比叡
　下三座——宮增・大森・坂本

（四）伊勢猿樂（伊勢大神宮に奉仕）
　伊勢　主司

これ等の諸座はもと大體同じ藝風のものであつたが、大和猿樂の觀阿彌・世阿彌が新しく能樂を大成興隆したために、その觀世座及び同系統の寶生・金春・金剛が猿樂四座（別項）として榮え、他の諸座は手猿樂として輕侮せられるやうになつた。（散樂・能樂參照）

【參考】花傳書（世阿彌十六部集）○世子六十以後申樂談儀（世阿彌十六部集）○猿樂傳記（續群書類從第十九輯の日本歌謠史に收む）○猿樂沿革考（燕石十種）○歌舞音樂略史　小中村清矩○能樂全史　橫井春野○能樂盛衰記下卷　池內信嘉○日本歌謠史　高野辰之○能樂の源流及變遷一斑　吉田東伍（能樂三ノ三）○能樂の源流を論ず　友枝照雄（藝文第三年）○さるがくの名義・猿樂の起原・奈良朝の唐散樂・平安朝の新伎猿樂・翁概說　佐成謙太郎（謠曲界一八・九卷）　〔佐成〕

申樂座　「猿樂」を見よ。

猿樂四座　能樂　【解說】能樂の主要な演奏者シテ方の用ひる詞章、及びその演奏樣式は、猿樂座によつて多少の異同があり、そのうち能樂の大成した室町初期から一座を成してゐた大和猿樂の觀世・寶生・金春・金剛（各別項）を猿樂四座といふ。（猿樂・能樂五流參照）　〔佐成〕

申樂談儀　猿樂　【名義】世阿彌（別項）が、猿樂に關して秦元能に話した談話の聞書で、世阿彌の「却來華」を「世子七十以後口傳」といふのに對して、これに「世子六十以後」と冠す。元能の人と爲りは分らない。吉田東伍博士は、或は音阿彌元重と同人かといつてゐるが、恐らく世阿彌の子息であらう。【諸本】世阿彌十六部集（別項）に收められてゐる。岩波文庫中にもある。【內容】談話の聞書であるから、整然たる秩序は立つてゐないが、まづ第一に田樂と申樂、大和と近江との藝風の相異を述べて、斯道の先輩、一忠・觀阿・犬王等の藝風を語り、次に、物眞似・聲出等の心得を說き、曲舞と小歌との區別を論じ、藝位・能作・勸進能等について說き、當代の能役者金春・金剛等のことを述べ、而打のことに及び、更に話題を轉じて、大和申樂四座の沿革を述べ、世阿彌の能論の論理を考へた上で結論を下す。【諸本】江戶時代文藝資料第二所收。【解說】浮世の榮華を極めたさから出家得道した西福寺・三輪・鹿刈・鵜飼・春日詣神・遊女・義戶・船辨慶・猩々・放下僧・金札の各項目を設け、下卷は評判之返答と題し、何れも反駁罵詈のうちに當時の能の傾向及び能の沿革、故實等を窺ふことが出來る。なほ江戶時代初期の淨瑠璃・小唄等に就いて參考すべき記述も散見する。（舞正語磨參照）　〔笹野〕

猿源氏色芝居　浮世草子六卷　【作者】九二軒鱗長　【刊行】享保三年板　【諸本】江戶時代文藝資料第二所收。【解說】浮世の榮華を極めたさから出家得道した西福寺・三輪・鹿刈・鵜飼・春日詣神・遊女・義戶・船辨慶・猩々・放下僧・金札の各項目を設け、下卷は評判之返答と題し、何れも反駁罵詈のうちに當時の能の傾向及び能の沿革、故實等を窺ふことが出來る。なほ江戶時代初期の淨瑠璃・小唄等に就いて參考すべき記述も散見する。　〔笹野〕

語り、用樂の起原・楔ばやし・雜能について述べ、役者の行儀、魚崎座の規約をも記してゐる。而してその末に「永享二年十一月十一日、爲殘志、秦元能書之」とある。【價値】「花傳書」（別項）と相並んで能樂研究の最も大切な根本資料で、前者が大體抽象的理論的であるのに對し、これは具體的實際的であつて、兩々相俟つて能樂に關する諸種の疑問を解決してゐる。

猿蟹合戰　童話　【梗概】猿は柿の種を、蟹は握り飯を拾つたのを、交換を申し込んだ猿は飯を食べ、蟹は種を播いておいて、柿の實が成熟するのを待つてゐる。蟹は、臼・蜂・糞・栗の四人の助力を得て、猿を懲らして、その惡行を改めさせる。【解說】怪談の一種で、本源に於てすべて關係あるものと推せられ得る。又別に猿の形態に關する天然傳說が、朝鮮及び九州に流布してゐて、これも猿蟹の爭ひで、本童話に交涉ありと想はれる。【影響】「詠猿蟹長歌并短歌」（黑澤翁滿作童話長篇）、黃表紙「猿蟹遠昔噺」（櫻川春町）、狂文「猿蟹物語」（六々園春足）及び狂歌等。

【參考】燕石襍志卷四　○標準日本御伽文庫上卷附錄解說　○インドネシア神話傳說集「慾張り寡婦」及び「猿龜合戰」の註（神話傳說大系）○羅生門の鬼（猿三題）島津久基　〔島津〕

猿神退治傳說　【解說】怪談の一種で、本源に於てすべて關係あるものと推せられ得る。又別に猿の形態に關する天然傳說が、朝鮮及び九州に流布してゐて、これも猿蟹の爭ひで、本童話に交涉ありと想はれる。【影響】「詠猿蟹長歌并短歌」（黑澤翁滿作童話長篇）、黃表紙「猿蟹遠昔噺」（櫻川春町）、狂文「猿蟹物語」（六々園春足）及び狂歌等。

【參考】燕石襍志卷四　○標準日本御伽文庫上卷附錄解說　○インドネシア神話傳說集「慾張り寡婦」及び「猿龜合戰」の註（神話傳說大系）○羅生門の鬼（猿三題）島津久基　〔島津〕

犬塚早太郎（兵坊太郎）の傳說が知られてゐる。本傳說は原形が神話にまで溯り得られる外、「搜神記」「幽怪錄」等の支那傳說の影響を受けてゐる事も認められるが、佛說に結合した同種の生贄說話とも交涉があらう。（但し、その種のものは、英雄譚でなく、靈驗譚或は高僧譚の形を取り、孝德・法力等に依つて生贄の難を免れるので、寶明童子（私聚百因緣集卷一）・善見童子（同卷三）・堅院羅貧女（同卷二）等から出た「法妙童子」「さよひめ」（各別項）等はその例である。）近世では、武者修行譚の一節として挿入されてゐる事が多い。

語り、田樂の起原・松ばやし・蓊能について述べ、役者の行儀、魚崎座の規約をも記してゐる。而してその末に「永享二年十一月十一日、爲殘志、秦元能書之」とある。【價値】「花傳書」（別項）と相並んで能樂研究の最も大切な根本資料で、前者が大體抽象的理論的であるのに對し、これは具體的實際的であつて、兩々相俟つて能樂に關する諸種の疑問を解決してゐる。〔佐成〕

猿蟹合戰（さるかにかつせん）　童話　【梗概】猿は柿の種を、蟹は握り飯を拾つたのを、交換を申し込んだ猿は飯を食べ、蟹は種を播いておいたのが、大きな柿の木に成長した。蟹の登れないのにつけ込み、親切ごかしに樹上に登り、果實の熟したのをちぎつて自分で味ひ、蟹には澁柿を投下し、而も甲羅を傷つけて横死させた。蟹の子は悲憤して、臼・杵・蜂・卵等の助けを借り、計を廻らして猿を誘ひ寄せ、卵は爐中から撥ね、蜂は刺し、臼・杵は壓へ打ち、つひに蟹はめでたく親の敵を討つた。【解說】五大國民童話の一。復讐を主題とするのと、德川初世の赤本「さるかに合戰」「さるかに」、黑本「猿蟹夢物語」等に作られてあるのから見て、本童話の成形は室町末頃であらう。握り飯も古い形では燒飯とし、また加勢の者も、庖丁・莞布・栗・蛇・牛糞等いろ〳〵に語られてもゐる。この童話の本據は恐らく外來の遊離說話らしく、卽ち前半は南洋セレベス島の猿龜合戰に、後半は同島の慾張婆退治及びその異形たる同じインドネシア地方の首狩物語にそれ〴〵類似してゐる。更にこの婆退治乃至首狩物語は、九州地方の山姥退治と類話を成すのみならず、蒙古童話（鳥居きみ子著「土俗學上より觀たる蒙古」所載）とも全く同型なのは注目に値する。本源に於てすべて關係あるものと推せられ得る。又別に猿の形態に關する天然傳說が、朝鮮及び九州に流布してゐて、これも猿蟹の爭ひで、本童話に交渉ありと想はれる。【影響】「詠猿蟹長歌幷短歌」（黑澤翁滿作童話長篇）、黃表紙「猿蟹遠昔噺」（燕川春町）、狂文「猿蟹物語」（六々園春足）及び狂歌等。

【參考】燕石襍志卷四　○標準日本御伽文庫上卷附錄解說　○インドネシア神話傳說集「慾張り寡婦」及び「猿龜合戰」の註（神話傳說大系）○羅生門の鬼（猿三題）島津久基　〔島津〕

猿神退治傳說（さるかみたいぢでんせつ）　【解說】怪物退治說話の一種型。鬼神退治傳說（別項）と類話をなす邪神退治で、何れも素戔嗚尊大蛇退治神話の變形、少くとも同型の遊離說話と云ひ得るが、彼の純粹な英雄傳說で國民的史的なのに對照して、これは地方的民俗的で、英雄傳說の形を取つた民間傳說である。而して生贄モーティフを具へ、却つて大蛇退治神話の原形に近い。卽ち人身御供の處女を救ふために、代つて贄となつた獵師或は廻國の修行者が、邪神たる怪猿を退治して里人の禍を除き、その處女と婚して鄕の長者となるといふのが本傳說の常型で、且つ大抵退治者は猛犬を從へてゐ、その功を記念するために犬の死後、里人によつて祀られたと云ふ義犬塚傳說をも構成してゐる場合が多い。民間信仰と習俗を具現した興味多い說話型である。古い文獻では「今昔物語」（卷二十六）に、「美作國神依二獵師謀一止二生贄一語第七、飛驒國猿神止二生贄一語第八」の二話を載せ、前者は「宇治拾遺物語」卷十にも出てゐる。口碑としては紀伊・丹波・近江・遠江・肥後を初め、諸國に分布してゐるが、就中、信濃國上伊那郡赤穗村光前寺の義犬傳早太郎（兵坊太郎）の傳說が知られてゐる。本傳說は原形が神話にまで溯り得られる外、「搜神記」「幽怪錄」等の支那傳說の影響を受けてゐる事も認められるが、佛說に結合した同種の生贄說話とも交渉があらう。（但し、その種のものは、英雄譚でなく、靈驗譚或は高僧譚の形を取り、孝德・法力等に依つて生贄の難を免れるので、寶明童子（私聚百因緣集卷一）・善見童子（同卷三）・堅院羅貪女（同卷二）等から出た「法妙童子」「さよひめ」（各別項）等はその例である。）近世では、武者修行譚の一節として挿入されてゐる事が多い。

【參考】攷證今昔物語集（本朝部下）　〔島津〕

猿轡（さるぐつわ）　評判記　大本三册　【著者】未詳　【名稱】序に猿樂の與黨等に口を開かせぬ心を以て名付けたとある。【刊行】刊記がない。「舞正語磨」（別項）の返答書であれば、その出版された萬治元年以後遠からず刊行されたものであらう。【解說】萬治元年の秋、京都四條河原で五日間催されに勸進能に於ける喜多十太夫の演伎に就いて批評した「舞正語磨」に對する反駁の評判記である。恐らく「舞正語磨」を書いた秋扇翁は、當時喜多流に七太夫のやうな名人が出て、その盛名を謳はれたのに對する猿樂四座の觸頭觀世流に關係のあつた者であらう。そしてこれは喜多流の贔屓の者が、七太夫の次男でやはり能役者として名高かつた十太夫のために書いたものであらう。先づ上卷に、「舞正語磨」の題名の當を得てゐないのを難じ、その批評に對して勸進能の翁立之返答、及び初日二日所演の高砂・賴政・江口・紅葉狩・櫻川・大會・吳服・賀茂・眞盛・松風・自然居士・葛城・海士・養老。中卷に勸進能三日四日所演の白鬢・忠則・熊野・道成寺・三輪・蘆刈・鵜飼・卷日龍神・乘女・藤戸・船辨慶・猩々・放下僧・金札の各項目を設け、下卷は評判之返答と題し、何れも反駁罵詈のうちに當時の能の傾向及び能の沿革、故實等を窺ふことが出來る。なほ江戸時代初期の淨瑠璃・小唄等に就いて參考すべき記述も散見する。（舞正語磨參照）　〔笹野〕

猿源氏色芝居（さるげんじいろしばる）　浮世草子　六卷　【作者】九二軒鱗長　【刊行】享保三年板　【諸本】江戸時代文藝資料第二所收。【解說】浮世の榮華を極めたさから出家得道した西福といふ男が、或る邸に出入りするうちに御物師と懇になり、主人から暇を出されて世帶をもつ。西福は肉食妻帶を許す本願寺宗に宗旨をかへ、小しめといふ唄の師匠の近所に住んで、娘お鈴に遊藝を習はせる。お鈴は年と共に美しくなり、つひに西福の望み通りに玉の輿に乘つて、月光院と呼ばれるに至るといふ筋。德川大奧の生活の狀態を描き、石川六兵衞の妻の豪奢や江島流罪の事件等をくみ合せたもの。實際の事實に據つて作られた小說の一である。〔小泉〕

猿源氏草子（さるげんじのさうし）　御伽草子（二十三部の一）二卷　【別名】さるげんじ　【成立】室町中世以後。【諸本】古板本は御伽草子本、萬治元年板（丹緣本）、松會開板本。明治以後の刊行としては、御伽草子（有朋堂文庫）・日本文學大系等に收めてある。【題材】歌物語・戀愛物。一面「伊勢物語」、他面「源氏物語」の影響文學。猿源氏の名も光源氏を捩つたこと勿論である。鰯賣の及ばぬ戀が成就する出世談と云ふのが珍しく、しかも、それが和歌の德に因るのが主題で、隨所に述べ立てられる故事來歷の挿話と

共に、また時代色である。猿源氏の物語る挿話中には、文學發心の傳說（袈裟の名は「天女御前」となつてゐる）や、和泉式部が鰯を食べた話等も見える。

【梗概】伊勢國阿漕が浦の鰯賣、元は海老名六郎左衞門と云つて關東侍であるが、猿源氏と云ふ雇人を一人娘の婿に取り、商賣を讓つて都へ上り、な阿彌陀佛と號した。婿の猿源氏も都へ上つて、洛中を「伊勢國に阿漕が浦の鰯かうえい」と呼び歩いて人氣を取り、裕福の身となつて來た。五條の橋を渡る時、輿の內の遊君螢火を見染め、商ひも手につかず病み臥してしまつた。舅は誠め慰めたが源氏が聞き入れぬので、大名・高家の外、相手にせぬ遊女の事ゆゑ、關東侍宇都宮彈正が上洛のやうに仕立てさせて螢火を欺き、本意の如く契が結ばれた。その夜宿所を訪れた螢火は、何だか大名とは勝手が違ふので訝かつてゐると、酒に醉うた源氏が、寢言に「阿漕が浦の猿源氏が鰯かうえい」と呶鳴つたので、螢火がさればこそと悔み歎いて詰ると、源氏は、將軍家で自分のために連歌が催されたその句案だと託けて、樣々昔の歌物語を引いて言ひ拔けたため、螢火もこれほど歌道に通じてゐる上は賤しい者ではあるまいと疑を晴らし、後で實を明かしたけれど、二人が仲はいよ〳〵濃やかに、相携へて伊勢に下り子孫繁昌した。返す〴〵も學ぶべきは歌の道であるといふことが書かれてゐる。　〔島津〕

猿田彦神　神話　【名稱】猿田毘古とも書く。名の義に關しては、この神と出雲の佐太大神と同一視して、「さだ」であるとなす說があり、又、天孫の「御前に先ちて仕へ奉りし神」であるから、先行といふ名を與せたとなす說があり、更に狹長田の地名を負ひて佐那縣彥と稱したのであらうといふ說がある。近代に入つては「さるだ」を目して、琉球語の「さだる」（「先になる」の義）と同一語であるとなし、從つて「さるだ」は「先驅」を意味するといふ說、アイヌ語の「さた」（「みさま」の義）から出た語で、「先に立つ」ことを意味すとする說が現はれ、更に「さるだ」は戲樂を演ずる人を意味する語「さるど」の轉呼となす說も出てゐる。この神の本來の職能から云へば、最後の說は、最も蓋然性に富むやうに思はれる。【職能】この神の職能は、古文獻ではいろ〳〵になつてゐる。「日本書紀」「古語拾遺」には衢神となつて居り、そしてその意味で、鄕導神・道祖神らしい面目がほの見えて居り、又「日本書紀」には、俳優・俳人とも記されてゐる。恐らく本原的には、神事に道化た技を演ずる神樂の俳優の神格化であつたらう。そして往古の傀儡子・遊女の如き俳優的漂泊民が、禍神として道祖神を祭つたところに、猿田彥神と衢神との同一化が生起したのであらう。民間信仰では、庚申・天狗等と相關聯し、三平二滿の女神と相並んで、戲技を演ずるものとされてゐる。

【神話梗概】瓊々杵尊が、高天原から天八衢までお降りになると、そこに鼻の長さ七咫、背の長さ七尋、口尻明耀、目は八咫鏡のやうで、赤酸漿の如く輝いてゐる異形神があつた。八十神がみな目勝つことが出來なかつたので、尊は、天鈿女に「汝は人に目勝つ者なり。」と云つて往いて問はしめた。天鈿女が裳帶を臍の下に押垂れ、これに對立して素性を尋ねると、猿田彥神と申し天孫を迎へ待つてゐると答へた。そして尊に先行した。天鈿女はこれを送つて伊勢の狹長田五十鈴川上に到つて、事の由を復命したとある（日本書紀・古語拾遺）。更に他の神話によると、猿田彥神が伊勢の阿坂にゐる時、漁して比良夫貝に手を咋ひ合はされ、海に溺れた。かくて底に沈んでゐる時の名を底度久御魂といひ、潮のつぶ立つ時の名を都夫多都御魂といひ、泡が盛んに立つ時の名を阿和佐久御魂といふとある（古事記）。

【解說】猿田彥神が天八衢に現はれて天孫の先驅をしたといふ神話は、恐らくこの神が鄕導神としての道祖神的な面目を帶びた文化期の產物であらう。その伊勢に到つたことを解して、天照大神の神靈を奉導したことを意味し、結局大神が伊勢の地に祭られた由來を說くためであらうとなすものがある。「垂仁紀」に皇女倭姬が神託によつて大神を伊勢に祭らしめたとあるのを、「御鎭座傳記」や「倭姬命世記」が敷衍して、猿田彥神もしくはその後裔をこれに關係させてゐる事實に徵すると、かうした解釋も敢て不當ではないかも知れぬが、「倭姬命世記」に、猿田彥神の子孫太田命は宇治の土公の祖とあり、そしてそれが昔時優人の家元であつたらしいから、猿田彥神の伊勢に到つた事情は、この點からより無難に解釋せられるかとも思ふ。この神の目が異樣であり、而してそれが目勝神の名ある天鈿女命に懷柔せられたのは、女陰の厭勝力によつて邪眼の災が解除せられた事を意味するらしい。猿田彥神が、比良夫貝に手を咬まれて水中にもがき苦しんだとなす神話は、火照命の子孫が、先祖の潮に溺れた折の滑稽な姿態を演じて、朝廷に奉仕したとなす神話と好個の對比をなす。そして後者が隼人舞の內容の神話化であるらしいやうに、前者も恐らく鎭魂の儀の中にさうした所作があつて、それが後に民間說話化したものであらう。

【參考】古語拾遺新註　池邊眞榮　○琉球古今記　伊波普猷　○民族と歷史（三ノ一）○日本建國神話之研究　辻春緒　○日本古語大辭典　松岡靜雄　○神話學論考　松村武雄　〔松村〕

猿蓑玖波集　雜俳集　【編者】一陽井素外　【刊行】安永七年十二月　【諸本】德川文藝類聚雜俳第十一所收。【解說】山崎宗鑑の「犬蓑玖波集」（別項）と題する最初の俳諧集に倣つて編述したもので、春・夏・秋・冬・神祇・釋敎・戀等の數篇に分叙してある。江戶座俳諧から前句附（別項）に推移せる徑路を辿るに必須な參考書である。「柳樽」中に收錄した川柳の句と、同想同型の類句二三を擧げておく。

急用を聞かれて禿息を切り
早打の禿あのねで息を切り（文化）
駈けて來て禿あのねを三ついひ（安永）　〔西原〕

猿の肝取り　童話　【梗概】龍王の女の病を治するため、醫伯の薦めにより、妙藥猿の生肝を取りに、使者として猿島に遣された海月が、甘言を以て猿を欺き載せ、龍宮へ伴ひ歸る途中、不用意にその目的を喋つてしまつたので、猿は生肝は樹上に置き忘れて來たとて、再び舊の島へ引返させて脫れ去り、空しく立ち歸つた愚な海月は王の怒りに觸れて、魚共に打擲せられ、終に骨無しとなつてしまつた。【解說】謂はゆる海月のお使ひの童話。古い形では使者が龜で、打擲せられて甲羅に龜裂を生じたとするもの、或は使の龜が伴ひ歸つた猿に、龍宮の門番の海月が、謀を口外した爲め、骨無しにされたとするものがあるらしいやうに、前者も恐らく鎭魂の儀

歌の說明傳說としての意味が、特に强調されてゐるが、本據は印度の佛典に見える寓話的童話で世界大擴布說話（別項）の一。原傳說では、猿に對する水棲動物が、虬（佛本行經）・鼈（六度經）・鱷（末生譚）等と種々の形で傳へられ（最後のものは我が因幡の兎（別項）の傳說に轉化したと言はれてゐる）、支那・西藏・朝鮮及び亞弗利加等にまで、各々少異を以て播布してゐる。因幡の兎の話は假に別とするも、日本でもほぼ印度說話のまゝの形で、早く「今昔物語」（卷五）に語られてゐる。天然傳說的分子の附加は、中世以後の事らしい。【影響】赤本歌をよくしたので、宮中の女官に呼ばれて狂歌を詠み、やがて朝廷に召されたとある。道鏡と同人と考へるために、讒にあつて配流されたとする說もある。貫之の頃には實在した歌人として多少は知り得る所があつたでもあらうが、今日では全く傳說の人となつてゐる。【作品】家集「猿丸大夫集」（別項）があるが、猿丸大夫の歌であるか否か疑はしい。【備考】「山城名勝誌」には、江州曾束村と城州田原鄕禪定寺との間に、古くより猿丸と呼ぶ地がある。恐らく猿丸大夫の住所であらうとある。長明の「無名抄」に「或人云たなかみのしもに、の」であつて、「袋草紙」にいふ所と一致する。「萬葉集」の歌と思はれるもの凡そ二十一首、中には作者のわかつてゐるものもあり、「古今集」の歌と思はれるもの凡そ二十五首、すべて讀人不知である。このうち明瞭に猿丸大夫作と主張し得る歌は一首もない。初めに「萬葉集」の歌をおき、次に「古今集」の歌をおいてゐる。本書によつて歌人猿丸大夫を見ることはもとより出來ないが、歌仙家集の一としての歷史的意義はある。　〔西下〕

猿曳門出諷　「近頃河原の達引」を見よ。

竹書）がある。故に首に其角序と書くのである。然るに一帖の疊紙を吝み、後年書肆が拔き去つたものであるといふ。なる程流布の傳本には、年月筆者の一行がない。或る人の談に、近頃某氏がこの原版を所持してゐたのを見ると、序の末に、年月筆者の一行がある。恐らく西馬のいふ元祿の製本はこれであらうと。【諸本】俳諧七部集（別項）中の一である。集中の四歌仙は、蝶夢の「俳諧集」、曉臺の「幽蘭集」、甘井の「金蘭集」、奇淵の「袖草紙」、湖中の「一葉集」、默池の「袖珍鈔」、その他近來の芭蕉全集類に入つてゐる。

態の説明傳説としての意味が、特に強調されてゐるが、本據は印度の佛典に見える寓話的童話で世界大擴布説話（別項）の一。原傳説では、猿に對する水棲動物が、虬（佛太行經）・鼈（六度經）・鱷（本生譚）等と種々の形で傳へられ（最後のものは我が因幡の兎（別項）の傳説に轉化したと言はれてゐる）、支那・西藏・朝鮮及び亞弗利加等にまで、各々少異を以て播布してゐる。因幡の兎の話は假に別とするも、日本でもほぼ印度説話のまゝの形で、早く「今昔物語」（巻五）に語られてゐる。天然傳説的分子の附加は、中世以後の事らしい。【影響】赤本「猿のいきぎも」、「詠乙姫長歌幷短歌」（黒澤翁滿）等。

【參考】燕石襍志巻四　○攷證今昔物語集　天竺震旦部　○標準日本御伽文庫の日本童話下巻附錄解説　〔島津〕

猿丸大夫（さるまるだいふ）　歌人（三十六歌仙の一）【名義】「和歌極祕傳抄」に、宮中に參るとき面が猿に似てゐたので、宮中を木丸といふが如く猿丸と名づけ、大夫は官が大夫であつたからであるとしてゐる。丸は、蟬丸・翁丸の類か。【家系】「扶桑隱逸傳」には、聖德太子の御孫弓削王の別名であるとし、弓削王卽ち道鏡であるとする説もある。「分類本朝年代紀」には、光仁天皇の皇子施基皇子とする。「鎌倉實記」には、その子孫が白旗を頼朝の許に持參したとある。【閲歷】元明天皇の頃、或は元慶の頃の人ともいふ。「古今集」眞名序に、「大友黑主之歌、古猿丸大夫之次（イ流）也」とある點から平安朝の初期、萬葉集時代を餘り隔てない頃の人であらう。「扶桑隱逸傳」には深草の人で、後には近江曾束（そつか）山中に隱れ住んだとある。又「和歌極祕傳抄」には土器を賣り、和歌をよくしたので、宮中の女官に呼ばれて狂歌を詠み、やがて朝廷に召されたとある。道鏡と同人と考へるために、讒にあつて配流されたとする説もある。貫之の頃には實在した歌人として多少は知り得る所があつたでもあらうが、今日では全く傳説の人となつてゐる。【作品】家集「猿丸大夫集」（別項）があるが、猿丸大夫の歌であるか否か疑はしい。【備考】「山城名勝誌」には、江州曾束村と城州田原郷禪定寺との間に、古くより猿丸と呼ぶ地がある。恐らく猿丸大夫の住所であらうとある。長明の「無名抄」に「或人云たなかみのしもに、そつかといふ所あり。そこに猿丸大夫が墓あり」とあり、「方丈記」にも「田上川を渡つて猿丸大夫が墓をたづね」とある。その他「草山集」「攝津名所圖會」にも、その墓所に就いて記してゐる。

【參考】歌仙傳○百人一首一夕話　〔西下〕

猿丸大夫集（さるまるだいふしふ）　歌集　一巻【略稱】猿丸集【諸本】（一）群書類從本巻二四八、（二）歌仙歌集本があり、寫本には（一）の系統に「猿丸集」（圖書寮藏）、（二）の系統に「猿丸大夫集」（同上）がある。【解説】歌の數は、（一）四十九首、（二）三十七首、共通の歌は三十四首にて順序が異なり語句も相違する。圖書寮本「猿丸集」は、寶治・建長の奥書がある。歌數は本來五十四首にて類從本にない歌が三首と重出二首とがあるが、脫落が六首あつて實數四十八首である。圖書寮本「猿丸大夫集」は清輔本を以て校合したといふ奥書があつて、類從本にて補つたらしい十五首があり、なほ歌仙歌集と一首づつの出入があつて五十二首である。而して四本を合せ重複をさけると五十三首となり、四本とも最初の歌は「しらすげの」であつて、「袋草紙」にいふ所と一致する。「萬葉集」の歌と思はれるもの凡そ二十一首、中には作者のわかつてゐるものもあり、「古今集」の歌と思はれるもの凡そ二十五首、すべて讀人不知である。このうち明瞭に猿丸大夫作と主張し得る歌は一首もない。初めに「萬葉集」の歌をおき、次に「古今集」の歌をおいてゐる。本書によつて歌人猿丸大夫を見ることはもとより出來ないが、歌仙家集の一としての歷史的意義はある。　〔西下〕

猿曳門出諷（さるまはしかどでのひとふし）　「近頃河原の達引」を見よ。

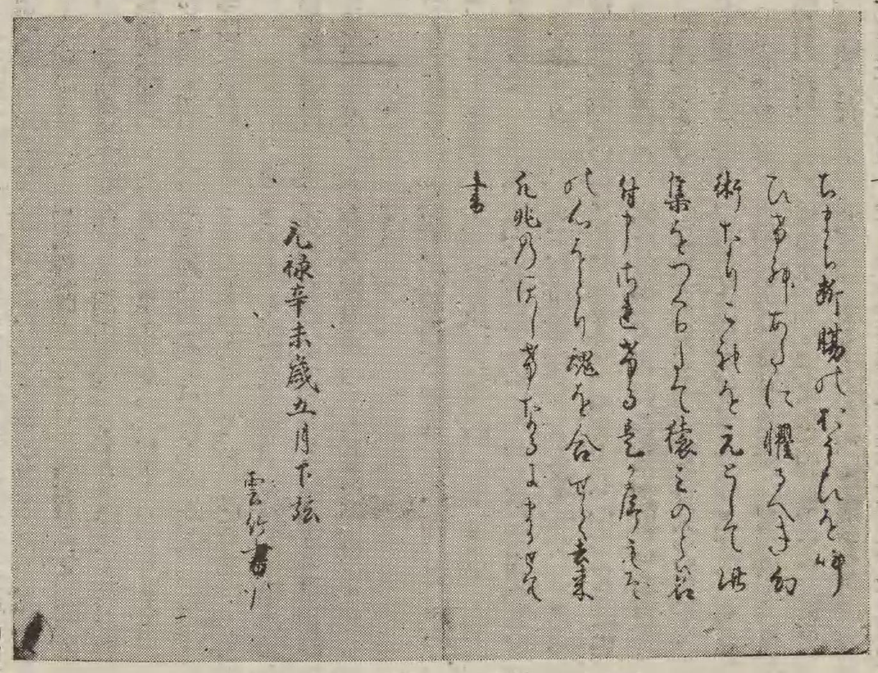
猿蓑集（さるみのしふ）　俳諧集　【撰者】向井去來・宮城凡兆【名義】巻頭の芭蕉の「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」といふ句から名づけたのであらう。この句は其角の序にも、「俳諧の神を入れたまひければ」と感歎されてゐるものであつて、この句が奥羽行脚以後、蕉風の一轉期を示すものであつた所から、一部の新風を代表させて、撰集の名としたのであらう。【成立】選句に就いては去來・凡兆の隔意なき議論の下に取捨を決し、その上一々芭蕉の嚴重な指導を仰いだ。去來の心には、芭蕉の俳諧は奥羽行脚以來一變した、その新風を代表すべき撰集を作りたいものである、それには芭蕉の斧正を得た末代の龜鑑たるべき集でなければならぬと云つたやうな抱負と熱心とがあつたやうであり、芭蕉の方でも從來の撰集とは違つた態度で、本集を監修したやうである。その事は「湖東問答」「去來抄」等によつて窺ひ得る。【傳本】半紙本二册、元祿四年、京、井筒屋庄兵衞開版である。普通白茶の表紙本が流布してゐる。西馬の説によると、元祿の製本には年月筆者の一行（元祿辛未歲五月下浣雲竹書）がある。故に首に其角序と書くのである。然るに一帖の疊紙を咨み、後年書肆が拔き去つたものであるといふ。なる程流布の傳本には、年月筆者の一行がない。或る人の談に、近頃某氏がこの原版を所持してゐたのを見ると、序の末に、年月筆者の一行がある。恐らく西馬のいふ元祿の製本はこれであらうと。【諸本】俳諧七部集（別項）中の一である。集中の四歌仙は、蝶夢の「俳諧集」、曉臺の「幽蘭集」、甘井の「金蘭集」、奇淵の「袖草紙」、湖中の「一葉集」、默池の「袖珍鈔」、その他近來の芭蕉全集類に入つてゐる。

【内容】六巻二册から成つてゐる。卽ち晋其角の序（雲竹書）、風狂野衲丈艸の跋（正竹書）、巻之一冬の發句、巻之二夏の發句、巻之三秋の發句、巻之四春の發句、巻之五連句四歌仙、巻之六幻住菴記（別項）、几右日記等を收め下ゐる。發句すべて三百八十二、うち芭蕉四十一句、其角二十五句、去來二十五句、凡兆四十二句、入選してゐる。連句は四歌仙で、去來・芭蕉・凡兆・史邦四吟歌仙一巻、凡兆・芭蕉・去來三吟歌仙一巻、凡兆・芭蕉・野水・去來四吟歌仙一巻、芭蕉・乙州・珍碩・素男・智月・凡兆・去來・正秀・半殘・土芳・園風・猿雖・嵐蘭・史邦・野水・羽紅十六吟歌仙一巻である。【史的地位】「猿蓑集」は古來非常に尊重された。蕉風の三變論が、後の俳壇に多大の影響を與へた關係上、本集は實にその絶頂に達した完成期の風調として、永く後人の龜鑑となつたのである。卽ち許六は、「前猿蓑」は俳諧の「古今集」である。初心の人は去來の「猿蓑」から當流俳諧に入るがよいと稱揚し、支考は「猿蓑」に至りて全く花實を備ふと云ひ、風國は新風を起し、正風の賜を見せて、千載不易の姿、一時流行の

變格を明かにしてゐると論じ、その他蓼太・五明・曲齋凡て前說を承けて、稱讃止まなかつた集である。【影響】蕉風の三變論が諸集を簡拔して、最も劃期的に蕉風の推移を明示してゐる所から、本集の尊崇は一層高まつたのである。淡々は「猿蓑」「炭俵」を一日見ないと眼に霞がかゝつたやうであると云つてゐた。「猿蓑」の感化は文化の俳壇に及んで、一般にその調を摸してゐたやうであるが、純粹なものではなかつた。かゝる摸倣は後に至るほど甚だしく、西馬の如きは「猿蓑」を一派の龜鑑としてゐた。

【價値】曲齋の說によると、「風調は地を專にして風韻を主とし、高雅なるもの冬の日に似ず、曲節なるものひさごに反して」と云つてゐるがその通りで、巧まず凝らず、最も自然に芭蕉の眞髓を表してゐる。發句と云ひ、連句と云ひ、實に後世の龜鑑である。殊に連句の如きは、初めの三卷は正風の骨髓で、最も寂栞主義に叶つてゐる。

【參考】泊船集風國○俳諧問答　森川許六○湖東問答向井去來○宇陀法師森川許六○歷代滑稽傳同上○去來抄○小夜話吉川五明○俳諧七部捜櫻井吏登○猿蓑爪じるし杜勤○七部小鏡茂呂何丸○猿蓑逆志抄樺柯○俳諧猿蓑註解佛支龍指直○猿蓑集歌仙異同考夏目成美○猿蓑序註解通論○猿蓑註解太田蜀山人の序○猿蓑序註解補遺（文政版）



猿蓑集（序文）

猿女（さるめ）「天鈿女命（あめのうずめのみこと）」を見よ。

猿若（さるわか）　所作事【作者】初代猿若勘三郎【名稱】シテ役の名前からついた名稱であるが、元來は一の役柄の名目であつた。【興行】中村座の發生と同時に起り、幕末に及んだ。シテの猿若のみは、常に上演當時の座主中村勘三郎が勤める事になつてゐた。【諸本】「古今役者物語」（復製本の外に德川文藝類聚所收）所收のものは原形に近いと思はれるが、その他「三座家狂言並由緒書」にも收められ、「燕石十種」「百戲逸略」等に入つてゐる。

【梗概】芥屋の某といふ大名の下人の道化者（猿若）が、故郷へ歸つて、大名から命じられるのを逃れるために、道中の實話を身振り可笑しく聽かせる。狂言小歌式に土地の流行唄を謠つては、宿場女郎が客引きの態やら、美しいよねの口舌の振り等を見せると、大名が乘氣になるので猿若は惡戲する。終に大名は堪へ兼ねて手討にしようとするが、それは威しだつた。又岡崎の橋普請の話で、木挽の音頭をきかせる。猿廻しの歌から五段の獅子舞になつて、共に浮かれて盃事に終る（元祿前後の型と覺える）。

【解說】元祿前に定まつたらしい「猿若」の脚色は、形式は大體能の狂言に倣つて相當完備してゐるが、元は流行小歌や音頭等を主體とした「海道下り」（別項）に過ぎなかつたであらうと思ふ。但しそれ等の小歌や音頭等は、狂言小歌に化せしめず、身振も小舞化せしめず、飽くまで寫實主義をとつた所に、前時代の演劇から截然と區分されて、新時代の民衆劇的素地を固めたものと察せられる。一般民衆を初め高貴にまで召されたのも、そこに特殊な意義を盛つたからであらう。【沿革】猿若は、もとお國歌舞伎時代に起る。その獨特な歌舞伎踊りの役柄で、ツレの位置にゐたのが猿若である。踊りの合間等にだうけた身振を演じてゐた。この樣式は女歌舞伎がその儘に踏襲したので、猿若役者も一方の存在となり、必要となつた。初代勘三郎は、或はそれ等の猿若役者であつたものが、志を抱いて關東に下つたものではあるまいか。かくして猿若なる役柄を單なる道化から向上せしめて、これを中心とする脚色を案じ、この技を標榜して猿若座と稱へ、自身も猿若勘三郎と名乘つた。やがて進歩した各種の演技をも「猿若狂言盡し」なる名目の下に演ずるに至つた。この間、勘三郎の猿若は天下に謳はれ、將軍家には屢々召された外に、明暦三年の大火に上洛の時は、內裏の叡覽を蒙つた事もある。これ等は當然猿若座の由緒となつて、江戸歌舞伎の開祖たる地位を一層堅固にした。こゝに生れた格式を以て、「猿若」は猿若座卽ち中村座の家狂言となり、後進の市村座や森田座に對しても、家狂言の指令を出す慣習を生じた。また同座の記念興行の場合にのみ必ず上演せらるべき壽狂言（別項）ともなつた。かゝる傳統の下に保存されたので、特にこの作から成長した脚色のものは餘り見出されない。「二人さるわか」（貞享四年（？）、中村座上演。中村傳九郎の男猿若に袖島市彌の女猿若）の如きは異例である。

【參考】東都劇場沿革誌　關根只誠○日本演劇史　伊原敏郎　【守隨】

澤田東江（さはだとうかう）　洒落本作者【名】平蹴、後、麟と改む。通稱は文二郎、東江はその字である。【號】東郊・來禽堂・萱舍等【戲號】無々道人・嬉齋・和亭等【生歿】享保十七年江戸に生れ、寛政八年（一七九六）六月十五日歿す。享年六十五【墓所】東京東本願寺【閱歷】江戸兩國矢倉の町人の子として生れ、林鳳岡に朱子學を學び、高頤齋に書道を學び、能書家として當時有名であり、殊に草隸に巧であつたし、篆刻にも長じた。作家としては寶曆七年二十六歳で「異素六帖」（別項）を著はし、江戸に於ける洒落本の先驅の一として有名である。要するに江戸の町儒者で通人であつた。【著書】迷所邪正案內（寶曆六年）○異素六帖（同七年）○吉原大全（明和五年）等。【山崎】

三英隨筆（さんえいずいひつ）　隨筆　一卷【著者】望月三英、鹿門と號す。【諸本】大田南畝の「續三十輻」中に收められ、大正六年國書刊行會から刊行【解說】野家并に儒家たる著者の隨筆で、前半には江戸期醫道の史傳に關する事、名醫の處方・逸事等を錄して、まゝ自家の醫案に及び、後半には同時代の儒學諸派の大家を評論し、殊に自家の私淑する荻生徂徠の一派に委しく、古文辭學を揚げて、その他を斥けんとする氣色を示してゐる。通計百五十餘則を收む。文化二年菅原維則の序がある。普通傳寫の本には魯魚の誤りが多くて難解の處がある。文政中大田南畝が「補三十輻」の叢書に編入した際校訂をした筈であるが、なほ整はぬふしが少くない。〔和田〕

散樂（さんがく）　舞樂【名義】古說には、「周禮」の春官に、「旄人掌ㇾ敎ㇾ舞ㇾ散樂一舞ㇾ夷樂上」

會から刊行【解説】醫家并に儒家たる著者の隨筆で、前半には江戸期醫道の史傳に關する事、名醫の處方・逸事等を錄して、まゝ自家の醫案に及び、後半には同時代の儒學諸派の大家を評論し、殊に自家の私淑する荻生徂徠の一派に委しく、古文辭學を揚げて、その他を斥けんとする氣色を示してゐる。通計百五十餘則を收む。文化二年菅原維則の序がある。普通傳寫の本には魯魚の誤りが多くて難解の處がある。文政中大田南畝が「補三十輻」の叢書に編入した際校訂をした筈であるが、なほ整はぬふしが少くない。〔和田〕

參會名護屋（さんくわいなごや）　脚本　四幕【作者】中村明石清三郎、初代市川團十郎【名稱】角書は惠方男勢梅宿とある。惠方男は不破伴左衞門、勢梅宿は梅津掃部と思はれ、名護屋は勿論名護屋山三郎で、卽ちこれ等三人がめでたく出會ふ意味を利かせ、兼ねて團十郎の江戸下りを含めたものと思ふ。また三番目の島原廓の鞘當の場面が暗示されてゐるらしい。【諸本】狂言本として元祿十年二月上旬堺町かいふ屋から刊行された。これが元祿歌舞伎傑作集上卷に收められてゐる。挿畫は、鳥居清信か。【興行】元祿十年正月、江戸中村座上演、四番續。團十郎が上方から江戸に歸つた時の初狂言であると傳へる。

〔役割〕名護屋山三郎（村山四郎次）、赤松入道（中島勘左衞門）、仁木入道（田村平八）、正親町太宰之丞（山中平九郎）、櫻丸（生島大吉）、山名左衞門（大熊宇太右衞門）、山名三木之丞（市川團之丞）、葛城（荻野澤之丞）、不破伴左衞門（市川團十郎）、女房梅が枝（袖岡政之介）、不破伴作（中村勘三郎）、梅津掃部（中村傳九郎）等。

【梗概】〔序幕〕（足利館）春王世繼の祝儀で、春駒の踊等ある。叔父太宰は仁木入道と共に雲拂の寶劍を奪ふ策を構へる。一味の座頭は寶藏の傍なる用水を祈禱する必要があると說く。（寶藏前）山名三木之丞が、名護屋山三郎と寶藏番に詰めてゐる所へ、照姫が來て一命を賭しての三木之丞への戀の訴へに、山三郎が仲立で二人を契らせた。番替りで山名左衞門と仁木入道が來たので、姫は藏に隱れると、外から錠をさゝれて了つた。これを救ひ出さうとして三木之丞は寶劍の紛失で咎められたので、姫も悲歎の餘り用水に投身した所が、救はれると同時に寶劍の賊が捕はれ、太宰・仁木の惡事が發かれる。（館の庭前）三木之丞は危く拷問にかけられる所を山三に救はれ、却つて惡人等が悉く追放に處せられる。姫は三木之丞との戀が叶へられた。〔二幕〕（北野社頭）惠方で參詣の賑はふ折から、太宰の一行が來て、雷の劍を奉納せんとする。見ると、大福帳の繪馬があるので、これを引下さうとすると、「暫く」と聲がかゝり、伴左衞門が現はれて大福帳の德を說き、太宰を抑へる。太宰は伴左を味方に誘つて、却つて斬りかけられる。折から參詣の春王も、太宰が酒宴に託した毒殺から、危くも免かれる。（好色庵）病に籠る北野社人の掃部は、若衆櫻丸の見舞をうけながらも、恰も山三を尋ねて來た葛城を口說く。山名左衞門が赤松と仁木を捕へて長持に打込む。〔三幕〕（島原廓）山三は伴作と柏木との仲を執り持つたが、自身は葛城との戀路に町人姿にやつしてゐる。伴左は女房を若衆姿に仕立て、山三を尋ねて廓に來たが、偶々三木之丞を連れた山三と知らず、鞘當を咎める。そこへ掃部が落合つて裁き、三人笠をとつて驚く。伴左の扱ひで、葛城身請の話が成立する。（揚屋）伴左に口說かれて怨み逃げ廻つた葛城は、實は山三のためにわが心を試されたと知つて改めて伴左に詫び、亂した伴左の髮を梳いてやる。鏡に映る女の容姿に、伴左の心は漸く動いた。遂に女に迫り、指を切つて實意を示した。葛城からこれを聞いた山三は、怒つて伴左を草履で叩いた。その仕打を憤つて、伴左夫婦は二人を呪つて自害した。〔四幕〕（北野七本松）山三・葛城も、心中を遂げる覺悟でこゝに辿り着き、傍の僧に最後の回向を賴んでゐる所へ、三木之丞等が追つて來て歸參を勸める。それを聞いた僧が斬りかけて却つて討たれる。僧は太宰の成れの果であつた。（山三屋敷）葛城は伴左の靈に、山三も嘗て契つた女の靈に惱まされてゐる。掃部の祈に黑雲が立ち去つたかと見えたが、雲中に現はれた七頭の牛には、太宰一味が跨つて楠の姿を見せる。北方には伴左が現はれて實は鍾馗の姿を見せ、楠を斬り從へ、始めて天下泰平を喜ぶ。

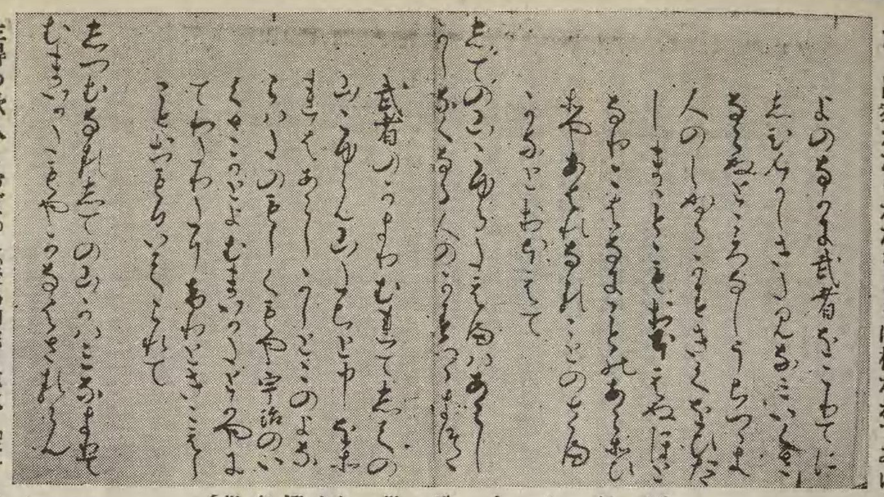
【脚色】江戸に古くからある不破名護屋の狂言に過ぎぬが、各場面の配合、或は部分的の脚色には勝れた多くのものを持つて、效果的な傑作である。殊に部分的には後世へ幾多の型を殘してゐるので、二番目から「暫」（別項）、三番目から「鞘當」「髮梳」「草履打」、四番目から「大森彥七」（別項）「鍾馗」等が算へられ、市川家の歌舞伎十八番（別項）中にも本作を嚆矢とするものが發見せられる。それ等の中で、現存する型が殆ど本作の樣式の儘を傳へたもののある事は、部分的であるとはいへ、一の完成を持つた脚色の價値を語るものである。なほ江戸歌舞伎でありながら、廓を島原としてゐるのは、古くから系統をひいた所謂島原歌舞伎の脚色の名殘と思はれる。特に當狂言本として考慮すべきは、本書が江戸の所謂狂言本としての最初の刊行らしい點である。從來も狂言本と稱するものの刊行はあつたが、脚色內容卽ち筋には觸れぬものであつたらしく、本書奧附にその斷りが記されてゐるので、これを文字通り信ずれば、本書は狂言本の書史的價値の頗る高いものとなる。（中村明石清三郎・三升屋兵庫・不破名護屋參照）〔守隨〕

散樂（さんがく）　舞樂【名義】古說には、「周禮」の春官に、「旄人掌ㇾ敎ㇾ舞ㇾ散樂一舞ㇾ夷樂上」とあり、その賈公彥の疏に「以ㇾ其不ㇾ在ㇾ官之員內一謂ㇾ之爲ㇾ散」とあるに依つて、散樂の名稱の起原と信じてゐたが、この名稱は決して古代にあるものではなく、中世に發生したのであつて、最近に河口慧海氏は、西藏佛教語の研究からその起原を發見した。その說に依る

散樂（正倉院藏彈弓の圖に據る）

と、印度の佛教語のサンローに、支那で散樂の文字を當てたものであつて、その語の意味は、「新しい戲樂」といふことである。【性質】杜佑の「通典」に、「散樂非二部伍之聲一、俳優歌舞雜奏」とあり、即ち俳優や侏儒が滑稽な戲を行ひ、又は奇藝などをなしたもので、當時印度・波斯・中央アジア等に於て最も盛行した種類の舞樂であつたらしい。「通典」には大面（代面とも書く、蘭陵王入陣曲）、撥頭（拔頭と同じ）、踏搖娘（醜夫、醉うてその妻を毆り、美色ある妻泣いてこれを訴へる戲）、窟儡子又は魁儡子（偶人を舞はしめるもの）等の種類を掲げてあるが、「文獻通考」には、これに加へて樊噲排闥戲・角力戲・瞋面戲・衝狹戲・透劍門戲・蹴鞠戲・蹴毬戲・踏毬戲・絙戲・劇戲・五鳳戲・猴騎戲・鳳皇戲・參軍戲・假婦戲・蘇葩戲・都盧伎・鳳書伎・藏挾伎・雜旋伎・弄槍伎・蹴瓶伎・擎戴伎・拗腰伎・飛彈伎等の多くが擧げられてゐる。信西古樂圖の中にある入壺舞・猿樂通金輪・飲刀子舞・四人重立・吐火舞・抑格倒立・神娃登繩弄玉・弄劍・三童重立・抑肩倒立・弄玉・臥劍上舞・入馬腹舞などは、孰れもこの散樂に屬するものらしい。我が國に傳來した劍氣渾脫・輪鼓渾脫などの樂も亦それである。

【沿革】「通典」には「散樂、隋以前謂二之百戲一」とあり、又「大抵散樂雜戲多幻術、皆出二西域一」とあつて、もとそれが印度・波斯・中央アジア地方にあつたものである事は、前に掲げた多くの戲藝が皆それ等地方の特有のものである事に依つて知られる。併しこれ等の樂は支那には可なり古くから入つて行はれてゐたものらしく、「禮記」の樂記に、魏の文侯が子夏に問うた語に、「禮記」の樂記に、魏の文侯が子夏に問うた語に、「子夏曰、今之樂、則進旅旋、[illegible]、[illegible]、[illegible]



西行上人歌集（伊達家蔵）

集」は尾崎雅嘉により、西行自撰と云はれてゐるが、尾山篤二郎氏は、「自撰歌集とすれば、他の箇所は兎も角もとして、雜の部がもつと整備されてゐなくてはならぬ筈である」と云つてゐる。又西行の歌は「おもしろくて、しかもこゝろもことにふかくてあはれなる、ありがたく出來がたきかたもともに相かねてみゆ。生得の歌人とおぼゆ」（後鳥羽院口傳）、「近くは西行があとをまなぶべし。其樣は別の事にあらず。たゞ詞をかざらずして、ふつゝといひたるがききよきなり」（八雲御抄）など言ひ、當時絢爛の歌風の中にあつて、平明枯淡、技巧に捉はれざる中に力があるのを稱した。本集の中の題詠歌には、時風がないではないが、なほ自然に對する感懷を詠じたものに、その本色を見るのである。句法としては、三句切の歌多く、擬人法などを用ひ、間々口語もしくは方言をも交へ、特に異本山家集の追加の部分や、伊達家本「西行上人歌集」などには、特殊なる語彙を驅使した作を見るのである。

【價値】六家集中での特色をいへば、その組織が他の五集と異ること、即ち百首や歌合の歌を中心としての編次でないこと。歌風は時流と異なり自然の愛をたゝへ、平淡にして崇高の風格あることなど、和歌史上の特殊な存在として注意すべく、又その語彙の自由なことは、國語史上の研究にも好資料を有するものである。【影響】歌そのものの影響と云はんより、西行の人と爲りとその生活とは、後世の文學に大きな影響を與へた。特に西行の自然愛好の態度は、宗祇、ついで芭蕉へと繼承されてゐる。（西行參照）

【註釋書】增補山家集抄寫五卷（僧固淨著。首卷に西行傳を掲げ、四季部のみを註解したもの。寛政七年西行上人六百年忌に新刻した）○山家集詳解刊一册（梅澤和軒著。前書を校訂し、固淨の小傳、西行聖人傳等を加へて成れるもの。明治四十四年興文館版）（松浦）

【參考】山家集研究　齋藤清衛（日本文學講座）

山家鳥蟲歌（さんかてうちゆうか）　俚謠集　上下二册

【編者】不明。種彥は所藏本の序に、寛文の頃後水尾院が諸國に勅して盆踊の歌を集められたのだといふが疑はしいといつてゐる。いつ頃の歌を輯めたのか明かでないが、元祿・寶永を下るものではなささうに思はれる。五畿内の歌だけが多くて、東國地方の歌の少い所から思ふと、京阪地方の人の輯錄でもあらうか。【刊行】明和八年冬、天中原長常兩山の序を卷首において刊行。【解說】上卷には、五畿内、東海・東山兩道諸國の歌二百十首、下卷には他の諸國の歌百八十四首を收めてある。又上卷に見通し四面の挿畫があつて、それに一首づつ次の如き歌がある。

年たち歸る春なれや木のめもめだつ花も咲く。
さがみ横山てるての姫は妻のためとて車ひく。
我もむかでを射てとりてたはら藤太の米ほしや。
浪もしづかに御代治りて臼ひき歌はよもつきじ。

下卷も恐らく挿繪があつたのであらう（刊本未見）。我自刊我本に諸國盆踊唱歌と題して收めてからは（近江・美濃・飛驒・信濃・上野の分缺）、一切を盆踊歌の如くに解して來たが、臼挽歌ともあれば、必ずしもさうとは定め難い。けれども田園僻地に於ける屋外舞踏の歌、夜の歌、男女唱和の場の歌とも解せられるのが多いためにさう考へられたのであらう。踊歌や長持唄や地搗唄に用ひられる祝の歌もあり、野趣横溢のものもあるが、

知つて居れども人に又問うて、母の差圖で迎へ取れ。（駿河）
嫁をかはいがれ嫁こそかゝれ、娘他國の人の嫁。（和泉）
あきもあかれもせぬ中なれど、暇やります親ゆゑに。（河内）
いなしよ〳〵と思うたうちに、太郎が生れていなされぬ。（隱岐）

の如き、諫戒や告白に成るものが尠からずある。更に深刻痛快なものには、

金が威光の太平顏も、昨日限りの三途川。（伯耆）
後生を願やれぢ樣とは樣、年より來いとの鳥がなく。（和泉）

の如きがあり、輕快好笑的なものには、

若いせなごの願かけるのは、神や佛も可笑しかろ。（大和）
橋の擬寶珠を五兵衞かと思て、既に言葉をかけうとしたが、さんしよくて、こせうくて見れば、いとこ同士やら似て辛い。サンセウノセイ。（陸奥）

の類がある。確かに民謠で、戀愛が六分に祝賀が二分、他の二分が教訓や洒落や追懷で出來てゐる。歌形は、概ね七七七五の形であるが、まゝ七五七五形や橋の擬寶珠の如きやゝ長いものもある。

【參考】近代歌謠集　藤井紫影校訂○日本歌謠史　高野辰之○日本歌謠集成卷七

三勝半七（さんかつはんしち）

「笠屋三勝廿五年忌」（高野）「臺頭（だいとう）霞彩幕（かすみのいろもく）」を見よ。

三賀莊曾我島臺（さんがのしやうそがのしまだい）　脚本

七幕二十四場　時代世話物【作者】四代鶴屋南北【通稱】笹野權三、お千代半兵衞【名稱】三組の世話物の世界を曾我にかよはせて三賀莊と据ゑ、春狂言を祝つて島臺と綴つた。【諸本】大南北全集第十卷所收【興行】文政四年一月十五日初日、江戸河原崎座。

【役割】源五兵衞女房小萬・八百屋下女おさん（中村大吉）、古鐵買ひ彌助・八右衞門同心西心・八百屋母お虎（嵐冠十郎）、出石千太郎・八百屋丁稚松太（尾上多見藏）、近江小藤太成家・鬱田檢校伊仙（大谷門藏）、八幡三郎行氏（中村十藏）、出石宅左衞門（市川門三郎）、百足屋金兵衞・賤ヶ谷伴右衞門（淺尾友藏）、腰元二の宮後に藝者鶴吉（市川瀧三郎）、千葉奥方星の井（市川瀧之助）、判人大磯屋傳三（坂東善次）、彌助女房お米（岩井梅藏）、源五兵衞娘お雪・半兵衞女房お千代・汐入村おみの（市川門之助）、薩摩源五兵衞・野伏り庚申塚の嘉十・曾我五郎時致（二代關三十郎）、笹野權三郎・八百屋半兵衞・工藤左衞門祐經（三代尾上菊五郎）。

【題材】近松の「薩摩歌」「心中宵庚申」「鑓權三重帷子」（各別項）を組み合せて世界を定めた

が、内容は全然南北の創意にかゝる。

【梗概】『一番目』〔序幕〕（鎌倉千葉屋敷）賤ケ谷伴右衞門は笹野權三の色香に迷ひ、惡事を企む。（家中源五兵衞宅）源五兵衞が權三の色香に迷ふを知つた女房小萬は、娘お雪に權三を配しようとするが、伴右衞門が小萬に戀慕した事から、源五兵衞は却つて小萬權三の仲を怪しむ。（千葉家奥殿）賴家公の仰せで、妙見へ奉納の額を權三が認める事になる。（源五兵衞宅）權三はそのために小萬から筆道傳授を受けるが、その隙に天國の短刀と折紙を下部彌助に奪はれ、剩へ伴右衞門のために再び不義の汚名を受けた。二人は遂に寶詮議に家出する。出石千太郎と二の宮が色模樣の間に、彌助は千太郎が預つてゐた月星の畫像まで盜む。（千葉家御殿）源五兵衞は二人の不義と寶紛失で屋敷を追はれる。伴右衞門も出石宅左衞門に惡事を見出される。（小袋坂）彌助は千太郎に傷を負はして二の宮を奪ひ立退く。八百屋半兵衞は千太郎を介抱する。〔二幕〕（箱根山）源五兵衞は小萬との仲の赤子を抱いて來かゝり、雲助の惡者と立廻る。（山中彌助隱れ家）小萬權三は彌助を惡人と知らず匿まはれる。短刀折紙の、質受けの金に詰まり、權三が女の衣裳を引かけた姿を女と間違はれしを幸ひ、女となつて判人傳三に賣られる。その金は彌助が着服する。源五兵衞は小萬を捜し當てたが、彌助が調合した毒藥を服んで聾になり、小萬と誤つて彌助女房お米を殺す。（谷底）お雪は盲目となり、小萬に逢つたが、小萬は見捨てて逃げる。〔大詰〕（箱根歴王權現）人見御供の框の中に時致がゐて、美人に扮した兩經と對面。近江八幡の迎ひ。

たお虎にお千代・おさん。乞食嘉十はお千代に見惚れる。響田檢校は短刀折紙を彌助から預かり、百足屋金兵衞と横領の相談。（根岸道）お千代・おさんの雨宿り、嘉十が送る。（お行の松不動尊）嘉十がお千代を無理口説きに、是非なくおさんが身替りに立つ。〔二幕〕（深川金英樓）女按摩になつたお雪は、偶然檢校の持つ天國を手に入れる。女姿の權三は小鍋といふ女郎になつて出で、小萬は稻野谷半兵衞と男裝して通ふ。藝者鶴吉となつた二の宮と千太郎の色模樣。（芥川）小萬・權三は業平と二條の君の姿で濡れ事。（金英樓）夢に言ひ交した二人の後悔。お雪に對面。（小座敷）小鍋の權三は、響田檢校から彌助の惡事を聞き、二品詮議のために檢校はじめ大勢を斬る。（靈巖寺境内）聾の源五兵衞は、短刀欲しさに盲目のお雪を娘と知らずに斬り、落雷のために聾は癒えたが、天國は川へ落ちる。（深川猪の堀）小萬は彌助に口説かれ、川へ落ちる。權三が來て彌助を斬り、川から天國は得たが、折紙が無いゆゑ再び逃走。〔三幕〕（山谷八百屋）嘉十はお虎の實子ゆゑ入り込んで半兵衞を追ひ出し、お千代と夫婦にならうとする。權三の姉であるお千代は、父の仇と嘉十を斬る。お虎も我が手に盛つた毒藥を知らずに呑んで死ぬ。おさんはその罪を被て宅左衞門に引かれる。〔大詰〕（山谷庵室）川へ落ちた小萬は實父西心に助けられる。權三も來て小萬と共に源五兵衞の手にかゝり、天國を戻す。（汐入村）千太郎・鶴吉の道行に、紙漉き女おみの搦む。清元「旨就宵庚申」。（淺茅ケ原）半兵衞・お千代の道行。（大川端）二人と源五兵衞が會して短刀折紙畫像も手に入る。

【解説】貞高の作は、極狂言だけに見逃がせるが、小萬・源五兵衞とお千代・半兵衞の二つの世界に分けたのは、南北が常套の技巧で複雜過ぎる。權三が女と間違へられて賣られ、後に刃物三昧になるのは、後の「御國入曾我中村」と同巧であるが老手である。女姿の權三が多勢を斬る金英樓の幕は、情痴と慘酷を交錯した南北の長所を發揮して面白いが、その外は複雜に過ぎる。〔遲美〕

三管（さんくわん）　樂器　【解説】雅樂の管絃合奏に於ける三種の管樂器、即ち横笛と篳篥と笙（各別項）との總稱。この三器は管絃合奏に於て常に相組んで樂曲の主要なる旋律を奏するもので、即ちその主奏樂器と見ることが出來る。詳しく言へば横笛と篳篥とは相組んで旋律を奏し、笙はこれに和聲を附けるのである。それでこの三管は相纏まつて他の打物や絃樂器に補導されて合奏が進行して行く。而して管絃合奏に際し、三管を各一個づつ（即ち笛一、篳篥一、笙一）用ひる時は、これを「一管通り」といひ、各二個づつ（即ち笛二、篳篥二、笙二）用ひる時は、これを「二管通り」といひ、各三個づつ用ひる時はこれを「三管通り」といふ。大合奏に於ては二管通り又は三管通りを用ひるのを普通とする。この際に、笛・篳篥・笙の各々に於て、その主導者一人づつを置く。これを音頭（おんどう）といふ。もし獨奏する時は、音頭一人これを行ふ。曲を終る時の止め手も亦同じ。樂家にして三管全部を習得する者も屢々あるが、普通はその中の或る一種をその家の專業とし、例へば笛の家、或は篳篥の家、或は笙の家としてこれを修業し、以てその子孫に傳へることになつてゐる。〔田邊〕

三幹竹（さんかん）　俳人　【姓名】名和香寶【略歴】明治二十六年三月四日、山形縣西村山郡谷地町に生る。大正七年大谷大學を卒業。俳句は初め碧梧桐の選評を受け、後乙字に師事し、句佛の麾下にあつて「懸葵」の編輯に携はり今日に至つてゐるが、傍ら乙字の晩年から同誌の雜詠選にも從ひ、乙字歿後は山梔子・夜濤と交替に雜詠選に從つてゐる。【編著】四明句集○月嶺句集○乙字句集（山梔子と共編）○懸葵第一句集等がある。〔白田〕

三議一統大雙紙（さんぎいつとうおほぞうし）　故實二卷【別名】當家弓法集【著者】序文に、足利將軍義滿が小笠原兵庫助長秀・今川左京大夫氏賴・伊勢武藏守滿忠の三人に命じて撰せしめたので、三議一統と名づけたと見えてゐるが、氏賴・滿忠の名が兩氏系圖に見えないのと、文體が將軍の命を奉じて記したものとは見えないのとによつて、伊勢貞丈はこの書を小笠原長秀一人の隨筆で、それで當家弓法集と名づけたのを、後人がこの書を尊からしめようとして、將軍下命の下に、足利時代故實・禮法の三家が合議決定したものとなして、序及び續以爲家門を作爲したものである旨を辨じてゐる。【内容】足利時代の武家禮式を說いた書で、續以爲家・法量・騎射・步射・供奉・宮仕・奏者・馬法・蹴鞠・饌部・筆法・實檢の十二門に分つて、禮法・武器・衣食・書札・遊戯等、諸般の事に亙つて式法を說いたものである。〔石村〕

【參考】三議一統之辨　伊勢貞丈

殘菊（ざんぎく）　小說【作者】廣津柳浪【刊行】明治二十二年十月「新著百種」第六號。【梗概】十六の冬、從兄の小太郎を迎へて人妻となつたお香は、新婚生活も僅か半歲足らずで官命で洋行する良人を悲喜交々まじる心で見送らねばならなかつたが、その時には既にたぜなられの身になつてゐた。やがて産れた初

繼を嘆き」の慰めとして、母親と留守を守つて日を暮してゐるうち、早くもお蝶は三つになり、待ち詫びた良人の歸朝もこの秋といふまでになつた。その十九の春――お香は喀血してどつと病の床に就いたが、それは不幸にも肺結核に違ひなかつた。しかしお蝶は良人や母親のためにどうしても死ぬまいとする張りつめた氣持からか、病は次第に怠つて夏の終りには起床するまでになつた。ところがふとした過失からぶり返して、再度喀血してからは病勢急進して、良人の歸朝を目前に控へながら自ら絶望を悟るやうになつた。呼吸も迫

三曉庵雜志（さんげうあんざつし）　「三曉庵隨筆」を見よ。

三曉庵隨筆（さんげうあんずいひつ）　隨筆　三卷【著者】木村時員【別名】一に「三曉庵雜志」とも。【諸本】大田南畝の「三十輯」の補編に收めても、又單行本としても傳寫されてゐたが、大正六年國書刊行會で「三十輯」を複刊の際、その第四册に編入して上刊した。又「日本書畫苑」にも收められた。【解説】繪畫・茶道・書道及び禪門に名ある人々の逸事幷にその道々の

である。しかもこの作が多くの選集に洩れてゐるのは、作者がこれを「のデッサンとして試作視してゐた故ではなからうか。〔水木〕

名氏の序、寶曆十二年圓昌疎山の跋がある。「三曉談話」（別項）と元は同一であつたものらしいが、記事に多くの出入があつて、全く別本と見られる。〔和田〕

三經義疏（さんぎやうぎしよ）　佛教書　【著者】聖德太子。太子の御著たることに就いては、古來その眞僞を疑ふものもあつたが、近時各方面よりの史的研究によつて、それが確められた。【名稱】「法華經義疏」四卷、「維摩經義疏」三卷、「勝鬘經義疏」一卷の三疏をいふ。【成立】本疏の製作年代に就いては、「傳曆」及び「補闕

せられたのであつて、この見地から當時の大陸佛教を批判し、吸收せられたのである。三經を選擇せられた理由も、亦此處に存するので、當時大陸に行はれてゐた一代教判釋の例を參考として、太子御自身の判教を立て、その中に於て特に三經を選出せられたものであらう。太子が「法華經」を重んぜられたことは、いろ〳〵の方面に於て見られるが、就中十七憲法によく現はれてゐる。憲法第三條に、「君則レ天之、臣則レ地之、天覆地載、四時順行、萬

緑を嗅ぐ」の慰めとして、母親と留守を守つて日を暮してゐるうち、早くもお蝶は三つになり、待ち詫びた良人の歸朝もこの秋といふまでになつた。その十九の春――お香は喀血してどつと病の床に就いたが、それは不幸にも肺結核に違ひなかつた。しかしお蝶は良人や母親のためにどうしても死ぬまいとする張りつめた氣持からか、病は次第に怠つて夏の終りには起床するまでになつた。ところがふとした過失からぶり返して、再度喀血してからは病勢急進して、良人の歸朝を目前に控へながら自ら絶望を悟るやうになつた。呼吸も迫り苦惱も烈しく、ただ過去・現在・未來に亙る妄想がしきりに湧き亂れ、遂に昏睡の淵に沈んだ――と思つたら、夜が明けたやうに氣も晴々と、枕頭にはお蝶を抱いた良人がゐるのであつた。

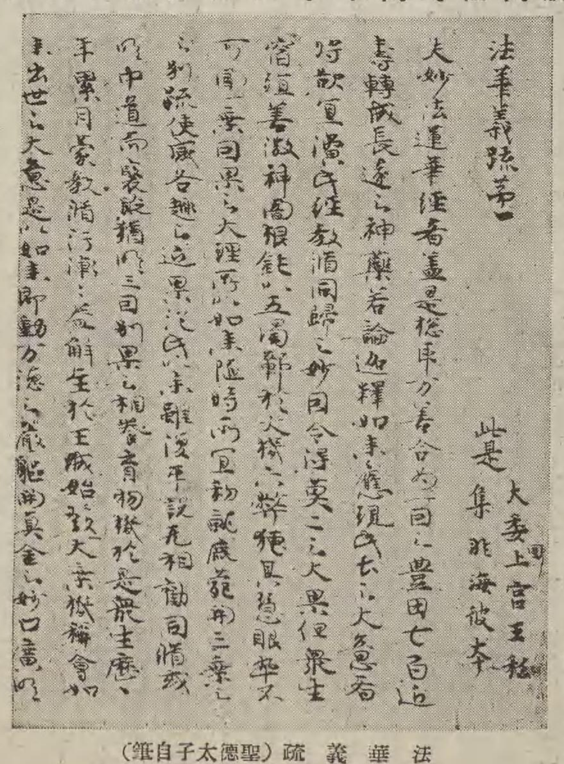
【批評】別に小說的脚色もなく、若い母の經驗を自叙體にした物語であるが、筋本位の作品しかなかつた當時としては珍重すべき所產たるを失はない。作者の極く初期の作品であつて、所謂深刻小說に間々見受ける偏執味もなく、肺結核患者の症狀とその心理を寫實的態度を以て精寫せんとしたものである。蘆花の「不如歸」(別項)に依つてポピュラアとなり、宛も浪漫的な新時代の病氣とされるに至つた肺結核が、その十年以前に作者がすでに描出を試みてゐることは注目すべきである。更にこの作品に於て擧ぐべきは、物語が平叙的であると共に、文體が非常にこなれた言文一致を成してゐることである。この早き時代に、かくまで自然的語調を以て叙述し得たのは偉としなければならないし、同時に、後年會話に異常な手腕を見せた作者の特質を示すものである。しかもこの作が多くの選集に洩れてゐるのは、作者がこれを一のデッサンとして試作視してゐた故ではなからうか。〔水木〕

三曉庵雜志（さんげうあんざつし）「三曉庵隨筆」を見よ。

三曉庵隨筆（さんげうあんずゐひつ）隨筆 三卷【著者】木村時員【別名】一に「三曉庵雜志」とも。【諸本】大田南畝の「三十輻」の補編に收めても、又單行本としても傳寫されてゐたが、大正六年國書刊行會で「三十輻」を複刊の際、その第四册に編入して上刊した。又「日本書畫苑」にも收められた。【解說】繪畫・茶道・書道及び禪門に名ある人々の逸事幷にその道々の逸話類を輯錄したもので、上卷には有明の御會の事以下五十一則、中卷には水劍の事以下八十七則、下卷には愛宕連歌の事以下六十六則を收めてある。繪畫については、宋徽宗皇帝・牧溪・雪舟・秋月・等薩・元信・探幽・尙信・興意・蛇足・松花堂・守景等の事、茶道については、ノ觀・利休・小堀權十郎等、書道については眞幸の正眞・北島雪山・石川丈山等、禪僧については、一休・雲居・盤珪・默室・澤庵・隱元・卽非・獨立・獨照・心越等の事を敍してゐる。序跋は無い。〔和田〕

三曉庵隨筆（さんげうあんずゐひつ）隨筆 二卷 寫【著者】橋口靜隱【解說】寶曆頃の薩摩の人で、繪技に遊び又禪僧に就いて參禪した事のある著者(以上の外、傳未詳)の隨筆で、島津義弘等薩藩主從の事、雲居・南的・鼓山・盤珪・默室・澤庵・隱元・卽非等、雪舟・秋月・探幽・安信・尙信・興以・蛇足等、石川丈山・眞幸正眞(幽眠)・利休・ノ觀・織田貞室・烏丸光廣・中院通村、その他、文墨風雅の人々多數の逸話を擧げ、まゝ名物茶器(平野肩衝・鶴首茶入・曜變茶椀等)の記事及び有職事項を交へてゐる。無名氏の序、寶曆十二年禰昌疎山の跋がある。「三曉談話」(別項)と元は同一であつたものらしいが、記事に多くの出入があつて、全く別本と見られる。〔和田〕

三經義疏（さんぎやうぎしよ）佛敎書【著者】聖德太子。太子の御著たることに就いては、古來その眞僞を疑ふものもあつたが、近時各方面よりの史的研究によつて、それが確められた。【名稱】「法華經義疏」四卷、「維摩經義疏」三卷、「勝鬘經義疏」一卷の三疏をいふ。【成立】本疏の製作年代に就いては、「傳曆」及び「補闕記」に記すところ、ほぼ一致し、ともに明細な時日が記されてゐる。「補闕記」に依れば、推古天皇十七年四月八日より十九年正月二十五日に至る間に「勝鬘經」を、二十年正月十九日より二十一年九月十五日に至る間に「維摩經」を、二十二年正月八日より二十三年四月十五日に至る間に「法華經」を註釋し、その疏を完成せられた。卽ち太子の、御年三十六から四十二に至る七年間で、最も精力のある、且つ最も圓熟せられた時期の御作である。成立の理由に就いては、第一には太子御自身の信仰內容により、第二には太子と大陸との關係交涉によつて決せらるべき問題である。太子は大乘佛敎主義に立つて、煩惱卽菩提・凡聖不二を理想とし、理論のみに止まらず、寧ろ實踐を重んじ、小乘的出家主義を排して、よりよき國土の建設に向つて精進せられたのであつて、この見地から當時の大陸佛敎を批判し、吸收せられたのである。三經を選擇せられた理由も、亦此處に存するので、當時大陸に行はれてゐた一代敎判釋の例を參考として、太子御自身の判敎を立て、その中に於て特に三經を選出せられたものであらう。太子が「法華經」を重んぜられたことは、いろ〳〵の方面に於て見られるが、就中十七憲法によく現はれてゐる。憲法第三條に、「君則レ天之、臣則レ地之、天覆地載、四時順行、萬氣得レ通」といひ、第十二條に、「國靡二君一、民無二兩主一、率土兆民、以レ王爲レ主」といふ意味は、「法華經」の法身常住の說に基いて、君臣の別を明かにし、以て我が皇運の天壤無窮を表はさんとしたものといふべく、第七條に「世少二生知一、尅念作レ聖、事無二大小一、得レ人必治、時無二急緩一、遇レ賢自寬、因レ此國家永久、社稷勿レ危」といひ、又第十二條に、「國司國造勿レ斂二百姓一、所レ任官司、皆是王臣」とあるのは、「法華經」の衆生平等の哲理を根據として、庶



法華義疏（聖德太子自筆）

民平等、人材登用の説を高調し、以て當時の氏族跋扈の弊を矯めんと試みられたものと考へられる。實にこれに依つて、我が國體の基礎が確定されたと言つても、敢て過言ではなく、その我が國後世に及ぼす影響は、蓋し甚大なりと言はなければならぬ。次に在俗の女人を主題とする「勝鬘經」を、女帝推古天皇のために、同じく俗形の居士維摩の説法たる「維摩經」を、太子御自身のための生活原理とせられたことは、容易に推察することができる。而して「勝鬘經」に就いては、單に推古天皇のためのみならず、太子御生涯の指導原理とせられたのではなかつたらうか。何となれば、本經に説く三大願・十大受が、極めて世間的大乘的であつて、太子の御經歴とよく一致するからである。今、三大願に就いて見れば、第一大願に「一切衆生に正法智を得せしめん」とは、太子が佛教研究に從事せられたことに相當し、第二大願に「衆生のために説法せん」とは、太子の三經を講ぜられ、疏を製せられたことに當り、第三大願に「身命を捨てゝ正法を護持せん」とは、法隆寺・四天王寺等の寺院を建立せられ、佛法弘通に力を盡されたことに相當すると思はれる。三經選定の過程に就いては以上の如くであるが、三經中、何を主とし何を傍とせられたかといふことは、不必要のことであり、且つ不可能の事に屬する。ただ三經中「法華」は主として宗教的哲學的力として太子の各方面に現れ、「勝鬘」「維摩」の兩經は、概して太子の實生活中にその跡が窺はれるといふことが出來る。【諸本】三疏の原本に就いては、三書中、「法華經義疏」のみは、その御自筆本を存し、宮中に秘せられて

回に亙つて、書寫せられ又は上梓せられて、三本共に完全に後世に傳へられ、現に大藏經中に收められてゐる。大正新修大藏經第五十一卷續經疏部一所收。外に聖德太子御製法華義疏（岩波文庫）及び、太子自筆稿本「法華經義疏」（玻璃版複製）等がある。

【内容】太子の研究態度は、頗る批判的科學的であつて、冗長を除き簡明を旨とせられた。その所依となつたのは、大陸學匠の疏釋であるが、更に佛書以外に、「論語」「老子」「左傳」「書經」等の外典をも、その疏中に引用されてゐる。「書紀」に、佛典を高麗僧慧慈に、外典を博士覺哿に學ばれ、共に通達せられたといひ、「帝説」には、「能悟ニ涅槃常住五種佛性之理一、明開ニ法華三車權實二智之趣一、通ニ達維摩不思議解脫之宗一、且知ニ經部薩婆多兩家之辨一、亦知ニ三玄五經之旨一、並照ニ天文地理之道一」とある通り、太子は廣く内外の學に通じてをられたことが判る。涅槃五種佛性といふのは、「涅槃經」に基づく十二因緣中心の五佛性説で、梁の智藏・僧旻を經て、隋の吉藏の重要教義となり、法華三車は、同じく吉藏の主張したものであつた。この點から見て、太子の佛教と吉藏のそれとの間には、密接の關係のあつた事を推察せしめる。先づ「勝鬘疏」については、その本經は宋の求那跋陀羅の譯本で、本疏の所々に本義云と言ひ、又眞實功德章の下に、法雲法師云と言つてある。凝然の「詳玄記」（一五）に、「初擧ニ本義一、卽ニ光宅所釋之義一」とあるよりすれば、本義といひ、法雲法師といふのは、光宅法雲を指すものの如く見えるが、併し光宅法雲に「勝鬘經」の註があつたといふ記事はないから、恐らく法雲の「法華義記」から

本疏には、他に何等の書名も人名も引かれてゐないから、太子は全く獨立にその疏を造られたわけであつて、本經が三經中最も短い經なるにも拘らず、逆に最長時間を要した理由も、これに依つて納得される。尤も北周の淨影寺慧遠に、既にこの經の義記があり、又最近燉煌地方に於て發掘された經論中に、「勝鬘經義記」「維摩經義記」「法華經義記」等の寫本の斷片を存し、何れも太子御出生前約六七十年のものであるから、太子は一應これ等をも御覽になつたであらうが、別に引用文のない所からすれば、これ等の註釋は特に所依とするに足らない程度のものであつたかも知れない。本疏一乘章の下に於て、三寶の意を説明し、別體三寶は所謂梯橙三寶であつて、究竟のものではなく、最極のものは一體三寶でなければならぬとし、この三寶を紹隆して永く國家を護る事が、太子の内治の御精神であつたのである。この事は太子の四節の意願に於て明かに知ることができる。「傳曆」下卷によれば推古天皇二十七年十月、太子病に罹らるゝや、天皇は大に憂慮あらせられ、太子をして思意する所を奏上せしめ給うた。その答として奉進したのが、四節の文で、その第一に曰く、「邦有ニ神珠一者、蠱魅莫レ侵レ之、國興ニ三寶一、亦有ニ何禍一哉、伏願　天皇遠以、覆ニ護伽藍一、紹ニ隆三寶一、久保ニ國家一。」同じく第二に、「二云、住ニ法隆學問寺一僧侶、每年九旬、令レ講ニ法華・勝鬘・維摩三部經一、法輪常轉、而濟ニ萬民一、紹ニ隆三寶一、以護ニ率土一。」とあるによつて、太子の御精神を窺ひ知ることが出來る。それから「維摩疏」の本經は、次の「法華經」と同樣に、桃奉經什の譯本に據つてゐる。本疏は別項に述べた如く、太子の御精神を窺ひ知ることが出來る。

の「註維摩經」十卷の文を引いてある所を見れば、本疏は專らこれに據られたことが明かに判る。併しこれに盲從することなく、私釋・私懷を附加してこれを批判してある。佛國品の下には、法空法師と中公なるものが、各一回引用されてゐる。凝然は「菴羅記」の中に、前者に就いて、法空法師とは、太子御在世の時に、百濟・新羅より來朝した本元興寺九僧正の一人で、三論宗に精しく、太子はこれに宗義を問はせられたといひ、後者に就いては、「言」中公ニ者、他國來朝、卽前一音諸師中一」といつてゐる。この凝然の語によれば、太子は同時代の碩學の説をも顧みられた事になるわけである。同じく佛國品に「無量壽經」を、弟子品には「乳光經」を引かれてをり、又佛書以外に「論語」「老子」「書經」等の儒書、并に「老」「莊」の書が、數回に亙つて引かれてゐる所からすれば、太子の如何に博聞達識であらせられたかを知る事ができる。最後に「法華疏」の本經は、前述の如く羅什譯に據られてゐる。本疏の所々に本義・本疏・本釋等として、光宅寺法雲の「法華經義記」八卷の文が引用されてゐる。法雲は太子生誕前四五十年頃の有名な學匠で、特に「法華」に通達してゐた。太子は單に「義記」の文を引用して居らるゝのみならず、註釋の廣略の點に至るまで、法雲の風に倣つて居られるので、太子のこれに據られたことは一見明かである。けれども、これに煩はされることなく、或は私釋小異とし、或は今不須等として、「義疏」の立場を明かにしてある。かくの如く、三疏中には數多の典籍を用ひられたが、これを引用するに當つては、前述の如く畑眼を以て一々これを批評し、取捨選擇して、決して盲從されることはなかつた。又太子は

當に講讃の態度を以て、先哲の説は十分に尊重され、強ひて新説を立てられるが如きことはなかつた。【影響】本疏は何れも立派な漢文で書かれてをり、恐らく漢文でものされた書物の初めであらう。また佛教史上よりすれば、佛教的文獻の最古のものであり、日本佛教の出發點となり、佛教國としての我が日本の基礎を成したものである。と同時に、言ひ得るならば、日本國體の進路も亦、これに依つて規定されたものである。卽ち太子の大乘主義の御精神の發露が、或は十七憲法となり、或は外交上に輝き、或は佛法弘通となり、延いては學問藝術の淵源となつたのである。三疏

圖珍も亦「諸家教相同異略集」に於て、支那・日本の十家を列ぶる第八に、大日本國上宮太子を擧げてゐる。鎌倉時代に至つて、三經學士凝然は、六十年間、太子三經疏の研究に沒頭し、遂に三疏に各々大部な註を造つた。卽ち乾元元年より翌嘉元元年に亙つて「勝鬘疏」を講じ、「詳玄記」十八卷を作り、正和元年より三年に亙つて「法華疏」を講じて、「慈光記」九十卷を作り、終に元應二年八十一歳にして「維摩經義疏菴羅記」四十卷を編んだ。又同時代の宗性は、「法華經上宮王義疏抄」二卷を作つて、太子の御精神を敷衍した。

【參考】三經義疏研究字説　法隆寺大月慧『佛教研究

藤一のもぢり。【刊行】天明三年【題材】天照大神・釋迦・孔子が遊里に赴き、老子に逢ふ趣向である。その他、子路・李白等も現れる。これは明かに「聖遊廓」（別項）の着想に倣つたのである。篇中に出て來る墨河は吉原妓樓扇屋の主人、鈴木宇右衞門である。

【梗概】孔子つら〳〵考へるに、今は昔と違ひ、しやれた世の中に青表紙の反古に縛られんよりは、時々巧言令色の通道をやつて見んと、日本の江戸昌平橋の出店に引越し、物髮を本田に結はせ、着物を長くし、細身の刀を帶び欣々然としてゐる。天照皇大神も甚だ遊

が聞える。大神、釋迦と行つて見ると、孔子「予が如き德行の通子に怖れをなすのか、閨隅に退て尸（しかば）の如くどぶさつてけつかる、危邦不入、亂邦不居こんな所に居ようより寧歸なん〳〵」など大聲で惡口をつき、もろこしがなだめるのも聞かず、蹴散らす拍子に唐紙はづれ、隣客の老子が顏を出す。釋迦「イヤ婆婆以來珍しい。」老子「通の通とすべきは常の通にあらず、四人一所に大道を歸らう」とうちつれ出づる所に、長崎屋の若者「ハイ御迎へに參りました。」

【構想】大神・釋迦・孔子の如きいかめしき人

常に講讃の態度を以て、先哲の說は十分に尊重され、强ひて新說を立てられるが如きことはなかつた。【影響】本疏は何れも立派な漢文で書かれてをり、恐らく漢文でものされた書物の初めであらう。また佛教史上よりすれば、佛教的文獻の最古のものであり、日本佛教の出發點となり、佛教國としての我が日本の基礎を成したものである。と同時に、言ひ得るならば、日本國體の進路も亦、これに依つて規定されたものである。即ち太子の大乘主義の御精神の發露が、或は十七憲法となり、或は外交上に輝き、或は佛法弘通となり、延いては學問藝術の淵源となつたのである。三疏の著はさるゝや、慧慈はその歸國に際して、これを本國に齎らし、流傳せしめたといふが、その後の事は明かでない。太子薨去後、約百五十年、我が寶龜八年に、日本國僧使誠明・得清等の八人が、大陸唐に航し、龍興寺の靈祐にこの疏を贈つた。これが學界に多く用ひられたものと見え、法雲寺明空は、太子の「勝鬘疏」に註を加へて、「勝鬘經疏義私鈔」六卷を作つた。日本の書が支那に於て註釋せられた初めである。この鈔は義疏の足らざるを補ひ、又は義疏の章句に更に註を加へたもので、大體に於て、太子の說を稱揚し敷衍してゐるが、折々反駁を加へたところもある。この鈔は太子の疏の鈔であるといふ所から、早くも慈覺大師によつて比叡山に傳へられた。弟子圓珍の跋に據れば、明空は天台六祖妙樂大師湛然の弟子であつて、慈覺入唐以前五六十年頃の人である。その後建長八年、西大寺の叡尊がこれを發見して、一本を書寫した。我が國に於ては最澄が日本天台を創唱するに當り、太子を以て法華經相承の先驅者として稱揚し、圓珍も亦「諸家教相同異略集」に於て、支那・日本の十家を列する第八に、大日本國上宮太子を擧げてゐる。鎌倉時代に至つて、三經學士凝然は、六十年間、太子三經疏の研究に沒頭し、遂に三疏に各々大部な註を造つた。即ち乾元元年より翌嘉元元年に亙つて「勝鬘疏」を講じ、「詳玄記」十八卷を作り、正和元年より三年に亙つて「法華疏」を講じて、「慈光記」九十卷を作り、終に元應二年八十一歲にして「維摩經義疏菴羅記」四十卷を編んだ。又同時代の宗性は、「法華經上宮王義疏抄」二卷を作つて、太子の御精神を敷衍した。

【參考】三經義疏研究序說 佐々木月樵（佛教研究二ノ二）○聖德太子の三部經疏に見えたる思想及其影響 中澤見明（史學雜誌三二）○聖德太子の法華義疏に就て 望月信亨（宗粹雜誌八ノ六）○上宮王御製三經義疏に就きて 今津洪嶽（佛書研究五）○上宮御製疏概說 橋川正（無盡燈二三ノ一・一二）○上宮御製疏の書史學的概說 日下無倫（佛教研究二ノ二）○法華義疏を讀みて 稻葉圓成（佛教研究二ノ二）○法華義疏を通じて聖德太子と大陸佛教との關係序說 花山信勝（宗教研究五ノ二）○聖德太子三經義疏の國文學的研究 黑上正一郎（國語と國文學六ノ七・八・一一・一二）○聖德太子御製法華義疏の研究 花山信勝 ○聖德太子御製法華義疏緒言（岩波文庫）同上 ○勝鬘經義疏を讀みて 金子大榮（佛教研究二ノ二）○維摩經義疏の研究 中島覺了（同上）○上宮御製疏と淨名玄論略述 橋川正（同上）○聖德太子維摩經義疏所依の註釋に就いて 寺崎修一（宗教研究五ノ四）〔常盤〕

三教色（さんけうしき）　洒落本　一册　【作者】唐來參和　【畫工】喜多川哥麿　【名稱】通神孔釋の角書は忠臣講釋のもぢり、書名は空海の「三教指歸」のもぢり。【刊行】天明三年　【題材】天照大神・釋迦・孔子が遊里に赴き、老子に逢ふ趣向である。その他、子路・李白等も現れる。これは明かに「聖遊廓」（別項）の着想に倣つたのである。篇中に出て來る墨河は吉原妓樓扇屋の主人、鈴木宇右衞門である。

【梗概】孔子つら〳〵考へるに、今は昔と違ひ、しやれた世の中に青表紙の反古に縛られんよりは、時々巧言令色の通道をやつて見んと、日本の江戸昌平橋の出店に引越し、惣髮を本田に結はせ、着物を長くし、細身の刀を帶び欣々然としてゐる。天照皇大神も甚だ遊蕩にまし〳〵、八百萬の神々これを心配し、神集ひに集ひ、高天原で相談して勘當したので、孔子宅に居候となつて居り、門弟の子路などと無駄口許り言つてゐる。「モシ大神さん、おめえの頭に紙がついて居やす」「ホンニナア正直の頭に紙やどるだ」折柄釋迦如來、時候のお見舞ひに阿難和尙に納豆を持たせて訪れる。孔子「朋遠方より來る事あり、また樂しからずや」などと挨拶する。遂に遊びに行く相談となる。孔子、火浣布の羽織を質屋にやり、金を拵へて打連れて出かける。やがて仲の町から茶屋長崎屋を經て越前屋にあがる。大神は和國、釋迦は三國、孔子はもろこしを相方と定める。新造・禿・男藝者と賑かな大一座となる。皆自分の專門で洒落を云ふ。大神「コレ其子、れんじをちつと明けや、しなとの風に吹かれると直にさめる」、釋迦「眞如の月がとんださえた」、孔子「昨日西方へ川獵に出たが、今日は內に茫然と閑居して居たものを、エヽ殘念閔子騫だ」などの類である。三人無事に床にをさまる。かくて大神と釋迦は無事であつたが、孔子の部屋で何やら爭ふ聲が聞える。大神、釋迦と行つて見ると、孔子「予が如き德行の通子に怖れをなすのか、閭閻に退て尸（しかば）の如くどぶさつてけつかる、危邦不入、亂邦不居こんな所に居ようより寧歸なん〳〵」など大聲で惡口をつき、もろこしがなだめるのも聞かず、蹴散らす拍子に唐紙はづれ、隣客の老子が顏を出す。釋迦「イヤ娑婆以來珍しい。」老子「通の通とすべきは常の通にあらず、四人一所に大道を歸らう」とうちつれ出づる所に、長崎屋の若者「ハイ御迎へに參りました。」

【構想】大神・釋迦・孔子の如きいかめしき人物を捉へ來つて洒落れさしてある點は、全く「聖遊廓」と同じく、一方面に存する黃表紙と同じ着想で、神佛儒に各自の成語術語を言はせてゐるところに可笑味がある。洒落本の前期に屬するもので、遊里の穿ちにはさまで力を入れてゐないのである。〔山崎〕

三曉談話（さんげうだんわ）　隨筆　三卷　寫【著者】橋口靜隱【解說】著者は薩摩藩主に事へた人で、同藩侯及び藩士の噂を主とし、交へるに德川前半期までの書畫・茶道・連歌・禪家諸名匠の逸話を以てしたもので、中に雪舟・秋月・雪村・等藝・探幽・守景・利休・小堀遠州兄弟等の事が見える。著者は、「參禪の工夫靜坐に熟し、且風月の才に富み、喫茶を好み、又畫を善くす。唐宋の風骨をしたひ、藍を出るの靑みづから一時に獨步せり。博聞强記、古今の事跡問へば答へ、尋ぬるに知らざるはなし。其明辯日のくれ夜の更くるをも忘る。」と謂はれる程の人だと云ふ事が、本書の序者によつて傳へられてゐるが、詳しい傳記は分らぬ。晩生兼珍と云ふ人の序及び他の一序がある。今所見の寫本は、誤書粗筆のために意を取り

かねるところが多い。「三曉庵隨筆」(別項)の別本と見られる。〔和田〕

三玉集（さんぎよくしふ）　歌集　【解説】中世の歌集の中で、柏玉集・雪玉集・碧玉集（各別項）の三集をいふ。〔久松〕

山旭亭眞婆行（さんきよくていまばゆき）　洒落本作者【解説】山旭亭眞婆行の外に、間波行・間葉行・旭眞婆行とも書く。小金厚丸（別項）と同人である事は、洒落本研究家の間には定説となつてゐるが、一般には知られてゐないから説明する。小金厚丸作の洒落本に眞婆行の序がついてゐるのを見るが、「仇手本」の如く、序だけでは果してどちらの人が作つたかわからぬ位である。厚丸は南陀迦紫蘭作「噺之畫有多」（安永九年）を「内所圖會」と改題自序を附して刊行し、眞婆行も前書の前半を削つて文を改作し、「孔雀染勤記」と題して刊行し、「面美多勤身」の作者名を削り、自己の名を入れ「金の和良路」と改題したり、不德な事ばかりしてゐる點が兩者共通してゐる。又兩者共に神田藍染川附近に住んでゐる點等から見て、小金厚丸が殊更に烏有の人物を設けたのであらうと推定されるのである。〔山崎〕

三溪（さんけい）　儒者【姓名】菊池純。字は子顯【生歿】文政二年生れ、明治二十四年十月十七日歿す。享年七十三【閲歴】紀伊の人。幕府に仕へて將軍家茂の侍講となり、晩年京都に住した。【著作】本朝虞初新誌（別項）三卷○晴雪樓詩抄一卷○三溪文鈔【批評】詩文兼ね長じ、清の袁隨園の風があつた。殊に詠物詩の技倆は枕山と對壘するに足る。〔佐久〕

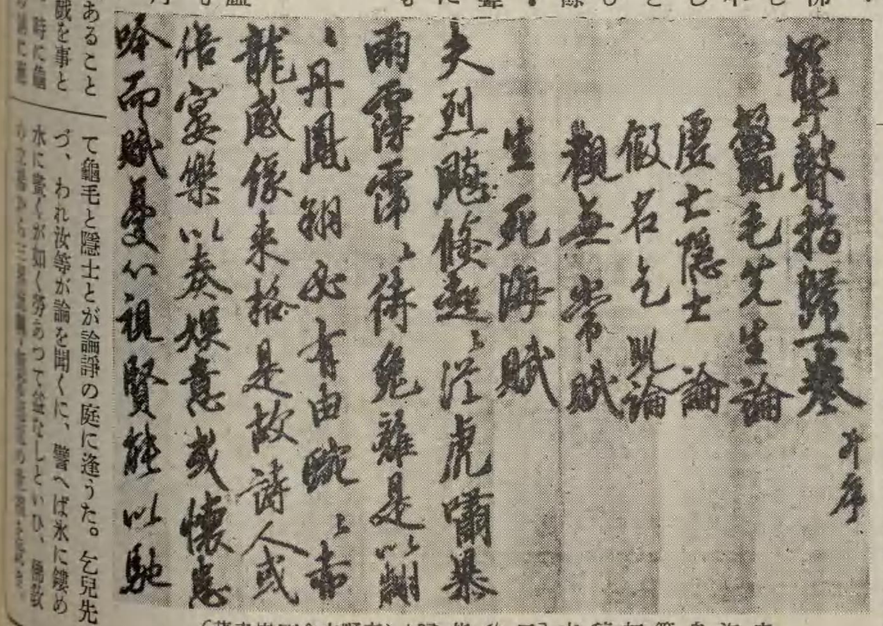
三鼓（さんこ）　樂器【異稱】打物（ちやうもの）【解説】雅樂の管絃合奏に於ける三種の打樂器。即ち太鼓・鉦鼓・三の鼓（各別項）の三種を總稱するのである。太鼓及び鉦鼓の裝飾は左方と右方とで多少の相違あることは、それ等の各項に於て述べた通りである。この三鼓は古來各樂家が必ず習得すべき必要な技術となつてゐる。〔田邊〕

管絃合奏に於て常に相組んで樂曲の拍子緩急を主導し、打音色を以てこれを飾るの用をなすものである。通常必ず各器一個づつを使用する。但し鼓に鞨鼓は必ず左方の樂に於てこれを用ひ、右方の樂に於ては鞨鼓の代りに三の鼓（つゞみ）と稱するものを用ひる。即ち右方の樂に於ける三鼓とは太鼓・鉦鼓・三の鼓（各別項）の

參考源平盛衰記（さんかうげんぺいせいすいき）　四十八卷四十九册【編者】德川光圀の命によつて今井弘濟・内藤貞顯が編纂したものである。但し弘濟はこの事業の中途で歿したので、貞顯がその後を承けて完成した。【成立】元祿二年の冬頃、編纂を完了したものである。【諸本】書寫本の外、「史籍集覽」に收めてある現行活字本（明治十七年刊）がある。【解説】「源平盛衰記」の本文を平家物語諸本・印本・一本・伊藤本・八坂本・鎌倉本・如白本・佐野本・南都本・南都異本・東寺本・長門本等の本文と對照してその異同を校註し、なほ史書・文學書凡そ百四部を參照して記事の適否を考訂してある。そして本文四十八卷の外に首卷を設け、凡例・總目次・劍卷を收めてある。〔高木（武）〕

三教指歸（さんがうしき）　辭賦　三卷【著者】釋空海【名義】この書初め「聾瞽指歸」と名づけ、後に改めて「三教指歸」と名づく。三教とは釋李孔三教、指は旨、歸は趣、即ち三教所詮の意旨の歸趣する所を申明するの義である。【成立】成立年代に古來異説がある。「既濟記」（空海傳要文）「事相目錄」等は、皆弘法大師御遺告の文に據つて、空海十八歳の時の作と定め、「行化記」「行狀略」「勘決抄」「本朝通鑑」等は、「三教指歸」序文に據つて二十四歳の時の作と定む。覺明の「三教指歸註」には、童形の時の草案を二十四歳にして再治すと云ひ、運敞の「三教指歸註刪補」には舊説を引いて、「初め近士たりし歳之を草し、延曆十六年に至つて之を點治し給ふか」と云つてゐる。案ずるに、十八歳の時草したのを二十四歳即ち延曆十六年に至つて再治すと云ふのが定説のやうである。【由來】空海は初め詩文を學び、又孔子の道をも修めたが、一たび佛法を知るに及んで深くこれに傾倒し釋李孔三教の對比論を試み、遂に本書を著はして、出家の志願を表明した（空海參照）。【諸本】「聾瞽指歸」と「三教指歸」とを比較するに、序及び卷末十韻の詩は全く異なり、その餘は大同小異である。寶性院草本（佚）・高野山御影堂所藏眞蹟本、共に皆「聾瞽指歸」に作る。「三教指歸」の刊本には、元祿十年苾蒭運體の刊行せるもの、弘法大師全集所收本、その他、古版數種がある。

【組織・内容】上中下三卷より成る。上卷は序及び龜毛先生論、中卷は虛亡隱士論、下卷は假名乞兒論である。その内容を略記すれば、こゝに兎角公と云へる者の外甥に蛭牙公子といふ遊蕩兒があつた。性質狠戾で禮義あることを知らず、酒色を樂しみとなし、博戲を事となし、淫樂して習ひ性となつてゐた。時に龜毛先生と云ふ隱者があつて、兎角公の過ちを諫めて龜毛と隱士とが論諍の庭に逢うた。乞兒先づ、われ汝等が論を聞くに、譬へば氷に鑽め水に求むが如く勞あつて益なしといひ、佛教の立場から懇に説諭して遂に蛭牙を説伏した（以上上卷）。ところが同じ座に虛亡隱士といふ道士がゐて、先より、光を和げ狂を示してその説を聞いてゐたが、蛭牙の戒心を見て大に嘲り、龜毛が病を療するが如きは寧ろ治せざるに如かずとなし、道教の立場から儒教の仁義忠孝説を批難した。龜毛・兎角・蛭牙公子等、皆幽玄なる道教の哲理を聞いてその説に感服した（以上中卷）。こゝに又、假名乞兒といふ乞丐の苦行僧があつて、今日しも鉢を擡げて聚落に出で、偶々兎角公が舍に到つ


聾瞽指歸上卷　并序
龜毛先生論
虛亡隱士論
假名乞兒論
觀無常賦
生死海賦
夫烈鷹候蓬沒虎嘯巢
雨霖霖以待兎離是以鵬
丹鳳翔於青雲號上帝
龍威保來格是故詩人或
作宴樂以奏娛意或懷感
時而賦憂以視賢能以馳

空海自筆初稿本「三教指歸」（高野山金剛峯寺藏）

この老死を超えて涅槃に到達することが最勝の教であり、眞の大孝であると喝破した。龜毛先生等、自らその淺見を恥ぢ、喜んで出世の最訓に沐した（以上下卷）。兎角公・龜毛公・蛭牙公子は、假想人物なることを現はし、共に最勝王經の語に據つて名づけたものである。虛亡と云ふは、老子の所謂虛無に名を得、假名乞兒と云ふも亦假に行乞の僧に名づけたものである。この三人の假想人物の語を借つて三教の勝劣を論じ、親識の誑誘を防ぎ、出家の本懷を諷したものである。「三教指歸」は三教の勝劣を論じたものであるが、直接の事實について論ぜずして、辭を設けて托諷したも

本文四十卷の外に首卷を設け、凡例・總目次を收めてある。〔高木（武）〕

參考平治物語（さんかうへいぢものがたり）　三卷六册【編者】德川光圀の命によつて、水戸藩の今井弘濟・内藤貞顯が編纂したものである。但し弘濟は業半ばにして歿したので、貞顯がその後を承けて完成した。【成立・刊行】元祿二年に編纂、同六年刊行【諸本】元祿六年刊行の整版本の外、國書刊行會本がある。【解説】「平治物語」の流布本を底本として、京師本・杉原本・鎌倉本・半井本・岡崎本などの諸本と對照して異同を校註し、又三十九部の史書・文學書などを參照して、記事の是非を考訂したも

鶴）所收【題材】謡曲「碇技」「富士太鼓」「弱法師」等の説話を併せて構成したものであるが、寧ろ直接には、並木宗輔の「莠伶人吾妻鏡形」、八文字屋本の「富士淺間裾野櫻」等に據つてゐると思はれる。

【梗概】嘉慶二年、足利義滿が富士山に遊んで舞樂を催した時、もと天王寺の伶人淺間左衞門は太鼓を打つたが、この邊に流浪してゐた住吉の伶人富士右門は、その祖父が家傳の高峯の太鼓を左衞門の祖父に奪はれた事を申立てたので、義滿は兩者に舞樂の故實を論ぜしめて右門の言ふ所に感じ、彼に父祖の本領と太鼓を返し與へる事となつた。その後、右門は太鼓を返し與へる事となつた。その後、右門は來つた太郎等に捕はれ、淚路は夫に代つて自害した。彼女は嘗て右門が質入れした樂譜を得るに困り、京の商人に奪はれた太郎の妹小雪であつた。かくて幼兒を尼僧に託した太郎等は嶺を下ると、卯原の合圖に攻め寄せた平馬と左衞門の兵に遭ひ、敵せずして伊賀の浦に投身したが、嘗て右門の助けた龜が現はれて夫婦を一孤島に運んだ。然るにこの騒動に罪を得た平馬は、逐電した左衞門と逢うて共に淡路へ渡り、便船に乘じて九州に遁れんとしたが、風雨に流されて太郎等のゐる島に漂着した。こゝに太郎等は仇を討ち、再び龜に乘つて播州に行き、幼兒と貞盛と諸共に

の教であり、眞の大孝であると喝破した。龜毛先生等、自らその淺見を恥ぢ、喜んで出世の最訓に沐した（以上下卷）。兎角公・龜毛公・蛭牙公子は、假想人物なることを現はし、共に最勝王經の語に據つて名づけたものである。虛亡と云ふは、老子の所謂虛無に名を得、假名乞兒と云ふも亦假に行乞の僧に名づけたものである。この三人の假想人物の語を借つて三教の勝劣を論じ、親識の誑誘を防ぎ、出家の本懷を諷したものである。「三教指歸」は三教の勝劣を論じたものであるが、直接の事實について論ぜずして、辭を設けて託諷したもので、文體より云へば辭賦類に屬すべきものである。文詞流麗、思想富贍、以て空海が青年時代に於ける意氣と文藻の一斑を窺ふことが出來る。

【註釋書】三教指歸文筆解知鈔三卷 印融 ○三教指歸註七卷 覺明 ○三教指歸簡註四卷二册 通玄 ○三教指歸註刪補七卷 運敞 ○三教指歸刪補鈔九卷 泰音 ○三教指歸私註二卷 文露 ○三教指歸正宗二卷 道純 〔加地〕

參考太平記（さんかうたいへいき） 四十卷四十一册 【編者】德川光圀の命により今井弘濟・內藤貞顯が編纂したものである。但し弘濟は、未だ業を終へないで歿したので、貞顯がその後を承けて完成した。【成立・刊行】元祿二年に完成、同四年刊行【諸本】書寫本の外、元祿四年刊の整版本、國書刊行會刊行本がある。【解說】「太平記」の流布本を本文とし、今出川本・島津本・今川本・毛利本・北條本・金勝院本・西源院本・天正本・天正異本等の諸本と對校して異同を註し、更に史書・文學書など百四部を參照して記事の適否を考訂してあるが、なほ本文四十卷の外に首卷を設け、凡例・總目次を收めてある。 〔高木（武）〕

參考平治物語（さんかうへいぢものがたり） 三卷六册 【編者】德川光圀の命によつて、水戶藩の今井弘濟・內藤貞顯が編纂したものである。但し弘濟は業半ばにして歿したので、貞顯がその後を承けて完成した。【成立・刊行】元祿二年に編纂、同六年刊行【諸本】元祿六年刊行の整版本の外、國書刊行會本がある。【解說】「平治物語」の流布本を底本として、京師本・杉原本・鎌倉本・半井本・岡崎本などの諸本と對照して異同を校註し、又三十九部の史書・文學書などを參照して、記事の是非を考訂したものである。 〔高木（武）〕

參考保元物語（さんかうはうげんものがたり） 三卷九册 【編者】德川光圀の命によつて、今井弘濟・內藤貞顯が編纂したものである。但し弘濟はこの事業の中途で歿したので、貞顯がその後を承けて完成した。【成立・刊行】元祿二年に編纂、同六年に刊行【諸本】元祿六年刊行の整版本の外、國書刊行會本がある。【解說】「保元物語」の流布本を底本として、京師本・杉原本・鎌倉本・半井本・岡崎本等の諸本をこれに對校して異同を註し、なほ史學・文學に關する典籍四十九部を參照して、事蹟の適否を考訂したものである。 〔高木（武）〕

參考北條時賴記圖繪（さんかうほうでうときよりきづゑ） 「北條時賴記圖繪」を見よ。

三國一夜物語（さんごくいちやものがたり） 讀本 七卷八册 【作者】曲亭馬琴 【畫工】歌川國直 【名稱】角書に富士淺間とある。富士にゆかりを求め、三國富士太郎を中心に、富士家・淺間家の物語といふ意に出たものである。【刊行】文化三年【諸本】曲亭馬琴翁叢書（野村銀次郎）所收【題材】謠曲「藤榎」「富士太鼓」「源法師」等の說話を併せて構成したものであるが、寧ろ直接には、並木宗輔の「菊伶人吾妻雛形」、八文字屋本の「富士淺間裾野櫻」等に據つてゐると思はれる。

【梗概】嘉慶二年、足利義滿が富士山に遊んで舞樂を催した時、もと天王寺の伶人淺間左衞門は太鼓を打つたが、この邊に流浪してゐた住吉の伶人富士右門は、その祖父が家傳の高峯の太鼓を左衞門の祖父に奪はれた事を申立てたので、義滿は兩者に舞樂の故實を論ぜしめて右門の言ふ所に感じ、彼に父祖の本領と太鼓を返し與へる事になつた。その後、右門は京に出で義滿に仕へ、攝州住吉に住み、一子太郎に櫻子を妻として配した。櫻子は南朝の臣橋本治部丞の遺子で、郎黨村主兵助夫婦に護られて戰亂を遁れ、偶々賊に拐かされたのを右門が助け養つてゐたのであつた。然るに右門は、猫間川の陣に在つた大內義弘・赤松義則に招かれて樂を奏し、共に招かれた左衞門に藝の事から恨みを受けて合法ヶ辻で暗殺され、その一家も鏖殺されようとしたが、當時こゝに居つた兵助がよく防いで死し、左衞門は播州に走り、赤松家の臣室積平馬を賴つて赤間關に赴き、こゝで遊女浪路に馴染み、その戀を爭ふ遊女浪江實は兵助の娘を殺し、浪路を妻として播州鳩胸嶺の麓に住んだ。一方仇を狙ふ富士太郎は吉備の中山で病み、それを知つた母三雪が身を以て代らんと自害した後、安否を尋ねて發足した櫻子は途に幼兒を見失ひ自殺しようとし、計らず本復した夫に救はれ、その幼兒は信德丸といふ尼僧に救はれ、また太郎の子と知つた左衞門の母卯原に殺されようとするが、却つて卯原は仇を尋ねて來つた太郎等に殺され、浪路は夫に代つて自害した。彼女は嘗て右門が質入れした樂譜を得るに困り、京の商人に奪はれた太郎の妹小雪であつた。かくて幼兒を尼僧に託した太郎等は嶺を下ると、卯原の合圖に攻め寄せた平馬と左衞門の兵に遭ひ、敵せずして伊賀の浦に投身したが、嘗て右門の助けた龜が現はれて夫婦を一孤島に運んだ。然るにこの騷動に罪を得た平馬は、逐電した左衞門と逢うて共に淡路へ渡り、便船に乘じて九州に遁れんとしたが、風雨に流されて太郎等のゐる島に漂着した。こゝに太郎等は仇を討ち、再び龜に乘つて播州に行き、幼兒を預けた信德尼を訪ね、その村主兵助の妻であることを知つた。かくして太郎は足利家に召返され、三國富士太郎と名乘つた。

【構想】太郎等が龜に助けられて渡つた島に、左衞門を漂着させて仇討を遂げさせる。この奇怪な事象は、敵討に至る事件の起伏を統一する方便に過ぎないのであるが、これに據つてこの敵討話を複雜にして興味を加へ、教訓の意義を深くしてゐる。そこに作者の興味と教訓とがあつて、善人が惡人を懲らすといふ勸善懲惡の作意がある。【影響】文化五年八月、大阪角の芝居でこれを歌舞伎狂言に仕組んで興行したと「江戶作者部類」に見える。

【參考】近代小說史 藤岡作太郎 ○馬琴研究 藤村作（日本文學講座） 〔笹野〕

三國傳記（さんごくでんき） 說話 十二卷 【撰者】沙彌玄棟 【成立】應永初年頃 【刊行】未詳 【諸本】大日本佛教全書所收 【出典】本書の說話は、「法苑珠林」「經律異相」「孝經」「史記」等の佛典・漢籍に依つたもの、或は「日本靈異記」「三寶繪詞」「扶桑略記」「今昔物語」「太平

記」、又は諸種の往生傳及び驗記、諸寺の緣起文、鎌倉時代の說話文學等から得て來たものが少くない。【解說】各卷殆ど三十種の說話を、印度・支那・日本の順に排列してゐる。これは梵・漢・和の三僧が淸水寺の通夜に會して物語つたためであるとしてある。說話は殆ど佛敎關係のものである。六道輪廻の思想を示す說話には、百姓と蛙とが沙門と王に生れる話、地獄に墮ちて餓鬼・修羅等に生れる話がある。その外の畜生に轉生する說話が多數を占めてゐる。橘の虫となつたり、蛇になつたりするのと、前生、牛や野干であつたものが人間となる話がある。なほ龍蛇と婚姻する說話も見出される。三寶の靈驗を示す說話には、病を治し壽命を延ばし、長生不死の藥を得たりする現世利益の話がある。長谷の貧女や、五萬長者がそれだ。墮地獄を免れる來世利益の說話も多い。弘法の字が龍となり、淨藏が斜塔を祈り直し、雨をふらし病を治す法力譚、久米仙人が天女と婚姻する話、高島郡の靈木等の話、發心往生譚、伊豫西條の幽魂譚、夢想姙娠の話、世間現の千人切などの說話が見られる。

【參考】國文學通史坂井衡平〇攷證今昔物語集〔高島〕

鑽故紙（さんこし）　隨筆　四卷　寫　【編者】大田覃（南畝）【成立】文化三年編者の序がある。【解說】編者過眼の雜書より、全部又は一部分を備忘のために抄出したものであつて、編者の意見等は更に加へてゐない。卷一に亥字俗解（撓洞池子）・政事談（名越克敏）・年貢考（赤水玄珠）・赤水先生七十壽序・禮記註疏抄、卷二に別方（石坂貞助）、卷三に延曆寺古瓦錄・饗庭盈蔬園與川秀才書・備火議以下十七篇、卷四に異文合愛序・豐受神主彈舊事本紀大成經文・記石井氏兄弟復讐事以下十一篇を收めてある。編者の序の末に「覃夙好脈望、老而彌篤、吏事少閒、坐風竹窓中、隨手所得、未盡掃除、名曰鑽故紙」と述べてゐる。〔和田〕

珊瑚集（さんごしふ）　譯詩集　【譯者】永井荷風【刊行】大正二年四月、籾山書店【內容】ボオドレエル、アイユ夫人、レニエ、メリル、ゼルレエヌ、サマン等の譯詩並にモウパスサン紀行、浮世繪論紹介等を收む。【批評】荷風の譯詩は、創作詩の經驗淺くしてその微妙なる契機を悟らず、しかも內に萬斛の詩情を貯へて、その發するに途なきを嘆くものの必ず實行する唯一の決（は）け口であつて、原詞の辭句に拘泥せず、一氣にエスプリを把握せんとする極端な自由譯で、或は失敗し、或は成功してゐるが、多くは己が好む作者の好作品のみに沈湎して、樂しんでこれを譯述する態度に出たのが、彼の「珊瑚集」譯詩の成功した主なる原因であつた。職業的譯詩家よりも、或る場合は、詩人の譯詩よりも遙かにすぐれて、上田敏・蒲原有明に次いで讃へられる所以である。この譯詩が、後の詩人・詩壇の感情を培つたこと夥しいのは言ふまでもない。その辭句には、荷風ならでは求められない柔媚と淸婉とがあつた。謂はゆる新體詩の氣息とは、全くかけ離れた自由な吐息が中心になつてゐた。その用語は、一々磨きがかけられて光つてゐる。荷風の譯詩の魅力は、こゝに存したのである。〔日夏〕

山齋集（さんさい）　歌集　七卷一冊　【作者】荒木田久老　【成立】寶暦十年（一七六〇）の序がある。【解說】本集は「山齋短歌集」（別項）・「山齋長歌集」（別項）・「山齋歌集」（別項）・「山齋歌集」（別項）・「山齋

【解説】編者過眼の雜書より、全部又は一部分を備忘のために抄出したものであつて、編者の意見等は更に加へてゐない。卷一に亥字俗解（桃洞池子）・政事談（名越克敏）・年貢考（赤水玄珠）・赤水先生七十壽序・禮記註疏抄、卷二に別[illegible]

【梗概】永正年中、奈良の城主續井順昭は茶室の天井に用ふる爲め、米谷山の大楠を伐らうとしたが、樹は不思議を現はして、多くの者が傷つくばかりであつた。偶々樵夫に零落してゐた赤根半六は、樹精の大蟻を殺して楠を伐り、その功によつて楠家郎黨の後裔である家柄を興し、なほ立身を望んで樹を伐る時、圖らずも傷つけて死に至らしめた丹波都の娘おさんと伜半七との婚約を破つて、家老蟻松典膳の娘園花の婿にしておさんを追ふ。然るにおさんは藥賣笠松平三に養はれ、京に上つて舞々となり笠屋三勝と云つてゐたが、若殿に隨つて上洛した半七と邂逅し、手を携へて走り、平三の情で共に浪速の長町に髢屋を營んだ。園花の母敷浪は、三勝を訪れて娘のために半七との緣を切らせようとし、端なくも前夫丹波都との間に生れた娘であることを知つた。三勝はいよ〳〵身の不運を歎き、とかく仇をなす今市全八郎を殺して自決を覺悟した半七と共に、死所を求めて千日寺に赴く。そこには意外にも懺悔の念してゐる情話に假り、換骨奪胎より來る特殊な興味を狙つただけである。そしてその武士的精神儒教的思想を盛るに當つては、說話の相を全く變化した。時代を室町の末、世界を武士の階級に取り、三勝半七の愛慾關係は、その節義貞烈を示すものと變化してゐる。又彼の解して惡とする所には必ず報罰がある。半六の榮達は楠を伐つた事に端を發するが、

「三七全傳南柯夢」挿畫（北齋）

淨瑠璃（笠屋三勝二十五年忌（別項）・竹本三郎兵衛・豐竹應律等の「[illegible]麥女舞衣」の材となつてゐるが、馬琴は直接この「女舞衣」に據つてゐる。又部分的には半六が伐木の術を得る條を、晉の干寶の「搜神記」に、楠の精を退治した獲緣による半六の榮枯を、唐代の小說「南柯記」及び明代の戲曲「南柯夢」の淳于棼に附會する等、支那小說から得たものが見られる。

に歸られて、半六と敷浪が自殺してゐた。丁度來合はせた家老厚倉友春の計らひで、商人赤根半七、舞々笠屋三勝の情死と取りつくろつて世に傳へた。かくて半七は主家に歸參し、三勝を正室、園花を側室として榮えた。

【構想】この原說話は、到底この作者の理想を盛る內容ではない。ただ僅かに大體の事件の輪廓と人名とを、淨瑠璃歌舞伎で人口に膾炙

同時にそれは榮滅の因であるべきであり、事件は丹波都との約を破つたことから起つてゐる。かくして勸懲を表はす趣向としてゐる。

【影響】刊行の年九月、大阪中座で「舞扇南柯話」と題して、歌舞伎に演ぜられて好評を得、大阪の書肆河內屋太助はその正本を印行し、京都の書肆大菱屋宗三郎・山科屋次七は「南柯話飛廻雙陸」といふものを合刻した。當時、江戸に於ける好評のために、狂言にも盛んに飜案され、書肆は續編「占夢南柯後記」（別項）に筆を執らせた。弘化三年には、二代櫻田治助等の脚色に依つて、市村座に上演され「奇說南柯夢」（文政四年）、爲永春水の人情本「貞烈美談園の花」（天保六年）、樂亭西馬の合卷「南柯夢女舞衣」（安政二年）等ともなつた。【價値】換骨奪胎の妙、筋の變化、事件の按排など手際よく行はれ、不自然さも比較的少ない。又淨瑠璃がかりの美文も、當時としてはかなりの效果があつたやうに思はれる。よほど好評であつたらしく、出版後間もなく千二百部といふ賣行であつたといふ。「南總里見八犬傳」「椿說弓張月」（各別項）と並べて三大奇書と稱せられた。

【參考】讀本集解說○曲亭馬琴集解說　（笹野）

三十石艪始（さんじつこくよふねのはじまり）

幕　お家物　脚本　五

【作者】並木正三【名稱】三十石船で淀川を上る案を立てた作意による。夜舟を一字に造つたのは、陽數を求めたからで、これについては、作者の名案が稱へられてゐる。【興行】寶曆八年十二月二十二日初日、大阪角の芝居中山文七座、二の替り狂言。

〔役割〕淀與三右衞門（中村四郎五郎）、河村瑞軒・關口平太（三桝大五郎）、神道源八・爪長尾權九郎（中山文七）、源八女房御船・お舟（中村喜代三郎）、花光縫之介・阿房與九郎（松山三十郎）、傾城揚巻（山下金作）、蕊淵小市（中山來助）、九藏（中村小伴三）、お松（嵐松之丞）、熊本辨之作（山下治郎三）、妾深雪（如川大吉）、花光左衞門、百姓茂治兵衞（中山新九郎　等。

非常な當りで、明和元年四月には、京、布袋座芝居にも上演され、その後上方での流行狂言の一となつた。大詰に廻り舞臺を使用したが、これが廻り舞臺の最初といはれてゐる。

【諸本】書卸臺帳の傳存する外に、後世の書替へが、繪入根本（文政四年、曉鐘成書）となつて版行された。これは帝國文庫脚本傑作集に所收。日本戲曲全集第四卷所收本も書卸しではない。【題材】寬保二年十二月、大阪角の芝居「雙娘山崎通」（安田蛙文作）や、寬延二年七月竹本座淨瑠璃「雙蝶々曲輪日記」（別項）等により案を立て、寬延元年八月竹本座淨瑠璃「假名手本忠臣藏」（別項）の脚色を利用したものと思はれる。

【梗概】〔序幕〕（東山寮）鎌倉から眞の太刀と天盃の土器とを拜受のために上洛した花光左衞門は、內裏の式作法を敎はるために、瑞軒を廓に饗し、彼の乞ふがまゝに妾深雪を讓る事を約した。ところが深雪の手紙が過つて瑞軒の手中に落ちた。これによつて左衞門の口上が、儀式を無事に濟ますまでの一時の方便である事がばれた。（大內）饗應の日、參內した左衞門は、昨日に變つて瑞軒等が嬲り者にするので、堪へ兼ねて一太刀瑞軒に斬りつけ、水門から逃れて切腹する。通りかゝつた源八の女房御船に、始終を鎌倉に傳へよと命じ、仇討を源八に託して瞑目する。御船は主人の首を討ち、圍みを開いて落ちる。〔二幕〕（花光館）淀與三右衞門の妹几帳は、深雪の弟で今は幇間の小市と、また左衞門の弟縫之介は

婉とがあつた。謂はゆる新體詩の氣息とは、全くかけ離れた自由な吐息が中心になつてゐた。その用語は、一々磨きがかけられて光つてゐる。荷風の譯詩の魅力は、こゝに存したのである。　（日夏）

山齋集（はんぷ）　歌集　七卷一冊　（作者）

くだちて妻戀ひすらし、をちかへり鳴く

反歌

須磨の浦にしほ鳴く千鳥我が如く妹に戀ふれやを　（佐佐木）

ちかへり鳴く

三下り（さんさん）　「三味線」「調子」を見よ。

山々亭有人（さんさんとていありんど）　「飯野採菊」を見よ。

三之（さんし）　[illegible]

がある。なほ袖珍繪入文庫・曲亭馬琴集（近代日本文學大系）・馬琴傑作集（帝國文庫）・讀本集（日本名著全集）・曲亭馬琴翁叢書（野村銀次郎編）・國民文庫等所收【題材】淨瑠璃歌舞伎で有名な三勝半七の情話に材を得てゐる。この情死事件は屢々歌舞伎に演ぜられ、西鶴一[illegible]

傾城揚巻と、互ひに契つた仲であるので、今宵の几帳との祝言に縫之介は當惑したが、花嫁は計らずも揚巻であつた。これは與三右衞門の粋な捌きであつた。左衞門は鎌倉殿から回船往來の御朱印を預り、神道源八には渡しを、瑞軒の弟關口平太には堤を守らせ、淀川往還の任に當らせてゐるが、この二人の反目で、一向埒が明かぬため、試合で勝つた方に委せることとした。源八は、縫之介のことから、平太に勝を讓らうとしたが、平太の暴言に散々彼を打ち懲らした。この時、縫之介の父將監が、熊本辨之作に殺害され、御朱印も紛失したとの報せが屆く。そこへ、血みどろの御船が蟲の息で馳せつけて、始終を告げて落命する。大内を騒がした廉で、早くも城受取りの使者が向つた。皆々、涙ながらに旅路につく。〔三幕〕

〔源八渡〕 源八が御朱印を尋ねに出た留守を、後添に入つた御船の妹お舟は、姉の遺兒お松を育ててゐる。縫之介の揚代支拂の催促が揚屋から來ると、子供と思つてゐたお松が、いつか縫之介に通じてゐたので、彼に會へる悦びに、われから身賣りを申出た。契約は決つたが、いつか忍び込んでゐた辨之作が、お松を小屋に引入れ、殺して生膽を取り、お舟の老父茂治兵衞から切取つた白髮をこれに調合して飲み下す。すると、彼の面相は忽ちに癩病人と變る。死んだと思つたお松は、姿を現して駕籠にゆられて行く。〔四幕〕

〔逸楽座〕 お舟は遺手勤めをして、身賣りの金で縫之介を揚げ詰めにして、平太の手を逃れ

三十石艜始（繪本番附）

るお松を揚げ詰めにして、故意に苦しめてゐる。揚巻としては、お舟への義理から、縫之介とお松との戀を見ても、徒に煩悶するばかりでゐる。そのうち源八等の口から、お松の死を初めて知つたお舟は驚き悲しんだ。源八の身の危險から、お舟は自分に心を寄せる權九郎を唆かして、源八の身代りに作りたて、一時を逃れたが、やがて揚巻と縫之介とが攫はれたと聞いた源八は、大門口に追ひ付いて平太と爭ひ、首尾よく御朱印まで取り返した。〔五幕〕（與三右衞門館）淀川檢分の勅使守護役として來た瑞軒に、花光家の人々は覲ひ寄つた。几帳は瑞軒に又を向けたが、捕はれて

ら去られて悲しき戀を歎いて自害する。與三右衞門は未來で添ふ盃にと、釣花活の鎖をはづし、これに生血を入れて、門外の小市の許まで引かせたが、不圖、これから淀川に引船の案を思ひつく。同時に、豫て怪しく思つてゐた寛能に、几帳の血をいのこ柳に合はせて飲ませると、忽ち辨之作の正體が露はれた。この時、陰謀が發覺して瑞軒召捕の勅諚が下つた。（淀川）辨之作は水門から出たが、外に待つてゐたお舟・揚巻等が、三十石船を操つて、遂に仇を討つ。（お花畑）瑞軒も明智の臣、齋藤内藏之介と名乘つて大童となる。

【解說】題材の先行脚色に併せ見ると、全曲の構想は、それ等から組織されてゐるに過ぎぬが、治水に通じた河村瑞軒を、却つて無氣味な解釋を以て反逆者に仕立てたところに、大阪であるだけ、一層特殊な感興が惹かれたと思ふ。既に脚色されてはゐたが、源八渡も平太堤も、大阪人としては親しい名稱であつて、愈々瑞軒との交渉も深くなる。その上、文七と大五郎との男達役の人氣者を對立させ、惡役の歌右衞門を中に据ゑた筋は、正に成功といはねばなるまい。更に舞臺技巧に於て、本作は正三の名を不朽ならしめたとも見られ、最も有名なのは大詰である。正三が獨樂廻しから思ひついたと傳へる廻り舞臺は、事實はこれより早く利用されてゐたらしく思はれるが、豪壯な舞臺裝置によつて、深く觀衆を驚歎させたのであつた。而も舞臺を廣く使用して數艘の三十石船を並べ、大提灯下の敵討は見事なものであつた。大評判を擧げた作で、直に三都に流行した外、源八と平太は屢々他の作品中に入つた。實際十三年四月、憑分座

で、名題を利用しただけである。〔守隨〕

三尺のむち（さんじやくのむち） 「俳諧三尺のむち」を見よ。

三社託宣（さんしやたくせん） 神道【解說】天照太神宮、八幡宮、春日神社を特に三社と云ふ。その三社の大神の託宣と稱せらるゝものを三社託宣と云ふ。

八幡大菩薩

雖レ食二鐵丸一不レ受二心穢人物一。
雖レ坐二銅焰一不レ到二心濁人處一。

天照皇太神宮

謀計雖レ爲二眼前利潤一必當二神明罰一。
正直雖レ非二一旦依怙一終蒙二日月憐一。

春日大明神

雖レ曳二千日注連一不レ到二邪見家一。
雖レ爲二重服深厚一可レ赴二慈悲家一。

この託宣が果して眞の託宣であるか否かは、素より疑問である。伊勢貞丈は「三社託宣考」の一書を著はして、その僞作たるを論じてゐる。たとひ僞作にしても、中古以來、社會教化の上に效果のあつたことは認めねばならぬ。

【參考】三社託宣考 伊勢貞丈（神道叢書）〔田中（義）〕

問答 齋藤彥麿

三社託宣（さんじやたくせん） 淨瑠璃 五段 時代物【作者】未詳。近松門左衞門との推定說もある。【名稱】八行本には、卷首に題名がないが、繪入細字本の挿繪に「三社のたくせん」とあり、外題年鑑には「三社の託宣」と記すので、今これに從ふ。繪入細字本には「三社託宣由來」（さんじやたくせんのゆらい）とある。伊勢・石清水・春日三社の託宣が作用するところから、この題名を成した。

【成立】「道行揃」や「竹子集」に本曲の一節を載せるところから延寶六年の作と推定されてゐる。

本】八行四十四丁加賀掾正本・繪入細字本等。近松門左衞門全集第十・近松全集第一卷等に所收。【題材】說經節の系をひく古淨瑠璃に屢々見る繼母子を中心にした騒動物に三社託宣の靈驗を交へた作。加賀掾正本と傳へられる「當麻中將姫」との交渉も豫想せられる。

【梗概】〔初段〕初春の祝儀に、伏見院は前關白基房に繼嗣なきを憂へ給ひ、先帝第二の皇子雅仁をお下しなされて、二位中將を賜ふ。基房の政所はわが腹の姫名月御前を中將に配（みあは）せるため、姉の繼姫照日の前を亡きものにしようと謀り、右近・左近の兄弟に、これを命じされて都に落られる。〔五段〕都では、館に屢々託宣のあつた事が帝の叡感を蒙り、三社へ奉幣使が遣はされる。（二位中將宮めぐり）雅仁は姫を伴ひ伊勢に參宮する。異香四邊に薫じ、雲上に伊勢・石清水・春日の神々が姿を現はし、御託宣は儼然と光を放つ。

【解說】筋は頗る簡單であるが、託宣の主題に忠實ならうとして、殆ど場面ごとに機巧（からくり）を利用して不思議を見せたことは、却つて内容の單調を暴露した觀はあるが、當時の石清水放生會の再興等と合はせて、相當觀衆の興を集めた作と思はれる。全曲が平坦な嫌ひはあるの三社祭を當込み、淺草觀音の宮戸川緣起に山東京傳の黄表紙「心學早染草」（別項）に書き出されて世の流行となつた善玉惡玉の趣向を取入れたもので、漁師の網打から善玉惡玉に化する趣向は、「早染草」の續編である「堪忍袋緒〆善玉」（寛政五年版）中に、北尾重政が畫いた挿繪に暗示を得たものである。又これより先、文化八年江戸市村座で、三代坂東三津五郎が「七枚續花の姿繪」の七變化所作事の一として惡玉だけの踊を演じたが、これなども參酌されたであらう。【内容】踊屋臺といふ趣向で、山車人形の神皇后皇（神功皇后）（四代坂東三津五

五・六〇清元研究資料寺西〇日本歌謠集成〇歌謠音曲集〇歌舞劇集〇近世邦樂年表

散手（さんじゆ） 雅樂舞曲【異稱】散手破陣樂・主皇破陣樂・至皇破陣樂【性質】左方樂。新樂の中曲。太食調曲に屬する（昔は道調に屬してゐた）。序二帖（拍子各二十）、破七帖（拍子各二十）。舞があり一人で舞ふ。舞者は特殊なる裝束を着、寶冠龍甲をかぶり、大將の如く威あつて鼻の高い假面をつけ、太刀を帶び鉾を持つて舞ふ。別に從者二人がある。これを番子（ばんこ）（又は牛古）といふ。常裝束を着て太刀を帶びる。一人は鉾を持つて出てこれを舞者

本】八行四十四丁加賀掾正本・綺入細字本等。近松門左衛門全集第十・近松全集第一巻等に所收。【題材】説經節の系をひく古淨瑠璃に屢々見る繼母子を中心にした騒動物に三社託宣の靈驗を交へた作。加賀掾正本と傳へられる「當麻中將姫」との交渉も豫想せられる。

【梗概】〔初段〕初春の祝儀に、伏見院は前關白基房に繼嗣なきを憂へ給ひ、先帝第二の皇子雅仁をお下しなされて、二位中將を賜ふ。基房の政所はわが腹の姫名月御前を中將に配せるため、姉の繼姫照日の前を亡きものにしようと謀り、右近・左近の兄弟に、これを命じたが、兄弟は姫を救つて密かに落す。この時名月御前に伊勢の大神宮が乘り移り、政所の謀を發き、逆樣になつて飛び廻つた擧句、終に狂ひ死んだ。御祓の箱から御託宣が金色の文字となつて現はれた。〔二段〕伊勢路を志す照日の前に追手が掛り、兄弟の防禦も危く見えると、神宮の勅によつて倭姫が忽然と現はれて追手を拂ふ。金色の神託は虚空に現はれた。姫は河内へ落ちる。〔三段〕雅仁は八幡社參の砌、まだ見ぬ照日の前に會うたが、互にそれとは氣づかず別れて了つた。姫は兄弟に命じて晝夜に魚鳥を放つて供養を行ふうち、社人公文の手に捕はれて既に危く見えたが、俄かに山谷鳴動して公文は狂ひ、大石が二つに割れて中から神託が現はれた。兄弟は姫を扶けて逃れる。〔四段〕東大寺の傍に庵を結んだ姫は、若僧治部卿からの戀を斥けたため、神鹿を殺した罪名で刑場に引かれたが、來かかつた雅仁は始めてそれが許嫁の姫と知つて對面し、治部卿も慈悲心を試みるための化身で、地藏菩薩と現はれて失せる。紫雲棚曳く中に大明神は白鹿に乘つて現はれた。姫は許されて都に送られる。〔五段〕都では、姫に屢々託宣のあつた事が帝の叡感を蒙り、三社へ奉幣使が遣はされる。(二位中將宮めぐり)雅仁は姫を伴ひ伊勢に參宮する。異香四邊に薫じ、雲上に伊勢・石淸水・春日の神々が姿を現はし、御託宣は儼然と光を放つ。

【解説】筋は頗る簡單であるが、託宣の主題に忠實ならうとして、殆ど場面ごとに機巧を利用して不思議を見せたことは、却つて内容の單調を暴露した觀はあるが、當時の石淸水放生會の再興等と合はせて、相當觀衆の興を集めた作と思はれる。全曲が平坦な嫌ひはあるが、三段目を愁歎場滿れ場とし、四段目に道行を配置した案によつて、作者の手腕は注目さるべきものがある。四段目庵室の場は淸玄の曲に負ふかと思はれる。なほ本曲が歌舞伎脚本「傾城顧本尊」(別項)その他の中將姫の作品に影響する所は尠からぬものがある。因みに「二位中將宮めぐり」は、「源氏烏帽子折」(別項)の「牛若宮めぐり」と同文である。

【參考】近松門左衛門全集第十卷解説　黑木勘藏
○近松全集第一卷解説　藤井乙男　〔守隨〕

三社祭（さんじやまつり）

所作事　變化物　【名義】淺草の三社祭を取り入れたのでこの名があるが、同名で全然異なつた曲に、「三世相錦繡文章」(おその六三)(安政四年七月江戸中村座)がある。併し普通には俗に「善玉惡玉」と呼ばれるのを指してゐる【本名題】朝風やさくら散り込鳩の豆彌生の花淺草祭【別名】善玉惡玉【初演】天保三年三月十一日初日、江戸中村座「櫻時女行列」第二番目大切〔作詞〕二代瀨川如皐〔曲節〕淸元榮治郎〔振附〕二代藤間勘十郎・松本五郎市【傳來】曲・振とも傳存【題材】當時、開帳中の三社祭を當込み、淺草觀音の宮戸川緣起に山東京傳の黃表紙「心學早染草」(別項)に書き出されて世の流行となつた善玉惡玉の趣向を取入れたもので、漁師の網打から善玉惡玉に化する趣向は、「早染草」の續編である「堪忍袋緒〆善玉」(寛政五年版)中に、北尾重政が畫いた挿繪に暗示を得たものである。又これより先、文化八年江戸市村座で、三代坂東三津五郎が「七枚續花の姿繪」の七變化所作事の一として惡玉だけの踊を演じたが、これなども參酌されたであらう。【内容】踊屋臺といふ趣向で、山車人形の神皇后皇（神功皇后）（四代坂東三津五郎）と武内宿禰（二代中村芝翫）とで、常磐津の所作があり、引抜いて三津五郎は漁師三ツ成（濱成）、芝翫は漁師駒成（武成）と變つて宮戸川緣起を利かせた舞臺面で、網を打つ振からテンポの早い手踊、次いで虚空から善惡の玉が降ると、それに乘り移られた二人は、善玉・惡玉の踊り分け、短いクドキから輕業めいた早間の踊りになる。初演には、この次に更に三津五郎は通人永木、芝翫は田舍侍ぶざの新五兵衛となり、これへ善玉惡玉の吹替が絡まつて二人を誘惑する振になる。最後は二人が石橋の役人と變り、華やかな所作タテがあつて終る。即ち二人四變化所作事の形式である。唄は「それが厭さに」のクドキが眼目である。

【備考】弘化四年五月、江戸河原崎座「時鶯雛淺草八景」では、長唄と常磐津節との掛合で、漁師は友成・濱成・武成の三人で、善玉・惡玉の件になつて蛋お文が絡んだ。また安政二年五月、江戸市村座「三幅對戯場彩色」では、常磐津節のみで、善玉・惡玉とで演じたが、二曲とも廢滅した。〔秋莖〕

【參考】三社祭と勢獅子　町田博三(演藝畫報、合同

五・六〇淸元研究會寺西〇日本歌謡集成〇歌謡音曲集〇歌舞劇集〇近世邦樂年表

散手（さんじゆ）

雅樂舞曲【異稱】散手破陣樂・主皇破陣樂・至皇破陣樂【性質】左方樂。新樂の中曲。太食調曲に屬する(昔は道調に屬してゐた)。序二帖(拍子各二十)、破七帖(拍子各二十)。舞があり一人で舞ふ。舞者は特殊なる裝束を着、寶冠龍甲をかぶり、大將の如く威あつて鼻の高い假面をつけ、太刀を帶び鉾を持つて舞ふ。別に從者二人がある。これを番子(又は牛古)といふ。常裝束を着て太刀を帶びる。一人は鉾を持つて出てこれを舞者に授け、他の一人は舞ひ終つた後にその鉾を受取る役をする。舞の途中では番子は舞臺の隅に侍立してゐる。番舞には貴德を用ひる。

【沿革】「教訓抄」に、「此曲誰人のつくりたると云こと勘いださゞる所也。古老傳曰、率川明神平ニ新羅軍一、抃悅之餘向ニ新羅國一指レ麾而舞、時人見ニ此姿一摸レ之」とあり、「體源抄」にもこの説を載せてゐる。これに就き「大日本史」(禮樂志)には「按、二書不レ記ニ年代一、今考ニ事實一、姑定爲ニ神功征韓時一」と述べてゐる。即ち神功皇后征韓の時、率川明神がその軍を助けて勝を得られたるによつて、これを摸してこの曲を作ると稱せられる。異説としては田安宗武の「樂曲考」に、「此曲の名を古くは「さるだ」といひしなめりと覺ゆ。さるは散樂をさるがうと唱へ、猿樂ともかけば、散と猿とは通はし用うる事知るべく、手を「た」ともいふは常也。しかれば瓊々杵尊の日向國に天降りませしとき、猿田彦命御先に立てその國の神をむけ給ひし事あり。それを舞にうつせるにこそ。また答へには必歸德をぞする。そは國神の瓊々杵尊の御德に從ひ奉りしすがた成べ

し。そのうへ釋日本紀に猿田彦命の鼻の長さ七尺を注せる中に、王舞の面は此神の面にかたどるといへり」とあり、「大日本史」にもこの異說を揭げてある。他に釋迦誕生の時、師子喔王が作つたといふ說があるが、それはこの曲を武將太平樂と混同し、五方師子舞に附會せるもので、我が國の作とするのが正しいらしい。嵯峨天皇はこの舞をよくし給うたと稱せられる。〔田邊〕

纂輯御系圖（さんしゅごけいづ）「系譜」を見よ。

卅三間堂棟由來（さんじふさんけんだうむなぎのいらい）「祇園女御九重櫻」を見よ。

三十六人家集（さんじふろくにんかしふ）　歌集　【異稱】歌仙家集【成立】全部完成したのは平安時代後期か。但し何人の撰か不明【諸本】西本願寺本三十六人家集（三十九帖）は、平安時代後期の書寫になる古寫本であり、もと御物であつたが、天文年間本願寺に下賜されたもので、筆蹟の優雅なこと、殊に料紙の見事な點で有名である。色々樣々の唐紙を切り繼ぎ破り繼ぎ、それに金銀で花鳥草木を描いたものである。本文は書寫の誤もあるが、古筆として最も尊重される。かつて各家集の數葉づつを木版で複製したが、昭和年間玻璃版にて全部複製。活版本では歌仙家集本、群書類從本、續國歌大觀本等がある。諸本の間に歌數、文句等にかなり異同がある。【內容】平安時代藤原公任が定めたと言はれる三十六歌仙（歌仙參照）の家集であつて、

柿本集・躬恒集・素性法師集・猿丸大夫集・家持集・業平集・兼輔集・致忠集・公忠集・齊宮集・敏行集・宗于集・清正集・興風集・是則集・小大君集・能宣集・兼盛集・貫之集・伊勢集・凡人集・躬恒集・源重之集・信明集・元眞集・仲文集・忠見集・中務集。

より成る。この中、貫之集や躬恒集・伊勢集の如く歌數も多く、內容も比較的精確と思はれる集も多いが、業平集の如きは歌數も四十餘首に止まり極めて杜撰である。又人麿集や赤人集の如き萬葉集の讀人不知の歌、その他明かに人麿や赤人の歌でないものが多く入り、如何なる立場から編纂されたか明かでない。【價値】本集は、所謂三十六歌仙の家集としては決して完全なるものではないが、三十六歌仙が萬葉歌人として人麿・赤人・家持の三人を選んだ外は、凡て平安時代の中期以前、卽ちほぼ公任以前の古今集・後撰集時代の主なる歌人を網羅して、その歌を集めてゐる點に於て、平安時代中期以前の和歌史の重要なる資料であることは明かである。（貫之集・伊勢集參照）【參考】西本願寺本三十六人家集　〔久松〕

三十六人歌仙傳（さんじふろくにんかせんでん）　歌人傳　一卷【著者】顯昭の「人麿勘文」等には藤原盛房の撰とあり、「和歌色葉集」には三十六人傳その他の書名をあげて、「公任大納言選びおき給へり」とあるが、前者の方が穩當である。【成立】一本に、「壽永二年三月十四日記之」とある。【諸本】群書類從卷六五所收。（新校群書類從本は宮內省圖書寮藏寫本で校合したとある。）【內容】公任の「三十六人撰」は、人丸以下三十六歌人の和歌十首づつを撰したものであるが、本書は三十六歌仙の家系・官歷・歿年等を、正史野乘を參考して、漢文で簡單に記した歌人列傳である。【價値】單獨の歌人傳としては最初のものともいふべく、その點に重要な意義がある。「類聚古集」の編者藤原敎盛は「西宋集目錄」を作り、大江佐國は「拾遺鈔目錄」を作り、その中に歌人傳ともいふべきものを附してゐるらしいが現存しない。藤原仲實の「古今集目錄」は、現存せるこれ等のもののうち最古であらうが、傳記を主としたのでは本書が最初のものであらう。なほ本書に次いで中古歌仙三十六人傳等が作られた。作者の時代・官歷等は、かなり精細な部分もあるが、忠岑の項の如きは、「大和物語」を引用したばかりで、官歷にも素性にも觸れてゐず、友則や順の項等は官歷を列記したばかりで、その業績・學殖・境遇等には一言も言及してゐない。且つ逸話とか性格等に餘り觸れてゐないから、「古今著聞集」第五卷「十訓抄」「無名抄」の如き興味はないのであるが、本書の如き性質の傳も必要であり、且つその先驅として價値を認めねばならない。〔藤川〕

三十六歌仙（さんじふろくかせん）「歌仙」を見よ。

三十六歌仙繪卷（さんじふろくかせんえまき）「歌仙繪卷」を見よ。

三笑（さんせう）「唐事物の諺曲」を見よ。

三條院女藏人左近（さんでうゐんのにようくらうどさこん）「小大君（こだいのきみ）」を見よ。

三條家裝束抄（さんでうけしやうぞくせう）　有職　一卷【著者】未詳【別名】伏見院宸翰裝束抄。この名は、淸閑寺中納言熙房の奧書に「右一冊伏見院御宸翰也、以二或人之祕本一令二書寫一畢」とあるから起つたものと見えるが、抄中「當家は壯年の時雖レ任二大臣一、暫輪無用レ之也」とあるので、伏見院の御撰の意味でないことは明かである。【諸本】群書類從卷一一七（裝束部第六）所收。【解說】三條家の裝束に關する故實を記したもので、束帶・直衣・狩衣等に就いて、それ等の製作・文樣・地合及び着用法を記してある。又終りに奉書を載せてある。〔石村〕

山莊太夫（さんしやうだいふ）　傳說【名義】山莊太夫の名稱はこの話に出る丹後由良の長者の名前から來てゐるが、古くは單に由良の長者とだけで、山莊太夫とは云はなかつたものであらう。「さんしやう」の字面も、三莊・山桝・三枡・山椒などと宛ててゐる。古く土佐國には、山庄太夫と稱する一階級の人民が住んでゐたといふ事を初めとして、各地に算所（さんしよ）・山莊（さんしやうさん）・產所（さんしよ）・山所（さんしよ）などと稱する者があり、背山臥（やまさし）・陰陽師の類であつたが（山莊太夫考、鄕土研究三ノ一）、これ等は卜占・祈禱の表藝の外、或は祝言を唱へ歌舞を奏して合力を受け、更にその一部は遊藝賣笑の賤業にも從つた。卽ち山莊太夫の名目は、最初この由良の長者の話を語つて歩いたのが、この「さんしよ」の太夫であつたので、いつの世にか、これを曲の主人公の名と誤解されるやうになつたものかとも考へられる。【解說】寬永版の說經淨瑠璃「さんせう太夫」によれば、大體話の筋は次のやうである。

奧州五十四郡の太守岩城の判官正氏、帝の御勘氣を蒙り筑紫へ流され、その子安壽姬・對王丸（つしわう）は母と共に父を慕つて行き、途中越後國直江の浦で、山岡太夫といふ惡者に欺かれて、人買の船に賣渡され、母は佐渡で足の筋を切られて、粟の鳥を追ふ奴婢とされ、安壽姬・對王丸は丹後の由良港の强慾無殘な三莊太夫といふ長者の僕婢となつて酷使された。安壽姬は弟を思ひ家を思つて我が身を殺して弟を遁す。對王は虎口を遁れて都に上り、淸水寺に參籠して觀世音に祈願し、貴人に見出され、その養子となり、その計ひで父の罪も宥され、又佐渡の母をも救ひ、三莊太夫等を劾した。

この話の古い形が果して如何なるものであつたかは、今日なほ詳かでないが、この話の原の形は、やはり單なる長者傳說（長者屋敷參照）であつたらう。これを長者傳說として見れば、

その幾子となり、その計ひで父の罪も宥され、又佐渡の母をも救ひ、三荘太夫等を訓した。

この話の古い形が果して如何なるものであつたかは、今日なほ詳かでないが、この話の原の形は、やはり単なる長者屋敷説話であつたらう。これを三荘太夫説話と呼び、又

参照の家集であつて、

柿本集・紀貫之集・業平集・業性法師集・猿丸大夫集・家持集・
業平集・兼輔集・敦忠集・公忠集・清宣集・敦行集・示
子集・清正集・頼信集・忠間集・小大君集・能宣集・兼
盛集・曾禰好忠集・赤人集・酒船集・源順集・元輔
集・藤原忠房集・[illegible]集・[illegible]集・[illegible]集・[illegible]集・[illegible]集・[illegible]集・[illegible]集・[illegible]

であるが、本書は三十六歌仙の家系・官歴・歌年等を、正史野乗を参考して、漢文で簡単に記した歌人列伝である。【價値】単独の歌人伝としては最初のものともいふべく、その点に重要な意義がある。「類聚古集」の編者藤原岱嶺は「貫之集重日歌」を作り、大江匡房の編者とも伝へ、「拾遺

ので、伏見院の御撰の意味でないことは明かである。【諸本】群書類從巻一一七（装束部第六）所收。【解説】三條家の装束に關する故實を記したもので、束帯・直衣・狩衣等に就いて、それ等の製作・文様・地合及び着用法を記してある。又終りに装束名を載せてある。

「古代」

伊勢集（本願寺本三十六人集の内）

し。そのうへ、『日本紀』に後円座命の鼻の長さ七尺を注せる事、『天狗の面は此神の面にかたどるといへり』とあり、『大日本史』にもこの説を採れり。他に猿田彦生の時、御子猿王が怪しかりしといふ説があるが、それはこの曲を能楽の手本と混同し、五方節子舞に附會せるもので、我が國の作とするのが正しいらしい。幾嶋大氣はこの郷をよくし給うたと稱せられる。　〔田邊〕

三輪御系圖　〔記紀〕「系譜」を見よ。

所三諸愛撰由來　〔ふん記紀〕「紀國女御九重譜」を見よ。

三十六人家集　さんじゅうろくにんかしゅう　歌集　〔異聞〕歌仙家集　〔成立〕全部完成したのは平安時代末期か。但し何人の撰か不明。〔諸本〕西本願寺本三十六人家集（三十六番代、平安末期代筆）別名家集になる古筆手である。もと巻物であつたが、天文年間本願寺に下賜されたもので、表紙の唐草たること、殊に料紙の見事なる点で有名である。色々雲母の唐紙を切り継ぎ、鳥の羽ぎ、それに金銀で花鳥草木を描いたものである。本文は藤原の誤もあるが、古筆として最も貴重される。かつて資家卿の数葉づつを本版で複製したが、昭和年間新興版にて全部復刻。活版本では歌仙家集本、群書類從本、岡田榮夫氏本等がある。諸本の間に歌数、文句等にかなり異同がある。〔内容〕平安時代藤原公任が定めたと言はれる三十六歌仙（柿本人麻呂・紀貫之・紀友則・伊勢・小野小町・僧正遍昭・在原業平・藤原敏行・藤原朝忠・藤原高光・源重之・源宗于・源信明・源順・源等・源融・源兼澄・源中正・源中至・源中務・源重光・源兼盛・源公忠・源仲文・源重之・源重光・源兼盛・源公忠・源仲文・源重之・源重光・源兼盛・源公忠・源仲文・源重之

（内の集入六十三本寺脇本）集夢伊

長者の名が山莊太夫といふ外に、これといふ特異の點もない。諸國の長者の話には朝日と夕日との二面がある。多くは原因を信心と善根の有無に歸してゐるが、一方には極度の幸運によつて一朝にして巨富を得た者と、他の一方には然るべき因緣があつて、さしもの大分限が夢の如く退轉して了つたと云ふ話とが語られる。山莊太夫は卽ち右の長者沒落の一の例であつて、これに伴ふに對王丸の不思議の立身談を以てし、大體の形式はよく整つてゐる。長者が沒落して行く因緣話には樣々なものがあるが、山莊太夫の如く、慈悲に乏しく

に登り、一人は西に走つて岩木山に入り山の主になつたといふ（共古日錄卷十六）。山莊太夫があれ程有名である以上、後人の訛傳とは認め難き話の相違である。兎に角この兄弟の話の奥には、例の花萩中納言の子少將の話などと同じく（柱松考、鄕土研究三ノ一）、流人の子が親を慕ひ、その臨終に逢ひ得ずして後に供養をしたといふ一段が含まれてゐたことはほぼ確かである。而も岩木判官正氏が如何にも芝居の殿樣然たる名である上に、奥州の大名が九州へ流されるなどは有り得べき話でないから、これは王孫沈淪の悲劇を濃厚ならしめる

單に由良長者の口碑として不調和な取合せでないのみならず、寧ろ山莊太夫の由來を明かにする良い手掛りであると思ふ。勿論淨瑠璃の山莊太夫となるまでには多くの脚色を經てゐるにしても、これ等鳥追の歌や、早乙女の話の如きは、後代の技巧が到底偶然には添附し難き部分であるのを感ずる。尤も實を言へば、これ等鳥追の歌や早乙女の話は、長者の滅亡退轉とは寧ろ調和の出來ぬ事柄であるから、多分はこの長者傳說が、その最初の形、卽ちその榮華繁昌を傳へられてゐた時代から、長者に附いて廻つてゐた口碑の一つであつた

之助と政氏の異母弟大江左衞門との間に政氏の跡目についての爭ひがある。政氏の娘安壽姫は平野の社に詣で、許婚の梅津中將春道との情事。大江左衞門の郎黨がこれを襲ふが要人之助が追散らす。政氏は京の館に死骸となつて歸る。要人之助の父兵衞は、草津の宿で主君が曲者のために害された次第を語つて切腹。大江は勅諚と詐つて安壽姫を奪はうとするが、要人之助はその妻植竹と共に奮戰してこれを追ふ。〔二段〕要人之助夫婦は、政氏の北の方・安壽姫・對王丸の供をして落ち行く。大江に仕へる要人之助の兄內藏之進は、安壽

長者の名が山莊太夫といふ外に、これといふ特異の點もない。諸國の長者の話には朝日と夕日との二面がある。多くは原因を信心と善根の有無に歸してゐるが、一方には極度の幸運によつて一朝にして巨富を得た者と、他の一方には然るべき因緣があつて、さしもの大分限が夢の如く退轉して了つたと云ふ話とが語られる。山莊太夫は卽ち右の長者沒落の一の例であつて、これに伴ふに對王丸の不思議の立身談を以てし、大體の形式はよく整つてゐる。長者が沒落して行く因緣話には樣々なものがあるが、山莊太夫の如く、慈悲に乏しく下人を酷使した爲めに滅びた例も段々ある。現に奥州膽澤の掃部長者などもその一つである(鄕土研究二卷)。慈悲と謙遜とは觀音・藥師などの最も重んじ給ふ所である。加ふるに信仰と祈念とを以てした對王丸は高い官祿を得たので、これも「今昔物語」以來、貧民が出世した普通の道筋である。次に岩城判官の三人の遺族が人買に買はれたといふ話も、少し複雜ではあるが說明が出來る。貪慾なる長者が富を得る手段として惡い事をした話は、纐纈城の筋を引いた播州姫路の平野長者の類が少くない。但しこの場合に、被害者が安壽姫・對王丸であることは、何か吾々に分らぬ別の仔細があることと思ふ。岩城判官の居館は、寬永の淨瑠璃には奥州信夫郡とあつて今の福島縣らしいが、北奥の青森縣では彼は津輕から出た人と傳へ、今でも丹後の國の船が寄港すると、岩木山の神の憤りで天氣が荒れるといふことが多くの書に見えてゐる。又近い頃の弘前の人の話に昔この邊に同胞二人の娘があつて姉の方を安壽姫と言ひ、山莊太夫のために苦しめられて遁れ出で、一人は東へ行つて小黑山に登り、一人は西に走つて岩木山に入り山の主になつたといふ(奥古日錄卷十六)。山莊太夫があれ程有名である以上、後人の訛傳とは認め難き話の相違である。兎に角この兄弟の話の奥には、例の花萩中納言の子少將の話などと同じく(柱松考、鄕土研究三ノ一)、流人の子が親を慕ひ、その臨終に逢ひ得ずして後に供養をしたといふ一段が含まれてゐたことはほぼ確かである。而も岩木判官正氏が如何にも芝居の殿樣然たる名である上に、奥州の大名が九州へ流されるなどは有り得べき話でないから、これは王孫沈淪の悲劇を濃厚ならしめるまでの脚色かも知れない。一體山莊太夫の話の中で最も身に沁むのは、盲目の母親が鳥を追ふ一段である。「あんじゆ戀しやほゝらほい、つし王こひしやほゝらほい」、この唄は人人の涙を誘はずには措かなかつたらう。前半は石童丸に、後半は梅若丸に、よく似通つた幾多の脚色は、或はこの鳥追の歌を中心として敷衍せられたのではなからうか。若しさうだとすれば、舞臺は違ふが謠曲の「鳥追舟」などは、既に又その一先型であつた。こゝに注意すべきは、山莊太夫に限らず多くの長者沒落譚には、農作に關する話題を伴つてゐることである。殊に鳥追は田植に次いで、農村生活に於て重要な地位を占めてゐた行事であるから、かく長者の話に結びついてゐることは寧ろ自然であるといつていゝ。そしてこの話などもこの唄によつて人の心に植ゑつけられ、信ぜられて傳說となつたものであらう。なほもう一つは、早乙女の死んだといふ話が長者傳說には伴ひ易いと考へられる點があるので(山莊太夫考)、若い安壽姫の非業の死、並にその母の盲目にして鳥を追ふといふ哀れな話も單に由良長者の口碑として不調和な取合せでないのみならず、寧ろ山莊太夫の由來を明かにする良い手掛りであると思ふ。勿論淨瑠璃の山莊太夫となるまでには多くの脚色を經てゐるにしても、これ等鳥追の歌や、早乙女の話の如きは、後代の技巧が到底偶然には添附し難き部分であるのを感ずる。尤も實を言へば、これ等鳥追の歌や早乙女の話は、長者の滅亡退轉とは寧ろ調和の出來ぬ事柄であるから、多分はこの長者傳說が、その最初の形、卽ちその榮華繁昌を傳へられてゐた時代から、長者に附いて廻つてゐた口碑の一つであつたらうと思ふ。

〔柳田(國)〕

【參考】山莊太夫考(鄕土研究三ノ一)

三莊太夫五人孃　淨瑠璃

五段【作者】竹田出雲【初演】享保十二年八月一日初日、竹本座【諸本】竹田出雲淨瑠璃集(續帝國文庫)所收【題材】山莊太夫(別項)の話は早く淨瑠璃となり、所謂五說經の一として巷間に謳はれたが、今日その題名を知り得る最も古きものに寬永版の大阪與七郎正本「さんせう太夫」があり(用捨箱)、更に古淨瑠璃にも移されて山本土佐掾の「都志王丸」、岡本文彌の「三枡太夫」(共に「聲曲類纂」所引)等となり、ついで義太夫節では「山枡太夫戀慕湊」(寶永五年十月豐竹座、作者未詳)、「山枡太夫葭原雀」(享保五年九月豐竹座、作者紀海音)を生じてゐる。本曲は直接說話の原型に據らず、これ等の先行諸作の傳統を追うて脚色されたものである。

【梗概】〔初段〕村上帝の御宇、諸國に國分寺を建立せしめられたが、丹後の國分寺落成につき圓海阿闍梨が住職に任ぜられる。陸奥の黃金獻上に來た岩城判官政氏の臣大和田要人之助と政氏の異母弟大江左衞門との間に政氏の跡目についての爭ひがある。政氏の娘安壽姫は平野の社に詣で、許婚の梅津中將春道との情事。大江左衞門の郎黨がこれを襲ふが要人之助が追散らす。政氏は京の館に死骸となつて歸る。要人之助の父兵衞は、草津の宿で主君が曲者のために害された次第を語つて切腹。大江は勅諚と詐つて安壽姫を奪はうとするが、要人之助はその妻植竹と共に奮戰してこれを追ふ。〔二段〕要人之助夫婦は、政氏の北の方・安壽姫・對王丸の供をして落ち行く。大江に仕へる要人之助の兄內藏之進は、安壽姫等を落すため、弟と斬り合ひ、その隙に無事に逃れしめる。(道行こしぢの女浪)北の方・姉弟・植竹四人の道行。越後の獵師山岡は、追手のかゝる四人を救ふが如く見せて、北の方と姉弟とを二艘の人買船にのせ去らしめ植竹を斬るが、彼女の告白によつて三人の素性を知つた山岡の妻は、岩城の舊臣と名乘つて自害する。山岡は改悟して三人を奪ひ還す事を約する。〔三段〕丹後由良の千軒長者三莊太夫には五人の娘があるが、長女は白痴、次女は跛、四女は啞、五女は目を病んでをり、三女のおさんのみが滿足な體であるが實子でなく山岡の妻の妹に當る。太夫は吝嗇狂暴で新しく買ひ入れた安壽・對王を樣々に虐待する。姉弟は母が佐渡で盲ひて狂ひ、山岡に救ひ出される樣を夢見る(粟の段夢物狂)。二人の素性を察したおさんの聟由良三郎が白狀させようとする。おさんは安壽と謀つて對王を逃がす。三莊太夫は怒つて安壽に燒金を當てる。と見せたのは計略で、實は四女を身代りに立てたのであつた。太夫はもと梅津家の雜掌で、由良三郎等を欺くための策であつたと明かし、

安壽姫に、おさんを附添はせて落す。〔四段〕大和田内藏之進は主人大江の命により對王丸を討たねばならぬ事となり、妾腹の子民千代を身代りに立てようとする。正妻櫻木は民千代を國分寺の圓海の許に落す。對王丸も亦圓海の許に身を隱す。由良三郎等が寺に押寄せ、圓海に迫つて誓文を立てさせる（誓文の段）。内藏之進は文殊の像の首を斬つて大江に示すが許されず、民千代は對王と誤認されて牽かれる。内藏之進は出家する。〔五段〕大江の惡逆が露見し、丹後一國沒收の勅使に立つた梅津中將と要人之助は、圓海・對王・内藏之進の妻妾と、北の方を伴うた山岡とに逢ふ。三莊太夫等は捕へられて來るが、安壽の取りなしで太夫は許され、聟由良三郎は殺される。岩城方の人々は大江の館を襲ひ、民千代を救ひ出し、大江の首を刎ねる。

「さんせう太夫」（正本）

【構想】説經若しくは古淨瑠璃に於ける同一題材の曲と比較する事に依つて、近世戲曲としての義太夫淨瑠璃の特質を明瞭に看取する事が出來る。古淨瑠璃の「さんせう太夫」の略筋は次の如くである。

〔初段〕奥州五十四郡の主岩城判官正うぢ、敕勘を蒙り筑紫あんらくじに流人となる。御臺・つし王姉弟・乳人の三人跡を追ふ。越後國あふけの橋下に憩ふ所を山をかの太夫に欺かれ、姉弟は宮崎の三郎に、乳人は佐渡の一郎に賣り渡される。途中乳人は投身し御臺は佐渡に盲目となつて粟の島を追ふ。〔二段〕丹後由良のさんせう太夫に賣られた姉弟は、しのぶ・忘れ草と名づけられて虐使されるが、伊勢の小萩に援けられる。〔三段〕姉弟は逃亡の相談を立ち聞かれ烙印を捺される。兩人が住持に送られて出立。「道行」あり。〔六段〕つし王清水寺に起請する。偶々一子を賜へと祈れる梅津の院に見出されて養子となる。養子披露の席上で、つし王は系圖の卷物を示すので、叡感斜ならず興州五十四郡の外に丹後五郡を賜はる。後佐渡に母をたづね系圖の卷物の功德で兩眼を開かしめ、次いで丹後に至り住持を召して姉の遺髮を受け、太夫等を罰し、伊勢の小萩を召し連れて歸國する。（德川文藝類聚所收。享保の複刻本による）

これは、前述の説經與七郎の正本の趣を大體傳へてゐるものと見てよからう。宗教的氣分の濃い點や全體に鬱然たる悲哀憂愁の情緒を湛へてをり、而も淡くそれを樂しまうとする態度が看取される點に、中世的特色が存する。出雲の作は此處から出發し、前述の一二の義太夫物の試練を經て、近世戲曲としての全き姿を提示してゐる。殘虐味・淫猥味の高調、類型的善惡兩人格の基本的對立、非宗教的態度、奸計・錯誤・苦肉の策・身代り等々に現れる脚色偏重の態度、感覺主義、一言にして言へば近世獨特の現實主義的態度を明かに示してゐる。【影響】本曲は半二・小出雲・松洛等に依り、歌舞伎の影響をも受けて、「由良湊千軒長者」（寶暦十一年五月竹本座）に發展せしめられ、町人文藝特有の機械的因果觀の要素を強く植ゑ附けられて、所謂「鶏娘（とりすめ）」の原型を成した。この曲は今なほ演ぜられ、且つ歌舞伎にも移された。（江戸では、「三莊太夫銚鶏歳（さんしやうたいふこがねのとりとし）」天保八年七月市村座）。これを改作した「增補三莊太夫」が今日行はれる。なほ小説では、出雲の「五人孃（ひすめ）」に依つて、八文字屋の浮世草子「咲分五人孃」（五冊、享保二十年刊、其磧）が現れ、青本では「文案で喰ふ蟲も好々三枡太夫七人娘」（三冊、寛政六年刊、京傳）となり、更にこれを變形せる黄表紙「山枡太夫物語」（二冊、寛政七年刊、櫻川慈悲成）となり、讀本には「山椒太夫榮枯物語」（五冊、文政六年刊、梅暮里谷峨。後編「新調錄」六冊、文政八年刊）がある。

【參考】繪入淨瑠璃史水谷不倒　〔近藤〕

三笑亭可樂（さんせうていからく）　落語家【通稱】京屋又五郎（一本に櫛屋又三郎とある）【生歿】生年未詳。天保四年（一八三三）三月八日歿。享年四十三歳説（落語家奇奴部類）、五十七歳説（名譽實錄）、五十八歳説（講談落語今昔譚）。【法名】三笑亭可樂安譽信士【墓所】淺草區今戸町七三、慶養寺地中潮江院【閲歴】櫛工で馬喰町に住んだが、稗史小説類を好み、又飜案に巧みで輕口頓作の才があつた。初代焉馬等の落語に影響せられて素人ながらも興味を持ち、自ら山生亭花樂と號した。然るに大阪より岡本萬作といふ輕口頓作の名人が江戸に出て堂々と繪入ビラの廣告をし、神田豐島町藁店に頓作輕口噺の看板をあげ、江戸市中に喝采を博した。江戸ッ兒の花樂はこれに對抗するため下谷柳町の稲荷社の境内に、金升・草露・瓢我等と講席を開いたが、元來素人であるため、落語の種が盡き、技も未熟なので五日にして場を閉ぢねばならなかつた。併し彼は屈することなく、目黑の不動尊に念じ、愈々櫛工の本職を擲つて落語家たらんと決心し、修業のために地方へと志したが、次第に人氣を得、藝名を虎溪三笑に因んで三笑亭可樂と改名した。寛政十二年、初めて江戸柳橋に落語會を開き、立川焉馬・櫻川慈悲成（各別項）等も出演し、大に氣勢をあげた。爾後自作の落語を披露するごとに人氣を得、文化元年六月、下谷廣德寺門前孔雀茶屋の夜講に聽衆より題を求め、辨慶・辻君・狐の三題を面白く組合せて、滿座を捧腹絶倒せしめたのが三題噺の初めである。【業績】彼が江戸の落語に對する功績は、甚だ偉大なるものがあつて、落語界の中興の祖と仰がれ、寄席の創始者として讃へられた。彼の創作の才と洗練された話術は遂に江戸市民の人氣を獲得し、落語をして純然たる興行物たらしめたのである。殊に彼が子弟を養成し、すぐれた落語家を輩出せしめた點は特筆に値ひする。即ち彼は不振なる落語を大成せしめたと共に、落語をして將來ある生命と時代の可樂となる。門弟

さん馬の門に入り、五代目さん馬となり、安政三年、四代目可樂となる。〔五代〕小石川可綠の門人にて可重といふ。二代目可樂の聟となり、四代目さん馬を襲名し、安政三年、三代目むらくとなり、元治元年五代目可樂となる。慶應三年、可樂の名を返上す。〔六代〕初め桂才賀といふ。桂文枝となり、左樂門に入りて小左樂となり、又瀧亭鯉昇となり、二代目談洲樓燕枝に就き燕玉といひ、後六代目が出來た。一つは老いたる母の住む九州の田舍の淋しい世界で、其處に彼は過去の殼を脱ぎ棄てて來た。次は圖書館や研究室の塵に埋もつた世界で、廣田先生や野々宮理學士が其處に生きてゐる。彼は半分その世界に入りかけてゐる。第三は燦として春の如く動いてゐる世界で、美彌子やよし子をば其處に置いて眺めたが、まだ遠くて彼には近づき難く思はれた。彼はこの三つの世界の前に立つてまご出來る。（門參照）

サンスクリット　「梵語」を見よ。　〔野上〕

三省錄（さんせいろく）　隨筆　正後編各五卷【著者】正編は志賀忍著、原義（德齋）補訂。後編は原義著（志賀忍の傳は「理齋隨筆」參照）【刊行】天保十四年・文久二年【解説】前後兩編、各衣服、飲食、住居、軒のしのぶ（上下二卷）の四部類を立て、各部類に關する教訓談を古今の雜書より引いたもので、まゝ著者の自説を交へて

排斥論倒せしめたのが三題噺の初めである。【業績】彼が江戸の落語に對する功績は、甚だ偉大なるものがあつて、落語界の中興の祖と仰がれ、寄席の創始者として讃へられた。彼の創作の才と洗練された話術は遂に江戸市民の人氣を獲得し、落語をして純然たる興行物たらしめたのである。殊に彼が子弟を養成し、すぐれた落語家を輩出せしめた點は特筆に値ひする。即ち彼は不振なる落語を大成せしめたと共に、落語をして將來ある生命を持たしめたのである。而も彼は民衆の物たる落語を將軍家の上聞に達せしめたこともある。即ち德川家齊が落語の看板を見て、落語の何たるかを知らんがため、彼並びに林屋正藏・三遊亭圓生(各別項)等を召され、彼は「將棋の殿樣」を口演したところ、將軍は殊の外喜ばれ、後屢々彼を召されたといふ。實に彼は今日の落語の基礎を確立せしめたものであつて、烏亭焉馬(別項)と共に、斯界の偉大なる功勞者である。【門弟】門人十哲と稱せられたものに、朝寢坊むらく・林屋正藏・山遊亭猿生(後、三遊亭圓生)・三笑亭可上・うつしゑ都樂・翁家さん馬・猩々亭左樂・佐川東幸・石井宗叔・船遊亭扇橋等がある。なほ八人藝の祖である川島歌遊も門人である。

【門系】〔二代〕筑前の僧侶。本名、晒見柁善。初め櫻川慈悲成の門に入つて友成といひ、二代目西東太郎左衞門となり、臼井杵藏となつたが、後、可樂の門に入り、初代芝樂・初代さん馬となり、ついで二代目可樂の名跡をつぐ。〔三代〕慈悲成門人清成。翁家さん馬の門人ともなり、小山・さん助・せい馬などといひ、三代目西東太郎左衞門となり、二代目さん馬ともなつた。〔四代〕初め龍奇といふ。四代目さん馬の門に入り、五代目さん馬となり、安政三年、四代目可樂となる。〔五代〕小石川可綠の門人にて可重といふ。二代目可樂の聟となり、四代目さん馬を襲名し、安政三年、三代目むらくとなり、元治元年五代目可樂となる。慶應三年、可樂の名を返上す。〔六代〕初め桂才賀といふ。桂文枝となり、左樂門に入りて小左樂となり、又瀧亭鯉昇となり、二代目談洲樓燕枝に就き燕玉といひ、後六代目の可樂となる。現存。〔小柴〕

三條流（さんでうりう）　書道　【解說】三條西實隆の書流をいふ。實隆(別項)は、戰國亂離の際、數朝に歷仕して、忠勤よく朝臣たる本分を盡したが、また和歌を初め學藝に長じ、典故に精しく、書は尊圓親王より出でて一派を成した。これを三條流といふ。その書風は、帝室御物の御註孝經を初め、幾多現存の筆蹟によつて知らるゝ如く、昔日の上代樣(別項)ほどの風韻は認め難いが、遒勁暢快なるものがあつて、戰國諸家中での名筆である。されば、當時その書を乞ふもの多く、相當行はれたやうである。〔伊木〕

三四郎（さんしろう）　小說　【作者】夏目漱石　【發表・刊行】明治四十一年九月一日から同十二月二十九日まで朝日新聞に連載。翌年五月春陽堂發行。漱石全集第四卷・同普及版第五卷所收。

【梗概】小川三四郎といふ大學新入の一青年が初めて東京へ出て來て、佐々木與次郎と呼ぶ專科生と知り合ひ、與次郎の寄食してゐる廣田先生の家に出入するやうになり、其處で里見美彌子を知るやうになつた。それから同鄕の先輩野々宮理學士とその妹よし子とも交際するやうになつた。三四郎には三つの世界を見た。一つは老いたる母の住む九州の田舍の淋しい世界で、其處に彼は過去の殼を脫ぎ棄てて來た。次は圖書館や研究室の塵に埋もつた世界で、廣田先生や野々宮理學士が其處に生きてゐる。彼は半分その世界に入りかけてゐる。第三は燦として春の如く動いてゐる世界で、美彌子やよし子をば其處に置いて眺めたが、まだ遠くて彼には近づき難く思はれた。彼はこの三つの世界の前に立つてまごつき苦しんでゐるうちに、最も多く彼の心を支配してゐた美彌子は結婚してしまつた。

【批評】これは、この作品の創作當時に於ける作者の周圍の人間の若干を目安に置いて書いたものであるが、事件としては直接原型と思はれる事件はなかつた。事件は主でなく思想が主である。即ち一青年の內に目ざめて來たまだ稀薄ではあるが、純眞な性的生活のきざし、それが主題でなければならぬ。彼の先輩は皆一種の露惡家——作中の廣田先生の用語を借りて云へば——である。一時代前の人間は敎育の結果悉く僞善者であつた。その僞善が社會の變化と共に持ち切れなくなり、今では自己意識が强くなつて昔なら僞善者となつてゐたであらう者が皆露惡家となつてゐる。その露惡家たちの空氣の中で揉まれて、田舍出の一青年が少しづつ伸びて行く姿が描かれてゐる。表現は「虞美人草」(別項)に比べて寫實的になだらかになつて來たが、それでもまだ相當に文飾が施されて後年の圓熟には遠いものである。女主人公の性格は「虞美人草」のそれに比べて毒氣が消えてゐるが、それだけ眞實味が多く、且つタイプとして近代的であることは注目に値する。この作品は、「それから」「門」(各別項)と共に三部作とも見ることが出來る。(門參照)

サンスクリット（さんぜいろく）　隨筆　正後編各五卷　【著者】正編は志賀忍著、原義(德齋)補訂。後編は原義著(志賀忍の傳は「理齋隨筆」參照)　【刊行】天保十四年・文久二年　【解說】前後兩編、各衣服、飲食、住居、軒のしのぶ(上下二卷)の四部類を立て、各部類に關する敎訓談を古今の雜書より引いたもので、まゝ著者の自說を交へてゐる。「軒のしのぶ」は附錄の名になつてゐるが、これは前三類以外の雜集類に相當する。正編の卷尾に「天保元年寅十二月志賀理齋忍」と署してある。所引の書數十種中に、燈前謾錄・獻可錄・落穗集・古老物語・明良洪範・鳩巢小說・文武訓・春臺獨語・年山紀聞・草茅危言・梧窓漫筆・閑田耕筆の類が屢々見える。正編に天保十三年原義、同三年千賀輯の兩序、及び天保十三年山崎美成、同十四年海老名絅(翹齋)の兩跋があり、後編に安政三年原義、文久三年同人の兩序がある。〔和田〕

三蹟（さんせき）　書道　【解說】小野道風・藤原佐理・藤原行成、この三人を三蹟或は三賢といふ。嵯峨天皇・空海・橘逸勢の三筆(別項)に對しての稱である。我が國の書風はその初めは全く支那風であつた。平安朝の初期に於て空海など多少獨自の書風を出したものもあつたが、一般には支那風を脫却し得なかつた。併し年と共に幾分の變化を生じ、所謂和習が多くなつて來た。そして天曆・天喜の頃に至れば、既に過渡期を過ぎて、支那樣の硬い勁い筆法は無くなり、高雅優麗なる日本風のものとなつてしまつた。所謂上代樣の書風で、その代表的のものは卽ち三蹟の人々である。就中、道風は太宰大貳菊弦の子で、篁の孫に當

り、位官は正四位下内藏權頭で終り、康保元年(一六二四)十二月、七十一歳を以て卒した。その書に關する事は、大江匡房の「新猿樂記」を初め、いろ〳〵見えて居り、彼の柳に蛙の逸話さへ傳へられてある位、能筆を以て有名であるが、彼はまた我が國で書道の專門家として立つた第一人者とも見られるのである。醍醐天皇深くその書を愛で給うて、醍醐寺の榜を書かしめられ、又行草の法帖各一卷を書かしめて、これを唐に遣し給うたこともある。この外、殿堂宮門の題額等、その筆に成るもの頗る多かつたと謂はれてゐる。殊に行草に巧妙であつた。その書風は、勿論唐樣(別項)から脱却した和風のものではあるが、而も遒勁を失はぬものである。世にその筆蹟を野跡と云ふ。眞蹟としては、帝室御物の屏風土代、北白川宮御所藏の智證大師徽號勅書等があり、秋萩帖・繼色紙・本阿彌切なども古來その筆に成るものと傳へられてゐる。次に佐理は左近衛少將敦敏の子で、太政大臣實賴の孫である。太宰大貳となり、正三位に進んだが、長德四年(一六五八)七月、五十五歳を以て薨じた。その筆蹟を佐跡と云ふ。他の上代樣に比して豐潤味は少いが、暢達巧妙を極めたものである。されば筑紫に在任中も遙に京都より手本を依賴するものが少くなかつたといふことであるが、殊に宇佐八幡の神官と爭うて京都に召還せらるゝ途中、瀨戸内海に於て風波の難に遭ひ、三島大明神の夢現に依つてその社の額を書き奉つた話は「大鏡」などにも見えて、名高い逸話である。その眞蹟としては、御物消息(恩命帖)を初め、酒井忠正伯所藏、松平直亮伯所藏の消息があり、また松平頼壽伯所藏詩懷紙も有名である。なほ右傳來としては、紙地切・通切・筋切・室町切・紙撚切等がある。次に、行成は少將義孝の長子で、攝政伊尹の孫に當り、佐理とほぼ同時の人で、正二位權大納言にまで陞つたが、萬壽四年(一六八七)十二月、五十六歳を以て薨じた。彼は才藝に長じ、典禮に精しかつたが、殊に書は二王を宗とし、道風に私淑したもので、世に權跡と稱へる。その書風は頗る溫潤で、道風に依つて圓熟された書風がこの人に依つて更に大成せられたと謂ふべきである。のみならず、その書流は世尊寺流(別項)として永く後世に傳はり、子孫世々朝廷入木道の本宗となつてゐるので、影響する所も亦大なるものがある。行成の眞蹟として知られてゐるのは、御物「朗詠集」、高松宮御所藏「白氏文集」、名古屋關戸守彥氏所藏「消息」等があり、また所傳のものでは本能寺切・伊豫切・法輪寺切・針切等の古筆切その他がある。

〔伊木〕

三世相（さんぜさう）

淨瑠璃　五段　時代物

【作者】近松門左衞門　【名稱】夕霧に言寄せて三世流轉の相を示す義。故に正本によつて「夕霧三世相」「夕霧追善物語」などとも題す。

【興行】版行が貞享三年五月であるから、その頃であらう。【諸本】八行六十三丁本、十行三十丁本(夕霧三世相)の外に、繪入細字本(夕霧追善物語)等もある。近松門左衞門全集第一・近松傑作全集第二・近松全集第二等に所收。因みに加賀掾正本にも同名題のものがある。【題材】謠曲「富士太鼓」等による奈良の樂人間の抗爭に、歌舞伎脚本「夕霧七年忌」(別項)に胚胎する夕霧追福を書き入れたものと思はれる。

【梗概】〔序段〕(春日神社)中宮御平產の御祈禱に勅使が立つて、來月日光山に催される天下泰平の御祈念に、明櫻の論議を樂し得る樂人として、狛野左京進盛光が選まれる。(盛光館)盛光は留守中、十三歳になる眼病の春姫が繼母に仕へる事の不安を感じたが、一族の樂人近藤兵庫守に託して出立した。(猿澤池邊)豫て兵庫に通じてゐた繼母は、共に謀つて姫を猿澤池に投じようとしたが、左京を見送つた執權望月高貞が、歸途これを見つけて姫を救つた。〔二段〕(玉水)高貞は姫を護つて落ち延びて來たが、深手に堪へで此處に落命する。姫は父を慕つて都に急ぐ。(北嵯峨殘秋庵)姫の母夕霧太夫の乳母は、太夫の死後、靜三尼と號してこの庵に住んだが、尋ね寄つた知貞尼も、もと河内太夫の遺手の果であつた。東下りの別れに靜三尼を訪れた左京は恰も父を探す春姫に廻り逢ふ。こゝに勅諚と稱して左京を捕へんと兵庫が寄せて來た。姫を家來望月小六に託した左京は、敵を追ひ散らして丹波へ落ちる。〔三段〕(新町廓)姫は母の跡慕はしく廓に入つて、昔、母の妹女郎荻野に會つた。荻野は傾城の誡を說くのであつた。(屋形)姫は荻野に案内されて、母のために屋形で營まれる法要に參列すると、黑格子の梓巫女の口寄せで、母の地獄の呵責を知る。(下寺町淨國寺)亡母の墓に詣でた姫は、寺の軒下に結ぶ夢の中に、惡鬼に責められる母の姿を見た。〔四段〕「はるひめ道行」姫は父を尋ねて大和法華寺につく。(奈良)靜三尼と知貞尼が、玉章塚を立てんとの勸進の聲に、姫の繼母が密夫兵庫の文を獻じて髮を切つた所へ、兵庫が追ひ驅けて、尼の所業を憤り守護職に引立てる。(守護職館)恰も左京が小六と姫を連れて訴へ出たために、尼の手から出された文が證據となつて、兵庫の罪科はすべて露かれる。〔五段〕(大内)左京の官位は元に復され、春姫は宮仕への身となり、薄霧局と名乘る。(誓願寺)夕霧供養のため、七日間の大法養が執行される。滿願の日、夕霧と彼の繼母とが姿を現し、誠は觀音勢至で、衆生濟度のために假りに人間に現じたのであると說く。

【解說】近松初期の作例にも徵して謠曲種と思はれるが、「富士太鼓」や「籠太鼓」の如き間接的な仇討の解釋を離れ、お家騷動の筋を辿らうとした所に近世的な態度が窺はれる。繼子虐めの脚色を盛つて前期流行の樣式を繼承したものの、夕霧事件を具體的に扱つた事によつて活氣を呈したのである。その觀方からすれば、脚色の中心は左京進のお家騷動にあつたが、外題を夕霧事件の方に選んだのは妥當かと考へられる。九年忌に當てた作であらうが、河内・荻野を初め實在の人物が多く登場してゐる。二人の尼の如きもその類であるかと思ふ。これ等は寧ろ脚色以上の效果を與へた題材と見るべきであらう。要するに脚色からは上作の部には屬さないが、歷史的に解釋さるべき位置を占めてゐる。(夕霧七年忌參照)

【參考】近松全集第二卷解說　藤井乙男　○近世邦樂年表(義太夫節之部)黑木勘藏　〔守隨〕

殘雪（ざんせつ）

小說　【作者】田山花袋　【發表】大正六年十月より朝日新聞に連載。【刊行】大正七年五月春陽堂。長篇小說全集(新潮社)所收。

【梗概】主人公哲太は、或る時、關東平原と思はれる殘雪の野に、昔戀した女の住んだ跡を探したり、片田舍に隱栖してゐる年寄つた知人を訪ねたり、或る川邊の料理屋を兼ねた旅館に泊つて、遊び客の騷ぎを隣室に聞きながら、ひとり淋しく遥々の想ひ出に耽つたりする。この數年來、彼は家を捨てよう、世を離れようとして、屢々旅から旅へとさまよつたのだつた。現在、彼の携はつてゐる文學的の職業の代りに山奥の百姓とか離れ島の燈臺守とかいふものの方に心を惹かれ、さういふ職業を調べて見たりした。けれども何處へ往つても同じやうな苦しい人生があつた。都會の人である彼はやはり都會へ歸らなければならなかつた。そこには彼の悲慘な家庭があり、足手まとひの妻子があり、煩はしいけれども戀しくて離れられない戀人があつた。彼は早くから家庭生活に飽きて、外に戀愛の相手を

る。この種の悟道、佛教的の菩提心を發するに至る事が取扱はれてある。「生」「妻」「緣」等では、自然主義的の平面描寫が重んぜられてゐたが、この作になると、心理解剖や、心理描寫が多く、感想文又は議論文が長く續いてゐる事もあつて、人生の外面よりは內面を、客觀の世界よりは主觀の世界を擴げて見せようとしたのであつた。そしてフランスの自然主義から象徵主義へ移つて行つたユイスマンスの宗教的三部作などに、この作は多少の暗示を得てゐるであらう。その證據は作中所々に散見する。又わが國の文壇にも、自然主義が頽廢し

子道信は、まなごの庄司の娘白菊の一念で、遣成寺で死んだが、弟道善は白菊の靈の乘り移つた異母妹滿月姫の執拗な戀に心憂く思ひ、避けて大峯山に籠らうとて吉野に來た。執權勘解由が、道善を控へて、家のために待宵姫との婚儀の承諾を勸める。併し道善は腰元十六夜との仲に儲けた道丸を世繼にせよと主張し、家寶の毒蛇の利劍と日高川の掛繪とを勸解由に預けて山に入る。勘解由は松枝にその繪を掛けると、繪の中の大蛇が拔け出して、滿月姫の一念を遂げさせぬ時は家に祟るであらうと戒めた。(道成館)勘解由が歸つたので、六夜の靈がこゝまで隨せて來た時、繼母の使者が待宵と思つて斬りかけた事から、忍之助は妹の敵として文藏を討つた。〔四幕〕(懺悔橋)道善は羽黑山へ赴く途中、小袖の祟りで橋を渡り兼ねてゐる所へ、勘解由の一味に斬りかけられて深手を負つたが、十六夜の靈の働きで敵は逐はれ、先達等の祈りによつて傷も癒えた。不動の像からは血が流れてゐた。(最上川)道善は果てたと館に報らせたが、滿月に追はれた道善は、最上川の渡舟の中に身を隱した。滿月は終に見出して責めたてる。〔五幕〕(道成寺)勘解由は忍之助兄弟に討た

る。この數年來、彼は家を捨てよう、世を離れようとして、屢々旅から旅へとさまよつたのだつた。現在、彼の携はつてゐる文學的の職業の代りに山奥の百姓とか離れ島の燈臺守とかいふものの方に心を惹かれ、さういふ職業を調べて見たりした。けれども何處へ往つても同じやうな苦しい人生があつた。都會の人である彼はやはり都會へ歸らなければならなかつた。そこには彼の悲慘な家庭があり、足手まとひの妻子があり、煩はしいけれども戀しくて離れられない戀人があつた。彼は早くから家庭生活に飽きて、外に戀愛の相手を求めた。求め得たその相手には、別に男があつた。そして色戀を賣り物にする種類の女だつたが、その女の情夫に別に女があるのを嫉妬して、その別の女を殺さうとして果さずに川に身投げするまでになつた。フランスの文學の中にある頽廢的・耽溺的の生活から、精神的・宗教的の生活に甦つてゆく人物 Durtal に深い興味を感じてゐた哲太は、自然にといふよりは意識的に、努力して、肉の世界から靈の世界へ、煩惱から菩提へと辿り登つて、屢々あと戻りをしてはもとの泥濘に陷ることもあつたが、女が身投げした事件のあつた頃から悟るところがあつて、田舍の或る寺に珍藏されてゐた一切藏經を讀む機會を得るや、それまでも多少佛教の研究をしてゐた彼は、こゝにまさしく佛法に會ひ得た喜びを感じ、新生の意氣を以て都會生活へ還つて來た。

【批評】同じ作者の「生」「妻」「緣」(生參照)の三部作の續篇と見るべきもので、戀愛の三角關係の紛糾を中心として、人間生活の諸種の問題に亙り、思索的傾向の強い主人公が、懷疑に懷疑を重ね、煩悶に煩悶を繰返した後、一種の悟道、佛教的の菩提心を發するに至る事が取扱はれてある。「生」「妻」「緣」等では、自然主義的の平面描寫が重んぜられてゐたが、この作になると、心理解剖や、心理描寫が多く、感想文又は議論文が長く續いてゐる事もあつて、人生の外面よりは內面を、客觀の世界よりは主觀の世界を擴げて見せようとしたのであつた。そしてフランスの自然主義から象徵主義へ移つて行つたユイスマンスの宗教的三部作などに、この作は多少の暗示を得てゐるであらう。その證據は作中所々に散見する。又わが國の文壇にも、自然主義が頽廢して人道主義が起り、やがて宗教的、殊に佛教的文學が盛んになつたことがあつたが、この作などは、その宗教的傾向を代表するものと言ふことが出來る。

〔中村(星)〕

三世道成寺（さんぜだうじやうじ）

脚本　五幕　時代物

【作者】宮崎傳吉

【名稱】女の怨念が三世に祟つた脚色から附けた。角書に「女人の角碎（をく）大峯山、嫉妬鱗削（そる）日高川」と記す。

【諸本】當時出版された正本屋小兵衞版の繪入狂言本（挿繪畫家は師宣か）が現存し、元祿歌舞伎傑作集上卷所收。

【興行】元祿十四年七月、江戸森田座上演。

〔役割〕橘道善(村山平右衞門)、岩倉勘解由左衞門(大谷廣右衞門)、片男波堂之助(守田勘彌)、繼母(松本吉左衞門)、待宵の前(歌村十次郎)、滿月姫(上村吉三郎)、岩倉文藏(田村宮右衞門)、十六夜(袖崎いろは)、まなご常五郎(勝村門之丞)、まなご忍之助(宮崎傳吉)等。

【題材】從前行はれた淨瑠璃や、歌舞伎狂言の「道成寺」を書き替へた作である。謠曲「現在道成寺」とは特に交渉がある。

【梗概】〔序幕〕(吉野大峯山麓)　橘道成の長子道信は、まなごの庄司の娘白菊の一念で、道成寺で死んだが、弟道善は白菊の靈の乘り移つた異母妹滿月姫の執拗な戀に心憂く思ひ、避けて大峯山に籠らうとて吉野に來た。執權勘解由が、道善を控へて、家のために待宵姫との婚儀の承諾を勸める。併し道善は腰元十六夜との仲に儲けた道丸を世繼にせよと主張し、家寶の毒蛇の利劍と日高川の掛繪とを勸解由に預けて山に入る。勘解由は松枝にその繪を掛けると、繪の中の大蛇が拔け出して、滿月姫の一念を遂げさせぬ時は家に祟るであらうと戒めた。(道成館)勘解由が歸つたので、一時、待宵姫の輿入を迎へることとなつた。

〔二幕〕(道成館)道善は人目を避けて、十六夜に會ひに來たが、待宵に發見されたので、待宵には、吉日を卜して館に迎へると約して一時實家に引取らす。繼母から勘解由の一子文藏に滿月姫を配（めあ）はせて家を繼がさうと言はれた勘解由は、慾からこれに與みして明日鞍馬に籠る道善の自滅の策を案じた。併しこれを十六夜が立ち聞きしたために、十六夜は殺された。(まなご屋敷)白菊から道丸を預つてゐる弟まなご常五郎の許に、白菊が姿を現した。そこへ東國から歸り着いた兄忍之助は、十六夜の胸から心の車が現れて道善を乘せて走るさまに驚きつゝ跡をつける。

〔三幕〕(鞍馬)專念行を勸める道善の所へ、滿月姫から贈られた小袖が屆いた。山伏姿にやつして忍び寄つた待宵が道善を尋ねあてて誘ふと、かの小袖が自ら動いて、また道善を誘つた。この時待宵からは別の姿が拔け出して、行場の屋內で激しい爭ひが始まる。道善が懺悔文を唱へると、小袖は消え、待宵も屋外にゐた。淺ましい己が心に恥ぢて待宵は山を下る。十六夜の靈がこゝまで聽せて來た時、繼母の使者が待宵と思つて斬りかけた事から、忍之助は妹の敵として文藏を討つた。

〔四幕〕(懺悔橋)道善は羽黑山へ赴く途中、小袖の祟りで橋を渡り兼ねてゐる所へ、勘解由の一味に斬りかけられて深手を負つたが、十六夜の靈の働きで敵は逐はれ、先達等の祈りによつて傷も癒えた。不動の像からは血が流れてゐた。

(最上川)道善は果てたと館に報らせたが、滿月に迫はれた道善は、最上川の渡舟の中に身を隱した。滿月は終に見出して責めたてる。

〔五幕〕(道成寺)勘解由は忍之助兄弟に討たれる。鐘供養に際して、滿月の靈は鐘に纏ひ付いたが、祈禱によりて日高川に飛び込む。座中、供養の大踊り。

【解說】普通の「道成寺」の後日談とも見えるが、寧ろ書き替へと言ふべきで、道善は安珍、滿月は淸姫に當る。十六夜や待宵の出現は、或は道善・滿月の關係を、徒に重複させようとしたもののやうにも觀察されるが、待宵は結局人間的な戀愛に終始し、煩惱の迷夢から覺める型を成したに對し、十六夜は死後の一念深く作用して、超人的な力を見せる型を示した。十六夜には、宙乘りや機巧（からく）の自由な運用も發見されるが、一子道丸を配する事によつて、人情美を强調するなど、滿月よりも十分に描かれてゐる。惡方の繼母や勘解由は餘り明瞭でない。本曲は、元祿時代の江戸狂言としては、脚色の統一を得た點に於て、出色の部に屬する。これ等は本曲が古來の道成寺狂言の書き替へであつて、筋としては既に完成してゐたからであらうと思ふ。但し脚色の十分に現存する江戸の道成寺狂言として、本曲は古い方である。(道成寺參照)

【參考】元祿歌舞伎傑作集上卷解說　高野辰之・黑木勘藏　〔守隨〕

三千世界色修業（さんぜんせかいいろしゆげふ）　浮世草子　五卷

【作者】自陀洛南無散人の署名がある。【刊行】安永二年【諸本】徳川文藝類聚第三遍歷小說所收【解說】五卷十五說話より成る地獄小說。江戸の關東屋介太郎は有り餘る金銀を人に施與して世間を賑はしてゐたが、かりそめの病に罹り悒鬱になる。そこで氣晴らしに突然江戸吉原の高尾太夫に馴染を重ねる。然るに高尾は病に罹り樣々の介抱もその甲斐なくはかなくなつて了ふ。怏々として心樂しまぬ介太郎は取引先なる京の吳服屋川上藤次郎、大阪の問屋乾屋宗左衞門の勸めで上方見物の旅に出る。途中關の宿にて浪人玉納家之進の娘おすゑを見初めて金を惠む。介太郎はこゝで今度の旅行が昔男業平の後を慕ひ、色道修業を思ひ立つた爲めである事を同行の二人に明かす。先づ京に入つて藤次郎の案內で島原を見物し、祇園の一力で尾上といふ白人を救ひ、繩手・石垣・北野・今出川・七條・新地等、京中の色所を端々まで遊び盡して大阪へと下る。乾屋宗左衞門の案內で新地の吉田屋に遊び、堂島さくらばしの歷々で、廓の玉の井と馴染み、勸當されて零落しながらもなほ玉の井に逢ひに來てゐる男を見かけてそれをも救ふ。かくて長門下關まで津々浦々の色所を行脚せんとして、先づ兵庫磯の町にて舟を借り切る。折から江戸より飛脚來り、御用金仰せ付けらるゝ由なれば、急ぎ歸れとの事だつたので、急に江戸に引返し、御用を首尾よく濟ませた上、今年は高尾が七回忌なので喜多りもし、馴染みの茶屋で昔語りもしようとして京へ行く。道中の大阪表に上つた所で、うんと一聲を名殘りに頓死する。これより冥途の色修業が展開してゆく。この世を去つた介太郎は、先づ西方淨土へ急がうとして行く途中、三途の川でお姥に思ひ込まれたのを手始めに、牛頭馬頭（ごづめうづ）の娘の赤鬼青鬼に惚れられ、閻魔大王は若衆にしようとする。介太郎漸く逃れて極樂淨土の釋尊にかくまはれる。釋尊に口說かれて戀仲となり、娑婆に駈落し、大和國三輪のあたりに住ひを定め、酒商賣をして大に繁昌したが、どこまでも釋尊につき纏はれるうるささに、人間と佛との間を行く神になり、遂に三輪明神と神去るといふ筋で、好色の弊を諷した作。その滑稽的叙述は、早くも黃表紙の世界を思はせるものがある。〔小泉〕

三千世界商往來（さんぜんせかいやりくりわうらい）　脚本　七幕十九場　時代物

【作者】並木正三【名稱】主人公山司金右衞門が、世界を股にかけて賊を働き、天下を窺ふ作の主題を利かせた。【諸本】書卸しの臺帳が現存する外、繪入根本としても版行され、又日本戲曲全集第四卷に收められたものもある。但しこれ等は書卸臺帳ではない。【興行】安永元年正月五日初日、大阪中の芝居市山助五郎座上演。二の替り興行。

〔役割〕種ヶ島時高・ぎかう・乾隆帝（市川音十郎）、鳴川玄蕃・北條氏直（坂東岩五郎）、木村采女之助（嵐七三郎）、傾城長門（姉川菊八）、又兵衞後に相人久五郎（藤川八藏）、妾お豐・娘四聲（花桐豐松）島田大膳太夫勝家（市野川彦四郎）、門兵衞女房小女郎・梅町御前（中村喜代三郎）、かぴたんていかう・山司金右衞門後に武智左馬五郎光秋（中村歌右衞門）等。

【梗概】〔序幕〕（丸山廓）久吉公の命で、和蘭人を饗應のため、竹田機關芝居の催しから、廓の遊となる。久五郎は恩人の伴采女之助が傾城長門故に勘當の身となつてゐるのに、種々心を碎いた。（和蘭屋敷）久五郎は終にこゝに忍んで、香爐を盜み、和蘭人に買はれた傾城長門を奪ひ、かぴたん達を斬りすてて出奔する。〔二幕〕（朝鮮國）落城となつた王宮へ、城受取りの日本の使者に化けた山司金右衞門は、まんまと財寶を盜み去る。（返し、濱邊）雨中、大勢の金右衞門の手下が、盜品を船に積む。〔三幕〕（ちやぐちう國代官屋敷）娘四聲に橫戀慕のがんしは、慾深の叔母と共謀して、美男の入婿ぎかうを逐ひ出し、自分が家を繼がうと策を構へた。金右衞門は日本からの漂流人になり濟まして、この家の掛り人となる中に、多くの手下を入り込ませ、終に財物を奪つて消える。（濱邊）荷物の積込み。物凄い丈高、小人、腹に穴のある唐人の幽靈等が現はれて、金右衞門を恨むが、彼は物の數とも思はぬ。〔四幕〕（海邊）和蘭人殺害の嫌疑のかゝつた采女之助と長門は、こゝで代官に圍まれたが、久五郎の妾お豐が働いて兩人を救ふ。采女之助は昔の下人九郎作に助けられたが、お豐は黑坊のために殺された。長門も命了黑坊の惱みとなる所を、遂に一旦に解決した。黑坊の乘つた石が押し寄せ、黑坊の乘つた石が鼈となつて泳ぎ出す態で花道に入る。長門は水に苦しむ。〔五幕〕（九郎作住家）金右衞門は名を門兵衞と變へてこの家に婿となり、多くの借錢乞ひの拂ひに財物を渡してやる。門兵衞の女房小女郎は、久吉から勘合の印を盜み、天下を窺ふ種ヶ島時高を隱まつたが、その夜、泊つた六部が武智光秀の一子左馬五郎光秋と名乘り、時高と勘合の印を爭ふのを見て、小女郎は時高の首を討つて、自分こそ光秀譜代の臣大矢作左衞門の娘と明かし、自ら竹槍を腹に立てて光秀最期の樣を見せ、久吉討伐の決意を勵ました。所が、その六部は、實は諸國に謀叛人を探る久吉方であつた。然るに今故ふる門

三千世界商往來（繪本番附）

に數種見えるので、それ等から案を得た事も考へられるが、彼の淨瑠璃「容競唐土噺」（明和五年九月、龜谷芝居上演）と、近松半二作淨瑠璃「天竺德兵衞鄕鏡」（寶曆十三年四月、竹本座上演）とに負ふ所が多いと思はれる。

〔梗概〕〔序幕〕（丸山廓）久吉公の命で、和蘭人を饗應のため、竹田機關芝居の催しから、廓の遊となる。久五郎は恩人の伴采女之助が傾城長門故に勘當の身となつてゐるのに、種々心を碎いた。（和蘭屋敷）久五郎は終にこゝに忍んで、香爐を盜み、和蘭人に買はれた傾城長門を奪ひ、かぴたん達を斬りすてて出奔する。〔二幕〕（朝鮮國）落城となつた王宮へ、城受取りの日本の使者に化けた山司金右衞門は、まんまと財寶を盜み去る。（返し、濱邊）雨中、大勢の金右衞門の手下が、盜品を船に積む。〔三幕〕（ちやぐちう國代官屋敷）娘四聲に橫戀慕のがんしは、慾深の叔母と共謀して、美男の入婿ぎかうを逐ひ出し、自分が家を繼がうと策を構へた。金右衞門は日本からの漂流人になり濟まして、この家の掛り人となる中に、多くの手下を入り込ませ、終に財物を奪つて消える。（濱邊）荷物の積込み。物凄い丈高、小人、腹に穴のある唐人の幽靈等が現はれて、金右衞門を恨むが、彼は物の數とも思はぬ。〔四幕〕（海邊）和蘭人殺害の嫌疑のかゝつた采女之助と長門は、こゝで代官に圍まれたが、久五郎の妾お豐が働いて兩人を救ふ。采女之助は昔の下人九郎作に助けられたが、お豐は黑坊のために殺された。長門も命了黑坊の惱みとなる所を、遂に一旦に解決した。黑坊の乘つた石が押し寄せ、黑坊の乘つた石が鼈となつて泳ぎ出す態で花道に入る。長門は水に苦しむ。〔五幕〕（九郎作住家）金右衞門は名を門兵衞と變へてこの家に婿となり、多くの借錢乞ひの拂ひに財物を渡してやる。門兵衞の女房小女郎は、久吉から勘合の印を盜み、天下を窺ふ種ヶ島時高を隱まつたが、その夜、泊つた六

兵衞の金右衞門こそ敵の光秋であると知れ、彼は奪へた財寶を以て、天下を奪はうと決心した。（返し、葭原）闇中を金右衞門と久五郎の爭ひ。久五郎は磁石で金右衞門の跡を追ふ。〔六幕〕（舞子の濱）采女之助・長門の道行。久吉に滅された乾隆帝は、光秋の謀叛を助けて術を授ける。まづ中科中將の行列を引戻して見せると、光秋は早速中將を殺して代つて乘物に入つて行く。〔七幕〕（島田勝家館）久次公が暗殺されたので、後室梅町御前を慰めようと勝家は五節句を一度の催し。上使北條氏直が花山和尙と共に來て、勝家にその不謹愼を詰る。勝家は惡人と見せて氏直等に一

であらう。五幕目の家は、近松の「博多小女郎浪枕」（別項）から得てゐるので、こゝにも異國情緖を多分に漂はせるに成功した。幕明きの竹田芝居も流行を捕へたものである。これ等の中心に、賣出しの實惡初代中村歌右衞門を十分に活躍させた所に、作者の滿足が察せられる。而も四段目の波板の利用や、大詰、三段返しの運用の如き、その得意な舞臺裝置の驅使と相俟つて成功したもので、正三傑作の一たるに恥ぢぬ。本作は多少加筆されて、上方では後世まで生命があつた。

【參考】傳奇作書　西澤一鳳　〔守隨〕

三千里（さんぜんり）　紀行　一册

【著者】河東しこの行の內面的な意義は、元來の作者時記等に依つて、傳統的に規定せられてゐた自然の見方が單に約束一片のものに過ぎぬといふことを、著者が親しく邊陲の地を踏んで看取し得たことで、それから季題趣味に對する懷疑となり、次いで破壞となり、新傾向運動の勃興を促進したといふことである。著者の作にも行を進めるに從ひ、作風の推移が認められる。〔荻原〕

三册子（さうし）　俳論　三册

【著者】服部土芳【名稱】別名を「忘れ水」といふ。【名義】本書は「しろざうし」「あかざうし」「くろざうし」の三部より成る。三册子とはこれ等の三

の花とはしらず匂ひかな」その他の芭蕉の發句及び「あれあれて末は海行く野分かな」を立句とする連句の脇句に關する芭蕉の見解を初め、諸種の附句に就いて芭蕉の述べた談話の聞書や、發句の出來た年代及びその前後の句案等に亙り、蕉風の附方の實際に觸れた問題を收めてゐる。第三の「くろざうし」は、發句を初め附句の案じ方・附方、その他の微細な問題に立ち入つて說いた芭蕉の敎や、平常の修養に關する芭蕉の訓言等を集めたもので、最後には色紙や短册の認め方をも述べてゐる。かくて以上の如き內容を有する本文は、闌更の序を「しろざうし」の卷頭に載せ、瑞馬の跋

兵衛の金右衛門こそ鼠の光秋であると知れ、彼は蓄へた財寶を以て、天下を奪はうと決心した。（返し、荻原）闇中を金右衛門と久五郎の爭ひ。久五郎は磁石で金右衛門の跡を追ふ。〔六幕〕（舞子の濱）采女之助・長門の道行。久吉に滅された乾隆帝は、光秋の謀叛を助けて術を授ける。まづ中科中將の行列を引戻して見せると、光秋は早速中將を殺して代つて乘物に入つて行く。〔七幕〕（島田勝家館）久次公が暗殺されたので、後室梅町御前を慰めようと勝家は五節句を一度の催し。上使北條氏直が花山和尚と共に來て、勝家にその不謹愼を詰る。勝家は惡人と見せて氏直等に一味すると、花山和尚はさばき髪となり、謀叛の頭領光秋と名乘つた。と、今迄その一味と見せた一同が、忽ち光秋を圍んだ。すべては勝家が光秋を捕へんための謀であつた。（以下三段返しを七度反復する。）（御殿）長門の死體から三歳子が產れる。（左馬五郎隱家）梅町御前と久五郎とが綸旨を探す。（捕物）左馬五郎は終に捕はれる。

【構想・價値】前年の二の替り狂言「桑名屋德藏入舟物語」（別項）が反逆物で大成功をあげたが、更に大規模な構想を敢てしたのが本曲である。但し桑名屋德藏の場合の如き、根深い惡を企むほどの興味よりも、本曲は名題にも示す通り、外國の風土風俗を取り入れた點に大なる特徵があり、特殊な歡迎を求めたものと思ふ。それ等のためには、追驅けに磁石が用ひられ、朝鮮人・唐人・和蘭人・黑坊等が登場し、異國の珍器が現はれる。大人・小人・腹に穴の穿いた幽靈等が出た。これは當時の小說との關係も考へられるが、やはり一般からは、外國に於ける實在として想像されてゐたものであらう。五幕目の案は、近松の「博多小女郎浪枕」（別項）から得てゐるので、こゝにも異國情緒を多分に漂はせるに成功した。幕明きの竹田芝居も流行を捕へたものである。これ等の中心に、賣出しの實惡初代中村歌右衛門を十分に活躍させた所に、作者の滿足が察せられる。而も四段目の波板の利用や、大詰、三段返しの運用の如き、その得意な舞臺裝置の驅使と相俟つて成功したもので、正三傑作の一たるに恥ぢぬ。本作は多少加筆されて、上方では後世まで生命があつた。

【參考】傳奇作書　西澤一鳳

三千里（さんぜんり）紀行　一册

【著者】河東碧梧桐【刊行】明治四十三年十月【內容】日本全國俳句旅行の紀行である。明治三十九年八月、著者は全國遍歷を志して東京を出發した。房總半島を振出しとして、常陸・下野・岩代・羽前を經て奧州に入り、藤島にて越年、北海道を周遊して、再び奧羽に杖を曳き、越後の地に淹留中、母の病氣を耳にして旅裝のまゝ歸京したので、四十年十二月十三日、東京にて擱筆してゐる。この紀行は初めは旅宿に於て每日筆を執り、新聞「日本」に「一日一信」と題して揭載された。後、雜誌「日本及日本人」に發表されたものである。これを一書となす時、別に「旅中吟」一篇が添へられた。

【影響】三千里といふ題名が「奧の細道」の詞から出てゐるのを見ても、著者は芭蕉の意氣を負うて發足したことが知られる。時は子規歿後四年、新派俳壇は炬火を失うて低迷してゐる際であつたので、各地の俳壇を歷訪し遊說したこの行が、到るところに刺戟となり興奮となつたのは事實で この事が新傾向（別項）運動の導火線になつたことも明かである。併しこの行の內面的な意義は、尤來の俳諧紀行記等に依つて、傳統的に規定せられてゐた自然の見方が單に約束一片のものに過ぎぬといふことを、著者が親しく邊陲の地を踏んで看取し得たことで、それから季題趣味に對する懷疑となり、次いで破壞となり、新傾向運動の勃興を促進したといふことである。著者の作にも行を進めるに從ひ、作風の推移が認められる。

（荻原）

三册子（さんさうし）俳論　三册

【著者】服部土芳【名稱】別名を「忘れ水」といふ。【名義】本書は「しろざうし」「あかざうし」「くろざうし」の三部より成る。三册子とはこれ等の三部を併せての稱である。【成立】元祿頃【刊行】安永五年。享和元年再刻【由來】再刻本の序跋によると、本書は著者が、その師芭蕉に得た隨聞を手錄して前記の三部とし、「忘れ水」と命名して筐底に遺したものであるが、享保十五年著者の歿後四十餘年を經て、闌更が刊行を企て、安永五年初秋に序を附して世に出したのである。然るにこの板行本は燒失したので、再びこれを刻することになり、享和元年春、生々庵瑞馬の眞名の跋を附して新に剞劂したものである。【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）・蕉門俳話文集（俳書大系）所收。【內容】本文は芭蕉の俳論書ともいふべきものであるが、著者の意見も附け加へられてゐる。第一の「しろざうし」は、連歌の起原から說き起して、芭蕉が誠の俳諧を提唱するに至つた道程を述べ、蕉風の連句が連歌と趣を異にする諸種の點に關する根本的、又概論的な問題に就いて、芭蕉が斷片的に語つた談話を集めてゐる。第二の「あかざうし」は、蕉風の不易と流行との本が誠であることを說き、「何の木の花とはしらず句ひかな」その他の芭蕉の發句及び「あれあれて末は海行く野分かな」を立句とする連句の脇句に關する芭蕉の見解を初め、諸種の附句に就いて芭蕉の述べた談話の聞書や、發句の出來た年代及びその前後の句案等に亙り、蕉風の附方の實際に觸れた問題を收めてゐる。第三の「くろざうし」は、發句を初め附句の案じ方・附方、その他の微細な問題に立ち入つて說いた芭蕉の敎や、平常の修養に關する芭蕉の訓言等を集めたもので、最後には色紙や短册の認め方をも述べてゐる。かくて以上の如き內容を有する本文は、闌更の序を「しろざうし」の卷頭に載せ、瑞馬の跋を「くろざうし」の卷末に添へてあるのである。なほ本書には僞作說がある。卽ち芭蕉句選年考の頭書に、これは芭蕉の覺書で、伊賀の禪僧何某の所持であるといひ、又「赤草紙」に就いて、闌更の板は土芳の筆記であるといふが虛實不分明であるとか、芭蕉覺書の赤草紙の名を借りて作つたものであらうといふことを述べてゐる。現代に於ても、なほこの僞作說を信ずる者がある。【價値】僞作說を離れて見ると、本書は、著者の意見を述べた箇所も含まれてはゐるが、槪ね芭蕉の遺語を聞書のまゝ忠實に傳へようとしたもので、この點に於て芭蕉遺弟の數多い俳論俳話書中、異色あるものの一つである。而もそれ等の遺語は多方面に亙つて包藏され、芭蕉の俳論を最も端的に廣汎に知らしめるところに、本書の價値は尠くない。が、僞作とすれば、芭蕉の遺語集としての價値は論外であるが、僞作としても、芭蕉の遺語が悉く假託のもののみでもあるまいし、又遺語といふ點を離れて蕉風の一俳論として眺めると、最も優れた蕉風の

俳論の一と見られるものである。〔各務〕

三草集（さんさうしふ）　歌集　三卷【作者】松平定信【成立】文政十年【刊行】未詳【諸本】近世名家家集上卷（續日本歌學全書）所收【內容】よもぎ・むぐら・あさぢの三卷より成る。「よもぎ」は、享和の初頃からの詠歌の中より選んだもので、文化四年の冬に成り、自序がある。「むぐら」は、文化の初頃より、致仕の頃（文化九年四月）までの詠歌を拔萃したもの、「あさぢ」は致仕の頃より、文政七年までの作品を記したもので、同年九月に成つた。かく三集は別個に成れるものを、後、文政十年十一月より十二月にかけて、三度にこの集を自書し、「三草集」と題して上梓するに至つたのである。三集とも四季及び雜に部立し、「あさぢ」のみは、終りに哀傷及び祝賀の歌が附してある。【作風】父田安宗武の萬葉風と異なり、新古今風を喜んだ。又「六家集」を愛誦し、歌風はその時代を庶幾してゐる。かくて新古今趣味の歌としては、全く自家のものとなし得て堂に入つてゐる。本居宣長の新古今風鼓吹の歌論を徹底的に詠み得たものとして、この時代の新古今調の作者の代表者と云ふことが出來る。歌は、敎訓を含む作と新古今調の歌とに秀歌が多い。左に作例を示さう。

うちしめる鐘の響に春の夜の音せぬ雨の音を聞くかな

埋火のあたり長閑にはらからの圓居せし夜ぞ戀しかりける

【備考】定信には歌作多く、言志集・なつ草・旅の落葉・風月集・九日百首・住吉百首・雪月花自歌合・享和日記抄・文化日記抄等の歌集・百首歌・詩がある。其中その家集として刊行せられたものは、三草集のみ、他は未だ世に出でざる不遇の文

版活字で印刷した一冊があり、三草集より寧ろこの方に秀歌が多い。〔佐佐木〕

三代御記（さんだいぎよき）　日記　三卷【抄者】中津廣昵。增訂者和田英松【別名】「宇多天皇御記」を寛平御記・寛平聖主記、「醍醐天皇御記」を醍醐御日記・延喜御日記・延喜御記・延長御記、「村上天皇御記」を天曆御記・天德御記・應和御記・康保御記などとも稱し奉つた。また醍醐・村上兩天皇御記を併せて、二代御記又は二朝御記と稱し奉つた事もあつた。【卷數】「宇多天皇御記」は、「花園院御記」に「正和二年十月四日、寛平御記十卷一見了、但第二卷缺」とあつて、もとの卷數は十卷と見えるが、今は亡佚して一卷も傳はらない。「醍醐天皇御記」は、春記（長曆三年十月廿八日條）に二十卷と見え、「村上天皇御記」は、「後二條師通記」に二代御記抄五十卷とあるに依つて見ると、三十卷もあつたものの如くに思はれるが詳かでない。今は延喜天曆御記抄殘篇一卷があるのみである。【諸本】歷代殘闕日記に收められたが、和田英松博士が增補訂正して、續々群書類從第五記錄部に收められ、更に補正して列聖全集宸記集中に加へられた。【內容】宇多天皇・醍醐天皇・村上天皇の三代の御記で、上卷「宇多天皇御記」は、西宮記・政事要略・日本紀略・扶桑略記等の二十一部の古書から抄錄し、中卷「醍醐天皇御記」は、西宮記・小右記・左經記等四十部の古書から抄錄し、下卷「村上天皇御記」は、西宮記・小右記・權記・左經記・春記等五十部の古書から抄錄したもので、每條その出典を明かにしてある。【價値】殘存卷數が原本の二十分の一にも過ぎないことであるから、今の宸記を以てその全貌を推すことの出來ないことは勿論であるが、それでも所載事件の概況の如きは、「宇多天皇御記」の記載に依つて、始めてその眞相を明かにすることが出來るとすれば、その史的價値の高いことが知られよう。その完全に遺存せられた時代には、政事・儀式等の先例を知るのに重要な文獻として重んぜられたものと見えて、清涼殿晝御座間にある日記厨子には、「二代御記」を置かせられたことが、「禁祕御抄」等に見え、又「貫首祕抄」には、「執柄若職事能知二主上御作法公事一之條、備二顧問一、或又幼若之主奉二敎訓一、仍寛平御記・二代御記・內裏式・寛平遺誡、常可レ見レ之也」とある。

【參考】歷世記錄考（星野恒（史學叢說第一集）○皇室御撰解題　和田英松（列聖全集）〔石村〕

三大考（さんだいかう）　國學書【著者】服部中庸【成立】寛政三年五月二十五日稿了、「古事記傳」卷十七に附錄として加へられてゐる。增補本居宣長全集第二集所收。【內容】「古事記傳」によつて、古傳にふくまれた天（あめ）・地（つち）・泉（よみ）の發生・狀態・關係等を考へ、十箇の圖を作つて說明し、わが古傳說に於ける宇宙論の研究ともいふべきものである。これによれば、最初に虛空があり、中に一物を生じ、それが浮脂のやうに漂うてゐる間に、葦牙（あしかび）のやうに萌え騰るものがあつて天となり、あとに殘つたものが堅まつて地となり、神々は順次この間に發生した。泉（よみ）についてはその發生に關する記事がない。しかし恐らく彼の一物の中から垂れ降つて成つたものであらう。天は日で、高天原はその中にあり、天照大御神は日の中に坐ます神である。そして天と地とは天の浮橋といふ帶によつてつながり、地と泉との間にも亦通路があつた。それが漸次に斷たれ離れて、地を中心として日（天）と月（泉）とが、今のやうに相旋ることになつた。故にわが國は天地の根蔕、皇御孫命は四海萬國の大君であるとなし、泰西の地動說にしても、かくの如き古傳と兩立しないものではないとしてゐる。【價値】記・紀二典に記されてゐる古傳中の天・地・泉に關する記事を比照して、古傳の宇宙觀を體系化しようと試みたもので、後の平田篤胤の「靈能眞柱」（別項）は、これを基礎としての考察である。

【參考】古事記傳　本居宣長（三―一三）○天地圖（增補本居宣長全集第十）○靈能眞柱　平田篤胤（平田篤胤全集二）○泉國辨　後藤夷臣○古學要附錄　本居大平〔西尾〕

三體詩（さんたいし）　漢詩集　三卷【編者】周弼。幼少より博聞强記、吟詠を好み、又善く墨竹を畫いた。嘉定年間進士となり、吳楚江漢の間に官遊すること四十年、文名江湖に振ひ、端平集十二卷（端平は彼の活躍せる頃の元號）を著はした。【本名】唐賢三體詩家法【名義】七言絕句、七言律詩、五言律詩の三を云ふ。【成立】宋末、淳祐十年（皇紀一九一〇）【傳來】「三體詩」の事は、已に宋の胡存の「漁隱叢話」に見え、元に入つて至大二年（皇紀一九六九）高安の僧圓至天隱が注釋を施し、その友陳湖の磧沙寺の住僧魁天紀がこれを刻し、又東嘉の裴庾季昌が增注を著はして以來、世に盛行し、元明人の詩話にも散見し（瞿宗吉の歸田詩話、李東陽の麓堂詩話、郝穆の南濠詩話等）、清朝に至つてもなほ藝苑に列せられて亡びなかつた。我が國に將來の年月は明かでないが、「三體詩絕句鈔」に、「此集を始めて講ずるは、妙喜庵の中巖和尙、入唐してよりの事なり」とあるのを見れば、恐らく中巖圓月が元から將來したものであらうと推測せられる。中巖は雪村と並んで、五山初期に於ける有數の詩僧で、その授受は中巖から義堂に、義堂から惟肖・江西に、江西から瑞巖・九淵・村菴に、村菴から正宗・月舟といふ順序に傳へた。又相國寺の萬里が「三體詩抄」を著はして、これを「曉風集」と云ひ、建仁寺の桂林が「三體詩注」を著はす等、その注解を作る者も多く、漸くその流布を弘めた。【諸本】本書に古本と新本とあり、新本は圓至の注本で、古本は裴庾の注本である。古本は五言律を第一に、七言律を第二に、七言絕句を第三に置き、新本は七言絕句を第一に、七言律を第二に、五言律を第三に置く。普通は新本に從ふ。

に及ぶ。中巖は雪村と並んで、五山初期に於ける有數の詩僧で、その授受は中巖から義堂に、義堂から惟肖・江西に、江西から瑞巖・九淵・村菴に、村菴から正宗・月舟といふ順序に傳へた。又相國寺の萬里が「三體詩抄」を著はして、これを「曉風集」と云ひ、建仁寺の桂林が「三體詩注」を著はす等、その注解を作る者も多く、漸くその流布を弘めた。【諸本】本書に古本と新本とあり、新本は圓至の注本で、古本は裴庾の注本である。古本は五言律を第一に、七言律を第二に、七言絕句を第三に置き、新本は七言絕句を第一に、七言律を第二に、五言律を第三に置く。普通は新本に從ふ。

先として感興を主とし、ただ自在に事を敍し、新に事を敍べるを尊しとし、所謂油脂滑調に陷つて、朱子をして今人の詩は村裏の雜劇の如しと歎ぜしめるに至り、理宗以後に及んでは、その弊の殊に甚しきものがあつた。玆に於て嚴羽・賈島・姚合等が淸新の詩風を鼓吹したが、未だ顯著の效を擧げるに至らなかつた。周弼の「三體詩」も亦その意を承繼して、專ら近體の詩法を說き、唐詩の風韻を以て時弊を救はうとした。併し本書が何故に格調の高い古詩に依らなかつたか、又同じく唐詩を選ぶにしても、何故に莊重雄麗な初盛の詩を棄てて、幽婉淸空の中晩の詩に偏し、律詩絕句を

行・三體理平【名稱】正しくは日本三代實錄【成立】宇多天皇これに着手せられ、醍醐天皇紹述して延喜元年八月に成つた。編者の中、道眞・理平は、完成を見ずして官を遷されたから、序に名を列ねたのは時平と善行との二人である。【諸本】寫本で知られたものには、細井貞雄・安田躬弦・村岡良弼等の藏本があつて、それ〴〵流布板本の誤を訂し得る。刊本では松下見林の校訂したところの寛文十三年及び元治元年の本が古く行はれ、明治以後では伴信友校訂本・國史大系本・朝日新聞社本等がある。【解說】天安二年八月、淸和天皇の崩御に至祚より、仁和三年八月、光孝天皇の崩御に至

のである點に注意を要する。【解說】古くは萬葉・古今・後撰の三集を稱した。「枕草子」に「集は古萬葉集・古今・後撰」とあるのは、この三代集を指したらしい。然るに「拾遺集」が撰せられてからは、これを加へて「萬葉集」を除いたことが、「袋草紙」に島守遠高の言として記されてゐる。俊成の「古來風體抄」「二中歷」には「古今集」以下をいひ、「吾妻鏡」承元四年五月六日の條に、廣元が三代集を實朝に獻じたとあるのも「古今集」以下であらう。別に二條家では、千載・新勅撰・續千載を三代集と稱した由、群書一覽に見えてゐる。【註釋書】僻案抄　定家○三代集之間事　定家○奧義抄　淸輔

に及ぶ物徳人物。中期は雪村と並んで、五山初期に於ける有數の詩僧で、その授受は中巌から義堂に、義堂から惟肖・江西に、江西から瑞巌・九淵・村菴に、村菴から正宗・月舟といふ順序に傳へた。又相國寺の萬里が「三體詩抄」を著はして、これを「曉風集」と云ひ、建仁寺の桂林が「三體詩注」を著はす等、その注解を作る者も多く、漸くその流布を弘めた。【諸本】本書に古本と新本とあり、新本は圓至の注本で、古本は裴庾の注本である。古本は五言律を第一に、七言律を第二に、七言絶句を第三に置き、新本は七言絶句を第一に、七言律を第二に、五言律を第三に置く。普通は新本に從ふ。日本では應仁以前既に飜刻本があり、明應年間にこれを重刊し、江戸時代に及んでは、明暦・貞享・文政・安政等の刻本がある。活版本は漢文大系本以下種々ある。【内容】唐代の作家一百六十七人の詩四百九十四首を上の三體に分ち、各體を更に多くの格に分けて收めてゐる。

〔巻一〕―七言絶句、一百七十四首―實接、虚接、用事、前對、後對、拗體、仄體

〔巻二〕―七言律詩、一百十一首―四實、四虚、前虚後實、前實後虚、結句

〔巻三〕―五言律詩、二百〇九首―四實、四虚、前虚後實、前實後虚、一意、起句、結句、詠物

【解説】周弼の「三體詩」編纂の目的は、詩法を子弟に教へて以て當時の詩壇の弊風を矯正せんとするに在つた。彼は宋末江湖派詩人中の錚々たる者で、本書に依つてその末流の弊を革めんとしたのである。宋は南渡以後詩運は頗る振はず、陸游一人を除いては殆ど觀るに足るものが無く、當時一般の詩風は、動もすれば邵康節の「擊壤集」の餘風を承けて、談理を先として感興を没し、ただ自在に事を論じ、新に事を敍べるを尊しとし、所謂油脂滑調に陷つて、朱子をして今人の詩は村裏の雑劇の如しと歎ぜしめるに至り、理宗以後に及んでは、その弊の殊に甚しきものがあつた。玆に於て嚴羽・賈島・姚合等が清新の詩風を鼓吹したが、未だ顯著の效を擧げるに至らなかつた。周弼の「三體詩」も亦その意を承繼して、專ら近體の詩法を説き、唐詩の風韻を以て時弊を救はうとした。併し本書が何故に格調の高い古詩に依らなかつたか、又同じく唐詩を選ぶにしても、何故に莊重雄麗な初盛の詩を棄てて、幽婉清空の中晩の詩に偏し、律詩絶句を以て千古に冠絶すと稱せられる李白・杜甫兩詩聖の詩を全く除外して採らなかつたかといふ點は、共に後人の慊らない所である。且つ又淵博なる唐一代の詩は、決してこの書の三體を以て盡し得るところではなかつた。諸格の分類に於ても精該を闕くものがあり、「四庫全書總目提要」が「列する所の諸格、尤も詩の變を盡すに足らず」と難じ、胡應麟をして「率合支離」の評を下さしめたが、而も永く後世に至るまで弘く鄕塾の間に行はれたのは、范晞文の云つた如く、「是の編一たび出でてより、後學に補なしとせず、有識高見の卓として時習に燻染せられざるものは、往々此に於て解悟」するものがあつたためであらう。

【注釋書】箋注唐賢絶句三體詩法 二十卷 元圓至○增注唐賢絶句三體詩法 三卷 元裴庾(漢文大系本)○增注三體詩法注 三卷(十三卷) 桑隱(漢文叢書本)○唐賢三體詩備考大成二十卷 熊谷立閑○三體詩評釋 野口寧齋 〔宇野・本多〕

三代實錄 さんだいじつろく

五十卷 【編者】藤原時平・菅原道眞・大藏善行・三統理平 【名稱】正しくは日本三代實錄 【成立】宇多天皇これに着手せられ、醍醐天皇紹述して延喜元年八月に成つた。編者の中、道眞・理平は、完成を見ずして官を遷されたから、序に名を列ねたのは時平と善行との二人である。【諸本】寫本で知られたものには、細井貞雄・安田躬弦・村岡良弼等の藏本があつて、それ〴〵流布板本の誤を訂し得る。刊本では松下見林の校訂したところの寛文十三年及び元治元年の本が古く行はれ、明治以後では伴信友校訂本・國史大系本・朝日新聞社本等がある。【解説】天安二年八月、淸和天皇の踐祚より、仁和三年八月、光孝天皇の崩御に至る三代三十年間の國史である。大體の體裁は殆ど前代の國史と異ならないが、撰修の方法等に進歩した點は認められる。日を記すにただ干支のみを以てした前代國史と異なつて、干支と共に實際の日數をも記してゐることは便利である。六國史の最後のものとして、平安朝の重要なる史料であることは言ふまでもなく、その體裁は後年の國史編修の模範ともなつてゐる。

【參考】三代實錄私記(寫)矢野玄道 ○三代實錄攷文(寫)岡本保孝 ○三代實錄故事考(寫)足羽敬明 〔坂本〕

三代集 さんだいしふ

和歌 【名義】三代の勅撰和歌集の義。古今・後撰・拾遺(各別項)の三集をいふ。【傳本】三代集としての特殊な傳本はなく、八代集・二十一代集等に含められてゐるものが多いが、三代集は勅撰集中特に代表的なものとされ、隨つて他の集よりも流行し、鑑賞研究せられてゐるので、三代集だけ一括して出版したもの、書寫したものもある。嘉永六年刊本(小六册)は善い寫本を版にしたものである點に注意を要する。【解説】古くは萬葉・古今・後撰の三集を稱した。「枕草子」に「集は古萬葉集・古今・後撰」とあるのは、この三代集を指したらしい。然るに「拾遺集」が撰せられてからは、これを加へて「萬葉集」を除いたことが、「袋草紙」に島守遠高の言として記されてゐる。俊成の「古來風體抄」「二中歴」には「古今集」以下をいひ、「吾妻鑑」承元四年五月六日の條に、廣元が三代集を實朝に獻じたとあるのも「古今集」以下であらう。別に二條家では、千載・新勅撰・續千載を三代集と稱した由、群書一覽に見えてゐる。【註釋書】僻案抄 定家○三代集之間事 定家○奥義抄 淸輔○和歌色葉集 上覺○色葉和難集 (以上各別項) 著者不詳 〔西下〕

三代集總説 さんだいしふのそうせつ

「古今和歌集打聽」を見よ。

三代集之間事 さんだいしふのあひだのこと

和歌書 一卷一册 【著者】藤原定家 【名義】「三代集」に關する事を書いたものとの意。【成立】定家は「古今」「後撰」に就いて傳來の祕説をもつてゐたが、當時多くの歌學者が輩出したので、傳來の祕説が必ずしも權威でなくなつたことを遺憾とし、年は既に六十を越え、旦暮を知らぬ身となつたので、今まで口外しなかつた祕奥の説を書き記したのである。奥に貞應元年九月とあるから六十一歳であつたことがわかり、「僻案抄」(別項)の記述より四年前となる。【諸本】群書類從卷二八八所載本は、細川幽齋が定家自筆本を書寫した旨、慶長三年の奥書がある。【解説】「三代集」とあるが、「古今歌事、大略去年事次勘注」とあつて、「古今集」の事はない。野村八良氏は「去年事次」を顯註に對する密勘の如く解してゐる。又「拾遺集」は

「未受一部之説」とあつて註する所が少く、「後撰集之中自他之説不同事」とあるが如く、主として「後撰集」に關することが多い。本書に記するところは殆ど「僻案抄」と一致し、ただ本書の方が註する歌數や事項が少く、且つ簡單である。「僻案抄」は本書を基礎として敷衍したものであらう。本書に於て最も注意すべき記事は、「拾遺集」「拾遺抄」の撰者及び兩者の關係に就いての論である。（拾遺集參照）

【參考】國文學研究史　野村八良　〔西下〕

三題噺高座新作　さんだいばなし　かうざのしんさく　脚本　五幕　世話物　【作者】二代河竹新七（默阿彌）【名稱】俗に「和國橋」「髮結藤次」。時として、「秀水仙梅幸曾我」（散切劇に改訂して）「國姓爺理髮姿見」「和國橋藤次」等の名稱に據つても上演せられた。【諸本】默阿彌全集第五卷所收【初演】文久三年二月江戸市村座。

〔役割〕髮結和國橋の藤次（市村小團次）、藤次女房おきつ（尾上菊次郎）、唐物屋神崎屋喜兵衞（市川團藏）、大國屋の千山・巾着切竹門の虎（市村家橘）、神喜の手代小助（市川九藏）、平野屋幸次郎（澤村訥升）等。

【題材】作者自作の三題噺を劇化したもの。

【梗概】〔序幕〕髮結藤次は酒のために家を疊み、二人の子供まである女房のおむつとも別れる。平野屋幸次郎は夫婦約束をした大國屋の千山が田舍の客に身請けされると聞いて、千葉家から預つた胡蝶の香合を質に置いて百兩を工面し、それを手附に打たうとするが、途中で巾着切り竹門の虎に奪はれ、虎の守袋を手に入れる。〔二幕〕千山は幸次郎のため百兩の金を田舍の客惣右衞門に賴むが、幸次郎と緣を切れと迫られるので、それを斷る。（清元「柳八重色香深川」）。幸次郎に逢つて一伍一什を聞いた藤次は、虎の守袋を見て虎が自分の弟であることを知り、母親が世話になつた主家へ恩返しに百兩の調達を引受ける。その後へおむつの父親唐人市兵衞が、二人の子供を連れて通りかゝり虐待するので、藤次は見兼ねて二人を引取る。すべてを立ち聞きした虎は、何とかして恩を返したいと考へる。〔三幕〕唐物屋神崎屋喜兵衞（神喜）の名ばかりの妾となつてその別莊にゐたおむつは、偶然その前を通つた藤次親子に逢ひ、自分が藤次のためと思つて妾に出たのが、實は市兵衞の企みと悟り、改めて藤次から百兩の調達を依賴される。〔四幕〕おむつは神喜に百兩貸して呉れと賴むが、幸次郎の許嫁お民の實家である丹波屋が神喜の本家に當る關係上、分家の義理として幸次郎へ金を貸すことは出來ないと斷られる。香合の手に入らぬ幸次郎と、惣右衞門に身請けされた千山とは、共に死なうとするが藤次に助けられ、藤次はおむつに金の調達が出來ないと知つて、神喜の處へ自身强談に乘込む。おむつは神喜への義理立てと藤次の難儀を思つて、自害して百兩を神喜に依賴し、神喜はおむつの回向料として百兩を藤次に與へた上、おむつが實の妹であることを告げて、二人の子供を引取ることとなる。千山が神喜への義理立てから幸次郎をお民へ讓らうとする時、神喜のところへ離緣の相談に來たお民が現はれて、二人は互ひに夫を讓り合ふ。神喜は幸次郎とお民のために、手代の小助を惣右衞門に仕立てて身請けさせた顚末を打ち明け、千山の年季證文を幸次郎へ渡し、お民を本妻に、千山を妾に末永く添へと云ふが、お民も千山も髮を切つて義理を立て合ふ。〔五幕〕幸次郎は道具屋から受戻した香合を市兵衞に奪はれ、その上危害を加へられようとするが、來合はせた虎のために助けられ、香合もその手に戻る。

【脚色】作者が「國姓爺」「乳貰ひ」「髮結」といふ兼題によつて三題噺を作つたのは書下し前のことであつたが、相隣る中村座で「國姓爺合戰」を上演するので、それに對抗するため、嘗て披講して好評を博した三題噺を敷衍し、世話狂言の和藤內、卽ち和國橋の藤次を主人公としたのがこの作である。なほ作中疱瘡の子を點出し、紅染の手拭を用ひたのは、當時疱瘡が流行したのを當て込んだものであり、夜鷹蕎麥で子供に天麩羅を喰はせたのは、作者自身の見聞を持ち込んだものであるといふ。

【價値】作者は、三題噺にも異常の才能を有してゐたが、こゝに至つてその劇壇に對する發露を見、かの「魚屋の茶碗」も同じく自作の三題噺を劇化したものであるが、この作の方が遙かに勝れてゐる。藤次と唐人市兵衞の性格が良く描かれてゐる。この時、粹狂・興笑といふ江戸の三題噺の兩連中から作者へ引幕が贈られた。作者として引幕を贈られたのは破格の名譽でもあり、演劇史上特筆すべきことに屬する。

【參考】河竹默阿彌　河竹繁俊　〇明治劇壇五十年史　關根默庵　〇續々歌舞伎年代記　〔河竹〕

三陀羅法師　さんだらぼうし　狂歌師　【姓名】清野正恒。字は巳己。通稱未詳【初號】一寸一葉。後、初代千種庵【生歿】享保十七年生れ、文化十一年（一七一四）八月八日歿す。享年八十四【法名】清心院釋一葉居士【墓所】東京本郷元町等正寺【閱歷】信州淸受院入道晴昌の後裔で、江戸神田阿玉ヶ池の左官職清野某の養子となる。唐衣橋洲の門に入つて三陀羅法師と稱し、千種庵と號した。寛政の末、神田側といふ一社を興してその棟梁となり、社中に、千首樓堅丸・千猿亭枚成・千林亭面吉・千金亭如蘭・千柳亭一葉等の判者があつた。又社標に丑を用ひ、これを三陀羅霞と稱してゐた。或る人、三陀羅に向ひ、「足下は如何なる體の狂歌を好むか」と問うたところが、言下に「目鼻ある歌は誰にも面白し詠む人の口聽く人の耳」と答へたと云ふ。【著書】狂歌東西集二册（寛政五年刊）〇三陀羅かすみ（同十年刊）〇女假名手本（同十一年刊）〇夷曲三十六歌仙（同年間刊）〇五十鈴川狂歌車（享和二年刊）〇狂歌東西集四册（文化七年刊）〇狂歌江戸名所繪本（同十年刊）〇狂歌續東西集二册（同十一年刊）　〔野崎〕

三太郎の日記　さんたらうのにつき　隨筆　【著者】阿部次郎【成立】自序に「經濟的な動機から、あるひは新聞雜誌等の求めに應じて、その都度書かれたものではあるが、同時に、何れも內面的衝動の充實を待つて書かれたものでないものはない」とある。卽ち明治四十一年から大正三年正月までの六年間、著者三十代の內面的生活の最も直接な表現である。【刊行】大正七年、岩波書店【解說】本書收むるところ感想文五十餘篇、「三太郎の日記」（痴者の歌以下二十篇）、「三太郎の日記第二」（思想と實行以下十一篇）、「三太郎の日記第三」（自ら疑ふ以下十七篇）。附錄として「親友」「狐火」「西川の日記」「痴人とその二つの影」等がある。なほ最長篇「聖フランシスとステンダール」がある。本書に取り扱はれてゐる主題は雜多であるが、眞理を愛する心と眞理を愛するがために、矛盾・缺陷・暗黑の一面をもたじろがずに正視せんとする精神とは、全篇を一貫して變らないと信ずると、著者も自ら言つてゐる。當時の哲學的青年男女に愛讀されたものであり、且つこの書物が出た當時は、日本に於ける言はば哲學復興時代でもあつたのである。　〔平林〕

纂訂古風土記逸文　さんていこふどきいつぶん　地誌　二卷一册【著者】栗田寬【成立】これより前に成つた彰考館の「風土記殘篇附錄」、吉田令世の「風土記抄」、今井似閑の「萬葉緯」、伴信友の「風土記逸文」等の類書をあはせ、新たであらう。

三哲小傳　さんてつしやうでん　國學書　一册【編者】僧立綱【成立】吾々が古代を明かにし、古書を讀み、やまと心を自覺することが出來るのは、偏に契沖・眞淵・宣長の力であるとし、この三哲の事蹟が世に明かでないことを慨き、その小傳を編したものである。【刊行】未詳であるが、文政元年十一月の序がある。【諸本】初刊本は編者立綱の序三葉、本文十三葉、板行者江澤溝修の跋三葉から成る小册で　〔山崎〕

【生歿】生年未詳、嘉永四年（一八五一）十二月十八日歿す。【法名】大用玄機居士【墓所】今戸慶養寺內潮江院【閱歷】吉原三浦屋若海の子（一說、玉屋彌八の子）、のち、京町一丁目大文字屋の養子となつたが離緣となり、山谷に質屋を營んだ。狂歌を淺草庵春村に學び、加保茶元成を名乘つた。養父村田宗園の後を繼いで、その三世となつたのである。初め十返舍一九の門人となつて九返舍一八と號し、二世一九（十字亭三九）が亡命後、弘化二年同じく二

山東京傳　さんとうきやうでん　「京傳」を見よ。

三人片輪　さんにんかたは　能狂言　【格式】小習（和泉流）【梗概】或る主が仔細あつて、片は者を數多抱へようと高札を打つ。そこへ博奕打が常々人が目の鞘のはづれた者だと言はれるからとて、反對に座頭になり、首尾よく召抱へられる。次に日頃脚の達者な者が壁になり、また口の利く者が啞を裝うて行つて抱へられる。この啞に藝は無いかと問はれて、

貫して變らないと信ずると、著者も自ら言つてゐる。當時の哲學的青年男女に愛讀されたものであり、且つこの書物が出た當時は、日本に於ける言はば哲學復興時代でもあつたのである。〔平林〕

纂訂古風土記逸文（さんていこふどきいつぶん）　地誌　二卷一册【著者】栗田寛【成立】これより前に成つた彰考館の「風土記殘篇附錄」、吉田令世の「風土記抄」、今井似閑の「萬葉緯」、伴信友の「風土記逸文」等の類書をあはせ、新たに見出でたものを加へて成つたものである。【刊行】明治三十一年。昭和三年重刊【內容】「釋日本紀」「萬葉集註釋」以下の諸書に引用せられた「古風土記」の逸文を集め、諸書によつて校訂を加へてある。畿內諸道別の下に各國別として逸文百八十條を錄し、上欄に校異を記してゐる。卷首に自序・凡例・引用書目を揭げ、附錄として「逸文採餘七條」「諸書に風土記の事を云ふ條々」「風土記に就いて人々の論へる事ども」「前後風土記概論」（伴信友）「前後風土記概論の辨」（中山信名）「辨日本總國風土記」（平祖衡）の諸篇を載せてゐる。重刊本は、宮地直一氏の校訂に由り、釋文を附し、同氏によつて逸文三條を補つてゐる。【價値】「古風土記」の逸文としては遺漏少く、且つ早く印行せられたので、學界に多大の便益を與へた書である。

【參考】古風土記逸文考證　栗田寛　〔武田〕

三亭春馬（さんていしゅんば）　人情本合卷本作者【本名】磯部源兵衞、幼名金次郎。一時吉原大文字屋の養子となり、村田市兵衞・大文字屋市兵衞と云ふ。【別號】九返舍一八・三世十返舍一九・花街樓・柿園・文尙堂虎圓・三世加保茶元成（又裏成）・四世八文字屋自笑・二世落栗庵。【生歿】生年未詳、嘉永四年（一八五一）十二月十八日歿す。【法名】大用玄機居士【墓所】今戸慶養寺內潮江院【閱歷】吉原三浦屋若海の子（一說、玉屋彌八の子）、のち、京町一丁目大文字屋の養子となつたが離緣となり、山谷に質屋を營んだ。狂歌を淺草庵春村に學び、加保茶元成を名乘つた。養父村田宗園の後を繼いで、その三世となつたのである。初め十返舍一九の門人となつて九返舍一八と號し、二世一九（十字亭三九）が亡命後、弘化二年同じく二世一九を名乘つたが實は三世なのである。人情本作者としては、「春秋二季種」（たねくさ）「多氣競」（たけくらべ）が知られてゐる。その處女作は嘲本「落噺笑ひ升」（文政三年）及び「笑たけ」（同年）であらう。當時は文尙堂虎圓と稱してゐた。三亭春馬を名乘つたのは天保四年頃で、同年刊合卷本「尾形鱗生傳」の序に、九返舍改三亭春馬とある。式亭三馬の歿後であるから、彼の三馬門人說は當らぬやうだ。彼の作品は合卷本に多いが傑出せるものは一つも無い。前述「多氣競」中に、吉原の生活が比較的詳細に描いてある點が、流石に妓樓に生れた人の作であることを想はしめる。要するに文學好きの若旦那が器用に綴つた作品を遺したと云ふ位のものである。【著作】前述の書の外、「夜討曾我人形製」（天保五年）、「霞帶春空解」（同十年）、「仙女香七變化粧」（同十一年）、「貧福慾換得」（弘化二年）等。【附記】彼の歿年は、四世繪馬屋額輔編「狂歌人物誌」及び「狂歌人名辭書」に據つたのである。人物誌には、山谷堀に八文字屋といふ船宿を營むとあつて、質屋とは無い。然るに彼の歿年後、安政五・六年以降、彼の名義の合卷本が多數續出してゐる。思ふに彼の歿年が誤まつてゐるのか、或は又誰か二世を繼いだのであらう。

三哲小傳（さんてつしょうでん）　國學書　一册【編者】僧立綱【成立】吾々が古代を明かにし、古書を讀み、やまと心を自覺することが出來るのは、偏に契沖・眞淵・宣長の力であるとし、この三哲の事蹟が世に明かでないことを慨き、その小傳を編したものである。【刊行】未詳であるが、文政元年十一月の序がある。【諸本】初刊本は編者立綱の序三葉、本文十三葉、板行者江澤講修の跋三葉から成る小册である。再刊本は江澤講修によつて增補されたもので、天保二年山本信陽、同三年小山田與清、文政十一年江澤講修等の序、及び文政十一年白井信常の跋がある。【內容】本文は契沖・眞淵・宣長の順にそれぞれ鍬形紹眞筆の肖像（着色）を揭げ、次に略傳（契沖の傳は、安藤爲章が漢文で書いてあつたのを立綱が和文に改めたもの、眞淵の傳は小山田與清、宣長の傳は齋藤彥麿に執筆させたもの）を置き、終りに立綱撰の三哲の和歌十首づつを附記してゐる外、「みたりの大人をたたへてよめる」（立綱の歌三首がある。江澤講修によつて增補された再刊本は、初刊本の宣長傳が簡略に過ぎた爲め、それを精しくしようとして增補者が自ら新たにこれを稿し、契沖傳を補つてゐる外、三哲の和歌も二十首づつを擧げてゐる。【價値】國學に對する史的研究の端緒は、一面には國學者の傳記を集成する事業として現はれた。本書はかくの如き國學者の傳記集成としての最初の試みで、詳しさもなければ新しさもない極めて簡單幼稚なものであるけれども、三大人に對する純情と熱心とは十分に現はれてゐる。〔西尾〕

算道（さんだう）「大學」を見よ。

山東京傳（さんとうきょうでん）「京傳」を見よ。

三人片輪（さんにんかたは）　能狂言【格式】小習（和泉流）【梗概】或る主が仔細あつて、片は者を數多抱へようと高札を打つ。そこへ博奕打（ちうち）が常々人が目の鞠のはづれた者だと言はれるからとて、反對に座頭になり、首尾よく召抱へられる。次に日頃脚の達者な者が躄になり、また口の利く者が啞を裝うて行つて抱へられる。この啞に藝は無いかと問はれて、弓を引き、槍を遣ふ眞似をする。主はこれを見て大に扶持を遣らうと言ふのを、喜んで忝なうと我知らず聲を出すのを遽てて止める。然るに主は却つて啞の一聲富貴の相と喜ぶ。さて主は三人各自に役を申しつけて外出する事となり、座頭には輕物（かるもの）（絹布類）藏（くら）を預け、躄には錢藏（ぜにくら）を守らせ、又啞には酒藏（さかくら）の番をさせる。いよ〳〵留守になると、座頭は眼をあけ、躄は足を伸ばす。二人は顏を合せて互に知合であるのに驚く。さうして兩人が啞を見ると又仲間である。そこで三人談合して、酒藏の酒を飲み、一座賑やかに酒宴となる。處へ主が歸つて來て、この爲體（ていたらく）に驚き、とど大盜人め、やるまいぞやるまいぞで追ひ込む。【構想】不具者でない者共が、故意にそれを裝うて行つたと云ふのが、破綻を招致する伏線で、酒宴に際して各々本體に立ち返り、假裝を忘れ、破綻に終るのである。それでこの作の喜劇的效果は頗る顯著である。それから片輪者を三人取扱つてゐる作意は童話式で、總じて三回の反覆が能く用ひられるものである。【影響】後の竹柴其水作の舞踊劇「三人片輪」（明治三十一年十月明治座初演）は本作に據つたもので、更に通俗化されてゐて、一般に歡迎され、今日もなほ上演を見てゐる。〔野村〕

三人吉三廓初買（さんにんきちさくるわのはつがひ）

脚本　七幕　世話物【作者】二代河竹新七（默阿彌）【通稱】三人吉三【別名題】「三人吉三廓初會（はつかい）」「三人吉三巴白浪（ともおのしらなみ）」「二筋道曲輪初夢」「三人吉三巴高浪（ともおのたかなみ）」等。【諸本】默阿彌全集第三卷所收【初演】萬延元年一月、江戸市村座。

【役割】和尚吉三・文里（市川小團次）、お坊吉三（河原崎權十郎）、お孃吉三・一重（岩井粂三郎）、土左衞門傳吉（關三十郎）等。

【題材】「三人吉三」は、同じ作者の「小猿七之助」の拾遺と註されてゐる作であるが、挿話であるところの一重・文里の情話は、梅暮里谷峨の洒落本「傾城買二筋道」（別項）から得たものである。

【梗概】〔序幕〕安森の家は預つてゐた庚申丸の短刀を盜まれて斷絶となつたが、海老名軍藏はこの短刀を道具屋の木屋から百兩で買取り、研師與九兵衞に預けたまゝ安森の若黨の手にかゝつて死ぬ。木屋の手代十三郎は、受取つた百兩を辻君おとせの許で落す。〔二幕〕庚申丸は與九兵衞の手から金貸太郎右衞門の手に移り、十三郎は金を紛失した申譯に身投げしようとしたが、おとせの父傳吉に助けられ、おとせは十三郎に返さうとした百兩をお孃吉三に奪はれ、川の中へ突き落される。その百兩を狙つた太郎右衞門は、所持の庚申丸をお孃に奪はれる。そこへお坊吉三が現はれ百兩の金を奪ひ合ひ、眞劍の勝負になるのを和尚吉三が留めに入り、結局三人は兄弟の緣を結び百兩の金は和尚が貰ふ。〔三幕〕文里の名で呼ばれる通人の木屋文藏が通ひ詰めた丁字屋の一重は安森の娘で、お坊吉三はその弟に當る。一方おとせを助けて送つて來た久兵衞は十三郎の實父である。十三郎の實父安森宗兵衞と六百兩の取

は傳吉と分る。おとせと十三郎は双生兒なのであるが、さうと知らずに枕を交はす。傳吉は軍藏に賴まれて安森家から庚申丸を盜んだ折、孕み犬を斬つたその報いで、今畜生道を見ることかと悔む處へ、伴の和尚吉三が貰つた金をこつそり土產に置いて行く。その後からおとせに言ひ寄つて來た釜屋武兵衞を、傳吉は伴と間違へて、その百兩を叩き返す。〔四幕〕文里が難儀してゐるので、傳吉は十三郎に百兩持たせて返させようと、おとせを百兩に買つて呉れと武兵衞に賴む。武兵衞は傳吉に叩きつけられた百兩で、一重を自分のものにしようとするが、一重は腕に彫つた文里の名を彫り替へよと迫られるが、實は文里のために無心した百兩なので、武兵衞へ突き返す。それを隣の部屋で聞いてゐたお坊吉三は、妹のためと恩を蒙つた文里のために、武兵衞の歸路を待ち伏せて捲き上げるが、それをつけて來た傳吉に貸せと迫られ、遂に傳吉を殺す。〔五幕〕一重は文里との間に儲けた子供を文里の妻おしづに託してあつたが、いまはの際に文里夫婦と我が兒に逢ふ。〔六幕〕巢鴨の吉祥院にゐる和尚吉三の處へ、お坊・お孃の二人が來て匿まはれてゐる。そこへ役人が來て若し和尚が他の二人の吉三を首にして差出せば、舊惡を許した上褒美を與へると言ふ。その後へおとせと十三郎が來て父傳吉の死を傳へ、敵討ちと百兩の調達とを賴む。和尚はそれを引受けて置いて二人を殺し、舊惡を悔悟して死なうとしたお坊・お孃の二人を留めて、畜生道の二人を殺すは却つて慈悲、二人の首を身替りに立てるから落ち延びて堅氣になれと言ふ。そして二人が改心して出した庚申丸と百兩とを、お坊の實家安森宗兵衞と六百屋久兵

衞の處へ少しも早く屆ける事となる。〔七幕〕武兵衞が僞首だと訴人したため町々の木戸は打たれて、往來止めとなつた本郷二丁目の火の見櫓で三人の吉三が落ち合ふ。そして和尚が武兵衞を殺した處へ久兵衞が駈けつけるので、庚申丸と百兩とは久兵衞の手に渡り、一時も早くと一散に駈けて行く。その跡を見送つて、三人の吉三は捕手に圍まれながら刺し違へて果てる。

【價値】百兩の金と庚申丸の短刀との配し方、文里・一重の情話と兄妹の戀との錯綜、纏綿複雜した構成は、技巧の妙と相俟つて、作者の一代表作と推稱され、抒情美乃至繪畫美に富み、數ある白浪物狂言中、最も著名なものである。

【參考】河竹默阿彌○世話狂言の新研究○續續歌舞伎年代記　〔河竹〕

三人懺悔册子（さんにんゆさうし）「三人法師」を見よ。

三人妻（さんにんづま）小說【作者】尾崎紅葉【發表】讀賣新聞に連載。【刊行】明治二十五年十二月春陽堂。紅葉全集第三卷所收。

【梗概】紳商葛城餘五郎は、加州金澤在の百姓の子だつた。江戸へ出て來て或る鑛山師に才氣を認められたのが出世の緒となり、今では大富豪の一人として矢場女上りの妻お麻共々御前樣・奧樣と仰がれる身分になつた。金で出來る樂しみを漁り盡した葛城大盡は、柳橋の逸物才藏が、菊住といふ深間があるため、いつかな靡かぬ手剛さに興を增し、反間苦肉の策を廻らして、とう〳〵手に入れた。次に政商雪村が向島の別莊で貴顯大官の享樂に供するため貯へてゐる素人出の艶色の一人、紅梅といふ女が氣に入り、盜み出して第二の妾として迎ふ。その後亡夫の後妻に納まつて、歸省した時、ふと少年時に及ばぬ戀の對象だつた人の末の妹で、琴の師匠をしてゐるまだ二十四の美しい處女お艶と逢ひ、お爲めごかしに東京へ連れ出して暴力で思ひを遂げて了ひ、間に餘之助といふ子さへ生む。老妻麻子の評に「紅梅は溫乎として內慧く、閨中に手ありて情も相應に深かるべし。お才は俠にして張强く、男に我儘なる所弄ぶに面白かるべし。お艶は無垢なる生娘（きねんめ）、唯優しくして實あるを取柄とす。銘々の役割をいへば、お才は酒の酌、紅梅は床の口說、お艶は茶漬の給仕」とあるが、三人に三樣の典型がある。そのうちお才は尾羽打枯らした菊住と燒け棒杭に火がつき、事露はれて蟄居を命ぜられる。紅梅は、この機を逸せず寵を獨占しようと、お麻に取り入つてお艶を遠ざけにかゝり、お艶は葛城の臨終に侍することさへ許されなかつたが、終にその寃が晴れ、餘之助と共に本家に引取られて厚遇される。紅梅は千圓の涙金で暇を出されて雪村の許へ、お才は能なしの菊住と添つて柳橋で待合を始めたとやら。

【批評】さきに、「二人女房」で對立せる性格の姉妹を寫した作者は、玆に好色の分限者の嬖妾三人を拉し來つてその情生活を描き、各々異なる性格を書き分けようとしただけに、構圖も大に、筋も複雜してゐる大作となつたが、精緻にして自在な描寫に依つて、お才・紅梅・お艶、共に類型的ながらも、それ〴〵の違つた性質が巧に寫されて、よくこの企てを成就せしめてゐる。しかも西鶴を摸した文章も、この作に至つては圓熟濃艶の極に達して、作者獨自の滋味を帶び來り、その點だけでも、作者の代表作として推すに足る傑作となつてゐる。

三人長者（さんにんちやうじや）

能狂言【構式】三番叟濟相傳の部（和泉流）【題材】蒲生の長者の名は、「臥雲日件錄」にも見え、又「中古雜唱集」所掲の門万歲が言立の中にも、「近江の國なるや、がもの長者のそうやうの御福」なる文辭が見えてゐる。市守長者のことは、「和州舊蹟幽考」や「南都名所集」に見える外、「紅梅千句」の「市もりが壁の柱の根は朽ちて」を初めとして、俳書にもしば〳〵見えてゐる有名な長者である。河內の國のせゝなぎ長者だけは不明である。【解說】近江の國の蒲生の長者と大和の國の市守長者とが、互に堂上から長

軍の時、精谷四郎左衞門とて近習に召された者、二條殿へ御成りの節、引出物を持つて出た尾上といふ女房の美しさに魅せられ、病となつて出仕も出來ずにゐたのを、親友佐々木三郎左衞門が仰せによつて問ひ質した結果、主君の御文が二條殿へ齎され、遂に望の如く女と契るやうになつた。常々祈念する北野天神をそれ故に怠つた懺悔を申すため、暮の二十四日は參籠して更けるまで念誦してゐたが、側で都近くの女殺しの噂を耳にし駈けつけて見ると、それが尾上であつた。髮まで切られてゐる淺間しさ悲しさ、直に髻切つてこの山

一族篠崎彌惣郎助の子六郎左衞門、正行最期の折、共に討たれながら息ある所を知己の僧に救はれたが、當主正儀變心して北朝に降つたのを諫めて容れられず、世を遁れた者であつた。妻子を捨てて奧から北國を廻り西國へ志す途中、故鄕篠崎へ立ち寄つてみると、我が家は荒れ果て、その附近に田を打つ老爺に聞けば、この尉のみ今落魄の主に仕へ居る者、而も御臺は三日前に他界、君達二人は毎日茶毘所へお詣りがあると云ふ。幾度か名告らうとして思ひ返し、なほも後見を託しつゝ路遠くまで送られて別れようとすると、一樹のも

の斬殺を中心として相關り、第三話のみは全然關係無き別箇の話なのが面白く、これは父子再會して名告り得ぬ悲劇が主題をなす。前半は「沙石集」（卷九上）の「値惡緣」發心事」から出たと思はれ、又「幻夢物語」（別項）と構想を同じくし、且つ第一の僧は「平家物語」の漁口入道に倣ひ、第三の僧の發心談は「吉野拾遺」（下卷）右馬允行繼の遁世談が本據か。知らぬ父との對面は、石童丸傳說及び朽木櫻（別項）と同巧、「發心集」や「西行物語」の西行及び西住の傳說とも通ずる所もある。少女の願文の件は「撰集抄」（卷九）の實房が十一歲で母の諷

三人長者（さんにんちやうじや）　能狂言【樹式】三番叟濟相傳の部（和泉流）【題材】蒲生の長者の名は、「臥雲日件錄」にも見え、又「中古雜唱集」所掲の門万歳が言立の中にも、「近江の國なるや、がもの長者のそうやうの御福」なる文辭が見えてゐる。市守長者のことは、「和州舊蹟幽考」や「南都名所集」に見える外、「紅梅千句」の「市もりが壁の柱の根は朽ちて」を初めとして、俳書にもしば〳〵見えてゐる有名な長者である。河内の國のせゝなぎ長者だけは不明である。【解說】近江の國の蒲生の長者と大和の國の市守長者とが、互に堂上から長者號を拜領して國元へ立ち歸る途次、河内の國のせゝなぎ長者が長者號を戴いて歸るのに會ひ、各々自らの由來を語り合つて、これと申すも天下安全のしるしであらうとて酒宴を始め、めでたく舞ひ納め、それ〴〵歸國してゆくといふ筋。寛正の紀河原勸進能の番組に「三ノ丸長者」と云ふ狂言が見えてゐるが、疑ひなく「三人長者」の草體の誤寫であらう。〔龍田〕

三人法師（さんにんほふし）　御伽草子　一卷【作者】未詳【別名】三人懺悔册子（高野山三人法師物語。又三人僧とも呼ぶか）。【成立】室町中期頃か。【諸本】古板本は寛永頃の版本、正保三年板、萬治二年板、鱗形屋本、西村屋新板等。續群書類從卷九五五所收（三人懺悔册子と題す）。史籍集覽・國史叢書・有朋堂文庫本御伽草紙・江戸文藝資料第一卷・日本文學大系第十九卷等所收。東京帝國大學圖書館舊藏鈴木叢書中にもあつた。「荒五郎發心記」と題する古寫本は特に異同が多い。【梗概】或る時高野の山で、半出家の僧三人が各々懺悔話をし合つた。四十二三の苦行に痩せてゐる人品良き僧が先づ語り出す。尊氏將軍の時、糟谷四郎左衛門とて近習に召された者、二條殿へ御成りの節、引出物を持つて出た尾上といふ女房の美しさに魅せられ、病となつて出仕も出來ずにゐたのを、親友佐々木三郎左衛門が仰せによつて問ひ質した結果、主君の御文が二條殿へ齎され、遂に望の如く女と契るやうになつた。常々祈念する北野天神をそれ故に怠つた懺悔を申すため、暮の二十四日は參籠して更けるまで念誦してゐたが、側で都近くの女殺しの噂を耳にし駈けつけて見ると、それが尾上であつた。髪まで切られてゐる淺間しさ悲しさ、直に髻切つてこの山に來てから二十年ばかりと云ふ。次に年五十ほど、丈は六尺豐かな色の黑い目鼻の大きい僧が「その上藹は私が殺したのです」と言つたので、先の僧はんかいが屹となるのを暫しと制して語るを聞けば、その荒入道は名を三條の荒五郎といふ强盜であつた。殺人の數三百八十餘に及び、因果の報か、盜を働いても手違ひ續きで獲物なく、家族は窮迫し、その夜も妻に責められて往來に待ち受け、異香馨しく來掛つた女房を襲ふと、供の女は二人ながら逃げ失せたが、流石上藹は騷がず、剣ぐに任せたので、肌着も脫がせ、唯一刀に刺殺して引返した。妻の喜び一方ならず、このやうな小袖を着た人は年若に違ひないと云ふ。憐みをなすかと思ひ、十八九かと答へると是非を云はず走り出で、やがてその髪を切つて來た淺ましさ。その夜の中に一條北小路なる玄慧法印の許に馳せ、名を玄竹と頂き、程なくこの山に登つたのであつた。我を殺して腹を癒せよと玄竹が泣けば、この人故の御發心懷しく、女は菩薩の化身で我等を助けんための御方便とはんかいも泣く。今一人は河内國楠の一族篠崎掃部助の子六郎左衛門、正行最期の折、共に討たれながら息ある所を知己の僧に救はれたが、當主正儀變心して北朝に降つたのを諫めて容れられず、世を遁れた者であつた。妻子を捨てて奥から北國を廻り西國へ志す途中、故郷篠崎へ立ち寄つてみると、我が家は荒れ果て、その附近に田を打つ老爺に聞けば、この尉のみ今落魄の主に仕へ居る者、而も御臺は三日前に他界、君達二人は毎日荼毘所へお詣りがあると云ふ。幾度か名告らうとして思ひ返し、なほも後見を託しつゝ路遠くまで送られて別れようとすると、一樹のもとに母の骨を拾ふ我が子に出逢つた。姉は九つ弟は六つ、父とも知らず經供養を賴むいぢらしさ。泪ながらに陀羅尼を誦して手向け、恩愛の絆の斷ち難きに苦しみつゝ胸を抑へ、更に二人をほうにん寺まで送り屆けると、法會に請ぜられた都の妙法上人や列なる道俗男女、利發で可憐な姉弟の身の上話と姉が捧げた願文に、これを讀誦する上人はじめ泪を絞らぬ者はなく、遁世する者無數であつた。弟は楠に取立てられて舊領を賜り、姉は比丘尼になつたとは後に聞いたとの懺悔話。名はと問へば玄梅と答へる。はんかい入道は玄松、荒五郎入道は玄竹、三人一度に手を打つて奇緣に驚き、後の同心を約したといふ。【解說】遁世物。懺悔物語。「七人比丘尼」以下この系統に屬する作の始祖で、而もその代表作。且つ近古小說中の白眉。遁世の三僧が相會して各自出家の動機と事歷を懺悔し合ふ形式で、間接には「源氏」の品定めや、「大鏡」の構想の流を引き、近くは「假名三部鈔」や「太平記」（卷三十五）の「北野通夜物語」や「梅松論」等に學んだか。第一・二の兩僧の出家談は、女人の斬殺を中心として相聯り、第三話のみは全然關係無き別箇の話なのが面白く、これは父子再會して名告り得ぬ悲劇が主題をなす。前半は「沙石集」（卷九上）の「値二惡緣一發心事」から出たと思はれ、又「幻夢物語」（別項）と構想を同じくし、且つ第一の僧は「平家物語」の瀧口入道に倣ひ、第三の僧の發心談は「吉野拾遺」（下卷）右馬允行繼の遁世談が本據か。知らぬ父との對面は、石童丸傳說及び朽木櫻（別項）と同巧、「發心集」や「西行物語」の西行及び西住の傳說とも通ずる所もある。少女の願文の件は「撰集抄」（卷九）の實房が十一歳で母の諷誦を作つた逸話から來てゐる。本書は正儀北朝降參の史料にすら引かれてゐるが、行繼の話が原說話とすれば、更に嚴密な資料批判の餘地があらう。【影響】「七人比丘尼」「二人比丘尼」「四人比丘尼」「花の名殘」（各別項）等は、これが影響と思はれる。

【參考】近古小說解題平出鏗二郎　○近古小說選解說　島津久基　〔島津〕

山王一實神道（さんわういちじつしんだう）【名義】中古以來、天台宗の教義に基いて立てられた神道をいふ。【由來】世にこの神道を以て僧最澄の創めた所と云ふ。彼は神佛習合に苦心し、自然に彼が所謂山王一實神道の端緒を開いたので、彼が門徒は歷世これが發展に努力し、遂に中古以來、有力なる神道としたのである。【解說】山王一實神道の教義は、全く天台のそれによつて立てられたのである。「神社考」に曰く、「行園姓源氏云云常與二山王明神一淸談。明神曰、我名二山王一公委レ之乎。表二三諦卽一一也。山王竪三畫者空假中也。横一畫者卽一也。王字横三畫者三諦也。竪一畫又一也。二字三畫而有二一貫之象一、故我立爲レ號也。一心三觀

一念三千亦復如ㇾ是。是以我護ニ持台教一鎭ニ護國家一」と。かくて山王とは三諦一境の稱、三と雖も而も一。これを極理となす。乃ち一實の謂也など云ひ、更に又說きて曰く、「所謂山王一實神道、欽明の御宇に濫觴し、天智に匯澤し、桓武に榮榮して今に至る。應に知るべし、一實神道は、山王の化導によりて啓發せしものにて、獨り日吉の神道に限るにあらず、八百萬の神々は皆此三諦一實の妙理に基きて、無窮の化導を施し玉ふことを(山王一實神道記)と。斯く鎭護國家を標榜せる天台の教義は、最澄の教徒によつて巧に應用せられ、以て山王一實神道の組織を完全の域に進めんことを努めたのである。

〔田中(義)〕

山王七社權現祭禮船謠（げんさいれいふなうた）

さんわうしちしやごん

歌謠集　一卷　【本稱】日吉神社七社祭禮船謠【諸本】原書は近江坂本村の舊家中村家所藏で、屛風に一枚づつ貼つてある。この書を日吉神社の祝、生源寺美濃守業蕃が書寫した本が無量院に藏せられ、その轉寫本で無量院の慈本の所藏してゐた本が、東京帝國大學國語研究室に藏せられてゐる。更に早く近衞三貌院の書寫したと云ふ本が中村家に藏せられ、原本及び三貌院書寫本を吉澤義則博士の校合した校本が京都帝國大學文學部研究室に藏せられてゐる。別に祝業蕃は、この書の註釋書「日吉七社船謠考證略解」一卷を文政六年に著はし、僧慈本は天台霞標四編卷三の慈慧大師の項に收めた。前者は日本歌謠集成卷五に飜刻され、後者は日本佛教全書所收天台霞標一に入つてゐる。【解說】山王權現・二宮・聖眞子・八王子・客人・十禪師・三宮の山王七社について、各々船謠五首、早謠五首、合計六首の歌謠が收められてゐる。古來この歌謠は、ゴマ點式の節博士が記されてゐる。その歌詞の殆ど全部は、「古今集」及び「萬葉集」の歌を取つたものである。奥書に慈惠大師作眞筆の由を云ひ、元享三年四月亮守、永正三年八月三日亮尊の奥書がある。但し「萬葉集」の歌の訓に仙覺の影響があるらしく、又囃子詞が室町時代の特徵を具へてゐて、新しきこと等の點より慈慧大師作と云ふは信じられない。恐らく鎌倉時代の末に、日吉神社の社僧の作つたものであらう。船謠とあるから同社の船祭の用に供せられたものと思はれる。早謠は船歌の早い調子で歌はれるものである。歌詞に面白味は少いけれども、量の少い鎌倉時代の歌謠の祭禮歌として、これだけの歌が一册の書として殘されてゐる事は研究上甚だ有益である。又その囃子や調子は、當時の一般歌謠の形態を窺ふ上に甚だ參考となる。

はし殿の、昔の面影、誰に問はましな、神よりほかに、さればの、ヤア　神より、ほかにさればの(山王權現船謠)

夕日さす、豐旗雲よの、あかゝと、月はさし上るよ、ヤア　月は、あかあかと(三宮早謠)

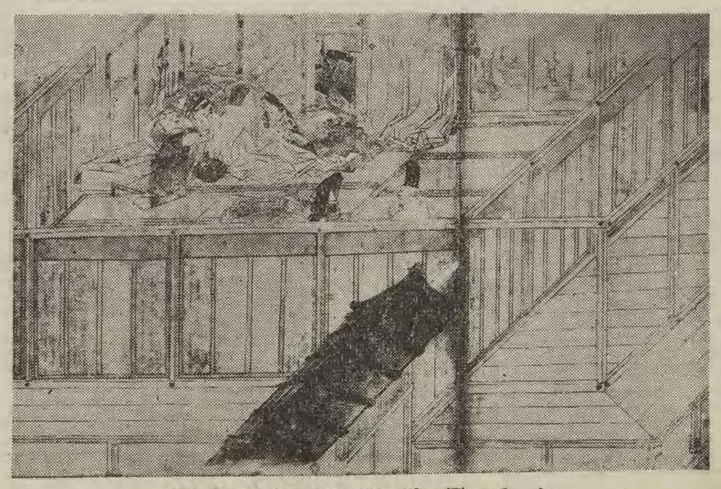
【參考】增訂和歌史の研究佐佐木信綱○日本歌謠史　高野辰之

〔藤田〕

山王靈驗記（さんわうれいげんき）

繪卷　【解說】この名の繪卷には二種あり、一は、山城蓮華寺の二卷本、他は沼津日枝神社の一卷本である。蓮華寺本は又山門僧傳などと云はるゝ如く、賴豪・運賀・聖救・桓舜・院源等比叡山の僧侶の傳に因んで、日吉山王の靈驗を叙した殘缺本で、その畫は六角寂濟の筆と傳へられてゐる。寂濟は清涼寺の融通念佛緣起の畫者の一人として著名な人で、土佐繪所預となり、靈水の家柱を受領した人といふ。この靈驗記は融通念佛緣起の分とも描寫相類し、畫致からしても、足利初期の製作と見るべきである。日枝神社本は蓮華寺本と全く物語の內容が違ひ、後二條關白師通が日吉山王の神罰を蒙つた話より引いて本社創立の緣起を說いたもので、その詞は「源平盛衰記」卷四、白山神輿登山事以下にある物語と最も近似してをり、史料としても興味あるものであるが、更に卷末には弘安十一年初春二十二朝云々の奥書があり、これによれば、この卷が本社の緣起として當時新たに圖繪奉納されたものであることが明かである。構圖が整ひ、描寫は細く勁く、正に當時の大和繪特有の典雅な趣致に富んだものである。

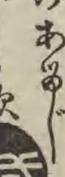
〔田中(一)〕



山王靈驗記（日枝神社藏）

三馬（さんば）

草雙紙・滑稽本作者　【姓名】菊地久德。字は泰輔、或は太輔とも。通稱西宮太助。【戲號】本町庵・遊戲堂・洒落齋・哆囉哩樓・四季山人・遊戲道人・戲作舍・滑稽堂・銅駝先生等、就中、式亭三馬の戲號が最も有名で、私淑した唐來三和と、忘形の友烏亭焉馬の號から取つたのであらう（江戸作者部類・戲作六家選）。式亭三馬とは、式三番の擬（なぞ）りであらう。



【生歿】安永五年、江戸淺草田原町三丁目に生れた。諸書に安永四乙未年生とあるが、彼の著「戲場粹言幕の外」（別項）の序の「文化三年丙寅の春、當年積て三十一歲」及び「式亭雜記」の「文化七年庚午六月、式亭自記。于時三十五齡」から安永五年と逆算される。歿年、文政五年（一八二二）壬午正月六日（墓碑銘）。享年四十七。【法名】觀譽喜樂奏天信士【墓所】東京深川雲光院中の長源寺內にあつたが、大震災後、東京市荏原區碑文谷の正泉寺に移された。【家系】菊地家の遠祖は明かでないが、「古今百馬鹿」（別項）の跋に、門人春曉の記した所によれば、父茂兵衞は八丈島の爲朝大明神の祠官、菊地壹岐守の妾腹の子であつたといふ。【閱歷】幼少時代は、中橋の書肆北林堂或は本石町四丁目の書肆翫月堂に奉公したとも傳へられてゐる（戲作六家撰）。後、山下町なる書肆萬屋太治右衞門（蘭香堂）の婿となつたが、妻が病死したので、家を出て四日市に古本を商つたと傳へられる（六家撰）。なほ「式亭雜記」には、妻の兄翫月堂主人といふことが見えてゐるから、翫月堂に住む中に、主人の娘を貰つたものであらう。ふうして書店の勤めの傍ら戲作をなし、又書店の關係から西宮新六と懇意になり、その姓を名乘るに至つたのであらう。彼は菊地家の長男に生れながらも、茂兵衞の名跡を弟に讓つて別家した。茂兵衞の名跡は今日もなほ淺草北仲町に續いてゐる。彼が賣藥並に化粧品を商つたことは、作中で屢々猛烈に宣傳し、或は廣告を出してゐるので知られる。白粉下江戸の水、酒の醉をさまし、毒けしの金勢丸、目藥の龍樹散、その他蘭奢袋、或は箱入齒磨、小兒百日せきの藥・薄化粧・毛生藥、天女丸などを賣り出し、文化七年に京都寺町通五條上ル町田を捺し、書入をもしてゐる。又子弟に對しては溫情を保つてゐた。生來飲酒家で且つ執着心に乏しかつたために、作品の續編が遂に成らなかつたり、或は一晝夜位の急案の作品を發表したりしてゐる。

【業績】〔草雙紙作者として〕「天道浮世出星操」（別項）「人間一心覗替操」を初作とする黃表紙の初期のものは、多く喜三二・京傳・全交の摸倣である。殊に二代目芝全交を名乘らうとしたほど私淑してゐた全交の作に範をとるものが多い。偶々「俠太平記向鉢卷」（別項）事件によつて作名の世に知られる頃から、漸次彼は人情本の作者となつたが、これが彼の才能を十二分に發揮させる世界であつた。その作品の數も多く、「戲場粹言幕之外」「小野慰讃字盡」「酩酊氣質」「浮世風呂」（別項）「當世七癖上戶」「早替胸機關」「浮世床」「客者評判記」「四十八癖」「忠臣藏偏癡氣論」「田舍芝居忠臣藏」「人間萬事虛誕計」「一盃綺言」「古今百馬鹿」「人心覗機關」「素人狂言紋切形」（以上各別

た。かく流行に押された三馬は、例の負けじ魂から草雙紙界に於て然るべき功績を誇るべく、合卷の體裁を創案したと稱し、「雷太郎强惡物語」（別項）を以て、その權輿であると自負してゐる。のち又、大合卷とて半紙版の合卷を出したこともあつた。三馬が合卷の筆を執るやうになると、もう黃表紙に於ける春町・喜三二の作風を主張しない。その方面はすべて滑稽本に讓り、合卷の方面は案外眞面目なる筋を作意としてゐる。尤も古い歌舞伎、又は淨瑠璃の筋を二つ三つ組み合はせて

政六年に著はし、僧慈本は天台霞標四編卷三の慈慧大師の項に收めた。前者は日本歌謠集成卷五に飜刻され、後者は日本佛教全書所收天台霞標一に入つてゐる。【解說】山王權現・二宮・聖眞子・八王子・客人・十禪師・三宮の山王七社について、各々粉藻五首、早藻五首、合

居の勤めの傍ら戯作をなし、又書店の關係から西宮新六と懇意になり、その姓を名乘るに至つたのであらう。彼は菊地家の長男に生れながらも、茂兵衞の名跡を弟に讓つて別家した。茂兵衞の名跡は今日もなほ淺草北仲町に續いてゐる。彼が賣藥並に化粧品を商つたことは、作中で屢々猛烈に宣傳し、或は廣告を出してゐるので知られる。白粉下江戸の水、酒の醉をさまし、毒けしの金勢丸、目藥の龍樹散、その他蘭奢袋、或は箱入齒磨、小兒百日せきの藥・薄化粧・毛生藥、天女丸などを賣り出し、文化七年に京都寺町通五條上ル町田中宗悅の製法にて、諸虛百損を補ふ良藥たる仙方延壽丹の關東賣弘所に指定された。かくて家業と戲作とによつて家計も裕福になつたらしい。【人物】金龍山人は「浮世風呂」(別項)の末文に、「式亭主人は鳩車竹馬の友なり。性素より拙辯、生平の茶譚殊に鈍し。故に人呼んで面白くなき人とし、且話のなき人とす。賈客にして騷人、野暮にして在行、居は市中にありて自ら隱れ、躬は俗間にありて自ら雅なり。言語を通めかさず、妄に陳奮翰を吐かず、形容を睟がらず、假にも利屈臭きを論ぜず、ごぜえすの結交、敬して闊げ、來玉への招待辭して到らず。陰物ならず陽氣ならず、かた〳〵よらずかたよらず、凡中位の好男なり云々」と記してゐる。これは三馬に對する適評であらう。その氣難かしさから、挿畫に關して歌川豐國・勝川春亭と絕交もし、或は馬琴と論爭したのは有名なことである。氣難かしく、几帳面な性格であつたから、藏書には必ず藏書印を捺し、書入をもしてゐる。又子弟に對しては溫情を保つてゐた。生來飲酒家で且つ執着心に乏しかつたために、作品の續編が遂に成らなかつたり、或は一晝夜位の急案の作品を發表したりしてゐる。

【業績】〔草雙紙作者として〕「天道浮世出星操」(別項)「人間一心覗替操」を初作とする黃表紙の初期のものは、多く喜三二・京傳・全交の摸倣である。殊に二代目芝全交を名乘らうとしたほど私淑してゐた全交の作に範をとるものが多い。偶々「俠太平記向鉢卷」(別項)事件によつて作名の世に知られる頃から、漸次彼の得意とする寫實と穿ちによつて、又歌舞伎色を利用する構圖に於て、異色ある作を出すやうになつた。しかも他人の作を飜案することに於て新趣向を立て、或は二三の作を錯綜させ、その間に新構成をする事が多かつた。彼は喜三二・春町の作風を正統と考へ、どこまでも滑稽を本體と心得て、敵討物の流行、殊に馬琴の理窟の作風に反抗して、文化二年「親讐胯膏藥」(別項)を出してこれを揶揄したが、大勢には敵せず、その翌年からは種々の辯疏の辭と共に、敵討物の著作を出すやうになつた。かく流行に押された三馬は、例の負けじ魂から草雙紙界に於て然るべき功績を誇るべく、合卷の體裁を創案したと稱し、「雷太郎强惡物語」(別項)を以て、その權輿であると自負してゐる。のち又、大合卷とて半紙版の合卷を出したこともあつた。三馬が合卷の筆を執るやうになると、もう黃表紙に於ける春町・喜三二の作風を主張しない。その方面はすべて滑稽本に讓り、合卷の方面は案外眞面目なる筋を作意としてゐる。尤も古い歌舞伎、又は淨瑠璃の筋を二つ三つ組み合はせて脚色を複雜にし、それが挿繪の場面の急激な變化と相伴ふことが、三馬の合卷の特徵である。但し三馬が歌舞伎や淨瑠璃に趣向を藉りる一面には、それに對する深い愛好があつたことをも注意すべきである。「劇場訓蒙圖彙」(別項)の刊行も、その理由によると思はれる。又書物の體裁の上に、絕えず新案を加へることも、その特徵であつた。何等かの形に於て注意すべき草雙紙の作は、前出のもの以外、「芝全交夢寓言」(別項)「俠太平記向鉢卷」(別項)「日本一癡鑑」「嬶訓歌字盡」(別項)「稗史億說年代記」(別項)「吃又平」「一對男時花歌川」(別項)「却說浮世三助話」「大盡舞花街始」「昔語丹前風呂」(別項)「五色潮來艷合奏」(別項)等である。

〔滑稽本作者として〕 初作「戲場粹言幕之外」を出して漸次滑稽本に進出し、「浮世風呂」初篇を出すに及んで、三馬は一九と異なる境域を領する滑稽本の雄となつたが、これが彼の才能を十二分に發揮させる世界であつた。その作品の數も多く、「戲場粹言幕之外」「小野篁讎字盡」「酩酊氣質」「浮世風呂」(別項)「當世七癖上戶」「早替胸機關」「浮世床」「客者評判記」「四十八癖」「忠臣藏偏癡氣論」「田舍芝居忠臣藏」「人間萬事虛誕計」「一盃綺言」「古今百馬鹿」「人心覗機關」「素人狂言紋切形」(以上各別項)「初物語」「どうげ物語」「兩道中記頭陀袋」「大千世界樂屋探」「茶番早合點」などがある。彼は洒落本の寫實主義の洗禮を受けてゐるだけ、寫實主義を以て微細に現實を寫し出さうとした。そして層一層眞實ならしめんがために會話を多くし、或は獨臺詞風に、人物をしたのは有名なことである。蓮華寺本は又山門僧傳などと云はるゝ如く、賴豪・暹賀・聖救・桓舜・院源等比叡山の僧侶の傳に因んで、日吉山王の靈驗を叙した殘缺本で、その畫は六角寂濟の筆と傳へられてゐる。寂濟は清涼寺の融通念佛緣起の畫者の一人として著名な人で、土佐繪所預となり、

あり、これによれば、この卷が本社の緣起として當時新たに圖繪奉納されたものであることが明かである。構圖が整ひ、描寫は細く勁く、正に當時の大和繪特有の典雅な趣致に富んだものである。

〔田中(一)〕

三ノ鼓 ほこの「鼓」を見よ。

三馬筆蹟

式亭三馬腹之内(自筆稿本)

て心中を語らしめてゐる。彼の會話は極めて微細な點まで吟味したもので、同じく町人であつても職業的に分け、老若男女の別を設け、或は通・半可通を分ち、醉漢の呂律の廻らぬ言葉までもその儘に寫し、上方辯・關東辯・江戸ツ兒辯等を區別し、隱語・吃音・よいよい病人の言葉までも寫し出さうとしてゐる。彼の鋭い觀察は日常の言語をも忽せにしなかつたのである。彼はかくして言語の外面觀察に精しかつたと共に、その內面をもよく觀察して、心にもない世辭や虛言を以てその場を胡麻化すなどに對して、皮肉な觀察をしてゐる。それが彼の穿ちである。彼は皮肉屋ではあつたが、不平家ではなかつた。彼の作には上司を揶揄して不平を漏らし、諷刺するといふが如きものはない。結局彼は江戸の町人として現在に滿足した人であつたのである。

〔洒落本作者として〕寛政十年の「辰巳婦言」（別項）を初作として洒落本を出したが、その數は少く、僅か數種に過ぎない。けれどそれ等の穿ちは辛辣であり、それ等の會話の寫生は極めて精緻である。後の滑稽本の素をすべて具備してゐることに特に注意すべきである。

〔讀本作者として〕三馬は「宿直物語」を初作として讀本を出し、文化七年には苦心の作「阿古義物語」を、翌八年には「繪本魁草紙」（各別項）を出した。これ等は馬琴の讀本の盛名に反抗するためにしたものらしく、考證方面にも努力したが、つひに世評は面白からず、間もなくこの方面から手を引いた。但し體裁に於て、讀本と合卷の中間性のものを中本繪入讀本と稱して出板した。これは相當好評を博したやうである。

【門弟】小說戲作の門弟は、可なりの數に上つてゐる。「戲作者小傳」「浮世繪類考」に見えてゐるものだけでも、樂亭馬笑・古今亭三鳥・一亭三生（以上は式亭自ら舊き門人といふ）、福亭三笑・益亭三友・二代目福亭三笑・一亭三子・德亭三孝・雪亭三冬・匠亭三七・春亭三曉・二代目春亭三曉・一亭三樂・春亭三鷺、その他三亭五蘭・學亭三子・樂亭西馬・式亭小三馬・岡山鳥などがある。尤も中には作の指導はさまでの事はなく、多くは文壇への紹介ぐらゐのものもあつたらう。この紹介に就いては、三馬はよく努め、彼の戲作の上でも、頻りに繰返すことが多い。【著作集】校訂三馬傑作集（帝國文庫）○式亭三馬集（近代日本文學大系）○滑稽文學全集○滑稽本集（日本名著全集）○四大奇書（帝國文庫）○浮世風呂・浮世床（有朋堂文庫）等。

【參考】式亭三馬の價値 小島政二郎（中央文學）○式亭三馬の弟子 山崎麓（江戸時代文化・昭和二ノ九）○式亭三馬 藤井乙男（江戸文學研究）○中本（一九・三馬・春水） 佐々政一（近世國文學史）○人としての京傳・馬琴・三馬・一九と其の作品 高須芳次郎（日本近世文學十二講）○三馬が滑稽本の二種 藤村作（上方文學と江戸文學）○三馬研究 笹川種郎

〔山口・小柴〕

三番叟（さんばそう）

能狂言【格式】 小習の次に三番叟相傳が位するが、三番叟のいろ〳〵な小書附（こがきつけ）になると、大事之習となり一子相傳とさへなつて非常に重いのである。大事之習としてあるのは、三番叟二日目（十人子寶）、同三日目（烏帽子の祝儀）、同四日目（作り道）、同五日目（三髮の祝儀）等であつて一子相傳としてあるのは、三番叟初日田で歌ふし同（後段和合）、同（天地和合）の如きである（以上は和泉流の定に據る）。【題材】これは能の翁（おきな）（諸曲、番外なる神歌（しんか））に附屬したもので、三番叟とは何を意味するかと云ふに、古來いろ〳〵な說がある。村田了阿遺書（新燕石十種）に「近代世事談」を引いて、式三番の翁は天照大神、千歲は八幡大神（鈴の大夫）三番叟は春日明神だとあるが如きは、一般に行はれてゐる所で、又三者は住吉三神を表したのだとも云はれてゐる。

【內容】初日の式では、三番叟の揉（もみ）の段があつて、「あら目出度やな、物に心得たるアドの大夫殿に見參（けんざう）申さう」と言ふ。千歲は、「丁度參つて候」と答へて、「今日の御祝儀を千秋萬歲とめでたきやうに舞うておりそへ云々」と所望する。三番叟はアドに、「めでたきやうに舞ひ納めるのは、何より以て易い事、先づ本の座敷へお直り候へ」と言ひ、千歲は、「先づ御舞ひ候へ」と促して、暫く讓り合ひ、千歲が「さあらば鈴を參らせう」と鈴を渡し、三番叟が「あらやうがましや候」と言つて、そこで鈴の段となるのである。二日目の式では、烏帽子の祝言が挿まれる。卽ち翁の大夫の立烏帽子、アドの大夫の折烏帽子、三番叟の降烏帽子（おりえぼし）につけて、三番叟が、「四方に四萬の舞を立烏帽子、其中にどうど折烏帽子」又「かやうに天下治りめでたい折なれば、此所へ七珍萬寶から り〳〵と降り烏帽子候」と祝ふのである。三日目の式では、十人の子寶の事が挿まれる。三番叟が、某は子十人を持つてゐるが、上五人は珠を延べたやうな男子、下五人は瑠璃を延べたやうな女子であつて、その名をおとよ・けさよ・だんだら・いなごに・たつ松・いる松・かいつく・ひつゝく・すひつく・燧袋（ひうちぶくろ）と附けたと狂言を言ふのである。田歌と云ふのは、三番叟がアドの大夫を田歌節に呼ぶ事が挿まれる。「ヤドノヤ、ヤドノヤ、ヤドノ〳〵ヤヤ、ヤドノヤ」と呼ぶ。それで何事ぞと問ふと、「なんぼうよき天氣にては候はぬか」と挨拶するのである。（以上は鷺流に據つた。和泉流とは二日目・三日目が反對に入替つてゐる。）

【構想】これは、能の「翁」に附屬した極めて單純な祝言事であつて、別に劇的脚色といふ程の點はなく、一種の儀禮めいた物である。三番叟の見所は、揉の段と鈴の段との所作の方に存する。これ等の仕方附は明細に「舊正錄」に載せてある。

〔野村〕

三番叟（さんばそう）所作事　三番物

【解說】三番（叟）物は何れも能樂の「翁」（おきな）（別項）に據つたものであるが、「翁」その儘を歌舞伎に移した「式三番」の如き儀式用のものと、全く所作事化された各種三番叟の如く時代趣味を取入れたものとがある。例へば「廓三番叟」の如き全く廓詞で通し、地口で洒落（しやれ）のめしたものとある。勿論歌舞伎の三番叟の特色は所作事化されたものにあるが、能樂が三番叟より翁を主としてゐるに對し、歌舞伎では翁より三番叟を主として、そこに興味を持つのは時代好尙の變化であり、また歌舞伎で三番叟と呼ぶ所以である。

【沿革】歌舞伎に於ける三番叟の最古のものは、江戸歌舞伎の開祖である猿若勘三郎が創始したと傳へられる「今樣風流大小の舞亂曲三番叟」である。能樂の「翁」の中の三番叟の件へ「風流（ふりう）」と「大小の舞」とを添加したもので、初め白拍子の男舞姿で舞ひ、後に三番叟に變つて「モミの段」「鈴の段」を演ずるのであつた。三味線を加へず、唄と小鼓、笛のみに據つたものといふ。これを江戸振附の祖、初代志賀山萬作が勘三郎より傳へて、更に一流の工夫を加へ「志賀山三番叟」なる名稱を附した。後年これによつて志賀山家の裔である初代中村仲藏が、天明六年十月、江戸中村座で「白拍子昔男、今樣風流、大小の舞」三番叟（通稱、朝比奈三番叟。文政五年二月、河原崎座）○四季三葉草（通稱、四季三葉。未詳。傳存）等。

〔長唄〕鏃鶴三番叟（未詳。但し作曲は寶曆五年で一說に初代中村仲藏所演といふ。傳存）○今樣四季三番三（通稱、さらし三番叟。寶曆五年十一月市村座。曲は傳存）○劍烏帽子照葉盞（通稱、劍烏帽子。寶曆三番叟（通稱、家櫻三番叟。未詳。傳存）等。〔清元節〕再春菘種蒔（後出）○麗（うるはし）とは梅を見せ月、中村座。傳存）等。〔富本節〕素袍の若松親（はなかざ）振袖の翁草（いなよ）今樣舞臺（ぶたい）（文化九年十一月、中村座）○家櫻幾齡（きれい）三たる月夜かな鳴立澤虎（しぎたつさはとら）礎（いしずゑ）（通稱、朝比奈三番叟。文政五年二月、河原崎座）○四季三葉草（通稱、四季三葉。未詳。傳存）等。

〔長唄〕鏃鶴三番叟（未詳。但し作曲は寶曆五年で一說に初代中村仲藏所演といふ。傳存）○今樣四季三番三（通稱、さらし三番叟。寶曆五年十一月市村座。曲は傳存）○劍烏帽子照葉盞（通稱、劍烏帽子。寶曆

田治助〔曲節〕長唄と豐後路（後の清元）節との掛合。〔太夫〕豐後路清海太夫（後の清元延壽太夫）〔立唄〕芳村伊十郎〔作曲〕長唄は二代杵屋正次郎、豐後路節は伊藤東三郎（後の清元東三郎）〔振附〕藤間勘十郎〔傳來〕曲・振とも傳存。曲は長唄と清元の双方に傳はつてゐるが、今日では長唄のみを地に使ふ場合が多い。〔內容〕最初序曲として、狂言の「鞨鼓焙燦」あり、終つて翁が本行の舞が濟むと、揉出しになつて三番叟（三代中村歌右衞門）出で、千歲とふ。聖歌又は讃歌ともいひ、神をたゝふる歌の意である。【沿革】源をヘブル人の歌謠に發してをる。「出埃及記」のモーゼの凱歌は、讃美歌の祖の如く思はれたが、「八千矛の神のみことは」の長歌が、恐らく後代の舞の歌であるが如く、民族の地步定まつての作であらう。デボラの歌は、巫の力のあつた時代を想はせる。ダビデの王となるに及んで、禮樂大に起り、器樂・聲樂の長は、わが「神樂の人長」のやうな華々しい者であつたらしい。而して「詩

抗するためにしたものらしく、考證方面にも努力したが、つひに世評は面白からず、間もなくこの方面から手を引いた。但し體裁に於て、讀本と合卷の中間性のものを中本繪入讀本と稱して出板した。これは相當好評を博したらしい。

三味線三番叟と題して上演し、初めて三味線を加へて儀式曲の一となつたが、一子相傳の極秘ものとして重く扱はれたために、遂に廢滅となつた。一方、顔見世や正月各座に行はれた「式三番」は、既に元祿期から見えて、外記節・半太夫節・大薩摩節等の地によつて演じられてゐたが、翁は太夫元、千歳は若太夫、三番叟は座頭とやゝ定例になつたのは寶曆期で、多く大薩摩節を用ひた。その後、長唄地に直されて現今に及んでゐるが、現行の「式三番」は、長唄の「翁千歳三番叟」を用ひるのが通例となつてゐる。これ等の三番叟は、殆ど能樂で狂言師のつとめる三番叟に近かつたものであるが、江戸長唄と豐後節等の勃興につれて所作事が發達するに及び、能樂の風とは趣を異にした諸種の三番叟が生れた。その形式も各種各樣だが、所作事化されたものとしては享保九年十一月、江戸中村座で澤村宗十郎と山下金作とで演じた「風流三番叟」が古く、又變化舞踊としては寛政四年八月、江戸市村座で三代瀨川菊之丞が七變化所作事「七瀨川最中桂女」中の一として演じたのが古い。

【主要種目】 各流派の主なるものは次の如くである。〔義太夫節〕風流連管三番叟（通稱二人三番。天明二年九月、大阪角の芝居、作詞並木十輔。傳存）○壽式三番叟（通稱、壽式三、式三番。未詳）〔常磐津節〕祝言子寶三番叟（通稱子寶三番。未詳。但し作曲は天明七年二月。傳存）○壽（祝言）式三番叟（通稱式三番。文化十二年七月中村座。傳存）○未熟菘種蒔（通稱、種蒔三番。弘化三年六月市村座で復活）○翁草霜舞女（通稱、菊三番。明和七年十一月市村座）〔翁草戀種蒔（通稱、種蒔三番叟。安永四年十一月中村座。傳存。振は廢滅）○壽世嗣三番叟（前出）○廓三番叟（未詳。但し作曲は文政九年正月、傳存）○舞奏いろはの種蒔（通稱、櫓三番。天保十二年閏正月市村座。傳存）○翁千歳三番叟（通稱、外記三番。未詳。但し作曲は安政三年十一月、傳存）。

再春菘種蒔

【再春菘種蒔】〔通稱〕舌出し三番叟。志賀山三番叟〔角書〕昔今志賀山三番叟。種蒔三番〔角書〕あらやうがましやかな盛衰記」第一番目二立目〔作詞〕二代櫻月、中村座。傳存）等。〔常本節〕掛袖の翁草霜舞女。今樣舞臺（文化九年十一月、中村座）○家櫻幾齡三番叟（通稱、家櫻三番叟。未詳。傳存）等。〔清元節〕再春菘種蒔（後出）○鬮とは梅を見せしたつはとつる月夜かな鳴立澤虎礎（通稱、朝比奈三番叟。文政五年二月、河原崎座）○四季三葉草（通稱、四季三葉。未詳。傳存）等。〔長唄〕雛鶴三番叟（未詳。但し作曲は寶曆五年で一說に初代中村仲藏所演といふ。傳存）○今樣四季三番三（通稱、さらし三番叟。寶曆五年十一月市村座。曲は傳存）○劔烏帽子照葉盞（通稱、劔烏帽子。寶曆十年十一月、市村座。曲・振とも廢滅。但し大正四年一月市村座で復活）○翁草戀種蒔（通稱、種蒔三番叟。安永四年十一月中村座。傳存。振は廢滅）○壽世嗣三番叟（前出）○廓三番叟（未詳。但し作曲は文政九年正月、傳存）○舞奏いろはの種蒔（通稱、櫓三番。天保十二年閏正月市村座。傳存）○翁千歳三番叟（通稱、外記三番。未詳。但し作曲は安政三年十一月、傳存）。

【再春菘種蒔】〔通稱〕舌出し三番叟。志賀山三番叟〔角書〕昔今志賀山三番叟。種蒔三番〔角書〕あらやうがましやかな盛衰記」第一番目二立目〔作詞〕二代櫻田治助〔曲節〕長唄と豐後路清海太夫（後の清元延壽太夫）〔立唄〕芳村伊十郎〔作曲〕長唄は二代杵屋正次郎、豐後路節は伊藤東三郎（後の清元東三郎）〔振附〕藤間勘十郎〔傳來〕曲・振とも傳存。曲は長唄と清元の双方に傳はつてゐるが、今日では長唄のみを地に使ふ場合が多い。〔內容〕最初序曲として、狂言の「鞨鼓焙燎」あり、終つて翁が本行の舞が濟むと、揉出しになつて三番叟（三代中村歌右衞門）出で、千歳と問答、次いで嫁入りの振よりクドキになり、最後に鈴の段の種蒔の所作で終る。

【柳糸引御攝】〔通稱〕操三番叟〔角書〕難波土產の御好にやうがましくも操の三番叟〔初演〕嘉永六年二月十日初日、河原崎座「しらぬひ譚」第二番目大切〔作詞〕篠田瑳助〔曲節〕長唄〔立唄〕芳村孝次郎〔作曲〕五代杵屋彌十郎〔振附〕五代西川扇藏〔傳來〕曲・振とも傳存。但し現行のものは明治三十二年一月、歌舞伎座で五代尾上菊五郎が上演した際、曲・振とも、多少の改訂を施したものに從つてゐる。〔內容〕ぜんまい人形の翁（坂東しうか）と同じく千歳（坂東竹三郎後の五代目彦三郎）とが現はれ、天下泰平、芝居長久を壽ぐ振あつて入ると、口上は箱の中から三番叟（嵐璃珏）を引出す。三番叟は操仕立で、お目見得披露のモミ出しよりクドキになり、終りの鈴の段まで進むうち、糸が切れたり搦んだりする仕草がある。

【參考】日本歌謠集成卷九〇舞踊劇集（日本戲曲全集）○江戸長唄佐々醒雪（俗曲評釋）○江戸近世舞踊史九重左近○近世邦樂年表○清元研究忍頂寺務○所作事類纂小谷靑楓（歌舞伎研究一六）

〔秋葉・渥美〕

讃美歌（さんびか）

【名義】 基督教の聖歌をいふ。聖歌又は讃歌ともいひ、神をたゝふる歌の意である。【沿革】源をヘブル人の歌謠に發してをる。「出埃及記」のモーゼの凱歌は、讃美歌の祖の如く思はれたが、「八千矛の神のみことは」の長歌が、恐らく後代の舞の歌であるが如く、民族の地歩定まつての作であらう。デボラの歌は、巫の力のあつた時代を想はせる。ダビデの王となるに及んで、禮樂大に起り、器樂・聲樂の長は、わが「神樂の人長」のやうな華々しい者であつたらしい。而して「詩篇」はヘブル聖歌の最高峯たるのみか、長く後代に仰がれてをる。新約に入つてルカ傳が最もたゝへ歌に富む。マリアの歌 Magnificat ザカリアの歌 Benedi tus など、今も用ひられる。〔ギリシヤ〕即ち東方教會の歌は、初代の素朴より八・九世紀の精巧に達した。Gloria Patri「父なる神に」は、早い頃の作である。〔シリア〕の歌は、五・六世紀に榮えた。〔ラテン〕の讃美歌の始祖は、ヒラリー、アンブロースの二星である。Je Deum は、アンブロースの作といはれる。六世紀に入つてグレゴリーが現はるゝや、謂はゆるグレゴリー流の歌が行はれた。ラテンの聖徒で、遺作の弘く行はれるのは、クレイルボウのベルナルドとクルニーのベルナルドであらう。〔イタリア〕に新文學の起つたのは、十三世紀頃からであらう。アシシのフランシスの詠といはれる宗教詩がある。十三世紀の後半には、フラジランツの町々を巡りゆく歌があり、巡禮の御詠歌を想はせる。〔フランス〕ローマ教會で用ひるカロルは、フランスの歌として大分古い。ラシーヌ、フェネロンの如き文人も讃美歌を詠じた。九百首もあるギヨン夫人の聖歌の多くは幽囚の中に成つたとか。詩篇などの聖句ミの段」「鈴の段」を演するのであつた。三味線を加へず、唄と小鼓、笛のみに據つたものといふ。これを江戸振附の祖、初代志賀山萬作が勘三郎より傳へて、更に一流の工夫を加へ「志賀山三番叟」なる名稱を附した。後年これによつて、志賀山家の裔である初代中村仲藏が、

を自國の語で歌ふについては、フランスは他國に先だつた。〔ドイツ〕ルーテルが一度起つや、讃美歌は新教會の支柱となつた。その傑作は Ein fest Burg「神は我が櫓」である。リンカルトの Aun danket「いざや共に」は、國家の大典に用ひられる。ゲルハルトはルーテル以後の第一人者といはれる。ボヘミヤ人の歌は、ルーテルと事を共にしたヴワイズより起り、ヘルバルトがこれを承けた。十八世紀に至つて、モラヴィア人の集團の中心人物チンツエンドルフの讃美歌は、二千首に達したといふ。ドイツの改革教會よりは、ネアンデルを出した。その後に現はれたのは、テルステーゲンである。ドイツの聖歌は、スカンヂナヴィアにも、オランダにも、イギリスにも入つた。英米の讃美歌は盛んだといつても、ドイツの刺戟がなかつたら今日に達しなかつたのである。〔オランダ〕では、十七世紀ごろより徐々に讃美歌の集が出で、十九世紀に至つて改革教會とルーテル教會との歌集が公けになつた。〔スカンヂナヴィア〕ではペトリ兄弟がスウエデン讃美歌の父と呼ばれる。その歌はデンマークにも入つた。スカンヂナヴィアの歌としては、Verzage nicht「ちひさき群よ、な恐れそ」が、グスターフ・アドルフ王の軍歌として知られてをる。お伽噺のアンデルセンも讃美歌を草した。

〔英米及び英語の讃美歌〕　イギリスでも初めは詩篇を歌へるやうに改譯して、禮拜に用ひてゐた。一五四九年のを舊譯といひ、その後紆餘曲折を經て、一六九六年にテート及びブラッデーの新譯が現はれた。アメリカなる植民地では、ニューイングランド譯とて、據る所

アンが新しい聖歌を入れた。英國聖歌のやゝ起らんとするや、ケンが現はれた。その「朝の歌」「夕の歌」は共に名高い。アヂソンの「はてしも知られぬ」は美しい。ワッツは英語聖歌の第一人者といつてもよからう。日本の讃美歌にさへ二十五篇を存してをる。メソヂストの歌として、チャーレス・ウエスレーの秀でた事は言ふ迄もない。「わがたましひを愛するイエスよ」は、殊にめでたい。「あまつみ使よ」のペロネット、「千歳の岩よ」のトプレデー、共に不朽の作を遺した。スコットランドのモントグメリーは、モラヴィアンの流を汲む者、アウバア女史は、ユグノーの血を引く作家であつた。國教會のヒーバアは、第一流の作家である。ヒーバア時代のアメリカにへスチングスといふ作者があつた。日本に緣のあるのは、「たそがれ靜に」のブラオン女史である。英國では政治家たるグラント、詩人ホワイト、婦人作家のミス・エリオット・オックスフォードの「キーブル」及び「ニウマン」など、とり〴〵の光を放つ。バアマアとスミスとは米國聖歌界の二大家ともいはれる。スミスは米國々歌の作者である。近代にあつて衆望をあつめた作家は、スコットランドのボナアであらう。聖歌の世界は次第に女流を迎へてゆく。アレキサンダー女史、ハバアガル女史など群を拔く。ウインクウォース女史は、ドイツの聖歌をイギリスに移した。フエバアの詞づかひは獨特の所があるらしい。世に福音唱歌といふものは、別に一つの流をなしてをる。その女流作者クロスビーは一人にして數千首の歌をとどめた。福音唱歌の英米二國を動かしたのは驚かれるが、調の高くないため、教會の禮拜に

〔日本〕戰國の頃、わが國へ渡來した南歐の天主教徒は、幾多の文書を殘したけれど、歌は主として詩篇を唱へてゐた。後の新教徒の間では、明治七年頃から讃美歌の集が數々あらはれた。筆者の目に觸れたものだけでも、同十八年までのが二十三種ほどあつた。早きは兵庫・横濱・長崎など開港地で發行したもの、ベリー、デビス、ブラオン、デフォレスト、ライトなどの古い宣教師、奥野昌綱・原胤昭などの先進が業に當つた。同十九年にはメソヂストのデビソン博士の「譜附基督教聖歌集」出で、同二十三年には譜附の「新撰讃美歌」が出た。聖歌集も時期を劃したものであらうが、「新撰讃美歌」こそ、我等の面を起す集であつた。詞は主として松山高吉・奥野昌綱・植村正久の三先輩が作り、譜はオルチンが心を籠めたものである。同三十三年の福音同盟會で、各派の讃美歌を主な歌だけでも同一にしたしとの案が出で、同三十四年には聖公會との共通の歌百二十五首を整へた。それを中心として同三十六年の末に出來たのが、現存せる「讃美歌」第一編である。主査として筆を執つたのは、湯谷磋一郎・三輪源造・別所梅之助の三人であり、曲譜その他一切の面倒を見たのは、故マクネヤ師である。同四十二年の末に發行した「讃美歌」第二編も、右のマクネヤ師の勞に成り、歌は主として三輪・別所の二人が詠じもし、譯しもした。昭和六年十二月、新たな讃美歌が發行された。昭和二年以後五ヶ年を費したもの、別所梅之助、エイチ・デー・ハナフォード、木岡英三郎、由木康の四人が主として編輯に當つた。歌の數も增し、詞はやさしくなり、譜にも新しいのが多く加はつた。

【參考】讃美歌小史　別所梅之助　日本之教會　日本之教會連盟

一一一七）○讃美歌第一・二編　〔別所〕

三筆（さんぴつ）　書道　【解說】平安朝の初期に於ける書道の三大家たる嵯峨天皇・空海（各別項）・橘逸勢をいふ。或は嵯峨天皇と空海とを二聖ともいふ。嵯峨天皇は王羲之の書風を慕つてこれを學び給ひ、空海が支那より將來した法帖などを召されたこともある。その宸筆は比叡山延曆寺所藏光定戒牒及び京都青蓮院所藏「哭澄上人」の宸翰などがある。これ等を拜見するに、空海と共通の點多く、晉唐諸大家の筆法を會得し給うたうちにも、獨特の御書風の著しきものがある。空海は多藝多能の人で、夙く朝野宿禰魚養に筆法を學んだと傳へられ、入唐以前既に立派な書家であつたが、在唐中、韓方明より書法を受け、また南北兩派の書道を研究して、篆・隷・楷・行・草のみならず、八分・飛白等の書法までも習得した。そして善く諸家の神髓を體得した上に、獨自の妙味を加へて、一新機軸を出してゐる。これを大師流といふ。その筆蹟の確實なるものとしては、東寺の風信帖、七祖賛、神護寺の灌頂歴名、仁和寺の三十帖策子、その他數種がある。橘逸勢は空海と共に入唐し、柳宗元から筆法を受け、隷書に巧みで、宮門の榜題多くその手に成ると傳へらるゝが、その眞蹟として確證のあるものは殆どないと言つて宜しい。御物の伊都内親王御願文は普通その筆蹟と稱せられるが、なほ仁和寺の三十帖策子の或る部分、神護寺の灌頂歴名の或る部分もさうらしいとの說がある。以上三筆、何れも古今の名筆で、その後世に及ぼせる影響大なるものがある。我が國固有の上代樣の書風もその萌芽をこの邊に求めることができる。殊に空海は、我が入木道に於て、文字書道史上の

王羲之に比せらるべき人である。　〔伊木〕

山風　號「白鯉館卯雲」を見よ。

杉風（さんぷう）　俳人　【姓名】杉山元雅。晩年一元と改めた。通稱、鯉屋市兵衞　【別號】採茶庵・茶舍・茶庵・蓑翁・衰翁・衰杖・存耕庵・五雲亭・鶴歩・芭蕉庵等。　【生歿】正保四年に生れ、享保十七年（一三九二）六月十三日歿。享年八十六。〔辭世〕やせ顏に團扇をかざし絶し息。　【法名】一元居士　【墓所】築地西本願寺中成勝寺　【家系】初代藤道有、攝津今津に住す。二代藤賢永、江戸に出で本小田川町に住し、魚問屋を營み、通稱鯉

杉風

庵の地主であつたからである。芭蕉とは未嘗に深い關係にあつた人で、芭蕉が實文十二年江戸へ下つた際、先づ杉風方へ落ち着いたといふ說もある程であるが、兎に角芭蕉出府の初めから弟子ともなり扶持者ともなつた人である。芭蕉から戯れに東三十三ケ國の俳諧奉行と言はれたといふが、支考の言もあるので恐らく事實かと思はれる。禪法を大龍寺の和尙に受け、茶道は宗甫公の流を汲んだ。家は富んでゐたが多病で聾であつた。芭蕉もそれ故、一生聾の句を作らなかつたと言はれてゐる。【作風・地位】初めは芭蕉と共に談林調で

歿後その生前の恩誼に感じて、深川の長慶寺に、「世にふるも更に宗祇のやどり哉」といふ芭蕉自筆の短册を埋め、發句塚を建ててこれを弔ひ、月々の忌日には懷舊の句を像前に手向けるなど追慕の情に餘念なく、何處までも芭蕉の遺風を守つた。芭蕉歿後支考と絶交したといはれるが、「草刈笛」（元祿十六年刊）に杉風から支考に送つた手紙があるので、これに

〔芭蕉七回忌追善〕一册（元祿十四年刊、俳諧七部集）　〔門十哲集〕○杉風句集　一册　平山指人編（天明五年刊、俳書大系元祿名家句選）。この外に、「杉風句集」の末尾に、採茶庵所持として擧げてゐるものがあるが、存否不明である。

【參考】芭蕉・杉風兩吟百韻　寬美　○俳則廣岡宗瑞　○杉風傳書○青根が峰俳諧問答抄森川許六○小夜話吉川五明○芭蕉翁頭陀物語建部涼袋○俳諧世說高桑闌更○俳家奇人談竹内玄々一○蕉門諸生全傳遠藤曰人○俳人百家撰綠亭川柳○俳諧人物便覽三浦若海○杉山杉風傳高木蒼梧（石楠昭和六ノ一附錄）　〔萩原・志田〕

王羲之に比せらるべき人である。〔伊木〕

山風（さんぷう）「白鯉館卯雲」を見よ。

杉風（さぎふう）　俳人　【姓名】杉山元雅。晩年一元と改めた。通稱、鯉屋市兵衞　【別號】採茶庵・茶舍・茶庵・蓑翁・蓑翁・蓑杖・存耕庵・五雲亭・鶴歩・芭蕉庵等。【生歿】正保四年に生れ、享保十七年（一三九二）六月十三日歿。享年八十六（〔辭世〕やせ顔に團扇をかざし絶し息。【法名】一元居士　【墓所】築地西本願寺中成滝寺　【家系】初代藤道有、攝津今津に住す。二代藤賢永、江戸に出で本小田川町に住し、魚問屋を營み、通稱鯉屋市兵衞といふ。俳號仙風。三代目が杉風である。四代鯉屋市兵衞は養子で隨夢といふ。五代も鯉屋市兵衞、六代五郎右衞門は養子で、煙草屋に變り磯屋といひ、通旅籠町に移る。七代・八代も共に同名。八代が鯉屋市兵衞に立ち戻つて、依然煙草屋渡世、九代が鯉屋伊兵衞といひ、俳號を杉露といふ。以下相續して今日に至り、現當主は十六代である。杉風の妻は法名を壽元といふ（高木蒼梧稿杉山杉風傳）。【閲歴】父の鯉屋市兵衞が幕府の御納屋（おなや）を勤めたので、杉風もこれを繼承した。深川に二つの庵を持ち、その一が採茶庵で、他の一に芭蕉を住まはせたが、これが芭蕉庵である。そこに鯉の籗（いけす）の崩れた古池があつた。杉風が一時芭蕉庵杉風と號したのは、

朝顔や
我が日くらす
花乃出来

鯉屋杉風（芭蕉堂蕉仙圖）

庵の地主であつたからである。芭蕉とは未嘗に深い關係にあつた人で、芭蕉が寶文十二年江戸へ下つた際、先づ杉風方へ落ち着いたといふ説もある程であるが、兎に角芭蕉出府の初めから弟子ともなり扶持者ともなつた人である。芭蕉から戯れに東三十三ケ國の俳諧奉行と言はれたといふが、支考の言もあるので恐らく事實かと思はれる。禪法を大龍寺の和尚に受け、茶道は宗甫公の流を汲んだ。家は富んでゐたが多病で聾であつた。芭蕉もそれ故、一生聾の句を作らなかつたと言はれてゐる。【作風・地位】初めは芭蕉と共に談林調であつたが、芭蕉の革新と共に蕉風に進んだ。その作風淺俗を免れぬ傾はあるが、蕉門屈指の作者ではある。一とせ芭蕉送別の句に、「何となく柴吹風も哀なり」といふ句を作つて、素堂から「たゞ思ふ事の深きならん」と稱された。許六の評判に、「器も鈍ならず、執心もかたの如く深し（中略）。師は不易流行を説て聞かせたまへども、杉風が耳には前後半ならでは入がたし、故に半分は流行して、半分は二十餘年動かず云々」と云つてゐるが、例の僻評であつて十分當つてゐるとは云へない。其角・嵐雪・桃隣と共に江戸の四大家と云はれ、東都俳壇の一勢力であつた。蕉門十哲（別項）にも數へられてゐる。その門に中川宗瑞を出し、その孫弟子平山梅人が採茶庵二世を嗣ぎ、垂井梅弟三世、太田萬里四世、鯉屋杉露五世、大沼杉舟六世、松井杉卿七世、重田石丈八世を承けて、今日にまで及んでゐる。【人物】己が長を説かず、人の短を言はぬやうな溫良篤實な人であつた。「杉風は蕉門の子貢なり」とも云はれてゐる。芭蕉の歿後その生前の恩誼に感じて、深川の長慶寺に、「世にふるも更に宗祇のやどり哉」といふ芭蕉自筆の短冊を埋め、發句塚を建ててこれを弔ひ、月々の忌日には懷舊の句を像前に手向けるなど追慕の情に餘念なく、何處までも芭蕉の遺風を守つた。芭蕉歿後支考と絶交したといはれるが、「草刈笛」（元祿十六年刊）に杉風から支考に送つた手紙があるので、これによつて否定する説もあるけれども、風之の「誹諧耳底記」に、「美濃のほどけを甚にくむ」とあるから、支考の變風を憎んだことは事實であらう。

杉風筆蹟（自畫賛）

【著作】常盤屋句合（其角の田舍句合の姉妹篇）一冊（延寶八年刊、俳諧文庫・俳書大系）〇角田川紀行一冊（元祿二年、俳文學大系紀行篇）〇冬かづら（芭蕉七回忌追善）一冊（元祿十四年刊、俳諧文庫・蕉門十哲集）〇杉風句集一冊平山梅人編（天明五年刊、俳書大系元祿名家句選）。この外に、「杉風句集」の末尾に、採茶庵所持として擧げてゐるものがあるが、存否不明である。

【參考】芭蕉・杉風兩吟百韻　寛美〇俳則廣岡宗瑞〇杉風傳書〇青根が峰誹諧問答抄森川許六〇小夜話吉川五明〇芭蕉翁頭陀物語建部涼袋〇誹諧世説高桑閑更〇俳家奇人談竹内玄々一〇蕉門諸生全傳遠藤曰人〇俳人百家撰綠亭川柳〇俳諧人物便覽三浦若海〇杉山杉風傳高木蒼梧（石楠昭和六ノ一附錄）　〔萩原・志田〕

三部假名鈔（さんぶかなせう）　佛書　七卷　【著者】向阿上人證賢　【成立】元亨年間　【刊行】向阿の滅後七十餘年、應永二十六年六月　【内容】「歸命本願鈔」三卷、「西要鈔」二卷、「父子相迎」二卷の三部を云ふ。淨土宗の思想を宣説する名著として尊重せられる。【價値】本書はその説相に特徴を有する。即ち物語もしくは創作風の形式をとつて佛教の思想を巧に表はした事である。「歸命本願鈔」は京都東山の眞如堂に通夜をする高僧と修行僧との對話に佛教の思想を叙べ、「西要鈔」は洛北釋迦堂に參籠して高德の僧と數人の男女との對話を中心とし、「父子相迎」は彌陀の慈悲を父に譬へ、衆生の思慕を子に譬へて、阿彌陀佛の恩愛を叙述し、何れもその形式に文學的技巧が加味されてゐる。且つ文章が極めて優雅高尚であつて通常の「假名法語」とは全く類を異にしてゐる。伴蒿蹊はこの書の文を評して曰く「凡諸宗の知識の假名法語といふものは眞名をよまぬ人のために示されし者にて、詞をかざらず、耳ちかきをむねとせしさまにみゆるを、此の抄はしからず、これは深きこゝろなもし、譯しもした。昭和六年十二月、新たな讃美歌が發行された。昭和二年以後五ケ年を費したもの、別所梅之助、エイチ・デー・ハナフォード、木岡英三郎、由木康の四人が主として編輯に當つた。歌の數も增し、詞はやさしくなり、譜にも新しいのが多く加はつた。

【參考】讃美歌小史　別所梅之助　日本文化史大系

と稱せられるが、なほ仁和寺の三十帖策子の或る部分、神護寺の灌頂歴名の或る部分もさうらしいとの説がある。以上三筆、何れも古今の名筆で、その後世に及ぼせる影響大なるものがある。我が國固有の上代樣の書風もその萌芽をこの邊に求めることができる。殊に

ギリスに移した。フェバアの詞づかひは獨特の所があるらしい。世に福音唱歌といふものは、別に一つの流をなしてをる。その女流作者クロスビーは一人にして數千首の歌をとどめた。福音唱歌の英米二國を動かしたのは驚かれるが、調の高くないため、教會の禮拜に

〔英米及び英語の讃美歌〕　イギリスでも初めは詩篇を歌へるやうに改譯して、禮拜に用ひてゐた。一五四九年のを舊譯といひ、その後紆餘曲折を經て、一六九六年にテート及びブラッデーの新譯が現はれた。アメリカなる植民地のは、ニューイングランド譯とて、據る所

ども有ける事にこそ、なまじひに眞名の文章ならばこれほどの感情はすゝめざらまし、およそやまと人のためはよきかなの文章ほど、その心をうごかすものはなしとおぼえ侍り」と云ひ、又「三部抄のうち經釋の意をやはらげとかれたるところ〴〵みな譯文の師たるべし。殊に父子相迎のうち般舟讃の偈を引て即譯せられたるところなど藍より出でて藍よりも青し」とも云つてゐる。佛教文學の逸品である。

【參考】三部假名鈔諺註 湛澄 ○歸命本願鈔要解同 ○西要鈔要解同 ○三部假名鈔言釋賀茂眞淵 ○歸命本願鈔可俚語 關通 ○歸命本願鈔講本 ○西要鈔要解的門 ○父子相迎要解同 ○鎌倉時代文學新論 野村八良 〔三井〕

三部教和語說（さんぶきやうわごせつ）「眞宗聖教和語說」を見よ。

三幅對紫曾我（さんぷくつゐむらさきそが） 草雙紙 黃表紙 三册 十五丁十九圖 【作者】戀川春町 【畫工】自畫 【名稱】三幅對とは、重忠・祐成・祐經の三人を主要人物とし、紫曾我とはそれ等を通人に見立てた江戸當世流行曾我の義であらう。【刊行】安永七年、鱗形屋板、再版寛政六年、蔦屋板 【諸本】黃表紙百種（續帝國文庫）・黃表紙集（近代日本文學大系）に本文のみを收載してゐる。【題材】曾我狂言を題材として當時巷說に上つてゐた或る大名の豪奢を諷したものと云はれてゐる。

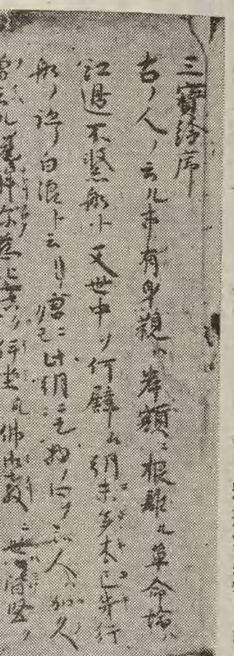
【梗概】〔上册〕（一）鎌倉の横山町煙草店鬼本屋の店前、主人禪師坊が鬼王と祐經館に入り込む手段を相談してゐる。曾我兄弟仇討のために便宜を計つての苦心。（二）畠山重忠邸門前。富本の太夫鬼本似付太夫に身を窶した鬼王が、團三郎を相撲に拵へて重忠邸に來た。（三）團三郎はしやがむがたけ首右衞門と名乘り重忠に目見えする。重忠は相撲好である。（四）鬼王また禪師坊を富本久善太夫に拵へて重忠に目見えさせる。重忠は又大の音曲好きであつた。（五）鬼王、艾屋に身を窶してゐる時致に、富本宗太夫と名乘つて重忠邸の大酒宴に參會し、敵祐經を覘へと勸める。（六）生藥屋に身を窶してゐる祐成、大磯の虎から重忠邸大酒宴の折の衣裳を無心される。〔中册〕（七）祐成大松屋に衣裳を誂へる。（八）大松屋、虎の部屋に衣裳を持込む。（九）大松屋、衣裳代を祐成に催促して埒あかず、地廻りに賴んで祐成を打擲する。虎、留めに入る。編笠の浪人來かゝつて、衣裳代を渡して難を救ふ。（十）重忠、大磯の遊興。虎を相方にして座敷のみで歸らうとする。虎合點せず大悶着となる。編笠の浪人、仲裁に入る。（十一）祐經一膚別當になり、重忠邸に禮廻りにと急ぐ。（十二）祐經、重忠の挨拶。〔下册〕（十三）山中。重忠、大酒宴に集つた諸大名を駕籠又は番袋に入れて何處へか舁いで行かせる。（十四）山中の茅屋、大小僧と幽靈が諸大名を接待する。皆々の驚き。大小僧は首右衞門、幽靈は遊女少將、皆重忠・祐經の酒宴の趣向であつた。（十五）重忠邸。豐後節の餘興。重忠、宗太夫の不參を怒る。鬼王の陳謝、祐經の執成し。（十六）時致、艾切の庖丁を研ぎさして寢る。夢に鬼王の難儀を見て目を覺す。（十七）時致、四つ手に乘つて重忠邸へ急ぐ。（十八）重忠邸內。斬り込まうとする時致を編笠の浪人が引きとめる。「今祐經を打たせては兄十郎は誰を敵、そして今年の新板に、大事の工藤を討たせては來年からの草雙紙の曾我の趣向の根だやしだ。そこで今夜の敵討はさつぱり思ひ切艾」などといふ。時致、承知する。（十九）しめ飾りの舞臺。編笠を脫いだ作者が「紫曾我」その他の黃表紙弘めの口上をいふ。

【構想】重忠邸が赤澤山麓にあるので、鎌倉の人々が赤澤門の先生といつたとあるのは、その大名邸が赤坂御門附近にあることを示し、曾我兄弟一味の者が相撲取となり、富本の太夫となつて入り込むとあるのは、その大名がそれ等を贔屓にしてゐることを示すのであらう。富本久善太夫は豐前太夫、似付太夫は齋宮太夫、宗太夫は粂太夫に擬し、しやがむがたけ首右衞門は、釋迦嶽雲右衞門に擬してゐる。皆當時著名の人であつた。【史的地位】曾我狂言は江戸演劇の代表とも見られるほど、民衆の好尙に投じてゐた事とて、草雙紙に於ては、初期以來しば〳〵題材となつてゐる。多くの場合、ただその筋を傳へてゐるだけであつたが、黃表紙時代になると、漸くそれをもぢり、茶かして珍奇な趣向を立てるものが多くなつた。この作は、前年、安永六年板、喜三二作「珍獻立曾我」と共にそれ等の先蹤をなすものである。尤もこの作の題名は、安永四年、淸經畫の「若綠色曾我」に、趣向は「珍獻立曾我」に負ふところがある。類作中著名なものを拾へば、安永九年、喜三二作「大通間違曾我」、同年、全交作「時花兮鶉茶曾我」、天明二年、喜三二作「染直蔦色曾我」、同三年、春町作「惡拔正直曾我」、寛政五年、京傳作「皐下旬蟲干曾我」、同年、全交作「年寄之冷水曾我」などがある。それ等の題名に、「紫曾我」の紫の系統を追ふもののあることが注意せられる。又「紫曾我」の中に、作者が作中の人物、編笠姿の浪人となつて筋を運び、後に作者自身となつて口上を演べてゐるが、この作中に作者の出沒する趣向は、後年の黃表紙としては最も多く見受けられるもので、隨分黃表紙の一特相とも考へられる。この作はその趣向の早いものとして注意されねばならない。所謂黃表紙名作二十三部の一である。 〔山口〕

散文（さんぶん）「文學の分類」を見よ。

朱欒（ザムボア） 雜誌 【刊行】明治四十四年十一月より大正二年六月まで、東雲堂刊 【主宰】北原白秋 【解說】白秋の處女歌集「桐の花」（別項）、第三詩集「東京景物詩」の主要篇を成した時代の刊行で、執筆者には、上田敏・蒲原有明・永井荷風・內田魯庵・與謝野晶子・昇曙夢等を初め、パンの會の石井柏亭・高村光太郎・木下杢太郎・長田秀雄・吉井勇等があつた。白樺派（別項）の萱野二十一・里見弴・志賀直哉、「アララギ」（別項）の齋藤茂吉等を對社會的に誘引したのも、この「朱欒」であつた。なほ新進としての詩人室生犀星・萩原朔太郎等を紹介し、劇小說に於て、三上白夜（於菟吉）・國枝完二等を世に送つた。藝術の香氣と時代の淸新相とに滿ち、雜誌「屋上庭園」（別項）以後の異國情緒を承けた高級の純藝術雜誌であつた。なほ第二期「ザムボア」は白秋顧問、その直系河野愼吾・村野次郎編輯の短歌雜誌で、大正七年一月より同年九月までつづいた。 〔北原〕

三寶繪詞（さんぼうゑことば） 佛教說話集 三卷 【著者】源爲憲 【名稱】三寶は佛と法と僧とである。【成立・由來】總序の終りに永觀二年仲冬と明記してあるので、著作年代が知られる。本書の撰まれた因緣は、濁世を厭つて成佛を希求する事を勸めるに在ることが總序に由つて知られる。【諸本】この書の現存する物は、東寺觀智院本であつて、その影寫が東京帝國大學史料編纂所に藏せられる。原本の下卷にある識語は、「文永十年八月八日 末刻書寫了 戶部二千石三善（次に名らしい字と花押がある）」とある。三卷のうち、上一卷だけは殊に宣命書きの書式が鮮かで、頗る古色を帶びてゐるが、中と下との二卷は、小字を普通の文のやうに書き交ぜたのが多く、一體に上卷よりは後の物のやうである。凡て片假名が用ひてあつて、その字體はキとかテとかマとか皆古い體である。大體一面八行もしくは九行に書いてあつて、墨附は上四十七枚、本生說話を擧げてゐる。（一）檀波羅蜜を行つた昔の尸毗王は今の釋迦である。（出典—六度集經・智度論等）（二）持戒波羅蜜を行つた昔の須陀摩王は今の釋迦である。（出典—智度論）（三）忍辱波羅蜜を行つた昔の忍辱仙人は今の釋迦である。（出典—大論）（四）精進波羅蜜を行つた次の如きものがある。（七）昔の流水は今の釋迦である。（出典—菩勝王經）（八）昔の國王は今の彌勒である。（出典—報恩經）（九）昔の鹿王は今の釋迦である。（出典—六度集經）（一〇）昔の雪山童子は今の釋迦である。（出典—涅槃經）（一一）昔の薩埵王子は今の釋迦である。（出典—最勝王經）（一二）昔の須檀那太子は今の釋迦である。（出典—太子須檀那經・六度集經）（一三）昔の施無は今の佛である（出典を明示しない）。中卷は「中ごろ法のまゝにひろまる事」、即ち聖德太子・役行者・行基菩薩・肥後國ましら尼・伴造義通・番藝國漁翁・義慶法中・越前國小尊



東寺觀智

（三月）孟賣傳法會・藥師寺最勝會・高雄法華會・法華寺花嚴會・比叡坂本勸學會・藥師寺萬燈會
（四月）比叡舍利會・大安寺大般若會・灌佛・比叡受戒
（五月）長谷菩薩戒・施米
（六月）東大寺千花會
（七月）文殊會・盂蘭盆
（八月）比叡不斷念佛・八幡放生會
（九月）比叡灌頂
（十月）山階寺維摩會
（十一月）熊野八講會・比叡霜月會
（十二月）佛名

して當時巷説に上つてゐた或る大名の豪奢を諷したものと云はれてゐる。

【梗概】〔上册〕(一)鎌倉の横山町煙草店鬼本屋の店前、主人禪師坊が鬼王と祐經館に入り込む手段を相談してゐる。曾我兄弟仇討のために便宜を計つての若心。(二)畠山重忠邸門前、主人禪師坊が鬼王と祐經館に入り込む手段を相談してゐる。曾我兄弟仇討のために便宜を計つての若心。(三)時致、四つ手に乘つて重忠邸へ急ぐ。(十八)重忠邸内。斬り込まうとする時致を編笠の浪人が引きとめる。「今祐經を打たせては兄十郎は誰を敵、そして今年の新板に、大事の工藤を討たせて

下卷にある識語は、「文永十年八月八日禪師末別書寫了　日部二千石三貫文に名らしい字と花押がある」とある。三卷のうち、上一卷だけは殊に宣命書きの書式が鮮かで、頗る古色を帶びてゐるが、中と下との二卷は、小字を普通の文のやうに書き交ぜたのが多く、一體に上卷よりは後の物のやうである。凡て片假名が用ひてあつて、その字體はキとかテとかマとか皆古い體である。大體一面八行もしくは九行に書いてあつて、墨附は上四十七枚、中六十二枚、下七十五枚である。今日のところでは、他に善本の出ない限り、この鎌倉時代書寫の原本が貴重なものである。大日本佛教全書の傳記叢書に收めてあるものは、原本の片假名を總て平假名に書き直し、且つ誤讀に基づく誤寫が多い。文章は大體國文體であるが、所々に漢文の格を混じ（例、「入二寶山一空二手を一還が如し」）、行文は形式美を備へ、趣致に富んでゐる。

【内容】初めに總序があり、各卷にも小序がある。これは恰も「靈異記」（別項）に似てゐる。また中・下卷の終りには、贊の詞が添へてある。佛寶・法寶・僧寶の三卷を以て組織したに就いては、總序に「總て佛法僧を顯せば、初も善く、中も善く、後も善し。在とし在らむ所には、當に三寶伊坐して、可二守給一し」と言つてゐる。上卷は「昔の佛の行ひ給へる事」、即ち昔の大施太子は今の釋迦である。（出典―六度集經・報恩經等）（五）禪定波羅蜜を行つた昔の正闇梨仙人は今の釋迦である。（出典―智度論）（六）般若波羅蜜を行つた昔の拘賓大臣は今の釋迦である。（出典―大論）

以上は六波羅蜜（六度）のことであるが、なほ本生說話を擧げてゐる。（一）檀波羅蜜を行つた昔の尸毗王は今の釋迦である。（出典―六度集經・智度論等）（二）持戒波羅蜜を行つた昔の須陀摩王は今の釋迦である。（出典―智度論）（三）忍辱波羅蜜を行つた昔の忍辱仙人は今の釋迦である。（出典―大論）（四）精進波羅蜜を行つた昔の施無は今の佛である。（出典を明示しない）。中卷は「中ごろ法のまゝにひろまる事」、即ち聖德太子・役行者・行基菩薩・肥後國ましら尼・伴造義通・播磨國漁翁・義覺法印・越前國小野麿・山城國圍碁沙彌・山城國造二經函一人・高橋東人・大和國女人・景染部臣鯛女・檜磐島・諸樂京僧・吉野山僧・美作國採鐵山人・大安寺榮好の十八人の僧俗の事歷を列擧してゐる。出典は殆ど全く「靈異記」であると明示してゐる。中で該書外にも亙つてゐるのは、聖德太子の事に、「日本紀」「平氏撰聖德太子上宮記」を示し、役行者の事に、「續日本紀」「居士小卿仲廣が撰日本國の名僧傳」を示してゐる類である。而して終りの榮好の事だけは「靈異記」で無く、「石淵寺緣起」を擧げてゐる。又この中卷の末に、「或本云」として、「妙達和尚の入定してよみがへりたる記云」と云つて、妙達の地獄巡りの話が附載してある。經典書寫の功德談が多いが、墮獄の惡報談も交つてゐる。下卷は、「ひとへに佛と法とをたつとうして、僧と尼とをかろむるなかれ」と云つて、僧の尊い所以を顯彰するのを主とし、月次行はれる所の各種の法會の來歷を叙述したのである。今その題目を示すと、次のやうである。

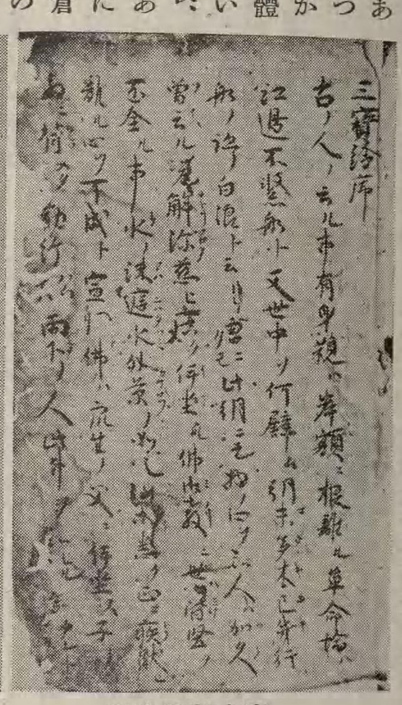
（正月）修正月・御齋會・比叡饑法・溫室・布薩
（二月）修二月・西院阿難悔過・山階寺涅槃會・石塔
（三月）[illegible]
（四月）比叡舍利會・大安寺大般若會・藤原・比叡安
祝
（五月）長谷菩薩祝・施米
（六月）東大寺千花會
（七月）文殊會・盂蘭盆
（八月）比叡不斷念佛・八幡放生會
（九月）比叡灌頂
（十月）山階寺維摩會
（十一月）熊野八講會・比叡霜月會
（十二月）佛名

これ等の中には、勿論幾多の佛教傳說を包含してゐる。藥師寺萬燈會の條に、貧女の一燈の說話があり、八幡放生會の條に、放生してやつた龜が、報恩として洪水を豫言した說話があるといふ次第である。

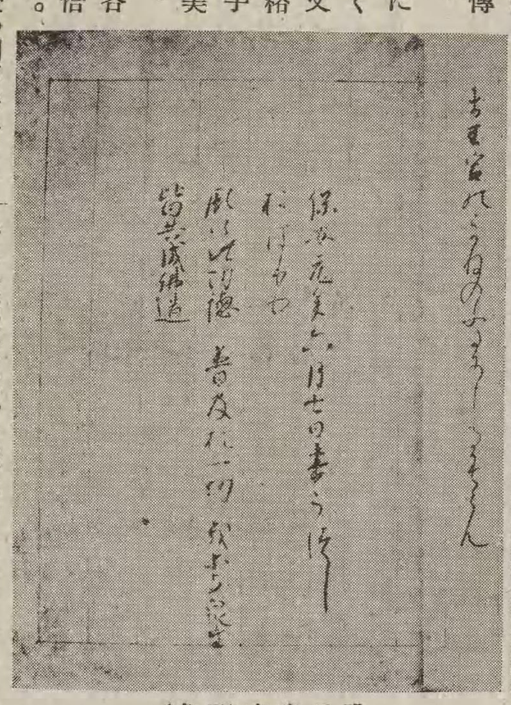
【史的地位】本書はこれを佛教說話集として見る時、上「靈異記」を承け、下「今昔物語」の如きを起した中間の物として、洵に意義が深いのである。特に「今昔物語」の研究上、その說話の源泉を探るためには、これを逸してはならない。【價値】三寶歸依の信念に基いて書かれたこの繪詞は、佛教が漸く國民上下の思想を支配し、且つ種々な法會が、公然各所に營まれるに至つた平安時代の反映として出來たと見てよい。故に平安朝の世態人情を察する上には、好箇の資料とせられるばかりでなく、文詞が文學的價値を有し、實質は說話集としても目せられる。〔野村〕

散木弃歌集（さんぼくきかしふ）

【作者】源俊頼【名稱】略して「散木集」ともいひ、弃は棄又は奇に作る。散木は無用の材の意で俊頼が木工頭であつたので謙遜しての命名であらう。弃歌も謙遜であらうから奇に作るのは誤



東寺觀智院本



關戸家本（奥書）

六）時致、艾切の庖丁を研ぎさして寢る。夢に鬼王の難儀を見て目を覺す。（十七）時致、四つ手に乘つて重忠邸へ急ぐ。（十八）重忠邸内。斬り込まうとする時致を編笠の浪人が引きとめる。「今祐經を打たせては兄十郎は誰を敵、そして今年の新板に、大事の工藤を討たせて

天明二年、喜三二作「染直鳶色曾我」、同三年、春町作「惡拔正直曾我」、寛政五年、京傳作「鼠下旬蟲干曾我」、同年、全交作「年寄之冷水曾我」などがある。それ等の題名に、「紫曾我」の系統を追ふものあることが注意せられる。又「紫曾我」の中に、作者が作中の人物、

次の如きものがある。（七）昔の須水は今の釋迦である。（出典―法華王經）（八）昔の國王は今の彌勒である。（出典―報恩經）（九）昔の鹿王は今の釋迦である。（出典―六度集經）（一〇）昔の雪山童子は今の釋迦である。（出典―涅槃經）（一一）昔の薩埵王子は今の釋迦である。（出典―最勝王經）（一二）昔の須檀那太子は今の釋迦である。（出典―太子須檀那經・六度集經）（一三）昔の施無は今の佛である。（出典を明示しない）。中卷は「中ごろ法のまゝにひろまる事」、即ち聖德太子・役行者・行基菩薩・肥後國ましら尼・伴造義通・播磨國漁翁・義覺法印・越前國小野麿・山城國圍碁沙彌・山城國造二經函一人・高橋東人・大和國女人・景染部臣鯛女・檜磐島・諸樂京僧・吉野山僧・美作國採鐵山人・大安寺榮好の十八人の僧俗の事歷を列擧してゐる。出典は殆ど全く「靈異記」であると明示してゐる。中で該書外にも亙つてゐるのは、聖德太子の事に、「日本紀」「平氏撰聖德太子上宮記」を示し、役行者の事に、「續日本紀」「居士小卿仲廣が撰日本國の名僧傳」を示してゐる類である。而して終りの榮好の事だけは「靈異記」で無く、「石淵寺緣起」を擧げてゐる。又この中卷の末に、「或本云」として、「妙達和尚の入定してよみがへりたる記云」と云つて、妙達の地獄巡りの話が附載してある。經典書寫の功德談が多いが、墮獄の惡報談も交つてゐる。下卷は、「ひとへに佛と法とをたつとうして、僧と尼とをかろむるなかれ」と云つて、僧の尊い所以を顯彰するのを主とし、月次行はれる所の各種の法會の來歷を叙述したのである。今その題目を示すと、次のやうである。

【著者】源爲憲【名稱】三寶は佛と法と僧とである。【成立・由來】總序の終りに永觀二年仲冬と明記してあるので、著作年代が知られる。本書の撰まれた因緣は、濁世を厭つて成佛を希求する事を勸めるに在ることが總序に由つて知られる。【諸本】この書の現存する物は、東寺觀智院本、[illegible]

である。【成立】未詳【傳本】(イ)群書類從二五四所載本。(ロ)圖書寮所藏本(十卷二冊、寫)は、類從本に殆ど等しく、奥に仁平四年彼の家の自筆本を以て書寫した旨、寶治元年顯昭自筆の片假名本を以て書寫した旨、及び寛文十年書寫した旨が記されてゐる。(ハ)內閣文庫所藏本(十卷三冊、寫)は大野廣城の校本であるが、契沖本、濱臣本、類從本等を參酌したもの、契沖は元祿六年古寫本を得て對校した旨が記されてゐる。(ニ)村上忠順の標註本(八卷三冊)は狩谷望之本、類從本、野口道直本等を參酌したが、契沖本は參酌しなかつたものにて、終りの二卷を缺いてゐる。(ホ)內閣文庫所藏の昌平坂學問所舊藏本(二冊)も終りの二卷を缺いてをり、契沖本によつて終りの二卷を補つたものも見受けられる。(ヘ)その他小澤蘆庵の識語のある本、閑宮永好の校本、入江昌喜の校本等がある。(ト)別に圖書寮所藏の「田上集」一卷は、本集から作者が田上の閑居に於て詠んだと思はれるもの(後重の和したものも)七十九首を書き拔き、最後に經信が田上にて詠んだもの一首を添へてゐる。

【內容】部類を春、夏、秋、冬、祝・別離・羇旅、悲歎・神祇・釋敎、戀上、戀下、雜上、雜下の十に分つて十卷とし、四季は十二月に細分して九月の初に前武衞の泉亭に月を見て詠んだ歌、それに添へた戀の歌、幷に小序を置いてゐる。雜上は雜歌にて終りに「恨躬恥運雜歌百首」をおき、雜下は雜體にて長歌(三首)・旋頭歌・混本歌・折句歌・沓冠折句歌・隱題・連歌の七項に分れてゐる。詞書は一人稱で書かれ、六箇所に亙つて左註がある。歌の總數は凡そ千六百二十三首で家集としては大きい。卷として無歌のあるものは、卷六の遊宴・離別である

り、卷に拘らず興味のあるものは生活境遇を詠んだもので、雜上に大部分は收められてゐるが、各卷にも散在してをり、その中から「田上集」が成立するわけになる。悲歎部は、經信が太宰府に薨じた事に始まり、涙の中に後のわざをした事、博多で唐人から弔問を受けた事、下の關・門司を經て內海の沿岸を航し、明石・須磨を經て、曾て經信が淡路の繪島に遊んだ事を忍び出した事、かしま江口にて遊女の舟に取りまかれたが、悲しみの折柄とて少しも心が慰まなかつた事、山崎で經信の形身の琶琶笛を見て涙を新しくした事、淀にて舟を捨てて車にのり、三條の舊居に歸つて仁和寺のほとりに骨を埋めた事等の次第を記し歌を揭げてゐる。釋敎部は、十二光佛、「觀無量壽經」の十六想觀、「雙觀經」の四十八願、龍樹十二禮文、往生論偈、「往生要集」の十樂等を詠んだものがその大部分を占め、淨土を彌陀の御國、又はその國かの國といつて彌陀の慈悲を信仰し、極樂の莊嚴を想像した信仰的な氣持を詠んでゐる。又とかく念佛の怠り勝になる心を詠んだものもあり、淨土敎の信仰をかなり深くもつてゐたと想像される。彼が、「往生要集」を人に借りて書寫してゐる事、歌もよみぢを助けると考へた事も注意される。田上の家に住んだ頃の生活狀態をも髣髴させるものがある。時には石山の鐘も聞き、徒然の折は俊重を伴つて山にも登つた。又經信の住まつてゐた時のことを偲んだり、京からくる人をなつかしがつた。彼は田園生活の中に寂寥を見出したのである。次に彼の用語及び題材はかなり露骨であり、當時の生活狀態を具體的に示すものがある。例へば、「惡阿せしふた子の前のはいと眼よに生み過ぎて捨てんとぞ思ふ」などの歌があり、かはほり・いなごまろ・蟹・螭・蛤・蛭等の動物も詠まれてをり、又生活感情の率直に現れた作が多い。なほ特殊な形容詞や漢語熟語、故事が詠み込まれてゐることも特色である。なほ又天王寺の西門にて、法師が船に乘つて西に向つて漕ぎ離れて行く繪、川尻にて受領の舟に遊女の舟が漕ぎよせてゐる繪、九州にて箱崎・香椎の兩神主の訴訟に對して、「箱崎の松はまことの緣にて香椎の方も罪はきこえず」と詠んで双方を和げたこと等は特に注意される。(俊頼參照)

【參考】散木集注顯昭(群書類從二九〇/〇散木弃歌集標注村上忠順〇群書一覽　〔西下〕

三木三鳥(さんぼく さんでう)「歌道傳授」を見よ。

三本柱(さんぼん のはしら)　能狂言【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へられる。【名稱】今「さんぼんはしら」と呼ぶ者があるが、古書には「三本の柱」とある。【格式】本神文濟相傳の部(大藏流)【解說】大果報の者が太郎・二郎・三郎の三人の冠者を呼び出し金藏の柱にする木を三本切らせて置いたから、三人して二本づつ取つて來いと命ずる。三人は安受合して出掛け、木を一本づつ持ち歸り、途中で休むうちに主の命を思ひ出し困つてしまふ。いろ〳〵案じた末、柱の端を二本づつ持つことにきめ、これは主が我々の智慧を見ようとて、わざと仰せられたものに相違ないといふので、囃子物に歌つて歸り主を喜ばすといふ筋。寛正の紀河原勸進能の時にも演ぜられたもので、記錄には「三本柱」(三本狂に作るのは誤り)と見えてゐる。五番脇狂言の一つで祝言物である。〔鏡田〕

三昧派(さんまいは)　俳句流派【解說】俳誌「三昧」に據ゐる俳句(俳諧)の一派の名であつて、河東碧梧桐(別項)を盟主とするものである。この派の特徵とも見らるゝ句風は七七七調である。「つゝじは寺へ蘭田の草とり人手は足りぬ」(碧梧桐)、「沼まで犬がトロの行衞の枯萱がくれ」(同)——併しかやうな定型を守るのではなく、新傾向派に共通する自由律に據ることを一般とはする。又「三昧」の句風そのものも推移してゐる。昭和三四年頃より句中の漢字に振假名を附することが、この派の流行になり、その手法の應用は漸次極端になり、遂には左の如きものにすらなつた。

湖面小波つ暖々晝休風、五六人女工の薄笑話

武藏西風ナ頰吹らく麥穗つ藥師森

文字と言語と全く分裂したるまゝを目と耳とから綜合的に味解せしめようとする不思議な表現である。同派の人は、これを敢て「俳句」と稱せずとも、一の「詩」の新體として主張する。「三昧」なる俳句雜誌の出發は、大正十四年三月にあるので、未だ七八年に過ぎないけれども、新傾向運動の歷史は既に二十五年に近く、碧梧桐は運動當初のリーダーであつたが、その後一派の分裂に次ぐに分裂を以てした。抑も明治四十一年、俳壇に新傾向運動の起つた時、その機關は雜誌「日本及日本人」中に於ける「日本俳句」欄であつたが、漸く獨立した新傾向俳句雜誌の必要を感じて、四十四年四月、「層雲」(別項)の刊行となり、河東碧梧桐・大須賀乙字・荻原井泉水・安齊櫻磈子等がその同人であつた(當時、中塚一碧樓は少しく考を異にして、その師碧梧桐ともやゝ合はぬものがあつた)。間もなく、乙字は新傾向運動の急進に疑念を懷いて同人から離れた。また井泉水は碧梧桐と主として系統の問題に就

いて意見を異にし、「層雲」をしてその信ずるまゝに進ませしめたので、碧梧桐を中心とする人々は凡て「層雲」から離れた。こゝに碧梧桐を主盟とする機關誌の必要が生じた。その時一碧樓はその藝術的主張から見れば聊か妥協的にも觀ぜられたが、還り來つてその人々と合致し、こゝに發行所を碧梧桐宅(海紅堂)に置き、大正四年三月、發行人を一碧樓とする俳句雜誌「海紅」(海紅派參照)が產れた。然るに一碧樓は、再び碧梧桐と異見の相異を來し、「海紅」を抱いて海紅堂から去つた。因つて碧梧桐は已の主張を守るべく、個人雜誌「碧」を刊行した。それは彼の外遊後の大正十二年二

實資外・奴牛道・藤牛道・チャリ藏等の語がある。【名義】看板から番附面の稱呼を經て特殊な役所(やくどころ)をさす(二枚目參照)。【解說】滑稽な役及びそれを演ずる役者をいふので、三枚目とは元祿以後にいひ出された。例へば、「忠臣藏」では、伴內の役は三枚目の役、そして伴內をやる役者を單に三枚目ともいふ。半道化、略して半道とは他の役所にゐる人が、道化を買つて出るやうな場合、或は道化に幾分腹の入る役と見るのが穩當である。道化は「新薄雪物語」の澁川東馬のやうな、チャリの役であるが、半道化といふと、「油屋」の「ちよいとせの善六」のやうな役である。〔三宅〕

五年六四十九歲)、養家が破產したので祖母を辭し、京都へと志して大阪まで行つた。これより先、歌を香川景樹(別項)に學び、歌人として名があつた。而して大阪には同門の木下幸文(蓼屋と號す)が、門戶を開いて歌文を敎へてゐたが、文政四年に病歿したので、師を失つた門生等は、强ひて請うて彼を大阪に留まらせた。卽ち彼は塾を難波小橋納屋町に開き、後、大川町字浮世小路(北濱五丁目)に移り、歌文の敎授をする傍ら國語を研究した。晚年眼を病んで失明し、遂にその邸で歿した。(因にその子熊彥も景樹の門に入り、萱園と號し歌を嗜んでゐた)。【業績・著書】歌は初め梨本

る。この方面の著書では「靈の宮」八卷(天保七年十月成。言靈の說に依つて發音の發生、父母・母音・清濁・延約・音便・冠辭・助辭・縫目(手爾乎波)・結目(結辭)等を說いてゐる)、「國語本義」十卷(弘化以前に成る。語源を解いたもの)、「國字定源」二卷(弘化元年成。歷史的假名遣を排斥して、聲音の輕重、平仄に依る一種の假名遣を說いてゐる)、「縫結大概」一卷(嘉永元年成、手爾波の呼應を言靈說によつて述べたもの)、この他「言靈古言考」三卷(弘化二年成。寫。記紀の語二百八十語を解いたもの)、「記紀縫結抄」四卷(寫、記紀の歌謠の手爾波と結辭を類別して集めたもの)、「記紀名物考」六卷(記紀の名詞を解いたもの)、「萬葉詞林抄」五卷(弘化三年

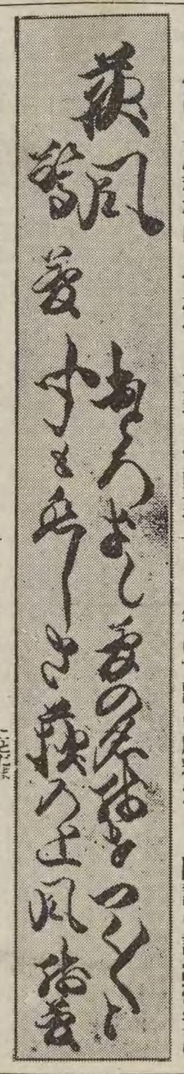
いて意見を異にし、「層雲」をしてその俳ずるまゝに遊ましめたので、碧梧桐を中心とする人々は凡て「層雲」から離れた。こゝに碧梧桐を主盟とする機關誌の必要が生じた。その時一碧樓はその藝術的主張から見れば聊か妥協的にも觀ぜられたが、還り來つてその人々と合致し、こゝに發行所を碧梧桐宅（海紅堂）に置き、大正四年三月、發行人を一碧樓とする俳句雜誌「海紅」（海紅派參照）が產れた。然るに一碧樓は、再び碧梧桐と異見の相異を來し、「海紅」を抱いて海紅堂から去つた。因つて碧梧桐は已の主張を守るべく、個人雜誌「碧」を刊行した。それは彼の外遊後の大正十二年二月である。當時、俳三昧と稱して、碧梧桐を圍んで連宵句作研磨する會合があり、その句稿を發表して「東京俳三昧」と稱した名を取つて、同人雜誌「三昧」の刊行となつた（大正十四年三月）。「碧」は同年二月に廢刊した。「三昧」は「碧」の後身である。こゝに於て、新傾向派なるものは「層雲」（井泉水）、「海紅」（一碧樓）、「三昧」（碧梧桐）の鼎立となつた。所謂「三昧派」とは、かく分裂した後の碧梧桐一門の人々を指して言ふので、その主なる人は、風間直得・井出台水・中村烏堂・梅野米城・松宮寒骨・染川藍泉・木下笑風・國又蕞爾・關口比呂志等である。然るに昭和七年に至り、「三昧」の支配人格たる風間直得も亦、碧梧桐と意見を異にして獨立を宣言した。かくて數の上より觀れば、「三昧派」なるものは、甚だ振はざる存在となつてしまつた。

【參考】新興俳句への道 河東碧梧桐〇現代俳句集（現代日本文學全集第三十八卷）〔荻原〕

三枚目（さんまいめ） 演劇 【異稱】道化（どうけ）・半道。上方ではチヤリといふ。これから派生して、實演外・奴半道・敵半道・チヤリ敵等の語がある。【名義】看板から番附面の稱呼を經て特殊な役所（やくどころ）をさす（二枚目參照）。【解說】滑稽な役及びそれを演ずる役者をいふので、三枚目とは元祿以後にいひ出された。例へば、「忠臣藏」では、伴內の役は三枚目の役、そして伴內をやる役者を單に三枚目ともいふ。半道化、略して半道とは他の役所にゐる人が、道化を買つて出るやうな場合、或は道化に幾分腹の入る役と見るのが穩當である。道化は「新薄雪物語」の澁川東馬のやうな、チヤリの役であるが、半道化といふと、「油屋」の「ちよいとせの善六」のやうな役である。〔三宅〕

三藐院流（さんみやくんりう） 「近衞流」を見よ。

殘夢（ざんむ） 國語學者 【姓名】本姓平松。後高橋氏を繼ぐ。名は初め正徵。後正澄と改む。晚年剃髮して殘夢と稱す。通稱元右衞門。【號】清園（すがの）、又は有所遊居。【生歿】安永四年（三年とも）京都に生れ、嘉永四年（二五一一）二月二十七日大阪で病歿す。享年七十七（七十八とも云ふ）。【法名】清譽正澄泉齋居士 【墓所】大阪市天滿寺町專念寺 【閱歷】實父平松正春は、備中上房郡松山の富豪で、京都の室町頭柳原南町金龍水に住んでゐた。殘夢はこの京都の邸で生れた。天明年間京都に大火があつて、その邸は類燒したので、彼は父と共に天明八年に故鄕松山へ歸つた（十四歲）。次いで同國小田郡笠岡の高橋美啓の養子となり、高橋氏を稱した。笠岡は天領で、美啓はその宿老であつた。彼は後養父の職を繼いだが、文政五年（四十六歲）、養家が破產したので宿老を辭し、京都へと志して大阪まで行つた。これより先、歌を香川景樹（別項）に學び、歌人として名があつた。而して大阪には同門の木下幸文（蓼屋と號す）が、門戶を開いて歌文を敎へてゐたが、文政四年に病歿したので、師を失つた門生等は、强ひて請うて彼を大阪に留まらせた。即ち彼は塾を難波小橋納屋町に開き、後、大川町字浮世小路（北濱五丁目）に移り、歌文の敎授をする傍ら國語を研究した。晚年眼を病んで失明し、遂にその邸で歿した。（因にその子熊彥も景樹の門に入り、萱園と號し歌を嗜んでゐた）。【業績・著書】 歌は初め梨本三位祐爲に敎を請うたが、後、香川景樹の門に入つて、備中にゐる頃から歌人として一家を成してゐた。家集には「塵室草露」（一卷、寫）「清園詞草」（三卷、寫）「清園後草」（二卷、寫）「殘の夢」（三卷、續日本歌學全書第十編所收）「心月詞花帖（一卷、寫）等があり、詠史歌集としては、「やまとにしき」（一卷、寫）「からにしき」（一卷、寫）「花園春里家集抄」（一卷、寫）があり、歌學に關するものでは、「和歌六體考」（一卷、寫）がある。彼は古歌の解釋から、國語の語源研究に進んだ。而して言靈（ことだま）の存在を主張し、これに依つて語源を解かうとするものである。言靈と云ふ語は、早く「萬葉集」にも見えてゐるが、特に言靈に依つて語源を說かうとする學派、即ち所謂言靈派は、彼が大成したものである。國語の聲音は天地の聲音で、その一音一聲に悉く靈があると言ひ、一音に一義を認めてゐる。この方面の著書では「靈の緒」八卷（天保七年十月成。言靈の說に依つて聲音の發生・父聲・母音・清濁・延約・音便・冠辭・助辭・縫目（手爾乎波）・結目（結辭）等を說いてゐる）、「國語本義」十卷（弘化以前に成る。語源を解いたもの）、「國字定源」二卷（弘化元年成。歷史的假名遣を排斥して、聲音の輕重、平仄に依る一種の假名遣を說いてゐる）、「縫結大槪」一卷（嘉永元年成、手爾波の呼應を言靈說によつて述べたもの）、この他「言靈古言考」三卷（弘化二年成。寫。記紀の語二百八十語を解いたもの）、「記紀縫結抄（ぬひむすび）」四卷（寫、記紀の歌謠の手爾波と結辭を類別して集めたもの）、「記紀名物考」六卷（記紀の名詞を解いたもの）、「萬葉詞林抄」五卷（弘化三年成。萬葉の詞を五十音順に列べて解釋したもの）、「萬葉縫結抄（ぬひむすび）」六卷（寫、萬葉集の手爾波と結辭の用法を說いたもので、卷頭に「縫目定格」を記してゐる）、「石上枕辭例（いそのかみまくらことばれい）」五卷（寫、記紀萬葉の枕詞を解いたもの）、「三代枕辭例」三卷（寫、弘化元年成。古今・後撰・拾遺の三集の枕詞を解いたもの）等があり、また「記紀の歌作者分類」一卷、「記紀景物」三卷、「神詠製歌考」六卷、「言靈東歌考」三卷、「和歌六體考」一卷等がある。その研究法は歷史的であり歸納的であるが、而も獨斷多く、學說としては餘り注意すべきものは無いやうである。〔龜田〕



【參考】高橋殘夢傳 龜田次郎（言語學雜誌三ノ一）

樓門（さんもん） 歌舞伎 【原作】初代並木五瓶作、安永七年四月大阪角芝居小川吉太郎座初演の「石川五右衞門忍術の事 澁川栄女艶書の事 金門五山桐（きんもんごさんのきり）」が原作であつて、その二ツ目の返し南禪寺山門の場が遊離し、或は獨立して一日の狂言の開幕劇として用ひられ、或は別個の五右衞門狂言と組合されてその序曲又は大詰として用ひられるに至つた。原作初演の際の主なる配役は、

此村大炊之助實は大明の宋蘇卿・眞柴久吉（尾上菊五郎）、奴八田平實は加藤政清（藤川八藏）、大佛餅惣右衞門實は海田新吾・眞柴久次（柴崎林左衞門）、早川高景・惣右衞門女房（尾上新七）、石川五右衞門（嵐雛助）、五右衞門女房・久吉與方（花桐豐松）、傾城花橘（藤川山吾）、瀨川采女（小川吉太郎）等。

その荒筋は次の如くである。

〔發端〕（玄海島の場）早川高景が漂着して石碑を發見、大明宋蘇卿の謀叛を知る。〔大序〕（島原揚屋）秀秋は兄秀次に世嗣を讓らんための遊興。五右衞門は靈山國師に化けて入り込み、千鳥の香爐とお袖判とを奪ひ去る（この五右衞門引込みの型に就いては、傳奇作書續編下の卷に詳しい）。（久吉館）秀次放埓のため此村大炊之助に預けらる。〔二幕〕（大炊館）大炊は久次のために宋蘇卿なる事を見顯はされて自滅し、血書した遺書を一軸の鷹に啣へ去らせる。

この返しが南禪寺山門である。爛漫たる櫻花金碧燦爛たる樓門、木魚入り禪の勤めの合方で五右衞門は大煙管を啣へ四方の風光を愛でてゐると、薄ドロ〳〵で白斑の鷹が現はれて高欄にとまる。五右衞門は大炊の遺書を讀み實父が宋蘇卿なりし事を知り、たとへ油で煮られようとも久吉を討取らうと誓ふ。大道具セリ上げになつて下に久吉が順禮の姿、杖の先に筆を括りつけ山門の柱に落書をしてゐる見得で現はれる。順禮が花道附際に來ると五右衞門は心得ぬと下を見下す。振返つて久「石川や濱の眞砂はつくるとも　五「ヤ何と」久「世に盜人の種はつきまじ」と、きつと見上げ互に顏を見合せて五「さては、うぬ」と、手裏劍を打つ。久吉柄杓でくわつしと受け久「順禮に御報謝」。この見得で幕。大體今日行はれる樓門と異ちの點は、現行のものは多く幕開きに大薩摩を語り、高調も遙かに音樂化され、全體に覺美、聽覺美が極度に洗練されて來てゐる。

〔三幕〕（松並木）五右衞門の配下が世尊寺中納言を襲つてその裝束を剝ぐをかしみ。〔四幕〕（大佛餅屋）五右衞門の勇大佛餅惣右衞門の死や、同じく異母の同胞で兄妹なるを知らずして繼に陷ちた采女とお菊とが死なうとするが、婆の告白でお菊は取換子なる事が分る事等。公卿姿で入り込んだ五右衞門は捕手の重圍を衝いて桃山御殿に向ふ。〔五幕〕（桃山御殿）忍び込んだ五右衞門は、久吉政清等に取卷かれ再會を約して別れる。

【名稱】豐臣家の五三の桐の金紋を、京の五山の一つなる南禪寺の山門にかけたのである。五右衞門が南禪寺山門に潛んでゐたといふ俗說による。

【題材】「釜淵双級巴」參照。【諸本】東京帝國大學所藏の大物本書卸臺帳。歌舞伎脚本傑作集卷三・日本戲曲全集卷三（兩者共に前者を底本として校訂）・時代狂言傑作集卷三（三升屋二三治自筆本による文政十一年三月市村座所演の臺帳）・役者濱ノ眞砂（享和三年刊繪入根本）。【影響】院本畑での五右衞門狂言は「釜淵双級巴」（別項）と「木下蔭狹間合戰」が有名であり、歌舞伎にも移されて大に行はれたが、純歌舞伎畑では「金門五山桐」と辰岡萬作の「艷競石川染」（別項）とが双璧で、特に前者からは「樓門」が、後者からは石田局の條が殘つて、現に行はれてゐる。「金門五山桐」が江戸歌舞伎に入つたのは寛政十二年二月の市村座で、これが「樓門五三桐」といふ名題の始めだと言はれる。爾來この名題で必ずしも原作に拘らず「石田局」と組合されて演ぜられもしてゐる（例へば明治二十九年三月明治座、團十郎の五右衞門と石田局）。のみならず、爾後の歌舞伎の五右衞門狂言は、殺し場（歌舞伎の用語で、それ〴〵の部分を強調した場面）の部分を強調した場面に綴り合せて行はれる。（例へば、嘉永四年正月中村座「木下會我惠磯路」は、「釜淵」「五山桐」（樓門）「木下蔭」の組合せであり、今日行はれる「增補双級巴」の原型である。また明治十二年八月久松座の「稚櫻眞砂兒」は、「稚兒ざくら五三の桐二ツ巴の三外題を合併せし如きもので、多見藏の五右衞門稚兒ケ淵の若衆姿より山門大百の大時代四ツ辻に代るべき雪の捕物など五右衞門中の粹を拔きたるもの」と「續々歌舞伎年代記」は記してゐる。）歌舞伎が俳優中心主義を採り、且つ又感覺的效果を過大に重んずる特性に、この樓門は最も迎合すべき性質を持つてゐる。今日樓門の五右衞門には市川團藏・中村芝翫の型が傳へられる。なほ「金門五山桐」は操りにも移された。（天保四年正月稻荷境内芝居「畜生塚の因緣大佛餅の由來金門五三桐」）

【參考】脚色餘錄（初編上の卷）○攝陽奇觀卷九（浪速叢書卷一）○歌舞伎狂言往來○歌舞伎細見　〔近藤〕

三遊亭圓喬（さんいうていえんけう）　落語家【初代】

初め船遊亭扇橋。後、初代三遊亭圓生の門に入りて山松亭圓橋と稱し、當時大に名聲を擧げた。屋號を橋家と云つた。それは圓生の狂歌號によるものである。【二代】初代の實子で山松亭巖橋と稱したが、圓橋の橋の木偏を取つて圓喬と名告るに至つた。【三代】四代目圓生と同人である。【四代】本名は柴田清五郎、慶應元年九月本所に生れ、大正元年十一月二十二日歿す。享年四十八。父は千石以上も取つた幕臣であつた。八歲の時、始めて三遊亭圓朝（別項）の門に入る。朝太の名で、日本橋茅場町の宮松亭へ出たのが高座に上つた最初である。つづいて門下の高足となり、明治十八年十二月、二十一歲で四代目圓喬を襲いだ。明治年間に於ける落語界の名人の一人であつた。　〔小柴〕

三遊亭圓生（さんいうていえんしやう）　落語家【初代】

〔本名〕未詳。俳名圓里〔生歿〕明和五年生れ、天保九年（一八三八）三月二十一日歿。享年七十一〔法名〕桃溪了遊居士〔墓所〕東京市淺草區清島町金龍寺地内〔閲歷〕最初、東亭八ツ子の門に入り多子と稱したが、後、三笑亭可樂（別項）の門人となつて東生亭世樂と改名した。故あつて可樂から破門され、烏亭焉馬（別項）の門に入り、一時は立川焉笑とも稱したが、自立後は山遊亭猿松と名乘り、寛政九年四月に三遊亭圓生と改めたのである。神田馬喰町附木店に住んでゐたが、彼の得意とする所は、俳優の聲色身振にあり、やがて芝居掛り、鳴物入の落語の元祖となり、且つ三遊派の基礎を築き上げたのである。〔門人〕葉南志坊圓馬。初代三松亭圓喬。初代三遊亭圓遊（後、初代金原亭馬生）。初代司馬龍生。初代橘屋圓藏（二代圓生）。

【二代】〔本名〕未詳、俗に木魚とあだ名された。〔生歿〕文化三年に生れ、文久二年（一八六二）八月十二日歿。享年五十七〔閲歷〕最初、三升屋しげ次と名乘り、初代圓生の門に入りて竹林亭虎生とも云つた。後、三遊亭花生と改め、又初代橘屋圓藏となり、二代目圓生を襲名するに至つた。

【三代】姓名・生歿共に未詳。〔閲歷〕初め二代目圓生の門人となり、三代目圓太を名乘り、後、三代目圓生を襲名したが、女淨瑠璃師と同席にて寄席に出づるに及んで、師匠に圓生の名を返上し、爾後、花遊亭新蝶と名乘つた。怪談噺に長じてゐた。

【四代】〔姓名〕文政時太郎〔生歿〕安政三年江戸下谷櫻木寺町に生れ、明治三十七年一月二十七日毛橋に寢り、下谷區竹町の自宅にて逝く。享年五十九〔法名〕法心院得脫日勝信士〔墓所〕東京下谷區谷中日蓮宗正蓮寺地内〔閲歷〕幼時、日本橋上槇町の小間物商立岩榮藏に養はれたが、素行修らず、放蕩に身を持ち崩し、素人落語會を作りて諸所を廻歷したりしたので、養父も落語家となすに決心した。彼も素より好む所なので、初め二代目圓生の門に入り、四代目圓太となつたが破門となり、後、三遊亭圓朝の弟子となり、鯉朝、或は寫西龍、寒公に出たり、玄海店の一勇書國芳の門に入つて浮世繪を學んだりしたが、結局落語家として身を立てることになり、十七歲の時圓朝と改名、場末廻りの眞打となつた。その後、自ら工夫して芝居がかりの道具噺をはじめ、その派手な高座ぶりによつて漸次人氣を博した。その頃彼は師匠の圓生を中入前に賴んでゐたが、なぜか圓生は常に彼の先をくぐつては、彼の用意した噺を横取して、あとに上る彼を苦しめた。已むを得ず彼は自ら筆を執つて「累草紙」といふ新作を試み、これ

【人物】後野孫右衞門と寄有人の一樣興奇人傳に、「此人うきたる業に似ず父母兄に仕へて孝順一方ならず、殊に風雅に携りて專ら有名の輩に交り」とあり、「父の師圓生長病の砌り介抱なほざりならず圓生歿して家族を引とり扶助の信切其志す處藝人の所爲にあらず」とあるやうに、目上に對しては飽くまで素直で優しく、又目下に對しては飽くまで懇篤、寛大であつた。從つてその主なる弟子、圓馬・圓橋・三代目及び四代目圓生・二代目圓遊・新朝・萬

年江戸下谷鶯塚寺町に生れ、明治三十七年一月二十七日舌癌に罹り、下谷區竹町の自宅にて逝く。享年五十九〔法名〕法心院得脱日勝信士〔墓所〕東京下谷區谷中日蓮宗正蓮寺地内〔閲歴〕幼時、日本橋上槇町の小間物商立岩榮藏に養はれたが、素行修らず、放蕩に身を持ち崩し、素人落語會を作りて諸所を廻歴したりしたので、養父も落語家となすに決心した。彼も素より好む所なので、初め二代目圓生の門に入り、四代目圓太となつたが破門となり、後、三遊亭圓朝の弟子となり、鯉朝(或は新朝)と名乗り、四代目圓生を繼ぐに及んだ。怪談に長じてゐた。四十一年間の落語界への努力により、斯界に重きを置かれ、三遊派の頭取とまでなつた。

【五代】〔姓名〕村田有松〔閲歴〕明治十八年江戸芝に生れ、足袋屋の小僧から劍舞士などと轉々業を變へたが、大正十年遂に落語界に入る。四代目圓藏の門に入り、二三藏となり、二代目小圓藏となり、又圓窓となり、同十四年五代目圓生となりて今日に至る。渡米したこともある。睦會の幹部である。〔小柴〕

三遊亭圓朝（さんいうていえんてう）

落語家〔本名〕出淵次郎吉〔生歿〕天保十年四月一日江戸湯島切通しに生れ、明治三十三年八月十一日下谷車坂町の寓居に歿す。享年六十二。〔法名〕三遊亭圓朝無舌居士〔墓所〕下谷區谷中初音町金生庵〔閲歴〕父は長藏、母はすみ、長藏は落語家橘屋圓太郎で、二代目三遊亭圓生の弟子であつた。圓朝は弘化二年三月、七歳の時、小圓太と名告り、江戸橋土手倉の寄席に初めて出演した。その後、谷中日暮里の禪寺南泉寺の役僧を勤めてゐた彼の異父兄玄正の諫止によつて屢々休席し、或は池の端の紙商高西屋へ奉公に出たり、玄冶店の一勇齋國芳の門に入つて浮世繪を學んだりしたが、結局落語家として身を立てることになり、十七歳の時圓朝と改名、場末廻りの眞打となつた。その後、自ら工夫して芝居がかりの道具噺をはじめ、その派手な高座ぶりによつて漸次人氣を博した。その頃彼は師匠の圓生を中入前に賴んでゐたが、なぜか圓生は常に彼の先をくぐつては、彼の用意した噺を横取して、あとに上る彼を苦しめた。已むを得ず彼は自ら筆を執つて「累草紙」といふ新作を試み、これを高座にかけて辛うじてその障害を切拔けたが、これが彼にその後多くの創作をさせる機緣を與へた。元治元年(二十六歳)、始めて彼は兩國垢離場の畫席の眞打となることが出來、引續きその席に出勤して名聲の確立すると共に生活にも餘裕を生じたが、その機會に彼は慶應元年の三月、その三年前に死んだ二代圓生の本葬を厚く營んだ。これはそのいまはの際の遺言に、葬式は今の衰へてゐる三遊の門派が、再び以前のやうに旺んになつた時にやつてくれといふのだつたさうである。つまり彼はそれだけの勢力を得て來たわけである。明治になつて、彼は時勢の變遷について感ずるところあり、弟子の圓樂に三代目圓生を襲名させると共に、從來の道具噺の道具一式をこれに讓り、自分は斷然扇一本の素噺に轉向した。そして續々新作を試み、高座にこれを自演した後、その速記を新聞に連載したり、一冊に纏めて刊行したりした。それは世間から異常な歡迎をうけた。つまり彼は話術家として卓越してゐたと同時に、作家としても非凡であつたのである。「眞景累ケ淵」「怪談牡丹燈籠」「怪談乳房榎」「鹽原多助一代記」「名人長二」(各別項)「粟田口霜笛竹」「後開榛名梅ケ香」「鏡ケ池操松影」「月謠荻江一節」「松の操美人の生埋」「名人競」「黄薔薇」等、數ある彼の作中の代表的なものである。これ等の作によつて人情噺は或る完成をもつた。かくして彼は一代の名人と仰がれ、彼によつて落語界の機運は、獨り三遊派といはず全般にわたつて興隆したが、明治二十四年六月(五十三歳)、席亭に對する或る計畫の齟齬から彼は高座を退いた。そしてそれからは一つには健康もすぐれなかつたが、「座敷」ばかりの寂しい數年間を送つた。同三十年十一月(五十九歳)、周圍の慫慂によつて、弟子たちのスケとして再び高座に返り咲いたが、立花家・惠知十・玉の井・大金・伊勢本・大ろじ・木原等、さうした都下の目星しい諸席を一巡したあとで發病、同三十三年、車坂町の彼の最後の住居でこの世を去つた。病名は進行性痲痺兼續發性腦髓炎。辭世として「目を閉ぢて聞きさだめけり露の音」といふ句が傳へられてゐるが、墓碑には「聾ひて」と上五の改惡されたものが誌されてある。圓朝は對外的に幸福だつたわりに、彼は對内的、家庭的には幸福でなかつた。彼の妻はもと柳橋でお幸といつて藝妓だつたが、彼女と結婚する以前に馴染んだ或る女との間にできた朝太郎といふ子供だけは、彼の手許に引取つたが、その朝太郎はお幸との間の折合がわるいため、酒に身をもち崩した末、行方知れずになつた。

三遊亭圓朝

【人物】後藤孝夫氏の「林與斎人傳」に、「此人うきたる業に似ず父母兄に仕へて孝順一方ならず、殊に風雅に携りて專ら有名の輩に交り」とあり、「父の師圓生長病の砌り介抱なほざりならず圓生歿して家族を引とり扶助の信切其志す處藝人の所爲にあらず」とあるやうに、目上に對しては飽くまで素直で優しく、又目下に對しては飽くまで懇篤、寛大であつた。從つてその主なる弟子、圓馬・圓橘・三代目及び四代目圓生・二代目圓遊・新朝・萬橘・圓太郎・圓喬・小圓朝・圓右等は、皆その德になづいた。

【參考】三遊亭圓朝子の傳　朗月散史〇講談落語今昔譚　嗣根默庵〇圓朝全集卷十三〔久保田〕

山陽（さんやう）

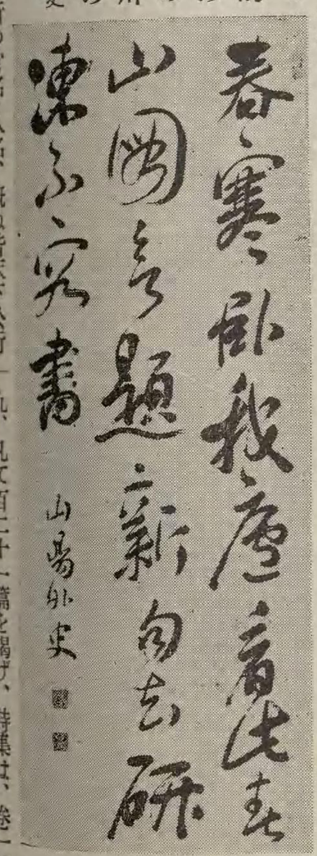
儒者・詩人〔姓名〕賴襄（のぼる）。字は子成。通稱久太郎〔別號〕三十六峯外史〔生歿〕安永九年十二月、大阪江戸堀に生れ、天保三年九月二十三日京都に歿す。享年五十三〔墓所〕京都長樂寺〔閲歴〕父は春水、母は飯岡義齋の次女、名は靜、梅颸と號した。春水は山陽二歳の時、藝州藩學問所の儒員となつたので、彼も從つて廣島で成人した。十三歳、詩を作つて當時江戸に在つた父春水に寄せ、柴野栗山に感賞された事がある。寛政九年(十八歳)三月、叔父杏坪に從つて江戸に上り、尾藤二洲の門に入つたが、翌年の夏藝州に歸つた。二十歳で藩士御園道英の女と結婚したが病の故を以て翌年離別した。併し、この時已に懷妊、長男餘一(聿庵)が生れた。文化元年(二十五歳)、「日本外史」の初稿成る。文化六年備後の神邊に到り、菅茶山の廉塾を督し、同八年大阪に出で、京都新町に寓居した。同十年春水、餘一を携へて上洛、車屋町の家に來泊。初めて一家團欒の樂しみを得た。同十一

年藝州に歸省し、途に廉塾を過ぎ、市河寛齋の長崎に歸るに邂逅した。翌十二年正月（三十六歳）、小石氏梨枝子を娶り、二條に轉居。同十三年二月十九日、父の喪に會つた。文政元年二月父の大祥忌に當り廣島に歸省展墓。喪除くや九州に遊び、豐筑より肥前に入り、長崎に留まること二月餘、龜井昭陽・草場佩川に會し、南薩隅を窮めた。文政二年西遊の歸路、廣島に到り、母を奉じて京に入り、芳野・奈良に侍遊し、秋、送つて廣島に歸つた。この年木屋町、翌年には兩替町に轉居した。同六年（四十四歳）家を三本木に買ひ水西莊と稱し、庭に梅花竹樹を植ゑ、一草堂を置く。鴨水に臨み東山に對す。山紫水明の處卽ちこれである。この年、又次郎（支峯）、同九年には三樹三郎が生れた。同十一年（四十九歳）には「日本樂府」、天保元年には「通議」が成つた。この年、胸痛を病んだ。同三年には女お陽が生れ、「日本政記」も完成したが、六月十三日喀血、九月二十三日遂に長逝した。【著作】小文規則一卷○古文典刑三卷○謝選拾遺六卷○通議三卷○日本外史二十二卷（別項）○日本樂府一卷（別項）○日本政記十五卷　○山陽遺稿八卷（別項）○山陽詩鈔八卷（別項）○書後題跋四卷○新策六卷○唐絕新選二卷。

【批評】山陽は、詩文共に兼ね長じた。友野玦の「錦天山房詩話に」、「山陽才高く學博く韓（退之）・蘇（東坡）に刻意し、魄力雄闊。最も史學に長じ。故に古事を運用し鎔鑄剪裁して別に生面を開く。之古は結果疲弊、化成前控、月樂韓蘇を學ぶ。之古は結果疲弊、化成前控、月樂韓蘇を學ぶ。

頼山陽

とし、實際に卽した活きた詩を作らうと志した點である。文章に於ては、寛政の三博士（別項）以後、江戸の佐藤一齋に對する西方の重鎭であつた。その文は才氣を以て勝る。その「日本外史」を草するや、漢文を日本化しようと心懸け、わざと一種の和習と見るべき字句を用ひた。こゝが彼の文に貴ぶべき所である。單なる摸倣でなく、日本的漢文たらしめようとしたのである。長川東洲は、その著「日本外史文法論」に、「外史書する所の官名・人名、概ね皆天下公行通用の文字に依る。所謂本色を失はざることなり。藝術公に上つる能に自り論じて云く、好



山陽筆蹟（中野氏藏）

錬雅健、聲調鏗鏘、綺麗を雄渾に寓す。實に近世の哲匠たるを忝しめず」とあるのは適評である。彼の詩に就いて特に注意すべき點は徒に漢人の口吻に擬するの愚を悟り、力めて我が國特有の風味を添へることに苦心した點である。どこまでも日本人の詩たらしめようと

實按レ跡可レ知とはこの謂なり。此一着亦子成の卓識にして、既に以て此間千古文人の陋習を打破するに足れり」といひ、又「外史語言を寫す處極めて吾が邦の本色を存せんと要す。故に俚言・俗語、その儘を直用す。平氏記中の公面可レ憎（俗語のっちの憎い奴だといふ意）、源氏記中の長袖者（公卿を罵る語）、九郎之貳舞（九郎判官義經の二の舞といふ意）、野猪而介者（猪武者の意）、足利記中の今日在レ人、明日在レ我、織田記中の膽生レ毛の類、是なり」といつてゐるのは、この間の消息を物語るものであるが、實は山陽自身も亦、「邦俗語の如き、却つて直に用ひて本色を見るに足るものあり。凡て此れ權度精巧なるものに非れば與に語るべからず」と言つてゐる。以て彼の見識を見るに足る。

【參考】賴山陽德富猪一郎　○隨筆賴山陽市島謙吉　○家庭の賴山陽　木崎好尙　〔佐久〕

山陽遺稿（さんやうゐかう）　漢詩文集　文十卷・詩七卷　拾遺一卷【著者】賴山陽【刊行】天保十二年【解說】文集は、卷一に書五、卷二に論十五、卷三に傳五、碑五、卷四に碑九、卷五に記十四、卷六に記九、卷七に記十、卷八に序十、卷九に序十、卷十に序六、雜著十九、凡て百二十一篇を揭げ、詩集は、卷一に丙戌の作古今體六十二、卷二に丁亥の作百五、卷三に戊子の作六十二、卷四に己丑の作百七、卷五に庚戌の作七十六、卷六に辛卯の作七十八、卷七に壬辰の作四十、拾遺に六十六、凡て五百九十六首を收め、山陽先生行狀を附錄としてある。

【參考】賴山陽詩集　木崎好尙輯註　〔佐久〕

三養雜記（さんやうざつき）　隨筆　四卷【著者】山崎美成【名稱】三養の名は著者の書堂の號から採つたものである。【成立】天保十一年三月【解說】同じ著者の「提醒紀談」に類したもので、眞の隨筆である。卷一に元日にハゼをまく以下三十三條、卷二に小歌以下三十四條、卷三に三十八條、卷四に賴朝放ちたまふ鶴以下三十三條を收め、まゝ小圖を挿んである。天保十年小野那賀伎の序がある。〔和田〕

山陽詩鈔（さんやうしせう）　漢詩集　八卷四册【著者】賴山陽【刊行】天保四年【解說】寛政五年から文政八年までの詩を集めたもので卷一から卷七までは山陽が自ら手定し、卷八は門人が編次したもののやうである。

【參考】山陽詩註燕石陳人　○賴山陽詩集　木崎好尙　〔佐久〕

山陽詩鈔註釋　奥山正幹　〔佐久〕

三葉集（さんえふしふ）　歌集【解說】「風葉集」「藤葉集」「新葉集」（各別項）の三歌集をいふ。

三餘叢談（さんよそうだん）　隨筆　一卷【著者】長谷川宣昭。柳の屋と號し、高田與淸の門人。【成立】文政五年高田與淸の序がある。【刊行】未詳【諸本】文政中の刊本の外に、明治二十五年、日本文庫第十一篇に編入上梓された。【解說】國史・制度・古歌用語等に關する考證的隨筆で、朝廷・佐官・陣ノ座、國郡鄕里の別、大田文・口分田・驛家・出擧・大あらき・かいとの道・うるまの島・とわたるといふ詞等、三十六則を收めてある。

三餘叢談　此書は「死後叢談」と見よ。

し

詩合（しあはせ）【名稱】鬪詩ともいふ。【解說】左右に分れて詩を合せ、優劣を競ふ事をいふ。支那には戰詩又は鬪歌の字面があるが、我が國の詩合と異るが如く、寧ろ彼の詩會はやゝ我が詩合に、その趣が似てゐるやうである。合が直接その影響によつて起つたものとは考へられない。殊にその儀式等が歌合と同樣である點から考ふるに、歌合の流行によつて起り、歌合と同じ形式に行はれたことと思はれる。我が國の詩合の最初は天德三年八月十六日、淸涼殿に行はれた十番詩合である。また殿上詩合ともいふ。その後のものでは應和三年三月十九日の善秀才宅詩合（三善遺統の宅に於けるもの、類從一三四所收）、永承六年三月二十七日の侍臣詩合（類從一三四所收）、天喜四年六

であり、本居宣長の「石上私淑言」の中にも、詩と歌とは同義となれることを論じてゐる。詩歌に對して、特に音曲の律によつて制限をうけたる歌唱のための歌詞をば歌謠（別項）と呼んで、部類を區別することがあるが、歌謠も詩歌の一部門と見るべきである。國語では詩歌・歌謠をすべてウタと呼んだ。ウタの語義は、エトと語原を同じくして、面白い言葉、感興語の意であるとも、訴訟宣言などと本源を同じくして言擧げの意であるとも、オト（音）か

ある。かつ言語の意味と律格との調和せられたる世界に於て、詩歌の領域を眺めることが出來るのではあるが、韻律の法則による形式で作られた文學が詩歌であると、形から定義づけようとすると、近代の無韻詩・自由詩・散文詩等は――內在律や印象律を認め得るが故に、詩歌であると肯定されるのではあるが――律語や韻文によつて書かれたものにあらざるが故に、詩歌にあらずといふ論も起り得る。又小說等と律語韻文の形式を具

し

詩合（しあはせ）

【名稱】鬪詩ともいふ。【解說】左右に分れて詩を合せ、優劣を競ふ事をいふ。支那には戰詩又は鬪歌の字面があるが、我が國の詩合と異るが如く、寧ろ彼の詩會はやゝ我が詩合に、その趣が似てゐるやうである。【沿革】歌合（別項）の起原が明確で無いやうに詩合の起原も明確を缺く。奈良朝から平安朝にかけて詩全盛時代に鬪詩の事は見えないから、或は寧ろ歌合の流行に刺戟されて起つたのではないかとも思はれる。支那に於ける戰詩は、韓愈の「送靈師詩」に、「戰詩誰與敵。浩汗橫戈鋋」とあつて、詩を作り合つて優劣を戰はしたものらしい。又鬪歌といふのは、汪元量の「潼州歌」に、「紅袖鬪歌纔拍手。綠鬟對舞盡纏頭」などとある。鬪歌と對舞の字面を見るに何れも相對して口誦で歌ひ合ひ、又は舞ひ合ふものであらうから、この鬪歌は詩合の如きものと多少趣が異るらしい。けれども詩又は歌を戰はして、その優劣を判定して勝負を定めたことは推察出來る。戰詩の如き又は鬪歌の如きを、一定の會合の席に於てすれば詩會となる。詩會の語も孟郊の詩に、「昔遊詩會滿。今遊詩會空」の如きも見えるが、唐時代既に詩會が行はれてゐた事が知られる。唐代の詩會が如何なるものであつたかは今明かにし難いけれども、「紅樓夢」に見える詩會の記事によつて、古代のものもほぼ推測出來るが、やはり、作詩の可否批評などをしたものらしい。これ等の例に就いて見るに、我が國の詩合が直接その影響によつて起つたものとは考へられない。殊にその儀式等が歌合と同樣である點から考ふるに、歌合の流行によつて起り、歌合と同じ形式に行はれたことと思はれる。我が國の詩合の最初は天德三年八月十六日、清涼殿に行はれた十番詩合である。また殿上詩合ともいふ。その後のものでは應和三年三月十九日の善秀才宅詩合（三善道統の宅に於けるもの、類從一三四所收）、永承六年三月二十七日の侍臣詩合（類從一三四所收）、天喜四年六月の殿上詩合（類從一三四所收）、天永二年六月二十日の八條邸詩合（長秋記）、承安四年三月一日の八番詩合（吉記）、建長八年六月中旬の百番詩合（資實・長兼兩卿のもの、類從一三四所收）等が著名である。又、單に詩會と稱すべきものは、諸記錄中に甚だ多く散見する。平安時代から鎌倉初期に於ける詩會は凡そ以上の如くであるが、後に至るに從つて詩歌の接近が特に目立つて來た。詩歌合の發現も、かくの如き現象の具體化せられたものである。（歌合・詩歌合參照）

【參考】競物名彙卷上（墨水遺稿卷二所收）○天德鬪詩行事略記○日本紀略○扶桑略記○濫觴抄（類從四六五）○西宮記　〔山岸〕

詩歌（しか）

文學論【意義】「尙書」舜典に「詩言レ志、歌永レ言、聲依レ永、律和レ聲、八音克諧、無ニ相奪一倫、神人以和。」と見え、「故禮」樂記に、「詩言ニ其志一也、歌詠ニ其聲一也」と見え、又漢の劉熙の「釋名」に、「詩之也、志之所レ之也」と云ひ、「漢書」藝文志に、「詠ニ其聲一謂ニ之哥一」とあるによると、詩とは情意の發動を指示する語であり、詩の吟詠が歌である。しかし劉勰の「文心彫龍」に、「在レ心爲レ志、發レ言爲レ詩」とあるは、詩と歌とを同義にせるものであり、本居宣長の「石上私淑言」の中にも、詩と歌とは同義となれることを論じてゐる。詩歌に對して、特に音曲の律によつて制限をうけたる歌唱のための歌詞をば歌謠（別項）と呼んで、部類を區別することがあるが、歌謠も詩歌の一部門と見るべきである。國語では詩歌・歌謠をすべてウタと呼んだ。ウタの語義は、エトと語原を同じくして、面白い言葉、感興語の意であるとも、訴訟宣言などと本源を同じくして言擧げの意であるとも、オト（音）から出たとも、空漠の義で正義の言葉でないものを指すとも、心情を知らす意とも、心情を抒べる意とも、また東亞諸民族に共用する語源で、巫女の託宣といふ本義に遡るべき語であるとも說かれてゐるが、舞踊と關係して手拍子をとつて歌謠することから起つたものと解するのは、詩歌發生の立場から見ても穩當であらう。西洋の Poetry の語根、ポイ又はポエ等は、制作創造の義より生じたものである。（漢詩を單に詩といふこともあるが、現今では明治以降の新體詩の系統のものを詩と呼ぶのが通例であり、ウタといふ時は、主として和歌を指す。）【本質】詩歌を抽象的に質として考へる時と、具體的に形として見る時とによつて、その概念が特色づけられる。質として考へられたる場合の詩的といふ概念は、感性的內容をもち、詩句そのものにだけ限らず、散文に又他の一切の美の活動にも、詩は存在すると認められ、知的活動の科學に對立する。詩的なるものは、必ずしもそれの表出を言語の世界にのみは求めてゐない。が、この詩的なるものを、言葉をもつて表出する場合に詩歌が生み出される。詩歌は言語を手段として、認識されたる實在を表現するものである。かつ言語の意味と律格との調合調和せられたる世界に於て、詩歌の領域を眺めることが出來るのではあるが、韻律の法則による形式で作られた文學が詩歌であると、形から定義づけようとすると、近代の無韻詩・自由詩・散文詩等は——內在律や印象律を認め得るが故に、詩歌であると肯定されるのではあるが——律語や韻文によつて書かれたものにあらざるが故に、詩歌にあらずといふ論も起り得る。又小說等に律語韻文の形式を帶べるところは、詩歌なりといふことにもなる。韻律を帶べる文章必ずしも詩にあらず、また散文必ずしも詩でなくはないといふことが、質として云はれるのである。要するに人間の敏感性が、新しい感情の世界、新しい情調の世界、新しい美の世界等を發見創造するにあたつて、その世界の想像又は表象が、最もそれに適切なる律動的言葉を以て、可視的並びに可聽的に表現又は描寫された時、これを詩歌といふのである。詩歌の生命は、言葉の意味と音聲と律動とを、換言すれば言葉の感覺と魅力とを、如何に活用して詩的なるものを表出するかに存在する。言語の持續性、强度性、緩急性、音色性を巧みに驅使して、偶然的示現から無限を暗示し、變轉出沒の現象から永遠の實相を獲得せしめるものは、詩歌の力である。詩的魔力は、大部分言葉の暗示力の心理的經驗から起るものである。

【起原及び發達】詩歌の起原は、卽ち文學の起原であるとも考へられる。詩歌の原鄕は、原始民族が主として宗敎上の祭式の行事であつた合唱にあると見られる。合唱には、素朴なる音樂と舞踏と感興語とが融合してゐた。我が國に於ては、天岩戸隱れの神話の條に、また

萬葉・風土記等に記されてゐる歌垣・嬬歌・踏歌（各別項）等に、合唱の姿が眺められる。合唱に於ける激烈熱狂の情緒は、常に身體の律動的運動を伴ふものであつたであらうことは推察し得られるから、この場合の言葉が律動的表出であつたことも容易に首肯される。上代からの實生活に卽しての歌謠も、その勞作の律動によつて、支配規定されたと考へられる。詩歌の萌芽も、また傳承も、律動の必然性に運命づけられてゐるといふことは、詩歌の特質として注意すべきことである。合唱の中に見出だされる文學的成分は、未生形態であつて、抒情詩的、叙事詩的、劇詩的各要素を含むものであつて、どの要素が先行するとも斷定し難い狀態にあるものである。合唱中の音樂的、舞踏的、文學的成分が、次第に複雜化して來、それ〴〵の成分の媒材に依る表現意識が、次第に明瞭なる形體を具へて來るに至り、さらに文學的成分の各要素の特質が自覺された結果に於て、劇詩と叙事詩と抒情詩との方向が分岐して發達を見た。文學を詩と散文に分ち、詩を劇詩と叙事詩と抒情詩とに分類することは古くから見られるが、自我意識の發達しない個人的存在を保持しない以前の文學には、この分類をなすことは困難である。合唱の中には、劇詩・叙事詩・抒情詩の系統に屬する母胎が見出だされるに過ぎない。合唱に於ては、個人的興味の事柄よりも、全會衆に關係ある物語的なるものが要求せられるところに、叙事詩の萌芽があり、この萌芽が劇的なるものとの交渉を絶緣して、物語の世界を意識的に展開せしめて叙事詩は發達する。また合唱に於ての情緒の急迫興奮より發達して、物語的乃至動作的に傾かず、それ自らの形を成長せしめて、個性的主觀を歌ふやうになつて抒情詩は發達する。合唱の中の身振舞踏を更に樣式化し、唱和を更に對話の形式に完成せしめて劇詩は發達する。詩歌は原始民族の生活の間から、自らに發生した自然詩より、民族詩より、個人の藝術意識によつて創作せられたる藝術詩に進むものであり、形態は形式の未だ規律を見ない未定形詩より、韻律形式の確定せる定形詩となり、更に因襲的形式を打破して、不定形詩となる道程を辿るものである。

【種類】内容・形式・表現等により、各種の分類が可能であるが、叙事詩・抒情詩・劇詩と三大別にするのが通例である。

〔叙事詩〕秩序立てられた結構のもとに、過去の時に現れた凡ての想念を——神話傳說、英雄豪傑の業績等——客觀的に叙述したものである。Epic は Story を意味するので、吟誦すべき歌の義である。上代に於ては物語られたのであつて、古事記・風土記にも、反復律をもつて口誦されたであらうと考へられる叙事詩的なるものを見出だし得るのであるが、「平家物語」の如きは、明かに平曲（別項）と呼ばれて盲目の琵琶法師の「語りもの」であつた。支那にも瞍賦瞽誦とある如く、盲目者によつて語られた事を知り得る。叙事詩は傳誦的叙事詩と記載的叙事詩、民族的叙事詩と個人的叙事詩とに分つ事が出來る。前者は主として古代傳說や民謠等が集合統一して自らに發達したもので、興味は作者よりも物語られる事柄にかゝる。一民族の思想感情の共通性が出てゐる。作者は多くの場合不明であつて、内容が次第に增加して行く。後者は或る一人の天才によつて、前者の如く生のまゝの素材をありのまゝに取扱ふ傾向ではなしに、獨自の想念のもとに、從來の形式を集大成して、その時代精神を代表的に表白するのである。

〔抒情詩〕現在の時に現れたる想念を對象とし、自己の純粹感情を直接に、現在の時の姿そのまゝに表現した形態であり、從つて動向は常に現在である。個人の止みがたき心の叫びであり、單純敏感にして熱情ある言葉が伴ふ。單に文字としての言葉でなく、音聲と韻律としての言葉が伴ふ。lyric とは lyra に合せて歌ふ歌の義であるが、抒情詩は音樂的であつて、外界の事柄そのものを叙述するのではなく、事柄によりて起されたる自己感情を表現するのであるから、第一人稱の詩であるとも云はれ、詩歌の精髓と見られてゐる。この抒情詩は題材によつて、宗教的、愛國的、戀愛的、自然、哀悼、反省、祭宴等の類別が見られる。

〔劇詩〕過去の時を現在に見る想念の表現であり、叙事的なる姿を抒情的なる形に見る詩である。過去の時と現在の時とを一つに結合し統一する作用は動作である。叙事詩が成長してはじめて劇詩が發達する。劇詩は、悲劇・喜劇・悲喜劇に分たれる（演劇參照）。劇詩の構造は、發端・遞昇・頂點・遞降・結末の五徑路をとるやうになつてゐるのが原則であるけれども、必ずしもこの原則が嚴守されねばならぬとは限らない。

叙事詩・抒情詩・劇詩は、詩歌形態の基本的分類であるが、更に種々の分類の態度がある。一は謠ふと謠はないといふ點からの區分である。この區分は民衆詩と個人詩との區別にもなる。歌謠詩としては民衆詩に屬すべきものを擧げると、民謠・童謠（各別項）・譚歌・田園詩の如きがあり、謠はれない個人詩を擧げると、象徵詩・自由詩・散文詩（各別項）・未來詩の如きがある。諷刺詩は或る場合には、歌謠もしくは民衆詩となる。又叙事詩と抒情詩とを廣い意味の客觀詩と主觀詩とに解釋しないで、客觀詩や主觀詩の一形態と見る時には、客觀詩の中に叙景詩を加へ、主觀詩の中に思想詩を擧げることが出來る。譚歌（物語詩）は、作者が多くの場合不明で、或る事件、或る物語を詠じたものである。民衆に共通の說話を内容とし、反復の形式をもつもので、浦島や竹取の翁の歌の如きものがこれに屬し、叙事詩より小篇なもの。諷刺詩は、世上を嘲笑罵倒する巧妙な修辭を含み、作者の鋭利な機智が働いてゐるもの。落首や川柳や狂歌に、これに屬するものが多い。未來詩は、對象を感覺によつて分解し、それを新しい一つの精神を以て見たる詩、力動感覺の表現を試みた詩である。なほ歌謠と歌謠以外の詩歌を、日本詩歌の上の歷史的名稱から分類すると、（一）和歌・連歌・俳諧・狂歌・川柳・新體詩（各別項）・長詩。（二）神樂・催馬樂・朗詠・今樣・宴曲・小歌・隆達節の歌・長唄・軍歌・唱歌（各別項）の如き方面からも見られる。

【韻律の種類】詩歌の表出媒材としてとられる言葉は、それの固有の性質によつて、韻律的形式を規定するものである。（一）音性律。言語の音聲に於ける抑揚又は長短の性質に基づく韻律であつて、西洋の詩歌の音格、漢詩の平仄等がこれである。音格にも平仄にも、また種別がある。（二）音位律。一定の位置に同一又は類似の音を反復することによつて生ずる韻律で、頭韻といふ。押韻に頭韻・頭韻・

中韻・半韻・波紋韻・反響韻等と呼ばれる種類がある。漢詩で雙聲又は疊字と呼ぶものは頭韻のことである。（三）音數律。一句中の音數を規律して、韻律的效果を生ぜしめるものである。漢詩に五言又は七言の詩があり、古代ギリシヤにも音數律が行はれたが、我が國の詩歌は、專ら音數律であつて、音性律は全くなく、任意的に音位律が行はれた。量的音數律、五音と七音との相互にもつ韻律によつても、複雜なる律動が可能である。五音のみで

露風〇日本詩歌形式論 改造社〇英詩から見た和歌形式論 八木又三 〇上田敏全集第八卷（改造社刊）〔佐藤〕

詩歌合（しいかあはせ）【解說】詩と和歌を合せること。歌合と詩合（各別項）とが融合したものである。古いものでは崇德帝の長承二年相撲立の詩歌合が存在し、又「玉海」の仁安三年正月二十八日には、攝政家に詩歌絲竹會が行はれた。その後、元久二年五月の元久詩歌合（類從二二三）等が現存するものの古い方である。

横井千秋【刊行】文化十四年【諸本】續歌學全書第三編（本居宣長翁全集）所收。【内容】「或人の歌と詩とのけぢめ又其劣り勝りを問ひけるに答へたる書」と題されてゐるが、漢詩と和歌とを比較して、和歌の、より優れてゐることを論じてゐる。戀歌は「物のあはれ」を知ることから生れるものである。「物のあはれ」を知るとは、「萬の事のこゝろをわきまへ知り、世の人の思ふ情のさまをも悟り知りて我身になしてあはれと思ふ」をいふのであつ

で、續いて共に播州の名所古跡を探り、曾根・高砂の松を見物する。かくて九月十八日の旅泊の所で終つてゐる。紀行中自己及び空我の句の外に旅中聞き觸れた俳人の發句や、各地の俳人と卷いた連句等を後部に纏めて記してゐる。文は和漢混淆文ながら雅文に近い趣があり、一通りの筆力を感ぜしめる。〔志田〕

【參考】俳諧紀行全集提要 飯田飯人（俳諧文庫）

子音（しいん）音聲學【名稱】〔英〕consonant

完全韻・半韻・連續韻・反響韻等と呼ばれる種類がある。漢詩で雙聲又は疊字と呼ぶものは頭韻のことである。(三)音數律。一句中の音數を規律して、韻律的效果を生ぜしめるものである。漢詩に五言又は七言の詩があり、古代ギリシヤにも音數律が行はれたが、我が國の詩歌は、專ら音數律であつて、音性律は全くなく、任意的に音位律が行はれた。量的音數律、五音と七音との相互にもつ韻律によつても、複雜なる律動が可能である。五音のみで二十種の律動を、七音のみで四十二種の律動を見出だし得るが故に、この組合せが複雜微妙の效果を收め得るのである。(四)句數律。一定の句數より成る形式をいふ。短歌の五句律、俳句の三句律の如きもの。(五)句位律。句間を內容上から分割しての形式で句調のことである。五七調とか七五調とかいふのがこれである。(六)印象律。詩歌の對象に移入された感情の韻律をいふ。詩歌の心理的對象から享ける印象の間に、一種の韻律が成立する場合に云はれることである。(七)內在律。作家の人格的感情が生ずる韻律であつて、作家の內的態度に基づくものであるから內在律といふ。近代詩は、內在律・印象律を重んじて、形式化された韻律には囚はれてゐない。韻律的形式が、定型的詩句を規定し、卽ち音性律による强弱型、弱强型等、或は平起型、仄起型等を、又音數律による五七型、七五型等を支持しつゝ、節を作り篇を成すのである。

【參考】詩の起原 竹友藻風 ○詩學概論 外山卯三郎 ○詩の形態學的研究 同上 ○詩の形態學原論 同上 ○詩學雜考 矢野峰人 ○詩の本質 野口米次郎 ○詩の原理 萩原朔太郎 ○詩の本 百田宗治 ○露風詩話 三木露風 ○日本詩歌形式論 藤井清治 ○英詩から見た和歌形式論 八木又三 ○上田敏全集第八卷(改造社刊)　〔佐藤〕

詩歌合（しいかあはせ）【解說】詩と和歌を合せること。歌合と詩合(各別項)とが融合したものである。古いものでは崇德帝の長承二年相撲立の詩歌合が存在し、又「玉海」の仁安三年正月二十八日には、攝政家に詩歌絲竹會が行はれた。その後、元久二年五月の元久詩歌合(類從二二三)等が現存するものの古い方である。その他、建曆二年春の內裏詩歌合(新勅撰集第二奉下・第八羇旅)、建保二年二月十六日の詩歌合(類從二二三)等が著名である。然るに和漢兼作の才は、後世に及ぶに從つて次第に行はれぬやうになり、再び分離して詩歌管絃三席の御會の如きものとなつたやうである。「至德元年記」には、元中元年十一月の條に、詩歌管絃三席御會の記事が出てゐる。その他「成恩寺關白記」などにもその記事があり、かくして詩歌合も次第に和漢聯句の如きものと變じたやうである。詩歌合として比較的後世の記錄に見えるものは、「親長卿記」の文明十五年正月十三日の條の記錄などであらう。その後には殆ど所見に入らない。(詩合參照)

【參考】長承二年相撲立詩歌合(續群書類從四二〇)○卅六番相撲立詩歌合 ○和漢名所詩歌合 ○元久詩歌合(群書類從二二三)○建保元年詩歌合(同上) ○建治二年現存三十六人詩歌合(群書類從二二四)○康永二年五十四番詩歌合(同上) ○守遍詩歌合(同上) ○文安詩歌合(群書類從二二五)○文明十四年正月十三日將軍家詩歌合(同上) ○寬正五年仙洞三席御會詩歌(續群書類從四二一・四二二)　〔山岸〕

詩歌論（しいかろん）歌論書　一卷【著者】橫井千秋【刊行】文化十四年【諸本】續歌學全書第三編(本居宣長翁全集)所收。【內容】「或人の歌と詩とのけぢめ又其劣り勝りを問ひけるに答へたる書」と題されてゐるが、漢詩と和歌とを比較して、和歌の、より優れてゐることを論じてゐる。戀歌は「物のあはれ」を知ることから生れるものである。「物のあはれ」を知るとは、「萬の事のこゝろをわきまへ知り、世の人の思ふ情のさまをも悟り知りて我身になしてあはれと思ふ」をいふのであつて、「物のあはれ」をうたふ和歌は、自ら身を治め國を治むる道の本であるなどとも說いてゐる。【價値】宣長の跋に、この書を推して書いてある詞の中に、「己がかねてより思ひえて候趣も是に外ならず」とあるが、大體に於て宣長の「石上私淑言」中の漢詩、和歌の比較論及び戀歌についてのべた意見と同じく、且つ宣長の論の組織的で精緻明確、人をして自ら承服せしめる筆致あるに比して、遙かに劣つてゐる。ただこの詩と歌を比較し、歌をまされるとする論が一書をなして出版されたことは歌學史上注意すべきことである。　〔藤川〕

椎の葉（しひのは）俳諧紀行　一册【著者】椎本才麿【名義】姓の椎本に因んで「萬葉集」の「家にあれば笥(け)に盛(も)る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」の歌に取つたものであらう。【成立】元祿五年九月【刊行】元祿五年【諸本】芭蕉以前俳諧集(俳諧文庫)・俳諧紀行全集(同上)所收(後者は後の部分の俳句を省略してある)。【解說】元祿五年八月二十五日、大阪北の岸を出帆し、先づ尼ケ崎に上り、目的の須磨・明石を見物し、それより書寫山詣でを思ひ立つて道をその方に取る。その途次姬路の高松空我を訪ひ、空我を東道として書寫に詣で、續いて共に播州の名所古跡を探り、曾根・高砂の松を見物する。かくて九月十八日の旅泊の所で終つてゐる。紀行中自己及び空我の句の外に旅中聞き觸れた俳人の發句や、各地の俳人と卷いた連句等を後部に纏めて記してゐる。文は和漢混淆文ながら雅文に近い趣があり、一通りの筆力を感ぜしめる。　〔志田〕

【參考】俳諧紀行全集提要 飯田飯人(俳諧文庫)

子音（しいん）音聲學【名稱】〔英〕consonant〔獨〕der Konsonant 又は der Mitlaut, der Mitlauter〔佛〕la consonne. 子音を「シオン」と稱へるものもある。また父音(フォン、又はフイン)ともいふ。【解說】母音(別項)に對する名稱で、氣息の通路の中、喉頭より上の或る部分に於て、通路を一時閉塞するか、又は通路の著しい狹(せば)まりを作ることによつて生ずる音。

【子音の分類】(甲)氣息の通路の開閉の度合による分け方と、(乙)開閉を作る場所による分け方との二方面より分類する。而して甲乙に通じ、それ〴〵同時に聲帶の振動による聲を伴ふものと伴はないものとに分け、伴はないものを無聲音(英 voiceless or breathed 獨 stimmlos 佛 soufflée)と名づけ、伴ふものを有聲音(英 voiced 獨 stimmhaft 佛 voisée)と名づける。(甲)の分け方では(イ)全く閉塞するもの、而して多くは閉塞した後でこれを解放する時生ずる音聲を子音の中に數へる。これを「破裂音」(英 plosive 又は explosive 獨 der Verschlusslaut 佛 plosive 又は occlusive ラテン mutae)といふ。(或は「破音」「閉鎖音」などともいふ)(ロ)通路の狹(せば)まりを作るもの、この時、氣息は狹まりに逢つて摩擦的の音を生ずる。これを摩擦音(英 fricative 獨

Frikativ. 又は der Reibelaut 佛 fricative ラテン spirans)と名づける。(ハ)通路の中央又は片側に閉塞を作り、氣息はその兩側又は片側から外に出るもの、これを側音(lateral)と名づける。l で表はす音はその代表的のものである。(ニ)口腔への通路を閉塞し軟口蓋を下げて氣息を鼻腔へ通ずるもの、これを鼻音(nasal)と名づける。附り(ホ)破裂音から次の音に移る時、やゝ時間を隔てるため輕く氣息の洩れる時、これを帶氣破裂音(aspirate)と名づける。例へば英語の up-hill などの p. h の所にこれに似た音が聞える。ph, pḣ; th, tḣ; kh, kḣ 等の符號で表はす。(ヘ)又 pf, ts, tʃ の如く破裂音の次に直に摩擦音(同じ器官の位置に於て)を伴ふ時これを affricate(摩擦音附破裂音)と名づける。又器官の中、唇・舌等の彈力ある部分の振動により、閉塞と解放とを交互に極めて急速に繰返す時これを振動音(rolled 又は trilled)と名づける。謂ゆるラ行音を「卷舌」で發音するのはこの例である。(乙)の分け方、即ち開閉を作る場所に關しては、(イ)唇を使ふもの。その中(一)兩唇破裂音(bilabial plosive)。例、無聲 p(パ行の子音)、有聲 b(バ行の子音)。(二)兩唇摩擦音(bilabial fricative)。例、無聲 F(ファで表はす音に含まれる子音)、有聲 v。(三)兩唇をすぼめ同時に舌の後部を高くする音。有聲を w で表はす(例、英語の wood 等にある)。無聲を ʍ で表はす。(四)上齒と下唇とを使ふもの、唇齒音(labio-dental)、これには完全な破裂音は困難で、多く摩擦音になる。例、無聲 f(英語等の f で表はす音)、有聲 v(英語の v で表はす音、我が國でヴァ等と書くのはこの音を表はす工夫である)。(五)鼻音、兩唇を閉ぢ氣息を鼻腔に通はすもの、有聲 m(マ行の子音)、無聲 m̥。(ロ)上齒又は上齒齦と舌の前部とを使ふもの。(一)t d で表はす音、(t は無聲「タ」「テ」「ト」の子音、d は有聲「ダ」「デ」「ド」の子音)これは上齒裏、又は上齒齦と舌の前部(或は緣(リ))との間の破裂音である。(二)s z で表はす音、(s は無聲、「サ」「ス」「セ」「ソ」の子音、z は有聲「ザ」「ズ」「ゼ」「ゾ」の子音)、これは同じ位置の摩擦音である。(三) θ ð、これは英語の綴字 th で表はす think, they 等にある音。上齒裏と舌の緣との間の輕い摩擦音。θ (think) は無聲、ð (they)は有聲。(四)鼻音、t d と同じ位置で口の通路を閉塞し、息を鼻に通はせる。その有聲を n で表はす(「ナ」「ヌ」「ノ」の子音)。無聲を n̥ で表はす。(ハ)硬口蓋と舌の前部とを使ふもの。(一)ɲ 3、ʃ は英語の綴字 sh で表はす she 等にある無聲摩擦音である。その有聲音が 3 である。英語の pleasure 等の s の部で表はされる。日本語のシャ、シ、シュ等と書く音の子音はこの類に屬する。(二)j ç これは ʃ 3 とほぼ同じ位置で摩擦の極く弱いもの、j は有聲音で英語の綴字 y で表はす yes 等、ドイツ語の綴字 j で表はす jung 等にある音である。(三)ラ行の子音、これは舌の緣を輕く硬口蓋の前部に着けて、直に離す有聲音である。この位置で作る振動音は即ち「卷舌」である。(四)l の音、英語等に使ふ l 字で表はす音は、舌の先端を上齒齦又は硬口蓋の前部に着ける有聲側音である。(一)破裂音、有聲 g(「ガ」「グ」「ゴ」の子音)、無聲 k(「カ」「ク」「コ」の子音)。(二)摩擦音、有聲 ɣ、無聲 x(ドイツ語の Buch 等の ch で表はす音)。(ホ)鼻音、軟口蓋と舌の後部とで、閉塞を作り、息を鼻に通はせる。有聲 ŋ(英語 king 等の ng で表はすもの、及び日本の多くの地方で「ガ」「グ」「ゴ」を鼻にかけて發音する時の子音)。(ヘ)聲帶の摩擦音。通例 h で表はす。m n ŋ l r 等の音を總稱して「流音」(liquid)と名づけることがある。滑かに聞えるからである。以上が英・獨・佛・日等に使はれる子音の主なるものである。

【參考】「音聲」及び「音聲學」の項の參考書を見よ。

〔神保〕

次韻(じゐん)　俳諧集　一册　【著者】松尾芭蕉【本稱】誹諧次韵【名義】信德の七百五十韻に次ぐといふ義である。【成立】延寶八年【刊行】延寶九年【諸本】蝶夢の「芭蕉翁俳諧集」「甘井の金蘭集」、奇淵の「袖草紙」、湖中の「一葉集」、默池の「袖珍鈔」等所載。芭蕉全集(沼波瓊音編)・芭蕉一代集(俳書大系)・芭蕉全集(日本名著全集)等所收【內容】卷頭に短文の序と「七百五十韻」(別項)の最末の二句とを前書とし、桃青・其角・才丸・揚水の四吟五十韻一卷、其角・才丸・揚水・桃青の四吟百韻一卷、才丸・揚水・桃青・其角の四吟百韻一卷、都合二百五十韻と、餘興として揚水・桃青・其角・才丸の四吟四句とを收めてゐる。この連句は信德の「七百五十韻」に刺戟されて成つたもので、その事は漢文序に述べてあり、且つその次に「七百五十韻」の最末の二句を掲げ來つてその接續を一目瞭然たらしめようとしてゐるのである。【史的地位】本書は、古來芭蕉の劃期的撰集の一として尊ばれてゐた。去來は「師の風雅見及ぶ所次韻に改まり」とか、「先師の次韻起りて信德が七百五十韻衰ふ」などと論じ、越人は本書を以て蕉門開基の撰集と考へたのである。併し越人の論は支考が「冬の日」(別項)を以て、正風開眼の集と定めた說に對抗したもので是認され難い。【價値】芭蕉が「鷺の足雖脛長く繼添て」の句を以て始め、其角が「這句以テ莊子ヲ可シ見ヅ矣」の句で承けてゐるやうに、この連句には漢詩漢文の影響が著しく見られる。即ち芭蕉がかゝる所から自家連句の革新を企圖したものであることが推せられやう。三卷を見ると、最初の卷は比較的穩かな所があり深みもあるが、先へ行くと駄洒落や道化た比喩や奇怪な空想が續出して、なほ前時代の輕口風を脫却せぬ感がある。要するにまだ本書は過渡時代の撰集で、正風たるには不純な集たるを免れない。

〔萩原〕

柿蔭集(しいふ)　歌集　【著者】島木赤彥【刊行】大正十五年七月岩波書店【解說】第五歌集で、赤彥歿後、門人によつて編輯せられた。本集の歌風は、「太虛集」(別項)に比してやゝ平淡となり、殊に大正十五年の病床吟の如きは、沈痛の氣を內に潛めて、外見きはめて淡々たるは、正岡子規晩年の歌を偲ばしめるに足るものと思ふ。

〔齋藤(茂)〕

子音組織(そしいんそしき)　「音聲」を見よ。

地歌(地唄)(じうた)　「上方歌」を見よ。

似雲(じうん)　歌僧　【姓名】未詳【別號】如雲【生歿】寬文十三年に生れ、寶曆三年(一七一三)七月八日寂す。享年八十一(但し一般には八十六歲說が流布してゐる)。【墓所】河內國弘川寺境內西行墳墓の側【學統】靈元院御門下の武者小路實陰の弟子で、武者小路公野・柘植知淸・高松重季・蓮阿等と同門の關係になつてゐる。【閱歷・人物】安藝國廣島に生れ(姓路說は根據がない)、詠歌の趣味を有した父を持ち、彼を愛する兄弟に恵まれてゐた。この境遇は彼の崇拜した西行に似てゐた。その少年時代は幸福に育てられ、十歲にして夙に大學章句などを學んでゐる。その結尾の句によつて、一少年ながら人生無常といふことを考へたといふ。二十五歲の時父親に死なれ、出家の志を一層深めた。三十一歲(寶永元年)の六月、決然出家を遂げて家督を弟に渡し、法名を如雲と號した。その命名にも彼の內生命がよく反映されてゐるやうに思ふ。その翌年まうとして、再び隱棲行脚苦の生活を選んだ。實陰の邸を去つたことに就いては、「古今集」の傳授箱の保管を委託された煩はしさに由るなどと傳へるものもゐるけれど、そこには、もつと深い內的要求が存してゐたことであらう。まづ嵯峨天龍寺境內に庵を營んで、任有亭と名づけ、膝を容れる住所とした。「我庵はかたもさだめず行雲の立居さはらぬ空とこそ思へ」といふ歌が、漂泊に身を託した當時の顯を被り、屢々出入したことは特記すべきである。延享元年七十二歲の老軀を支へ、葛城籠りをしてから信仰上に一展開を遂げた。彼の撓まぬ精進生活を偲ぶに足る(葛城百首)。山を出た彼は多く須磨に棲んだ。須磨は彼の愛した土地の一つで、これ迄とても止錫したこと數度に及んでゐる。晩年多く弘川寺の春雨亭にゐたやうである。「西行に姿計は似たれども心は雪と墨染の袖」と詠んでゐる。から湧き出て來たといふことを思ふ時、吾々は全然別個の尺度(批評眼)を持つべきであるといふことを感ずる。ともあれ彼の不朽の詠草は、そのまゝ彼にとつて、讀經・看經であつたことを思ひ得るのである。

行く雁は見おくる空に影きえて聲のみ霞む春のあけぼの

花鳥のなごりを雲にしたひても春はかへらぬ夕ぐれの空

遇は彼の崇拜した西行に似てゐた。その少年時代は幸福に育てられ、十歳にして夙に大學章句などを學んでゐる。その結尾の句によつて、一少年ながら人生無常といふことを考へたといふ。二十五歳の時父親に死なれ、出家の志を一層深めた。三十一歳（寶永元年）の六月、決然出家を遂げて家督を弟に渡し、法名を如雲と號した。その命名にも彼の内生命がよく反映されてゐるやうに思ふ。その翌年まづ永年憧憬した都に上り、聖賢の道に親しく接しようとした。西行出家當時のやうに、似雲にも出家後數年、初老を迎へる頃までは、情熱的求道の悶えを續けたものらしい。かくて歌佛一路の安住地の中に、漸く新境を見出だし得た。彼の遺著「年並草」（別項）は、寶永七年三十七歳の時より執筆され、多少の間隙もあるが、實に四十年間に亙り寛延までに及んでゐる古今未曾有の大歌日記である。現傳のもの錯簡あるを思へば、記錄の缺けてゐる年月の中には散佚した爲めのものも多いのであらう。この根氣こそ、正しく彼の歌道精進と歌僧生活半生の眞情を後世に遺し傳へたものと言つてよい。まづ歌道の實際的研究は正德三年（四十歳）、當時堂上歌壇の雄、武者小路實陰（別項）に仕へ、直接その誘掖を受くるに至つたその年より始まる。かくてその後八ケ年間續いた聽講の筆錄は、「似雲聞書」とか「實陰卿御咄似雲聞書」とか、又「磯の浪」「詞林拾葉」と云ふ名で書き傳へられてゐる（流布本の聞書は、「磯の浪」「詞林拾葉」に較べて狹本である）。尤も旅神に憑かれてゐるやうな彼は、その間と雖も、大和・攝津方面に旅立つて居り、殊に玉津島明神を信仰して、或る時は三ケ年缺かさず參詣してゐる。いつか五十歳の峠を越えようとして、再び隱棲行脚悲苦の生活を選んだ。實陰の邸を去つたことに就いては、「古今集」の傳授箱の保管を委託された煩はしさに由るなどと傳へるものもゐるけれど、そこには、もつと深い内的要求が存してゐたことであらう。まづ嵯峨天龍寺境内に庵を營んで、任有亭と名づけ、膝を容れる住所とした。「我庵はかたもさだめず行雲の立居さはらぬ空とこそ思へ」といふ歌が、漂泊に身を託した當時の心境を語つて餘蘊が無い。庵は九尺四方、東方に圓窓があり朝日に向うて看經し、別に持佛と云ふものを持たなかつた。一箇の藥鑵、一個の茶碗、それで天龍寺食堂に於ける殘物や人々の施物に依つて糧をつなぎ、最も簡素な托鉢生活を續けた。世人は、いつか彼を「今西行」と呼んだ。老いて社會に交はるのは恥だといふ「徒然草」の句は、彼が幾度も思ひ浮べた言葉であつたが（年並草）、しかも彼は老境に入つて益々矍鑠としてゐた。彼の健脚と意氣とがそれを證明する。廣島や伊勢への旅は前後三回に亙つてゐる。江戸にも下つた（享保五年）。更に、仙臺・松島といふやうに遠く巡錫した。伊達侯からその地に止まることを勸められたが彼は應じなかつた。さて歸洛した翌年に、靈元院の崩御に際會した。彼はその年、多年念願の西行の墳墓を、偶然河内國弘川寺の墓地に尋ねあてることを得た。それから毎年西行忌に缺かさず墓參してゐる。元文四年は西行五百五十回忌に當るといふので、特に法會を營み、その後暫く弘川寺境内に庵居した。永年の歌師實陰も元文三年に薨去し、彼も將に七十の坂を越えようとした。この頃から彼は漸次嵯峨の舊庵から遠ざかつて行つた。元文の初め頃から、奈良の一乘院宮の愛顧を被り、屢々出入したことは特記すべきである。延享元年七十二歳の老軀を支へ、葛城籠りをしてから信仰上に一展開を遂げた。彼の撓まぬ精進生活を偲ぶに足る（葛城百首）。山を出た彼は多く須磨に棲んだ。須磨は彼の愛した土地の一つで、これ迄とても止錫したこと數度に及んでゐる。晩年多く弘川寺の春雨亭にゐたやうである。「西行に姿計は似たれども心は雪と墨染の袖」と詠んでゐる。かくて八十一歳を最期として、和泉國蹲尾（つくのを）の北村某氏に寄寓中他界した。

【著作】詞林拾葉一卷（寫）○磯の浪二卷（刊）（享和元年の序がある。歌學文庫第六所收）○似雲聞書二卷（寫）○實陰卿御咄似雲聞書一卷（寫）○超嶽院御講演一卷（寫）（以上、すべて同一書であるが、廣略の差がある）○年並草二十卷十九册（寫）（別項）○寄歌述懷百首一卷（寫）（排技巧自然表出論の歌書、年並草の拔抄）○十百首二卷（寫）（年並草の卷十・十一に當る十百首集。如雲庵で享保十七八年頃編んだもの）○葛城百首一卷（安永六年刊）（延享元年四月葛城に入山し、三ヶ月の修行中、轉迷開悟の心境を詠出したもの）○窓の曙二卷（寫）（「似雲上人東行道の記」とも呼ぶ。奥州紀行で年並草の卷十二・十三に當る。年並草參照）○思出草一卷（寫）（年並草の卷二十に當る）○蜑の囀一卷（寫）（年並草の中から、須磨に住んだ頃の記錄の拔萃）○似雲和歌集一卷（寛政四年刊）（年並草中の和歌の拔萃）○似雲類題一卷（刊）○續似雲類題（刊）。

【作風・史的地位】彼の作は、餘りに形式的、概念的乃至趣向本位のもの多く、自然の肺腑に迫る純眞味情熱性に缺けてゐる。しかも何千首と云ふ多數の詠草が、抑へ難い彼の詩心から生み出されたことを鑑みる時、又かゝる語戯本位の旅の歌が、苦しみ多い行脚の底から湧き出て來たといふことを思ふ時、吾々は全然別個の尺度（批評眼）を持つべきであるといふことを感ずる。ともあれ彼の不齟の詠草は、そのまゝ彼にとつて、讀經・看經であつたことを思ひ得るのである。

行く雁は見おくる空に影きえて聲のみ霞む春のあけぼの

花鳥のなごりを雲にしたひても春はかへらぬ夕ぐれの空

一葉ちりて木の間そひゆく秋風に影も加はる月のさやけさ

これ等に於て重要な句となつてゐる「聲のみ霞む」「春はかへらぬ」や、まして「影も加はる月のさやけさ」と云ふ如き發想が、彼にとつて形式化され概念化された死語乃至内容薄き辭句では無かつたのである。そこには、多分に彼の迷妄、謬見もあつたらう。併し八十年間、さうした歌道に精進しつゞけた事實は、彼の詩の價値を決定する上に、沒却するわけにゆかない。後の蘆庵（別項）は、彼の「寄歌述懷百首」によつて、正しい立脚點を始めて捉へ得たと告白してゐる（年並草參照）。

【參考】年並草○野史○近世畸人傳○長春隨筆○翁草　〔齋藤（清）〕

柴影（しえい）　國文學者・俳人【姓名】藤井乙男【俳句流派】日本派【閲歴】明治元年七月十六日兵庫縣洲本町に生る。第三高等學校を經て東京帝國大學國文學科に入學し、同二十七年卒業。三十一年第四高等學校教授となり、四十一年第八高等學校教授に轉じ、四十二年京都帝國大學文科講師、やがて教授となり、四十五年文學博士の學位を受け、同職にあること二十年、昭和三年七月停年申合せによつて退職し、同年十二月名譽教授となつた。川寺境内西行墳墓の側【學統】靈元院御門下の武者小路實陰の弟子で、武者小路公野・柘植知清・高松重季・蓮阿等と同門の關係になつてゐる。【閲歴・人物】安藝國廣島に生れ（藪路説は根據がない）、詠歌の趣味を有した父を持ち、彼を愛する兄弟に囲まれてゐた。この境

現在は專ら著述に從つてゐる。俳歴としては大學在學中、正岡子規と同科一級上の先輩であつた關係で句作に入り、金澤に轉任後は、同地の北聲會を指導して盛んに句作し、北國新聞俳壇の選者ともなり、同俳壇の選句集「燕ずし」が刊行された。京都に轉任後も時々作句を各種の雜誌に發表した。昭和三年十二月に京大退職記念として知友門弟に配布した詞華集「かきね草」一卷には約一千の句が收められてゐる。句は優艶の調に洒脱滑稽を加へた風格を具へてゐる。【編著】集林子評釋〇近松門左衞門〇俗諺論〇諺語大辭典〇江戸文學研究〇江戸文學叢說　〇諺の研究（俗諺論の增訂改題）〇風俗文選通釋等。外に近松全集十五卷（朝日新聞社刊）の編纂がある。　〔石井〕

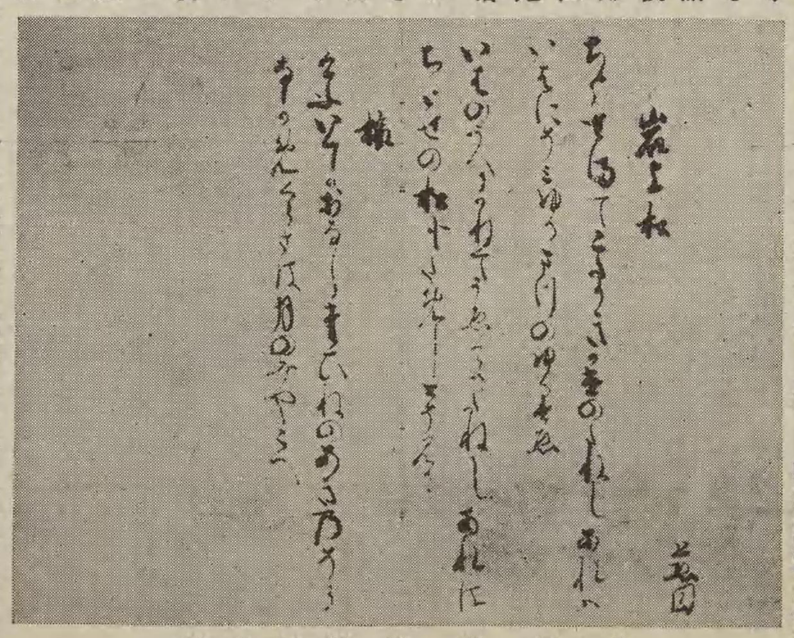
是亦樓雜抄（しえきろうざつせう）　隨筆　八卷　寫

【著者】淺井輙（傳未詳）【解說】漢文の隨筆で漢語の字義・名謂等に係る記事、殊に動植物に屬する名義の解などが多い。その他考據に關する雜說もある。後半は支那成書の抄錄に外ならぬ。　〔和田〕

慈圓（じえん）　歌僧　【姓】藤原　【初名】道快　【別號】吉水和尙　【諡名】慈鎭　【生歿】久壽二年四月五日に生れ、嘉祿元年（一八八五）九月二十五日寂。享年七十一（皇代曆には七十三歲寂とす）。【墓所】「雍州府志」等の諸書に、京都丸山安養寺の吉水房（現在智恩院境內）附近に慈圓の塔のあつた事が見えてゐる。【學統】父忠通や兄兼實より直接授けられたこと勿論だが俊成や西行等との私交もあつて、その方面よりも歌道を受けたらしい。【閱歴】久壽二年、時の關白忠通の第六子として生誕、併し同腹の兼實から云へば第三子位であつたらしく、後年は時に入滅であつた。四度に歴任した忠通は溫厚文雅の點に於て代表的人物で、詩文に令名があつたことは勿論、書道に於ては法性寺流（別項）の祖と崇められるに至つてゐる。慈圓は十歲の時、父の薨去にあひ、その翌年法道に入るべく叡山に登り、覺快に師事したが、十四歲冬出家し、明雲の戒を受けた。公家の子弟にして出家するは、慈圓の兄弟にすら四五人もあり常事であるが、當時武家の勢力、公家を壓し來る情勢に於て、公家が法界に途を選ぶことは、却つてその宜しきを得た方法であつた。「華頂要略」に詳かなるが如く、入道後の慈圓の運命は甚だ順調であつた。法性寺座主（治承二年）、法印（養和元年）、靑蓮院にあつて無動寺その他諸寺の管轄（壽永元年）、平等院執印（文治二年）等を經、建久三年には權僧正天台座主（第六十二代）となり、同時に政治上の權力も增大していつた。これは同腹兄の兼實が關白となつたのにもよるが、天資聰明な慈圓は、法界の人として或は江文寺百日參籠と云ひ、或は無動寺千日入堂といひ、敎學の精進深く、後鳥羽帝の元曆元年には、護持僧として延命法を修する榮譽をも受けたのである。即ち後白河法皇のために藥師法を修し（文治三年）、後鳥羽帝のため金輪法を修し（建久元年）、中宮御安產の祈禱を修するに及び（建久四年）、益々宮廷の御歸依を深くした。慈圓は又關東の武家（頼朝）との親密をも絕えず企圖

知足院忠實―法性寺忠通―
- 基實（母國信女）
- 基房（同右）
- 兼實（母仲光女、北政所女房加賀）
- 兼房（同右）
- 惠信（母基信女）
- 慈圓（母同兼實母）
- 信圓（母不明）
- 覺忠（母不明三井長吏）
- 最忠（母不明延曆寺法師）
- 聖子（母宗通女崇德院后）
- 育子（母顯俊女二條院后）
- 呈子（母顯隆女近衞院后）

とした。當時兼實に相對し、通親の勢力が他にあつたが、建久七年、土御門院の踐祚と共に外戚としての權力を振ひ、遂には兼實の關白辭退と云ふ事實をすら招致せしめ、慈圓もこれと共に一度天台座主の地位を奪はれてしまつた。が、よくその傳に引かれてある如く四度座主となり（建仁元年―同二年、建曆二年―同三年、建保元年―同二年）、その外に平等院檢校といひ（建仁二年）、四天王寺院別當といひ（承元元年）、競つて諸方より主座に迎へ入れられた。彼が叡山に入るや一山忽ち靜謐に歸し、恰も法王廳に於ける法王卽位の觀すらあつた。かくて彼は、兄兼實・兼房すべて他界した後、大僧正として建保六年（時に六十四歲）には牛車のまゝ宮中の出入を許可され、一世の信任と輿望を繫ぎ得たのである。彼の法系は諸流兼學でかの法然上人に圓頓戒をすら受けてゐる。歌人としての慈圓に就いては樣々の逸話がある。彼が法界に身を入れながら歌道に執心深いのを憂ひ、當時、奈良一條院門主であつた一弟が屢々これを諫めたが、「皆人の一つの癖はあるぞとよ われには許せしきしまの道」と云ふ一首を見て、その以後、諫めることを斷念したと言ふ一話、また密敎の奧義を僧西行にただすと、歌道を學べと敎へられ、愈々歌への執心を深めたと言ふ一話、その典故の正否は別として何れも彼と歌道との關聯する深さの一端を察するに足り得る。從つて彼の若年時の作は殆ど知られず、年齡の明瞭なものは文治以後、即ち三十歲時代からであるが、驚くべき多作者で、百首歌を次々に送り出してゐる。かの「千載集」に採られた「おほけなく浮世の民におほふかなわが立つ杣に墨染の袖」といふ作は、實に三十三歲當時の詠である。「千載集」に八首だけ選入された彼は、「新古今集」撰定に當り九十一首選入の多きを示し、歌數の點では西行の一位に對し准位を占め得た。彼が顯職にあつて忙中よく心の餘裕を存してゐたことは、實にこの詠歌の世界あつたからによると言ひたい。厭離百首（文治三年及び承元三年の兩度に亘る）の如き、彼の半面的氣質を露呈したもので、必ずしも口戲でないと思ふ。家集に多き會利報恩講詩歌會の催、また諸社法樂歌の如き、當時の流行とは云へ、彼と歌道との關聯



慈圓筆蹟（慈圓詠草）

を知る上に同樣な暗示を與し得るであらう。定家の子爲家が歌才乏しきを恥ぢ脫俗せんとしたのを、彼が諫め止めて大成せしめたと云ふは貞應元年（六十八歳）のことに屬する。その前年承久三年頃より老病が發してか、有馬溫泉に入湯治療などしてゐたが、天命を悟るところあつてか、その療養を斷念し、ひたすら信佛に凝つていつたと云ふ。當時、近江東阪本大和庄の小島坊に隱遁してゐたが、遂にその一坊で寂した。慈鎭と云ふは、寂後十三年朝廷からの諡號である。

【著作】「野守鏡」や「古今著聞集」に從へば、彼は聲明また書道にも優れ、それ〴〵遺績の大きなものも存するやうであるが、藝道に於ては、やはり歌を以て尤とする。「千載集」以下各勅撰集に選入されてゐることは勿論、「拾玉集」（別項）の如く、比類少い大家集を傳へてゐる。〔歌集〕「無名歌集」、寫一卷「慈鎭和尙詠」とも名づけ、刊本に洩れた歌を輯めたもの、圖書寮に一本がある。○慈鎭和尙自歌合（群書類從二一八）、慈圓の自作に良經及び俊成の作を配せしめ釋阿の判を乞うたもので、大比叡十五番、小比叡十五番、聖眞子十五番、八王子十五番、客人十五番、十禪師十五番、三宮十五番計百五番であるが、これは天下の靜寧ならんことを願ひ、承久三年それ〴〵の神殿に收め祀つたものである。○鷹百首（群書類從三五七）、「かすめても鷹はしら尾の曙に空とぶ鳥の目路近くなる」を卷頭とする外に、類例多き詠鷹の歌集である。その他個々寫本で傳はつてゐるものに、「大僧正百首」（四季百首とも）「春日社等奉納慈鎭和尙百首」等の百首歌がある。〔其他〕和歌以外に、今樣が四首、「拾玉集」の卷五に遺されてあり、その中、「春の彌生の曙の」の一首は、特にひろく世間に喧傳されてゐる。次に、文章として和歌關係の序跋類數篇は、同じく「拾玉集」中に散在してゐる。しかし問題とされるのは「愚管抄」七卷と「閑居友」二卷（各別項）の二書で、著者の慈圓なるか否かにつき、古來定說を見ない（別項參照）。その外に、「色葉和難抄」（別項）寫十卷がある。なほ敎學上の著作は省く。【歌風】慈圓の歌は、その法門の榮譽に比し、世評は餘り高くない。併し後鳥羽上皇の「御口傳」の中にも、當世の殊勝歌人として「天炊御門前齋院、故中御門攝政（良經）、吉水大僧正（慈圓）」の三人を擧げてゐ給ふのみならず、慈圓の調べを「おほやう西行がふり」とまで推賞して居られたことが分る。なほ連歌師として名ある兼載が、定家の言として記錄してゐるものの中に、「慈鎭西行などは歌よみ、その外はうた作りなり」と云ふ一節もある。當時歌は超現實的の文人精神と共に、益々技巧本位に向ひ、速吟、修辭の練達乃至表出の瀟洒と云ふ類の條件が殊の外重視された。定家などが熱中した連歌趣味が、抑も歌道のこの一角から派生して出たもので、當時の歌人で多少ともこの傾向を持たぬものは絕無と云つてよい。慈圓はこの方面に於ては、寧ろ西行以上の天才であつた。「拾玉集」には、速吟の例が幾つも揭げられてゐる。

照る月の光とともに流れきて音さへすめる山川の水（續拾遺）

我たのむ七の社の夕たすきかけても六の道にかへすな（自讚歌）

あとの作は自讚歌の一つで、慈圓の得々たるところが忍ばれるやうな作である。而も、

吉野山なほしも奥に花さかば又あくがるゝ身とやなりなむ（新勅撰）

山里に契りし庵や荒れぬらむ待たれんとだに思はざりしを（自讚歌）

これ等には、「山家集」そのまゝの調べが出てゐる。その渾身が歌になりきつて言々句々歌となつて口を衝いて出たものでもあらう。ここには殊更、西行と並稱さるべき彼がある。

春の田の苗代水をまかすればすだく蛙の聲ぞ流るる（風雅）

岡のべの里の主人をたづぬれば人は答へず山嵐の風（自讚歌）

而も、かうした表現法に及ぶと、漸くその意識的技巧が露出してくることが分る通り、彼が歌その物に對する態度は終始「遊び」に近かつた。了俊の「和歌所へ不審の條々」と稱するものの中に、珍しい歌例として、慈圓の「しげりあふ靑き紅葉の下すゞみ暑さは蟬の聲にゆづりて」と云ふ一首を抽出してゐるが、何と云つても俳諧體に傾きすぎたものと思へる。

【參考】明月記○野槌○門葉記○天台座主記○華頂要略○諸門統譜○樵談治要○合類節用集○柳葉雜筆○本朝高僧傳○百人一首一夕話○尊卑分脈○大日本史料五ノ二○雜誌「わかたけ」第十五卷○雜誌「歌學」第二卷○慈圓傳（彰考館文庫等）○慈鎭和尙風卷景次郎（水甕、新古今研究號）〔齋藤（清）〕

慈延（じえん）　歌僧　【號】大愚・吐屑庵【生歿】寛延元年に生れ、文化二年（二四六五）歿す。享年五十八【閲歷】天台宗の僧で、佛理を研究して大智識であつた。後、世の俗僧と共に交はることを恥ぢ隱遁した。その後爲村の門に入つて、和歌の道を究め、遂に小澤蘆庵・伴蒿蹊・澄月と共に、和歌の四天王と稱せらるゝに至つた。澄月とは親しく交り、彼の俊成や西行等との私交もあつて、その方面よりも歌道を受けたらしい。【閲歷】久壽二年、時の關白忠通の第六子として生誕、併し同腹の兄實から云へば第三子位であつたらしく、後年は時に入談であつた。四位に歷任した忠通の兄兼實より直接指導にあられたと久論たが

僧として延命法を修する榮譽をも受けたのである。即ち後白河法皇のために藥師法を修し（文治三年）、後鳥羽帝のため金輪法を修し（建久元年）、中宮御安產の祈禱を修するに及び（建久四年）、益々宮廷の御歸依を深くした。慈圓は又關東の武家（頼朝）との親密をも絕えず念慮

話、また密敎の奥義を僧西行にただすと、歌道を學べと敎へられ、愈々歌への執心を深めたと言ふ一話、その典故の正否は別として何れも彼と歌道との關聯する深さの一端を察するに足り得る。從つて彼の若年時の作は殆と知られず、年時の明瞭なものは文治以後、即ち

實にこの詠歌の世界あつたからによると言ひたい。厭離百首（文治三年及び承元三年の兩度に亘る）の如き、彼の半面的氣質を露呈したもので、必ずしも口戲でないと思ふ。家集に多き會利報恩講詩歌會の催、また諸社法樂歌の如き、當時の反映とは云へ、彼と歌道との關聯

「和歌僧隣抄」には序を書いてゐる。また桂園の名流木下幸文は、初め慈延に學んだのである。【業績】「慈延和歌聞書」「隣女語言」「二十一代集概覽」等の著書がある。隨筆「隣女語言」は、僧契沖の歌學を非難したもので、澄月が同じ非難を同じ契沖に加へてゐるやうに、堂上派の立場から、露骨で賤しいと新興の歌學を攻擊したのである。慈延は、漢學にも精しく、博聞多識であつた。門下の橘春暉は、「師の詠歌におけるや、淸新況味を詠みて漢學を兼ね備へたる、實に此道の宗匠なり」と言つてゐる。〔羅田〕

紫煙草舍（しえんさうしや）　詩歌結社【成立】第一期、大正五年七月――同六年九月。第二期、大正七年一月――同年九月【解說】北原白秋主宰の紫煙草舍は、巡禮詩社を改稱したものである。その第一期は、北原白秋の東京府南葛飾郡小岩村三谷の生活當時の事に屬する。その假寓の名であつたのを結社の名とし、機關誌「煙草の花」を刊行したが、二號で中絕した。白秋は大正六年六月上京、動坂に移るや、九月「紫煙草舍解散の辭」を舊門下の繼承する短歌雜誌「曼陀羅」創刊號に揭げて、一旦門下を解散し、彼は單に顧問としてこれに臨んだ。第二期は「曼陀羅」同人が「紫煙草舍」の名と、雜誌「ザムボア」（別項）の名を繼承したが、その第二期の舍風が初期の精神に反し、繼承の本義を忘れたため、白秋はこの名義の返還を迫り、遂にこれを破棄した。而して「曼陀羅」改稱の「ザムボア」は愈々九月に廢刊、その同人等は雜誌「秦皮（とねりこ）」を創刊した。〔北原〕

鹽井雨江（しほゐうかう）　詩人　【本名】正男【生歿】明治二年、但馬國豐岡に生れ、大正二年奈良で病歿した。享年四十五。【閲歷】明治

二十九年、東京帝大國文學科卒業、地方中學より日本女子大學校、奈良女子高等師範學校等に歷任した。擬古派詩人として起ち、國文學者として終つた。【著作】明治二十七年刊、スコット原作「湖上の美人」で名を知られ、「花紅葉」(別項)、「暗香疎影」等の美文韻文等の外に、「香川景樹」「新古今和歌集詳解」等がある。【批評】「湖上の美人」(別項)の七五調譯に幽婉の筆致を試み、擬古派詩人中隨一の詩才として「村時雨」「磯の笛竹」「深山の美人」等の佳篇を出し、野花美の楚々として人を動かす淸婉さを稱されたが、その古雅な語の自由な驅使以上に未來性がなかつたため、その後の進歩を見ずに終つた。

【參考】明治文學史 岩城準太郎〇明治大正詩史 [日夏]

汐汲 しほくみ 所作事 「松風」を見よ。

鹽尻 しほじり 隨筆 百卷 【著者】天野信景 【名稱】開卷第一に、「鹽尻の形」と題した一節があるのに據る。【諸本】著者の稿本は、もと千卷に近かつたと云ひ、或は五百卷或は三百卷などと云はれるが、原本は夙く散佚して中途未了の謄本のみが世に傳はつた。著者逝去後五十年の天明二年、門人紀方舊が書賈の求めにより、稿本を整理して考訂本百卷を作つた。今內閣文庫所藏の一部がそれらしく思はれる。異本で同文庫並に他の圖書館等に在るものに、七十卷本・五十五卷本・五十册本・四十五册本等の諸本があつて、內容に各々出入がある。その中黑川眞賴翁所藏の五十六册本は曾て甫喜山氏の我自刊我書本に收められたが刊了に至らないで廢せられ、その後、明治四十年井上頼圀・宝松治雄所校の一部〇一冊が帝國博物館から出版された。史籍の外語文獻本に採つたもので、比較的佳本であるから、さし當り底本としてよいであらう。この解題も同本に據つて置く。【解說】隨筆書類中、神澤貞幹の「翁草」(別項)と並んで卷帙浩瀚の稱を得たもので、編述の時代の早いのと內容のすぐれてゐるのとで、隨筆中の最先位を占めてゐる。元祿・寶永・正德・享保の約四十年間に、著者が和漢古今の文籍涉獵の暇に、その會心の事柄を記載し、考據を明かにして意見を添へ、以て他日の參考に資せんとしたもので、その主とする所は、有職故實の學に在つたやうであるが、汎く史傳・地理・言語・文學・制度・宗教・藝術・博物・敎育・風俗等に亙り、且つ視聽に入つたもの、感想に浮んだものの總てを載錄したかの觀がある。所々に挿圖があるが、この中、卷七十・八十一・八十五の三卷は、特別の文篇で、前後諸卷とは體を異にして居り、正しくは單行すべきであるが、編者(紀方舊)が强ひてこれに收めたものであらう。帝國書院本には下卷に附錄索引があり、上卷に著者自畫蘭船の圖、下卷に著者の筆蹟二種(一種は鹽尻原稿の一部、一種は避子說)があり、又松本愛重博士の序がある。

【著者小傳】信景は名古屋藩士、字は子顯、通稱源藏、のち宮內、また治部と云つた。貞享元年二十四歲で父の後を承けて藩の寄合職となり、藩で尾州の國志編纂の擧があつた時、その事に從つたが、事業は中途で廢された。しかし寶曆中「張州府志」の官撰が始まつた時に、信景の稿本は、大に據るところとなつたと云ふ。正德五年、鐵砲頭に進み、享保八年致仕、同十五年、家を長子に讓り、剃髮して信阿彌、又白雪翁と號した。同十八年九月八日歲、享年七十三。人となり溫厚にして沈く學を好み、宏博を以て聞えた。文雅洒落を以て生涯を一貫し、著述が甚だ多く、而も一部亘册を成すものがあるが、概ね門外に出さなかつた。

鹽原多助一代記 しほばらたすけいちだいき 人情噺 【作者】三遊亭圓朝 【成立】明治九年より同十一年 【刊行】「牡丹燈籠」に次いで速記になり、明治十八年若林玵藏の速記法研究所から出版。圓朝全集第十二・十三卷所收 【題材】柴田是眞から聞いた本所の炭商鹽原太助の事實譚にヒントを得た噺で、圓朝はそのために太助の故鄕上州沼田下新田へ屢々旅行したりして苦心した。但しこの作の根本の趣向は、「越後傳吉」に出てゐる。圓朝は、初め怪談にする考へだつたといふが、結果は立志談になつた。

【梗概】肥前島原戶田伊豫守の家臣鹽原角右衞門は浪人して江戶へ下り、流浪の末上州に轉住、妻おせいと伜多助を抱へて國元へ歸參出來る日を待つてゐた。そのうち歸參は叶ふ事になつたが、それにつけても先立つものは金だつた。家來の岸田右內は江戶で小間物屋を開いてゐたが、主人のためその金を調達するのに骨を折つた。と、こゝに同じ上州沼田下新田に鹽原角右衞門といふ百姓があつた。或る日馬市から南部八ノ戶產の黑といふ馬を買つて歸る途中、物奪に襲はれた。偶々獵に出てゐた浪人の角右衞門は、それと見て發砲し、百姓角右衞門の危難を救つた。が、近よつて見るとその物奪は自分のために金の奔走をしてゐる岸田右內だつた。二人の角右衞門は名乘り合つたが、二人は同姓同名の上、先祖も一つであることが分り、とゞ百姓角右衞門は浪人角右衞門の伜を貰ひうけ、黑と共に下新田のあか家へ連れ歸つた。その後、百姓角右衞門は江戶へ出た時、お榮といふ娘を連れ戻り、行末多助に配はすつもりで養つた。ある日、百姓角右衞門は上州保泉ヶ原で一人の女の危難に遭つてゐるのを助けて歸ると、この女は岸田右內の女房おかめだつた。そしてお榮は、おかめが夫右內を尋ねて鴻の巢まで來た時、立場茶屋で誘拐されて行方知れずになつたおかめの實の娘だつた。女房に先へ死なれた角右衞門はおかめを後妻に直した。おかめが浪人角右衞門の妻おせいの妹であることも分つた。月日は經つた。多助はお榮を女房にして働いた。角右衞門は死んだ。間もなくそこへ現はれたのは、原丹次同じく丹三郎といふ親子の侍で、この二人は土岐伊豫守の藩中だつたが、雨宿りが緣になつてしげ〳〵鹽原の家へ出入りするやうになつた。丹次はおかめ、丹三郎はお榮と、それ〴〵不義をするに至つた。多助はそれを見て見ない振りをしてゐたが、丹次親子がおかめ親子と共謀して自分に危害を加へる企みのあるのを知り、十五夜の月の明るい晩、永い馴染の黑と別れて密かに江戶へ出奔した。懷中には六文の錢しかなかつたが、その途中、道連小平、繼立仁助といふ二人の惡者に衣服を奪はれ、利根川へ投げ込まれた。辛うじて命だけ助かつて、多助は江戶へ着くとすぐ、戶田能登守へ仕官の實父角右衞門を訪ねたが、父は國元へ歸つて江戶にはゐなかつた。奉公しようにも請人がなく、路頭に迷つた擧句、昌平橋から身を投げようとした。その時通りかゝつたのが神田佐久間町の薪炭問屋山口屋善右衞門で、多助はこの人に助けられ、その店で使はれることになつた。多助は勿論骨身を惜しまず働いた。一日、戶田能登守の家中の侍の紙文を持つて行つたとき、實父角右衞門の家の支圖に立つたが角右衞門は逢はなかつた。實父にすると養父に對する義理があつた。發奮した多助はそれ以來、いよ〳〵身を粉にして働いた。そして自分一流の經濟論を編み出した。それは金に使はれずに金を使ひこなすといふことだつた。この議論を空樽買の久八にしてゐるのを、ゆくりなくも津輕家の用達藤野屋杢右衞門が聽いて感心し、是非娘のお花を多助に貰つてくれと申込んだ。主人から分けて貰つた中取、角右衞門女房おせい・後家おかめ（阪東秀調―先代）、百姓角右衞門・空樽買久八・妙岳尼實は又旅おかく（尾上松助）、原丹三郎・圓次郎（尾上菊之助）、嫁お榮・娘お花（尾上榮三郎―後の梅幸）、藤野屋杢右衞門（阪東家藏）、多助・道連小平（尾上菊五郎―先代）等。

この興行以來、この作は都下の大小劇場に何十回となく上演された。この外に、「鹽原多助經濟鑑」の名題で、別の脚色がある。明治二十四年、中村鴈治郎がこれによつて大阪で上演かに京傳の「通言總籬」（別項）の影響を受け、吉原各妓樓の特色ある用語を穿たんとしたものである。【著作】【洒落本】南門鼠（寬政十二年）（別項）〇匂ひ嚢（享和元年）〇三體誌（享和二年）（別項）〇鼠歸（同年）〇五大力（同年）〇白狐傳（文化元年）等。【黃表紙】男一面髭拔龜鑑（寬政十二年）〇見物左衞門（同年）。 [山崎]

栞 しをり 「蕉風」を見よ。

子音 しいん 「子音」を見よ。

字音 じおん 國語學・漢語學 【名稱】漢字の大部分を占めてゐる。又、漢字の音に基づいて日本で作つた漢語もある（漢語參照）。

【字音の構造】個々の漢字の字音は、通例支那語の一單語に相當するもので、一音節から出來てゐる。これは聲と韻との二つの部分から出來てゐると見る事が出來る。聲は韻の前に附く部分で、子音一つか又は二つ複合したものである。但し時には全然無いこともある。韻は音節の本體をなす部分で、母音一つ又は二つ、或はその後に子音の附いたものから出

行つたとき、實父角右衞門の家の支圖に立つたお角右衞門は逢はなかつた。實父にすると養父に對する義理があつた。發奮した多助はそれ以來、いよ〳〵身を粉にして働いた。そして自分一流の經濟論を編み出した。それは金に使はれずに金を使ひこなすといふことだつた。この議論を空樽買の久八にしてゐるのを、ゆくりなくも津輕家の用達藤野屋杢右衞門が聽いて感心し、是非娘のお花を多助に貰つてくれと申込んだ。主人から分けて貰つた暖簾に、黑を記念するため馬の轡をつけて店開きをした多助は、その日同時にお花を嫁に迎へた。多助の案出した炭のはかり賣があたつて店は繁昌した。が、一方多助が江戸へ出奔したあとの鹽原の家では、早速丹三郎をお榮の婿に名主の仲介で式を擧げようとした。分家の太左衞門がその席へ乘り込んで、その不都合を詰問してゐると、厩にゐた黑が俄に狂ひ出して、お榮と丹三郎を嚙み殺した。その騷ぎの中に火を失して家は灰になつた。おかめと丹次は二人の間に生れた不義の子を抱いて百姓達に追はれた。暫く上州の四萬溫泉に隱れてゐたが、そこを出て横堀の庵室を訪ねた。そこにはお榮を嘗て鴻の巢で誘拐したおかくといふ女と、その伴の道連小平とがゐて、二人は金を奪はれ、衣服を剝がれた上、丹次は殺された。おかめは子供を連れて江戸へ流れついた。そして偶然多助にめぐりあつた。多助はおかめ親子を引取つて情けを加へて養つたので、おかめは善心に立ち返つた。

【興行】名題「鹽原多助一代記」（日本戲曲全集三十二卷所收　明治二十五年一月、東京歌舞伎座。脚色者は三代河竹新七。

〔役割〕浪人角右衞門・原丹次（市川八百藏―後の中車、角右衞門女房おせい・後家おかめ（澤村寿調―先代）、百姓角右衞門・空樽買久八・妙岳尼實は又旅おかく（尾上松助）、原丹三郎・圓次郎（尾上菊之助）、嫁お榮・娘お花（尾上榮三郎―後の梅幸）、藤野屋杢右衞門（阪東家橘）、多助・道連小平（尾上菊五郎―先代）等。

この興行以來、この作は都下の大小劇場に何十回となく上演された。この外に、「鹽原多助經濟鑑」の名題で、別の脚色がある。明治二十四年、中村鴈治郎がこれによつて大阪で上演した。〔久保田〕

鹽屋艶二（しはやえんじ）　洒落本作者　【本名】未詳【生歿】未詳【別號】紫色主・鹽屋色主・鹽屋主人・駑々閣【閲歷】明かでないが、紫色主は狂歌師の號であると考へられるし、芝晋交・七珍萬寶等と交際のあつた事から見て、ほぼ時代と生活が推測出來る。文壇に現はれたのは寛政十二年で、洒落本「南門鼠」（別項）、黄表紙「男一面髭拔龜鑑」を發表してゐる。爾來數種の洒落本を發表したぎりで文壇から名が消えた。彼の名聲を文學史的に高からしめたのは、「南門鼠」が風紀問題で絶版を命ぜられたからである。その作は比較的精細で、特に品川通であつたことが分る。「戲作者小傳」に依れば、書に巧であつたとのことである。初め品川に住み、後、赤坂葵坂に住んだことは、著書で推定されるし、著書の序で職業が或は染物屋ではなかつたかと想像される。號の艶二は、山東京傳作「江戸生艶氣樺燒」及び「通言總籬」の主人公艶二郎から採つたので、自惚の代表人物と考へられたのだ（鹽屋も、明和安永頃からの流行語で自惚を意味する）。これを以て見ても、彼が京傳に私淑したことは明かで、彼の著「匂ひ嚢」（享和元年）の如き、明かに京傳の「通言總籬」（別項）の影響を受け、吉原各妓樓の特色ある用語を穿たんとしたものである。【著作】〔洒落本〕南門鼠（寛政十二年）（別項）○匂ひ嚢（享和元年）○三體誌（享和二年）（別項）○鼠歸（同年）○五大力（同年）○白狐傳（文化元年）等。〔黄表紙〕男一面髭拔龜鑑（寛政十二年）○見物左衞門」（同年）。〔山崎〕

栞（しをり）　「蕉風」を見よ。

子音（しおん）　「子音」を見よ。

字音（じおん）　國語學・漢語學　【名稱】漢字音とも、單に音とも。古く「こゑ」とも。「もじごゑ」とも。【解說】日本に於ける漢字の讀み方の一種で、支那に於ける漢字の讀み方を傳へたもの。訓（別項）に對する。廣義では、支那に於ける漢字の讀み方、及び他の諸國（例へば朝鮮・安南・日本など）に於て、支那に於ける漢字の讀み方を學んで傳へたもの。漢字は支那の言語を寫すために作られ用ひられたもので、その支那に於ける讀み方は、即ち支那語の音である。然るに他國人がこれを學んだ場合には、その國語に化せられて、もとの音とは變化するのが常であり、學び傳へてから多くの年代を經れば、更に一層の變化を來すものである。それ故、日本の字音も、決して支那の音とは同じでなく、かなりの變化を經てゐる。しかし、古代の支那語の發音から源を發してゐるものであるために、古代支那語の研究には、一の有力なる資料を供するものである。我が國では、漢文を全部字音で讀む事は古く絶えたらしく、訓讀の際必要な語のみ字音で讀む事になつてゐる。しかし佛經は全部字音で讀む習慣が殘つてゐる。字音で讀む語は、即ち漢語であるが、これが漢文訓讀語から日本の文語口語に入つて、日本の外來語の大部分を占めてゐる。又、漢字の音に基づいて日本で作つた漢語もある（漢語參照）。

【字音の構造】個々の漢字の字音は、通例支那語の一單語に相當するもので、一音節から出來てゐる。これは聲と韻との二つの部分から出來てゐると見る事が出來る。聲は韻の前に附く部分で、子音一つか又は二つ複合したものである。但し時には全然無いこともある。韻は音節の本體をなす部分で、母音一つ又は二つ、或はその後に子音の附いたものから出來てゐる（「韻」參照）。韻は必ず平上去入の四聲（別項）の一つをもつてゐる。これをその漢字の有する四聲として、平聲の字、入聲の字など呼ぶ事がある。同じ漢字に、いくつかの異なる字音がある事があるが、又同音でありながら、意味の違ひに隨つて、四聲のうち二つ又は三つをもつてゐるものもある。

【字音の種類】日本の字音には、普通吳音・漢音・唐音の三種あつて、同じ字に三種の違つた讀み方がある事がある（例、「行」吳音ギャウ、漢音カウ、唐音アン。「下」吳音ゲ、漢音カ、唐音ア）。漢語は熟字（熟語）の場合には、上の字も下の字も同じ種類の字音で讀むのが原則であるが（例、「神祇」ジンギ共に吳音、「神妙」シンベウ共に漢音）、必ずしもさうでなく、殊に通俗化したもの、又は日本で作つたものに例外が少くない。〔吳音〕古く對馬（つしま）音ともいひ、平安朝に正音（即ち漢音）に對して和音ともいつた。最も古く傳へた字音で、支那と直接交通しない前に、朝鮮から支那南方の音を傳へたものらしい。佛經は吳音で讀むのが普通であり、漢語も、古くから日本語の中に用ひられて日本化したものには吳音が多い。普通の字書類に見える吳音は、佛經讀誦の音と

少し違つた點がある(其・欺・棊を佛經ではゴと讀むが、字書にはキとあるなど)。これは佛經の方が由來が古いのであらう。〔漢音〕平安朝に正音ともいつたもので、支那と國交が開けてから、隋唐時代の正しい發音として傳へたもの、支那北方音に基づく標準的發音であつたらしく、隋以來の支那の韻書に一致する。後世までも漢文を讀む時の正しい音として用ひられた。〔唐音〕宋以後、時々傳はつたもので、古くは宋音といつたが、室町・江戸時代に明清の音を傳へてからは唐音といふ事になつた。概して支那南方音を傳へたものである。今日では、禪宗で或る經文を讀む時に用ひる外は、特殊の漢語の讀み方として用ひるに過ぎない。〔その他の字音〕推古時代の萬葉假名として用ひられた漢字の音や、天台・眞言で讀誦する或る種の經文等の音などには、今日の吳音・漢音、何れにも一致しないものがある。又、日本で作つた漢字を字音で讀む事があるが(「働」をドウ、「櫂」をクワンなど)、これは字音に擬して作つたもので、純粹の字音即ち支那語の音ではない。

【吳音・漢音と支那の字音】吳音と漢音は、幾分系統を異にするが、共に支那古代音から出たものであるから、これに近いと考へられる。隋唐時代の韻書に於ける支那語の音と比較すると、大體次の通りである。

(一)聲、即ち初の子音

k k' h	カ行音
g g	漢音カ行音、吳音ガ行音
ŋ	ガ行音
t d' t' d	タ行音
d d z	漢音タ行音、吳音ダ行音
n	漢音ナ行音、吳音ダ行音
p b' p' b	ハ行音
b v	漢音バ行音、吳音バ行音
m mŋ	漢音バ行音、吳音マ行音
ts ts' tʃ tʃ' s ʃ	サ行音
dz dʒ z ʒ	漢音サ行音、吳音ザ行音
j	ヤ行音
w	ワ行音
l	ラ行音
ʃʒ	漢音ザ行音、吳音ナ行音
(無)	ア行音、ヤ行音、ワ行音

(二)語尾の子音(韻の最後にあるもの)

ŋ	漢音ウ・イ、吳音ウ
n	ン
m	ム(後にン)
k	ク・キ
t	漢音ツ、吳音ツ・チ
p	フ

(三)韻。同一の韻に屬する文字必ずしも全部同一でなく、上の子音その他によつて異る場合が少くない。又字によつては例に合はないのもある。支那古代語の韻の發音については容易に定め難いものが少くない故、韻の名のみを擧げる(平聲の韻のみを擧げ、他は類推に任せる)。ーの下のアイウエオは五十音の段を代表する(例へば「ーウ」はウ段の音)、又ヤ行の假名は、各段のヤ行拗音を代表する(例へば「ーヨ」は「キョ」「ショ」「チョ」等)。

東・冬	漢音ーオウ、吳音ーウ(或はーオ)
鐘	漢音ーヨウ、吳音ーウ(或はーユ)
江	ーアウ
支・脂・之	ーイ
魚	漢音ーヨ、吳音ーオ
虞	ーウ
模	漢音ーオ、吳音ーオ(或はーウ)
齊	漢音ーエイ、吳音ーアイ(又はーエイ)
佳・灰	漢音ーアイ、吳音ーアイ、ーエイ(或はーエ)
皆・咍	漢音ーアイ、吳音ーアイ(又はーエ)
眞・臻	ーイン
諄	漢音ーイン(又はーユン)、吳音ーイン、ーユン、ーオン
文	ーウン(又はーオン)
欣	漢音ーイン、吳音ーオン(又はーイン)
元	漢音ーエン、ーワン(又はーアン)、吳音ーオン(又はーワン)
魂・痕	ーオン
寒・桓	ーアン
删	漢音ーアン、吳音ーアン(或はーエン)
山	漢音ーアン、吳音ーエン
先・仙	ーエン
蕭・宵	ーエウ
肴	漢音ーアウ、吳音ーエウ
豪	漢音ーアウ、吳音ーオウ
歌	ーア
戈	ーア(又はーワ)
麻	漢音ーア、吳音ーエ
陽	ーヤウ(又はーアウ)
唐	ーアウ
庚・耕	漢音ーアウ、吳音ーヤウ
清・青	漢音ーエイ、吳音ーヤウ
蒸	漢音ーヨウ、吳音ーヨウ(或はーオウ)
登	ーオウ
侯	漢音ーオウ、吳音ーウ
尤・幽	漢音ーイウ、吳音ーウ・ーユ
侵	漢音ーイム、吳音ーオム・ーイム
覃	漢音ーアム、吳音ーオム(或はーアム)
談・咸・銜	ーアム
鹽・添	ーエム
嚴	漢音ーエム、吳音ーオム(又はーエム)
凡	漢音ーアム(或はーエム)、吳音ーオム(又はーエム)

(四)四聲。漢音は韻書の四聲と一致するが、吳音は多くは一致しない。吳音の平聲は漢音の上聲去聲に當り、吳音の上去は漢音の平聲に當る事が多い。但し入聲は相違がない。

【日本漢字音の傳來及び沿革】〔最古の字音〕我が國に漢文が傳はつたのは應神天皇の時、「論語」と「千字文」とを百濟から奉つたのが歴史に見える最初である。その時百濟の阿直岐や王仁がこれを讀む事を敎へたのであり、その後、我が國で文筆の事を司つたのは、阿直岐や王仁の子孫なる文氏であつた。それ故最も古く傳へた漢字の讀み方即ち字音は、主として百濟に行はれたものであつたらうと考へられるが、百濟は支那の南朝と交通し、その文化を傳へた故、その發音は主として支那の南方音に基づくものと思はれる。この音は、今日の吳音の系統に屬するものである事は、推古時代の人名・地名を寫すに用ひた萬葉假名や、「古事記」などの萬葉假名が、大概吳音に一致し、又はこれに近いのによつて知られる。但し推古時代の數名に、漢音を、巳を、止を、トなどに用ひて、後の漢音にも吳音にも一致せぬものもあるのは、永く用ひられてゐる間に、新古を混じ、又多少他の系統のものをも交へたからでもあらうし、又今の吳音は、多分やゝ後になつて定まつたもので、太古のものとは多少の相違を生じたのでもあらう。その發音は百濟に入つても多少變じ、更に日本に入り多くの年月を經たので、一層變化したであらう。〔漢音の傳來〕推古天皇の時、支那との國交が始まり、以後、銳意支那本の漢字音は勿論多少日本化したものであるが、一旦日本化したものが、後に更に變化したものもある。遲くも平安朝末期にはあつた密雲を「ミッツン」、觀音を「クワンノン」といふ如き所謂連聲の現象は、果してこの中に入れてよいか不明であるが、「心」シムがシンとなり「歸」クヰがキとなり、「孝」カウと「功」コウとが同音となり、「京」キャウと「共」キョウと「敎」ケウとが同音となつた如きは、明かに後世の變化である。【備考】吳音を對馬音といふ。〔吳音の勢力〕漢音が用ひられた後にも吳音はなほ勢力を失はず、和音と稱して普通に行はれ、殊に佛經は古くから吳音を用ひて讀誦し諳誦したため、これを改めることは不可能であつて、ために今日に至るまで吳音を用ひる事となつたのであらう。これ等の漢字音は、次第に日本化したけれども、正しい發音としては、平安朝末期までも語尾のmnŋを區別し、クヰ・クエの音を存し、四聲を區別するなど、なほ原音に近い點を存してゐた。

字音假名遣 じおんかなづかひ 「假名遣」を見よ。

字音假字用格 じおんかなづかひ 語學書　一卷

【著者】本居宣長【刊行】安永四年正月自序、須賀直見の序を添へて同年同月刊行。同年春再版【諸本】寛政十一年の刊本もある。明治二十五年及び翌二十六年に活版本が出た。本居宣長全集卷四・增補本居全集卷九所收。また山崎美成が校正して跋文を添へた本(天保十三年刊)には三行分生圖、輕重等第圖及び字音

ヨ、止をトなどに用ひて、後の漢音にも吳音にも一致せぬものあるのは、永く用ひられてゐる間に、新古を混じ、又多少他の系統のものをも交へたからでもあらうし、又今の吳音は、多分やゝ後になつて定まつたもので、太古のものとは多少の相違を生じたのでもあらう。その發音は百濟に入つても多少變じ、更に日本に入り多くの年月を經たので、一層變化したであらう。〔漢音の傳來〕推古天皇の時、支那との國交が始まり、以後、銳意支那の文物を輸入するにいたつて、古來の字音とは系統を異にする、支那北方音に基づく隋唐時代の標準的發音が輸入せられ、朝廷でも音博士を置いて正しい發音を敎授させた。これが卽ち漢音であつたが、しかし、因襲久しき古來の吳音系統の音は容易に改まらなかつたと見えて、平安朝の初めには、屢々令を出して明經の學徒や僧侶に正音卽ち漢音を學ばしめられた。かくて、漢文の正式の讀方としては漢音を用ひることと定まつたのであるが、その漢音も、後、漢文が漸く衰へ、支那との交通が絶えるに從つて、次第に日本化したものと考へられる。〔一種の漢音の傳來〕平安朝の初、支那から傳はつた天台宗及び眞言宗に於ては、現代までも、日常讀誦する法文や經典に一種の漢音を用ひてゐるが、これは、當時支那に於て讀誦してゐたのをそのまゝ習ひ覺えて傳へたものと覺しく、その發音に於て、普通の漢音よりも、支那語に近いものがある。それ故、これこそ眞の漢音であると唱へるものもあるけれども、當時は唐の末期であつて、支那語の音が漸く變化した時代であるから、韻書の音とは違つた點があるやうである(勝・乘 稱・昇をシ、億・臆をイクと讀むなど)。〔吳音の勢力〕漢音が用ひられた後にも吳音はなほ勢力を失はず、和音と稱して普通に行はれ、殊に佛經は古くから吳音を用ひて讀誦し諳誦したため、これを改めることは不可能であつて、ために今日に至るまで吳音を用ひる事となつたのであらう。これ等の漢字音は、次第に日本化したけれども、正しい發音としては、平安朝末期までも語尾のmnリを區別し、クヰ・クヱの音を存し、四聲を區別するなど、なほ原音に近い點を存してゐた。〔宋音の傳來〕平安朝初期、支那との國交は絶えたが、その後も日本の僧侶や宋の商人の來往絶えず、ために宋以後の新しい音を學ぶ機會は多くあつた。殊に鎌倉時代に於ては禪宗が盛んであつて、日本僧が支那に渡つて禪堂生活をして歸るもの多く、支那僧の日本に來るものもあつて、宋元の支那音が傳はつた。當時これを宋音といつた。〔唐音の傳來〕室町時代には、幕府と支那との交が回復し、幕府の使節として、或は求法のために禪僧の渡明するものあり、江戸時代の初めには、明が亡びて僧侶儒者などが日本に歸化して、當時の音を傳へた。これを唐音といつた。當時の韻學者は唐音に注意し、漢吳音との比較を試み、その間に音轉換の規則を作つたりしたが、その規則によつて實際に無い唐音を作るものさへあつた。江戸時代の半以後、漸く唐音を學ぶもの多く、殊に江戸では荻生徂徠などの提唱によつて世に流行し、種々の支那語學書も出て一時甚だ盛んであつた。宋元以來日本人の往來したのは揚子江下流地方であり、江戸時代に於ても南京官話・杭州・福州・漳州等の音を傳へたのであるから、宋音・唐音はすべて南方音である。〔字音傳來後の音變化〕日本の漢字音は勿論多少日本化したものであるが、一旦日本化したものが、後に更に變化したものもある。遲くも平安朝末期にはあつた密雲を「ミツツン」、觀音を「クワンノン」といふ如き所謂連聲の現象は、果してこの中に入れてよいか不明であるが、「心」シムがシンとなり「歸」クヰがキとなり、「孝」カウと「功」コウとが同音となり、「京」キヤウと「共」キヨウと「敎」ケウとが同音となつた如きは、明かに後世の變化である。【備考】吳音を對馬(つしま)音といふのは、金禮信といふ人が對馬に來て初めて吳音を傳へたといふ說から出たのであらう。これに對して表信公といふものが筑紫に來て漢音を傳へたといふ說がある(共に安然の「悉曇藏」に見えてゐる)。表信公は奈良朝の音博士、唐人袁晉卿の誤かといふ。(韻・韻學・四聲・韻鏡參照)

【參考】漢字三音考 本居宣長○漢音正辨素眞○三音正譌 文雄○字音 萩野由之(國文論纂所收)○字音假字用格 本居宣長○漢字の形音義 岡井愼吾○漢字音韻提要 佐藤仁之助○假名源流考 國語調査委員會○文藝類纂 柳原芳野○古事類苑(文學部)○鎭西漢學史論 武藤長平(西南文獻史論)○鎭西に於ける支那語學研究 武藤長平(同上)○唐音考 中村久四郎(史學雜誌)○磨光韻鏡 文雄○漢吳音圖 太田全齋○韻鏡考 大矢透○支那音韻斷 滿田新造○中國聲韻學概要 張世祿○日臺大辭典 臺灣總督府 Z. Volpicelli, *Chinese phonology*. Shanghai 1896. ‖ S. H. Schaank, *Ancient Chinese Phonetics*. (T'oung Pao VIII, IX.) | H. Maspero. *Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang*. Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient. XX. 59.

字音假字用格 じおんかなづかひ 「假名遣」を見よ。

【著者】本居宣長【刊行】安永四年正月自序、須賀直見の序を添へて同年同月刊行。同年春再版【諸本】寛政十一年の刊本もある。明治二十五年及び翌二十六年に活版本が出た。本居宣長全集卷四・增補本居全集卷九所收。また山崎美成が校正して跋文を添へた本(天保十三年刊)には三行分生圖、輕重等第圖及び字音總論中の二圖を省略してある。【內容】字音の假名遣を定めたものである。字音の假名遣の紛れ易いものは、多くはその漢字の屬する韻により、又その入聲の字で知り得るが、辨別に困難なのは、ア行ヤ行ワ行の喉音三行の別であるとし、この三行の別を辨じて、三行のうちア行が根幹で、これにイが加はつてヤ行音となり、ウが加はつてワ行音となつたとした。次に「おを所屬辨」と題して、從來ア行にヲを、ワ行にオを置くのは誤りで、ア行にはオを、ワ行にはヲを屬せしむべきであるとして、古言・字音・悉曇等から證を擧げて論じてゐる(於乎輕重義參照)。次に「字音假字總論」と題して、假名遣は漢字の反切に關係のない事、假名遣は連用の音便に依つて轉ずると云ふのは誤りである事、イヰ、オヲ、エヱは「韻鏡」の開合と一致する事、字音假名遣と「韻鏡」との關係等を論じ、次に「いゐ之假字」「えゑ之假字」「おを之假字」「か行之假字」以下さ行、た行、な行、は行、ま行、ら行の假字、「濁音じぢずづ之假字」「韻のいゐ之假字」「下中のわ之假字」「韻のむ之假字」と標して漢字音の假名遣を示し、考證を付してゐる。【價値】字音の假名遣については、契沖・文雄・魚彥(各別項)を傳へた故、その發音は主として支那の南方音に基づくものと思はれる。この音は、今日の吳音の系統に屬するものである事は、推古時代の人名・地名を寫すに用ひた萬葉假名や、「古事記」などの萬葉假名が、大概吳音に一致し、又はこれに近いのによつて知られる。但し、[illegible]

等も研究してゐるが、專ら字音假名遣について研究したのは、本書が初めである。その意味に於て假名遣研究史上に一時期を劃するものと云ふ事が出來る。而して本書が學界に貢獻した最も大なるものは、おをの所屬を改めた點である。尤もその證明にはなほ不備な點も少くなかつたので、後に義門は、「於乎輕重義」(別項)を著してその不備を補つた。なほおを所屬の改正に就いて、本書よりも一年半前に脫稿した富士谷成章の「脚結抄」(別項)にも、おをの所屬が改めてあるので、その研究の前後に就いては、從來學界の一疑問とせられてゐたのであるが、「於乎輕重義」の義門の說、岡本保孝の說、「挿頭抄」におをの所屬を誤つてゐる點等から見て、おをの所屬改正の功は、宣長に歸すべきであらうと思ふ。さて本書は學界に貢獻した點も大きいが、その所說の誤つてゐる點も亦少くない。就中、大きな誤りは韻のんを凡て否定して、尹・允等をイム、神・信等をジム等とした點である。宣長は、「漢字三音考」「呵刈葭」(各別項)等に發表した說と同じく、我が古音にはンはなく、凡てムであると主張してゐたのである。而してこの誤りは義門の「男信」、政方の「傭字例」、寬蔭の「音韻假字用例」(別項)等で訂正された。

【參考】 字音假字用格及詞の玉緒の刊本につきて 龜田次郎(藝文一七ノ八)○おを所屬辨についての一疑問 同上(同二〇ノ七)　〔龜田〕

慈音尼(じおんに)　女流心學者　【姓名】 蕓葭慈音尼。本姓、俗名は不明。【生歿】 未詳。【學統】 石田梅巖門。【閱歷】 安政前後の人。父母の出自も不明であるが、八歲にして母を失つて京都遠柳山の白秀といふ尼僧の養子となつたが、その學力の卓越せに嫌らず、去つて彥根の正法寺に赴き、桃谷山寺に斷食して參籠したり、茶を斷つたり、三千佛を三日三夜に拜して刻苦したりしたが、得るところなく、最後に石田梅巖に就いて頓悟した。安政の初年、江戸に下つて心學の普及に從ひ、世人の誹謗誤解を受くるも意とせず、婦人の身を以て道のために盡し、同三年「道德問答」三卷を著した。尼は江戸で心學を說いた最初の人である。

【參考】 石門心學の研究 白石正邦　〔森〕

志賀(がし)　「神事物の謠曲」を見よ。

史海(しかい)　雜誌　【刊行】 明治二十四年五月創刊、同二十九年五月第二十六卷にて終刊。東京經濟雜誌社發行。【主筆】 鼎軒田口卯吉　【內容】 「完全なる歷史の體裁」には二種ある。一は「物質的卽ち有形的現象の變遷」と、「心理的卽ち無形的現象の變遷」とが「互に相感應することを示す」ものであり、他の一は「一人物を中心に立て、之を相手にして政治なり文學なり、其他萬般の事情を述べる」ものである。(前者は「切干體」、後者は「輪截體」と呼ばれた)といふ鼎軒一流の史論に基づき、主として自己の業績を發表するために刊行されたもので、鼎軒は先づ輪截體より始め、武內宿禰・藤原鎌足・藤原不比等及び三千代・聖武天皇・光明皇后・孝謙天皇・光仁天皇・坂上田村麿・最澄及空海・藤原園人・冬嗣・緒嗣・藤原良房・藤原基經・菅原道眞・藤原時平・平將門・花山天皇等を傳し、更に「切干體」に轉じて「上代(かみよ)」「藤原氏の盛時」「王朝の末」に及んだが、その頃鼎軒自身、政治界及び經濟界に於ける活動期に入つたため、歷史の研究から遠ざかることとなつて「史海」も廢刊した。傳じる所に「東京經濟雜誌」で、それに續く「源頼朝を論ず」「北條政子」「承久以後の鎌倉時代」その他の史論を發表した。「史海」には鼎軒の外に久米邦武博士の史論が載つたが、その他考證及び批評の欄があつて、前者は主として久米博士のそれを收めた。寄書家としては、吉田東伍・渡邊修一郎・饗庭篁村・田岡嶺雲・川上廣樹・西村兼文・森三溪・原抱一庵その他があつた。

【批評・影響】 黑板勝美博士は、「鼎軒田口卯吉全集」第一卷の解說に於て「先生は歷史を、否、特に我國の歷史を、新しい目を以て見直し、自由に考察し、活潑に論述し、之を社會民衆の間に普及せしめられた。こゝに於て(中略)國民の間に、祖國の歷史に對する興味と知識とがよび起され、(中略)國民的自覺が生じ、自主的に西洋文明を批判し、(中略)一箇の新たなる文明を我等の力によつて生み出さうといふ氣運を生じて來た」といひ、明治時代に於ける國民的自覺に對しては、鼎軒の「貢獻が與つて大に力のあつた事」を高調した。要するに、「史海」は當時重野安繹博士一派の漢學者出の歷史家に獨占されてゐた歷史(尤も、それも可なりに近代の實證主義的方法を無意識に採用してゐたものではあつたが、)を社會史的の立場から認識する態度に先鞭をつけたもので、それは時代の幼稚であつたことに應じて、極めて初步的のものではあつたが、敢て「社會民衆」に對してのみならず、後の歷史家に對しても相當影響のあつたことも認められてゐる。

【參考】 鼎軒田口卯吉全集第一卷解說 黑板勝美　〔長谷川〕

詩學(しがく)　「詩歌」を見よ。

慈覺大師(じかくだいし)　「圓仁」を見よ。

詩學逢原(しがくほうげん)　「藤海」を見よ。

祇園南海　【刊行】 寶曆十三年　【諸本】 日本文庫第五編所收　【解說】 漢詩について論述したものである。詩語、常語取レ義、詩有ニ境趣一、雅俗、詩有ニ輕重淸濁大小緩急一、字眼、詩有ニ强弱一等の目につき、假名交り文で書いてある。　〔佐久〕

仕懸文庫(しかけぶんこ)　洒落本　一冊　【作者】 山東京傳　【畫工】 自畫　【名稱】 大磯風俗と角書がある。本文中に次の如き說明がある。「しかけ文庫といふは子どもの着換を入てもたせて來るぶんこなり。大磯にて着物をしかけといふ事人の知る所なり、尤しかけぶんこを持せる事は繩丁にかぎる。故に此册子の外題となす」云々。大磯は深川、繩丁は仲町、子どもは深川の遊女の義。【刊行】 寬政三年　【諸本】 京傳傑作集(帝國文庫)・人情本刊行會本所收。

【題材】 京傳は、鄕に「曾我糠袋」(別項)を發表し、曾我兄弟、朝比奈が吉原通ひする事を叙したので、今度は更に曾我兄弟を題材として深川の世界を描寫したのである。出て來る人物は曾我物に因みあるものになつてゐる。二分狂言の事は、寬政二年深川永代寺境內で、壬生狂言が京都より下つて興行し、大に流行したことを取つたものである。

【梗概】 鎌倉の辰巳に大磯(深川)と云ふ色里があり、繁昌を極めてゐる。今しも秋の初め、花水橋(永代橋)を御所五郎丸、武張つた風で行き過ぎる。それを船中の三人の客(朝ひな・曾我十郎・團三郎)が認める。やがて舟は新つ(新地)を過ぎ、新市葉(新石場)、振市葉(古石場)の前を通り、繩丁(仲町)河岸につく。三人は鶴ケ岡屋に上る。遊女お虎・おだん・お鶴が來る。隣座敷には近江屋小藤太・八幡屋三郎兵衛・酒屋の通言で語しをする。聽と鶴の中寸に舞臺迄

陳三と云ふ絃家がある。判人長谷觀六來り、專公人の周旋を相談する。終つて傳三は、遊女お蝶を小茜に招き、五郎時宗との仲に就いて、誡める。朝比奈・十郎・團三郎は歸る。八幡の入相の鐘が鳴つて夜となる。五郎時宗、この家にあがる。彼の馴染お蝶は、既に客梶原源太に出てゐるが、時宗の來てゐるのを知つて會ひに行く。源太、腹を立て太平樂をならべる。段々聲が大きくなるのを、皆々出てなだめ歸す。あとにお蝶と五郎は、互の詰り果てた身の上を歎く。結局逃げようと相談が纏まる。

【批評】追加に作者が言へる如く、深川を題材とした洒落本は多いが十年の星霜がたち、風俗が變遷し流行が推移してゐるので、これを新たに描寫したのである、そこに作者の目的抱負があつただけ、深川の描寫は、特に精緻を極めてゐる。殊に前半がこの意味で勝れてゐる。筋は平凡で、洒落本の類型以上のものでない。梶原源太の如きは、後世の落語「五人廻し」「三枚起請」の中に現はるゝ半可通そつくりで、これには既に、「美地の蠣殼」(別項)中の琴孝の如き類型的人物がある。卷末の五郎・お蝶の情話は、彼の前作「志羅川夜船」(別項)中の梅川忠兵衞の情話と些の相違が見出せない。本書は「娼妓絹籠」「錦の裏」(各別項)と共に、京傳最後の洒落本となつたものである。　〔山崎〕

四家式　「和歌四式」を見よ。

紫家七論　評論　一卷　【著者】安藤爲章【名稱】「紫女七論」とも、「源氏物語七論」とも。紫式部に關する七箇の論說の意。【成立】卷末の跋によれば、昔爲章が伏見宮(貞致親王)に仕へた時、中院通村の門人冬仲朝臣の源氏講釋を聽き、その先考定爲朝臣の聞書を申請け、烏丸資慶の門人乘胤法橋の談義をつたへ、中院通茂の說を承り、「水原」「河海」「花鳥」「岷江」等の諸抄に心を盡したが、後、東國に下り、水戸光圀の彰考館に於て、「李部王記」「御堂殿日記」「小右記」「權記」「左經記」「台記」「玉海」「明月記」「玉蘂記」以下、近世の「二水記」に至るまで、數百部の舊記を讀み故實をきはめた際、偶然「紫式部日記」を得、日記と物語とに共通の精神の存するを知り、この七論を起草して置いたところ、後、難波に旅して契神に會ひ、「萬葉集」の不審を傳授されたついでに、この物語の談に及んで、彼の私案と符合する事多く、遂に江戸小石川で淸書を終つた。時に元祿十六年重陽の日であつた。この本を翌寶永元年五月、伴資矩が淸書して世に傳へた。【諸本】本書は、爲章の自跋、伴資矩・藤原治之・尙友軒牧月等の跋を添へて刊行された。國文註釋全書第三卷・日本名著文庫(富山房)所收。なほ彰考館所藏の本は最も注意すべき古寫本である。【內容】本書は、卷頭に紫女の家系を示し、七論には、その一、才德兼備の條に、紫女は單に才女たるに止まらず、有德の賢婦なる由を物語中の女性の性格、女性觀、「紫式部日記」等によりて論證し、その二、七事共具の條に、式部が學問の家に生れたること、天才なりしこと、學藝について敎養ありしこと、有職故實に通じたること、文物大に興れる太平の世に生れたること、地理に明るかりしこと、中流の婦人たることが、作者としてふさはしきこと等の七得を兼備せる由を論じ、その三、修撰年序の條に、「紫式部日記」及び「榮花物語」等を引證して、式部三十歲頃、寡婦時代の作なるべしと論じ、その四、文章無雙の條に、「源氏」は品位高き名文なりとし、淸少納言の「草子」に優るものとし、その五、作者本意の條に、式部は諷諫の目的を以て物語を作れりとなし、その六、一部大事の條に、冷泉院の事、蕉の事に對して辯明し、その七、正傳說誤の條に、「源氏」の作者のこと、その著作動機のこと、由來のこと等に關して、古來の說の誤りを指摘してゐる。【價値】本書は、舊き中院家の學統と、新しき契沖の學風の感化を受け、新舊學風の過渡期に立てる著者が、水府の藏書を涉獵して「源氏物語」、紫式部に關する舊說を批判檢討したる快著である。眞淵・宣長等をはじめとして、所謂新註の系統にある學者で、これが影響をうけないものは無いと云つてもよい。幾多の舊說を縱橫に打破する所、當時にあつては實に拔群の卓識と云はねばならぬ。しかし、紫式部を婦德高き貞女なりとし、「源氏物語」には敎誡の意ありとなし、文學をもつて勸善懲惡の具となしたのは、未だ儒敎主義的臭味を脫し得ないものと云はねばならぬ。かく紫式部の性格論、文學理論に於て、正鵠を失せるものが少くないが、全體から見ると、舊註を訂正した所甚だ多く、實に劃期的な好著である。

【參考】源氏物語論の考察　久松潛一(國語と國文學二ノ一〇)　〔池田〕

仕懸文庫（挿畫）

志賀重昂　評論家　【號】矧川　【生歿】文久三年に生れ、昭和二年病歿、享年六十五。【閱歷】愛知縣岡崎の人。明治十七年札幌農學校を卒業したが、農學よりも政治及び文學に趣味を有し、同二十一年、三宅雪嶺等と雜誌「日本人」(別項)を發刊して、日本精神を高調した。次いで「南洋時事」を書いて豪放の氣を吐いた。同二十九年、松隈內閣が成立した時、山林局長となり、爾後、政治方面に一時關係したこともあつた。その得意は地理學で、著書また少くないが、乾燥な地理學も一たびその筆にのぼれば、詩趣畫味豐かな詩のやうな文となる。代表的なものは、「日本風景論」(別項)である。三たび世界を漫遊して、旅程二十六萬餘哩に上り、日英地理學協會の名譽會員に推されたこともある。晚年には世界國情を經濟的に見た地理學の講演をして國內を巡遊した。著書は「日本風景論」を始め、「河及湖澤」「地理學講義」等の外、日露戰役

に就いて書いた「大役小志」等がある。〔高須〕

自我主義（じがしゆぎ）【解説】文藝上の自我主義は、一に主我主義とも言はれ、この世界及び人は自己のために存在すると解する。近代の自我主義はスティルネル の專有説に基づく思想で、それによれば、一切の根源は「我」であつて、一切のものは「我」があつて初めて存在する。「我」が唯一の絶對價値であるとする。而して一切の觀念や傳統を否認し、如何なる權威にも服せず、無神論を唱へて、個人の自由を主張し、平等は妥協的であるとしてこれを斥けた。この思想に於ては、すべての動機が根柢的に必然的に利己的なものであつて、人間の目的は最も徹底した利己主義者となることにある。フィヒテの形而上學的自我や、グリーンの倫理學的自我實限説も、同じく自我を説くものではあるが、何れも非經驗的のものであるのに反し、この自我主義の自我は、經驗的なもので、極端に個人主義的である。故に實際の社會生活に於ては、徹底することが出來ず、厭人主義又は厭世主義に陷り、頽廢派に墮する。而してこの自我主義は主張として存在したが、作品を生むには至らなかつた。日本に於ても大正の末年に多少の影響を見せてゐる。〔　〕

【參考】自我經 スチイルネル（辻潤譯）〔宮島〕

私可多咄（しかたばなし）**噺本**　五册（原版は中本、再版本は大本）【作者】中川喜雲【挿畫】菱川師宣風【名稱】當時身振動作に依つて、噺を一層躍動せしめるものが流行した。これを仕形話といつた。この語をそのまゝ題名としたものである。帝國圖書館藏の大本の題簽には枠に「狂人」と記してある。【刊行】初版は寛文[illegible]年、[illegible]版は[illegible]年[illegible]〔宮本〕

藝叢書（笑話）・滑稽文學全集第十卷所收。【解説】話數百九十七章より成り、各話には小題を附けず、直に「昔」とか、「むかし〳〵」とか冒頭して書いてある。この點は、「今昔物語」「宇治拾遺」「伊勢物語」などに類した書き振りである。殊に「宇治拾遺」の色彩は、可なり濃厚に現れてゐる。それと共に、同じく萬治二年に刊行せられた作者未詳の「百物語」（別項）とも似てゐる點がある。題材の範圍も極めて多岐に亙り、和漢の故事を初め、「棠陰比事」「伊勢物語」「枕草子」などからも取り、或は漢詩や和歌・俳句・折句などをも入れ、その他彼自身の見聞・創作などをも用ひて、多數の小話となしたのである。狂言などの影響もあつたと思はれる。從つて本書は讀み物としても興味あるものである。作者がこれを仕形話として取扱はうとしたことは注目に値する。併しどの程度までこれ等の話が仕形話として用ひられるかは、單に本書の話の内容のみから檢することは出來ない。笑話本にして仕形話を標榜したことは、本書が最も古いものであらう。仕形話によつて[illegible]

私可多咄（挿畫）

んとしたことが序文によつて窺はれる。この仕形話といふ標榜は落語界に衝動を與へたものらしく、江戸に於ては鹿野武左衞門（別項）が、これを實演に應用し、或は「正直咄大鑑」（別項）にも仕形話の重視すべきことが説かれ、後世に於ても落語家の中に研究せられるに至つた。併し本書に取扱はれた話を見るに、結びは「……といふた」の形式で、説明的である點は、かうした古典的な落語の常套手法で、これも可なり後年まで用ひられたものであるが、虚實取り交ぜた本書の話は、古典的な典雅な風格を具へてゐる。笑話本史を通じては、「醒睡笑」（別項）などと共に珍重すべきものである。〔小柴〕

鹿都部眞顔（しかつべまがほ）　狂歌師・黄表紙作者【本名】北川嘉兵衞【別號】鹿杖山人・戀川好町・好屋の翁・狂歌堂・四方歌垣・俳諧歌場【生歿】寶曆三年江戸に生れ、文化十二年（二四七五）六月六日歿す。享年七十七【墓所】小石川極樂水（今の久堅町）光圓寺【法名】俳諧歌場壽譽福阿眞顔居士【閲歴】江戸數寄屋橋外の大家（おほや）、今云ふ差配人の子と生れ、初めは汁粉餅を鬻いで家業としてゐた。眞顔は天明の初、戀川春町の門に入つて戀川好町と號し、浮世繪と戲文とを學び、次いで四方赤良に師事して狂歌の道に遊び、寛政八年には師より判者を讓られ、四方眞顔と名乘つて四方側の領袖となつたが、これより先、眞顔は歌人に媚びて狂歌を優美高尚なものにしようとして、名を俳諧歌と改め、些[illegible]

學ばせる事となつたのを、落書體の狂歌を鼓吹してゐた宿屋飯盛が、これに反對して手厳しく論難攻擊したため、終に兩人は絶交するに至つたが、眞顔はこの强敵を得てこれと抗せんがために大に國文歌書を研究し、後には一廉の歌學者となつた。けれどもなほ古學と滑稽の才とは飯盛に及ばなかつた。元來當時の狂歌は文藝に遊ぶ輩の慰みに過ぎなかつたのを、眞顔は狂歌を以て自家の職業とし、百首の點料を銀壹兩と定め、これを以て生活の費とし、且つその門人をも利を以て誘ひ、文政十一年には京都二條家から宗匠號を賜はつたと稱し、紫の紐で髻を結び、水干に葛袴を着し、折烏帽子を戴いて狂歌會に臨むなど、ひたすら威勢を示すことに腐心してゐたが、晩年には不幸が打續いて賴るべき身寄もなく、自分も亦足患にて歩行の自由を失ひ、困苦を累ね、曾ては四天王の隨一と呼ばれた彼も、終に麻布芋洗坂に住む門人瀧廼本千丈方で病歿した。

【門弟】門人中判者として名ある者に、森羅亭萬象・芝廼屋山陽・都千賀江・桃本雛丸・松園眞楫・燕栗園千穎、その他數名がある。又前號の狂歌堂を鳥人事肥後人吉の城主相良頼德に、四方歌垣を二分して四方の號を眞門事長門長府の城主毛利元義に、歌垣の號を接戦事丹後[illegible]

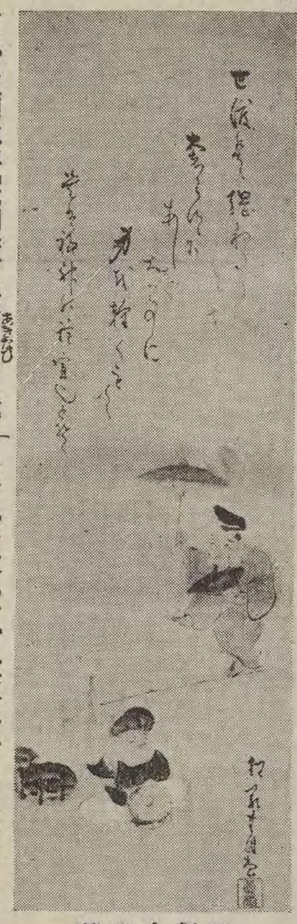
鹿都部眞顔

江門人時も多く師敎して、時と四方側の師を絶つに至つた。【著書】狂歌集としては左の如くで、この外、俳諧歌何々百首と題する月並集が十數部ある。○狂歌數寄屋風呂一册（寛政三年刊）○年始物申どうれ百首一册（寛政五年刊）○四方廼巴流一册（寛政七年刊）○狂歌櫻合花ぐはし一册（寛政七年刊）○狂歌武藏風流二册（文化元年刊）○狂歌茅花集二册（文化元年刊）○狂歌阿豆麻風流二册（文化三年刊）○狂歌新草集二册（文化十年刊）○類題俳諧歌集六册（文化十一年刊）

【以上野崎】

【黄表紙作者として】春町の門人なる故に戀川と名乘り、數寄屋河岸に住ひしてゐた緣で好町と稱した。天明五年「元利安賣錦商内」の處女作に於て名聲を博した。笑・くさめ・咳・涙などの珍商賣で儲けたのを、屁・疳癪の商賣で耗つてしまふといふ趣向と、師匠春町との關係を筋の中にとり入れたのが受けたのであらう。同年にその他四種、同六年三種を出した。これ等を著しいものとして、あとは極めて少數の作しか發表しなかつた。寛政六年の「揚屋町伊達豆腐や」の序には、鹿杖山人眞顏と署名してゐる。その頃から黄表紙の筆を絶つて狂歌に專念したのである。作の少ない割に佳作がある。前の二作の外、「鳩八幡豆兼德外」「日本一痴鑑」が知られてゐる。

【以上山口】



眞顏自畫贊

志賀直哉（しがなほや）小說家【閱歷】明治十六年二月二十日、陸前國石卷町に生れた。同十八年兩親に伴はれて上京した。同二十二年學習院初等科に入學、同三十九年その高等科を卒業して、東京帝大文科大學英文學科に入學したが、翌々四十一年中途退學して專ら創作に志すことになつた。尤もその以前明治三十年頃、友人有島生馬・田村寛貞等と回覽雜誌「睦友會雜誌」を創めたといふ。同四十年には武者小路實篤・木下利玄等と計つて雜誌「白樺」の創刊を企てたが果さなかつた。併し、この作者自身は、四十二年（二十七歲）の「或る朝」を處女作としてゐる。四十三年四月、「白樺」（別項）創刊。この頃からは漸次に堅實な地步を占めはじめて、大正二年には最初の單行本「留女」を出版した。その頃、彼は餘り創作の筆を執らず、大正元年には尾の道に、同三年には松江に、同年九月には京都に、翌四年の夏は赤城に、更に同年秋には我孫子町にといふやうに轉々してゐた。そして同三年の末に結婚、翌々五年には長女を喪つたが、その頃から生活氣分も落着いたらしく、旁々武者小路實篤の勸めもあつて、翌六年頃から、再び創作に親しみはじめた。さうして今度は俄かに盛名を馳せて、間もなく新現實主義文壇の第一人者を以て目せられるに至つた。同十二年我孫子より京都粟田口に移り住み、同年秋山科村に轉じ、更に翌々十四年四月には奈良市幸町に移つた。その頃から、我が國の古美術に親しむこと多く、その方面のよき鑑賞家たる實を示した仕事を、ぼつ〳〵見せるやうになつたが、大正の末年頃からは、また製作の量が、極めて乏しくなつて行つた。【著作】〔短篇集〕留女 ○大津順吉 ○夜の光（別項）○荒絹 ○和解（別項）○或る朝 ○壽々 ○雨蛙 ○山科の記憶 ○小僧の神樣 ○或る男 ○其姉の死 ○志賀直哉短篇小說集。〔中篇〕眞鶴。〔長篇〕暗夜行路（別項）前篇等。〔編著〕座右寶。〔選集〕志賀直哉集（新潮社版現代小說全集）○現代日本文學全集（志賀直哉集）○明治大正文學全集（佐藤春夫集と合冊）等。

【人物・作風】如何なる人間性の深潭をも瞬きもせずに諦視し得る性格の强さ、虛僞や不正を嗅ぎ出す驚くべき敏感、さういふものに對する寧ろ本能的な潔癖さと、激しい、寧ろ爆發的な憎惡、憤りを生き拔く底力、正義と、更により多く調和とを愛する理想派的な熱情、苟くも自分を胡麻化すことの出來ない正直さと非妥協性、一目で物の核心を摑んで了ふ鋭い洞察、さういふところから來る怖るべき聰明さと非感傷性をもつ作者である。そして極めて複雜な素質を有つた、而もその複雜な素質のあらゆる面に常人以上の分厚さを以て惠まれた、云はば素質的に大作家としての資格を具へた人である。

志賀直哉

その複雜な素質の故に、內には矛盾を藏しながら、作者の强い性格は多くの場合一種の調和をその上に見出してゐた。併しこの作者にも一つの心境の轉換がある。無論一概には云へないけれども、まづ大體大正六年の「好人物の夫婦」などを界として、從來の生氣と激動とに滿ちたそれから、蒼古に落着いたそれに代つて來た。さうしてその後の時期の作者は、人としても如何にも大家らしいどつしりした風格の持主になつた。從つてその作風にも可なり顯著に二つの時期の特徵が現れてゐる。前期の作には、正義派的・理想派的な傾向が滲み出してゐたが、それも正義や理想が眞つ正面に翳されたといふやうな作品は、その時期のものにも殆ど認められなかつた。從つてこの作者の作風は、一口に云へばまづ寫實主義のそれだつたといふことが出來る。而もそれは、ただ徒らに精細緻密な外形描寫を意圖する底のものではなく、極めて印象的に事物の焦點を捉へて、これを浮彫りにして行く底のものであつたために、描寫としては極めて簡潔端的で、それだけ立體的な、複雜な陰翳に富んだものになつて行つた。而もそれは飽く迄も正確で、同時に精到と深さと鋭さと、磨き上げられた美しさとを有つてゐた。嘘は書かないといふことは、作者の極く夙い頃からのモットーであつたし、後期に入つてからの作者は、やがて個性をさへ超越して、個性を遊離した、大きな人生その物の味ひを味ひとした作品といふやうなものを、意圖しようとする方向にと傾いて行つた。文章も、無駄な、ごて〳〵した裝飾などの全然ない、磨き盡されたものであり、文法的にも極めて格の正しいものであつて、作品全體から云つても、その構成に、こしらへ事やトリックなどは全然見ることが出來なかつた。よきエスプリだけを最もよく刻み上げるといふ作風だつたので

【門弟】門人中判者として名ある者に森羅亭萬象・芝廼屋山陽・都千賀江・桃本雛丸・松園眞樹・燕巢園千穎、その他數名がある。又前號の狂歌堂を鳥人事肥後人吉の城主相良賴德に、四方歌垣を二分して四方の號を眞詞事長岡長府の城主毛利元義に、歌垣の號を狂歌事丹波篠山の城主青山忠良に、譲つたが、高水を同じ

ある。作者の仕事振りも愼重で、一つの作品を仕上げる迄に、少くとも三度は稿を改めるといふやうなことが、一時文壇の好話柄となつたことさへあつた。その眞僞は兎に角として、あらゆる點で信頼されていゝ作家である。ただその愼重さが、心理的には、固く自己の世界を守らせるといふことになつて、それがこの作者から、野心と野心的な作品とを奪つたといふことが、この作者に對する唯一の物足りない點であらう。

【史的地位】白樺派（別項）から出た人であり、白樺派的な、稟質に豐かな人でもあつたが、理想派的態度に赴かず、嚴密な寫實主義的態度に住し、且つその方向に徹して行つた上に、一時創作から遠ざかつてゐたし、復活後も主として活動したのが、新現實主義の時代であつたために、屢々新現實主義の作者としても考へられたが、寧ろ作品の形式・內容、ともに大正期有產者文學の頂點を劃出してゐるものと考へる方が相應しい。兎に角、芥川龍之介・久米正雄（各別項）等の當時一流の作家達さへ、一目置いて考へるやうな存在であつた。從つてその影響するところも多く、殊にその渾成された表現技巧や寫實主義の樣式は、一時文藝界を風靡するの概があつた。さうしてその完成された寫實主義樣式から脫却しようとする努力が、大正末期に於ける新進作家達の苦心と工夫との一面にさへなつて行つたのであつた。直接の門流として相當著名な作家となつたのは、網野きく位ゐであつた。その他、初め長與善郎（別項）に學んで、後この作者の影響下に置かれた犬養健、新傾向句派の俳人から小說家に轉じた龍膽寺雄など、その門流と見

郎なども、一時はこの作者の影法師のやうだとまで云はれた。なほ同時代の作家で彼の影響を受けた人も少くない。

【參考】志賀直哉氏の世界　片岡良一（國語と國文學一一）○志賀直哉と葛西善藏　正宗白鳥（中央公論昭和三ノ一〇）○志賀直哉　小林秀雄（思想九一）　〔片岡〕

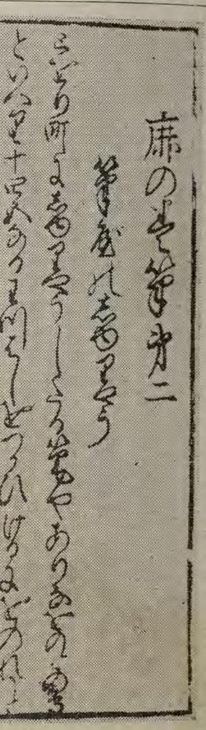
鹿野武左衞門（しかのぶざゑもん）

落語家【姓氏】未詳。「鹿野武左衞門口傳咄し」（別項）の序文に、志賀氏とあり、又同書の跋にも、しか氏とあれば、鹿野は宛字であらう。通稱安次郎。【生歿】生年は慶安二年。「鹿野武左衞門口傳咄し」の成つたのは、三十五歲の時であり、而も本書の上卷の挿畫には、既に武左衞門が座敷仕形話の演者として口演してゐる姿が畫かれてゐる。故に彼は三十歲前後には塗師職の業を罷めて、純然たる落語の口演者となつたものであらう。卽ち天和・貞享頃、江戶の中橋廣小路の見世物場に筵張りの小屋を設け、晴天に出演して木戶錢六文宛を取り、聽衆を集めて街頭を賑はし、江戶辻噺の元祖と言はれるに至つたのである。當時上方には同じく辻噺の祖と言はれる露の五郎兵衞が四條磧や北野にて輕口頓作に快辯を揮つて居り、東西相對峙の奇觀を呈してゐたのである。併し武左衞門の落語は仕形話である。輕口頓作である口頭の滑稽よりも、それに加ふるに動作の滑稽を以つて始められたとはいへ、これを最も多く活用し、やがて座敷噺にまで大成したのは、實に鹿野武左衞門であつた。上方と異なり、當時の江戶の民衆は未だ洗練されてゐる者ではなかつた。言葉そのものの洒落やサゲでをかしみを解する悠長な民衆でなく、もつと粗野で、それと共に端的な動作を見なければ承知しなかつた。武左衞門の方法は當時に於ては確に民衆の好尙に適したものであつた。京傳の「近世奇跡考」にも、鹿野武左衞門の名人であつたことを記してゐる。偶々元祿六年に江戶に惡疫が流行した時、流言蜚語が行はれ、馬が人語を發し、南天の實と梅干とを煎じて飲めば罹病せずとの風說があり、南天の實と梅干との價は、忽ち騰貴して二十倍となつたのである。なほ「梅干占」なる書物も發行され、人心を亂すことが多かつたので、六月十八日に町奉行能勢出雲守より觸書を出し、嚴重にこれ等の風說を取締つたのである。探索の結果、浪人筑紫團右衞門と八百屋惣右衞門とが結託し、梅干及び南天の實の騰貴を計畫したので、馬人語を發するといふは、前年刊行の「鹿の卷筆」中の、齋藤甚五兵衞といふ見習役者が、市村座に於て馬の脚となり、贔屓から褒められたに對し、馬の脚のまゝ舞臺の上でヒン〳〵と挨拶をした笑話にヒントを得たとの嫌疑で、奇禍は遂に彼にまで及んだ。翌年筑紫團右衞門等は死罪となり、惣右衞門と武左衞門は流刑となり、伊豆の大島に流され、「鹿の卷筆」の版元の本屋彌吉は追放せられ、「鹿の卷筆」と「梅干占」とは燒棄せられることとなつた。六年の刑期を終へ、元祿十二年四月、赦されて江戶に歸つたが、服役中の疲勞のため、同年八月廿一日歿した。

【業績】江戶に於ける落語の鼻祖といふ點でも落語史上特筆せらるべきであり、殊に彼が仕形話を以てしたことは、落語に對して大きな影響を與へたものである。後世の落語は、話術の方面にも時代と共に進步したのであるが、なほこの仕形方面も重視せられたのである。それは少くとも高座より聽衆を對手とする藝であれば、所謂天明調の短い落語では長い時間を繫ぐことは困難であり、枕としては十分の價値を發揮するも、矢張り實演となる時は、仕形話に於て一段の精彩と時間の延長とが可能となるのである。されば武左衞門によつて成された仕形話の如きも、寬政度にては石井宗叔（別項）等は、特に落語上必須なものとしたのである。宗叔が仕形話と從來の天明調の落語とを融和するに至つたのも、實にこゝに基因してゐるのである。　〔小柴〕

鹿野武左衞門口傳咄し（しかのぶざゑもんくでんはなし）

噺本　大本　三册【作者】鹿野武左衞門【挿畫】菱川師宣か【名稱】題簽には鹿野は角書になつてをり、外題の左脇に「繪いり」とある。【刊行】天和三年か。山崎氏の「日本小說年表」には貞享二年とある。兎も角、天和・貞享の間であることは間違ない。【諸本】活版本の飜刻はない。稀書複製會より、上下二卷の複製本が出版されてゐる。【解說】中卷は散逸して所在不明だが、上下二卷は稀書複製會本によつて、原本の面影に接することを得る。帝國大學圖書館には霞亭文庫本の零本として下卷のみ藏せられて居り、兎も角傳本稀なる貴重書籍たるを失はない。上卷は十四話より成り、紙數十五枚で、初半丁は序文、次に見通しの口繪があり、武左衞門が座敷仕形話をしてゐる圖がある。その裏より次の半丁は目次、次は見通しの繪、そして十六章の話と五圖の挿畫、最後の半丁は跋文になつてゐる。故に十五丁より二十九丁までの紙數十五枚の中卷のあつたことが覗はれる。書物の形式より見れば、中川喜雲の「私可多咄」（別項）の大版本と相似たるものがある。內容としては、座敷仕形話であるから、話の滑稽に動作の滑稽を併せ考へる時、如何にも紙上



鹿

江戶で最古の家柄であり、今日は勢力はないが、古風な特色を殘した名家である。傳說に依ると、流祖志賀山萬作は能樂の喜多流より出たといひ、現在の家元は十四代目志賀山勢（せい）を名乘り、七十歲を過ぎる高齡である。この流儀では、女子が家元を嗣ぐと、いつも勢以を名乘つて來た。元は劇場づきの振附師の家であつたが、この職は男子に限

日本村學會　○志賀山流　小寺融吉ナンデー　昭和七ノ三五）　〔小寺〕

しがらみ

歌集【著者】中村憲吉【解說】第三歌集で、第一歌集「馬鈴薯の花」、第二歌集「林泉集」に次ぐものである。大正五年より同十一年に至る七年間の作五百五十九首を收錄してゐる。歌風の特色は、「林泉集」に見る艶と潤とは失せたが、內面の心のゆらぎが深くなつてゐる。特に峽村の漫吟は、よくその特色を出し、沈鬱靜寂であり、地味に緊